田平町文化財調査報告書第５集

里　田　原　遺　跡

――町道里田原西線改良工事に伴う調査――

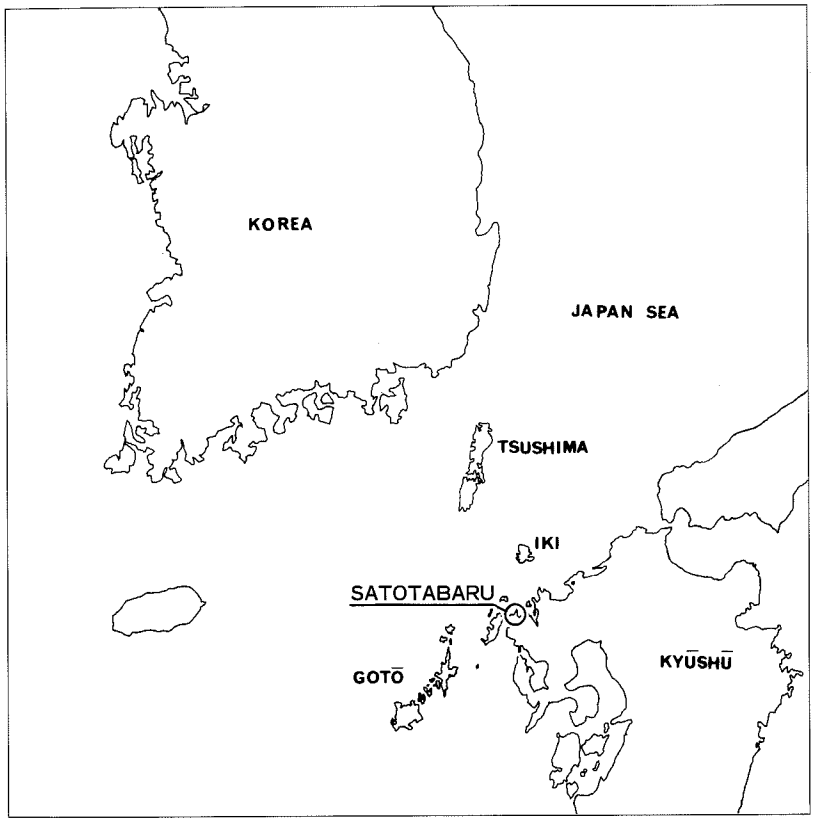
１９９２

長崎県田平町教育委員会

田平町文化財調査報告書第５集

里田原遺跡

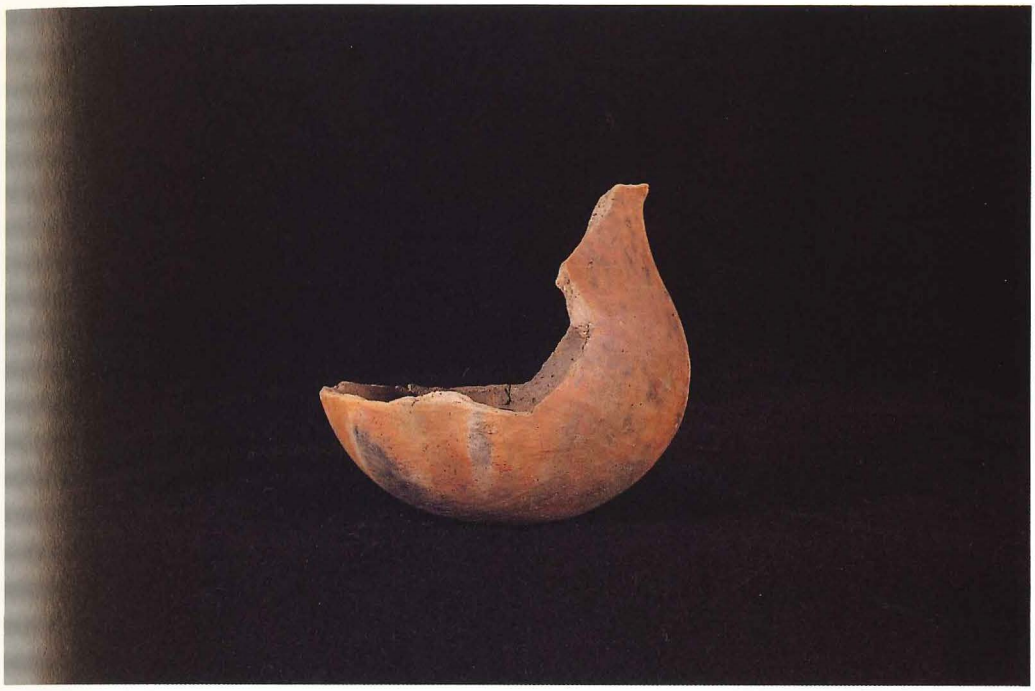
――町道里田原西線改良工事に伴う調査――



1992

長崎県田平町教育委員会

遺跡遠景



丹塗磨研土器

丹塗土器

発刊にあたって

このたび町道里田原西線拡幅工事に伴う里田原遺跡の緊急発掘調査が，長崎県教育庁文化課の格別なるご協力とご指導のもとに短期間のうちに調査ができましたことを大変ありがたく思います。

前回の調査（報告書第２集）に続いて里田原遺跡の全体像が解明されつつあることに大きな期待がよせられます。

今回の発掘調査で，弥生時代前期に属する護岸遺構やドングリピット３基をはじめ，陽根状木器，根挾みのある柱材など縄文晩期の木器類が確認されたことは，この時期すでに朝鮮半島との交流や農耕が盛んに行われていたことが実証され，いよいよ里田原地区に住居跡が発見される可能性が高まり，今後さらに計画的発掘調査を必要とするものであります。

本報告書は，多くの人々に埋蔵文化財に対する関心を深め，さらには学術研究の資料になるものと思います。

最後に，今回の発掘調査にご尽力いただきました県文化課の諸先生方に深く感謝を申し上げますとともに，本調査の作業にご協力をいただきました地元の皆様方に対し感謝を申し上げまして調査報告書発刊のことばといたします。

平成４年３月30日

田平町教育長　松　田　正　幸

例　　言

1．本書は長崎県北松浦郡田平町里免外に所在する里田原遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2．調査は，里田原西線改良工事に先立ち，平成元年12月1日～12月22日と平成2年11月26日～平成3年1月19日の2年次にわたり，田平町教育委員会が調査主体者となり，長崎県教育庁文化課が依頼を受け調査を担当した。

3．本書は分担執筆し，各執筆者は文末に記した。なお遺跡出土土器の赤色塗彩については福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏外の方に玉稿をいただいた。

4．遺物写真撮影は町田利幸・本田秀樹氏の協力を得た。

5．出土遺物は平成4年3月現在，長崎県文化課立山分室において保管しているが，本報告書刊行後は田平町教育委員会が保管の任にあたる。

6．本書の編集は各項分担して行い，総編集は安楽が行なった。

7．里田原遺跡に関する調査回次は，平成元年度が第25次，平成2年度が第26次に相当する。

8．調査には，当時筑波大学に留学されていた中国社会科学院考古研究所の白雲翔先生が12月10日から12月21日までの12日間参加された。泥水や寒さに悩まされながらも実測図の作成や，出土遺構・遺物の観察をしていただいた。ささやかながら日中の交流が出来たことを記して感謝申し上げます。

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る経緯……1
Ⅱ．里田原遺跡の地理的・歴史的環境……3
Ⅲ．調　査……6
(1)　第25次調査の概要（第１旧河道）……6
(2)　第26次調査の概要（第２旧河道～第４旧河道）……7
(3)　土　層……8
(4)　遺　構……10
(5)　遺物の出土概況……17
Ⅳ．遺　物
土　器
(1)　第１区～第８区出土の縄文土器……27
(2)　第１区～第８区出土の弥生土器およびその他の土器……38
(3)　第11区～第16区出土の縄文土器……47
(4)　第11区～第16区出土の弥生土器……50
(5)　第21区～第23区出土の縄文土器……54
(6)　第35区～第40区出土の縄文土器……56
(7)　第34区～第40区出土の弥生土器……63
石　器
(1)　第１区～第８区出土の弥生時代石器……67
(2)　第１区～第８区出土の縄文時代石器……74
(3)　第11区～第16区出土の弥生時代石器……78
(4)　第34区～第40区出土の縄文時代石器……81
木製品……84
(1)　第１区～第８区出土の木製品……89
(2)　第34区～第40区出土の木製品……101
Ⅴ．里田原遺跡出土土器の赤色塗彩について……107
Ⅵ．まとめ……111

挿　図　目　次

第１図　調査区域図（１/1000）……2
第２図　田平町内主要遺跡……4
第３図　第25次調査区域図（１/400）……6
第４図　第25次調査第１区～８区土層図（１/60）……9
第５図　第14区陽根状木製品埋置遺構図（１/30）……10
第６図　第26次調査第11区～40区土層図（１/80）……11
第７図　第３区出土の貯蔵穴実測図（１/30）……14
第８図　第３区出土の２号・３号貯蔵穴実測図（１/30）……14
第９図　第35区出土の貯蔵穴（１/30）……15
第10図　第36区出土の貯蔵穴（１/30）……15
第11図　第１区出土杭・矢板列実測図（１/80）……16
第12図　第１区～４区上層遺物出土状況図（１）（１/100）……18
第13図　第５区～８区上層遺物出土状況図（２）（１/100）……19
第14図　第１区～３区中層遺物出土状況図（３）（１/120）……20
第15図　第５区～８区中層遺物出土状況図（４）（１/100）……21
第16図　第１区～４区下層遺物出土状況図（５）（１/100）……22
第17図　第５区～８区下層遺物出土状況図（６）（１/100）……23
第18図　第35区～40区上層遺物出土状況図（１）（１/100）……25
第19図　第36・37区下層遺物出土状況図（１/60）……26
第20図　第１区～８区出土縄文土器（１）（⅓）……28
第21図　第１区～８区出土縄文土器（２）（⅓）……29
第22図　第１区～８区出土縄文土器（３）（⅓）……30
第23図　第１区～８区出土縄文土器（４）（⅓）……31
第24図　第１区～８区出土縄文土器（５）（⅓）……32
第25図　第１区～８区出土縄文土器（６）（⅓）……33
第26図　第１区～８区出土縄文土器（７）（⅓）……34
第27図　第１区～８区出土縄文土器（８）（⅓）……35
第28図　第１区～８区出土縄文土器（９）（⅓）……36
第29図　第１区～８区出土縄文土器（10）（⅓）……37
第30図　第１区～８区出土弥生土器（１）（⅓）……39
第31図　第１区～８区出土弥生土器（２）（⅓）……40

第32図　第１区～８区出土弥生土器（３）（⅓）……41
第33図　第１区～８区出土弥生土器（４）（¼）……42
第34図　第１区～８区出土弥生土器及びその他の土器（１）（⅓）……44
第35図　第１区～８区出土弥生土器及びその他の土器（２）（¼）……46
第36図　第11区～16区出土縄文土器（１）（⅓）……48
第37図　第11区～16区出土縄文土器（２）（⅓）……49
第38図　第11区～16区出土縄文土器底部（３）（⅓）……50
第39図　第11区～16区出土弥生土器（１）（⅓）……51
第40図　第11区～16区出土弥生土器（２）（⅓）……52
第41図　第11区～16区出土弥生土器底部（３）（⅓）……53
第42図　第21区～23区出土縄文土器（１）（⅓）……54
第43図　第21区～23区出土縄文土器（２）（⅓）……55
第44図　第35区～40区出土縄文土器（１）（⅓）……57
第45図　第35区～40区出土縄文土器（２）（⅓）……58
第46図　第35区～40区出土縄文土器（３）（⅓）……59
第47図　第35区～40区出土縄文土器（４）（⅓）……61
第48図　第35区～40区出土縄文土器（５）（⅓）……62
第49図　第35区～40区出土弥生土器（１）（⅓）……64
第50図　第35区～40区出土弥生土器（２）（⅓）……65
第51図　第38区出土半島系無文土器（½）……65
第52図　第35区～40区出土土製品（½）……66
第53図　第１区～８区出土石器（１）（½）……68
第54図　第１区～８区出土石器（２）（⅓）……69
第55図　第１区～８区出土石器（３）（½）……70
第56図　第１区～８区出土石器（４）（⅓）……71
第57図　第１区～８区出土石器（５）（⅓）……72
第58図　第１区～８区出土石器（６）（⅓）……73
第59図　第１区～８区出土石器（７）（½）……74
第60図　第１区～８区出土石器（１）（½）……75
第61図　第１区～８区出土石器（２）（⅓）……76
第62図　第１区～８区出土石器（３）（⅓）……77
第63図　第11区～16区出土石器（１）（½）……79
第64図　第11区～16区出土石器（２）（⅓）……80
第65図　第34区～40区出土石器（１）（½）……81

第66図　第34区～40区出土石器（２）（⅓）……82
第67図　第34区～40区出土石器（３）（⅓）……84
第68図　第34区～40区出土石器（４）（⅓）……85
第69図　第34区～40区出土石器（５）（⅓）……86
第70図　第34区～40区出土石器（６）（⅓）……87
第71図　鍬製作工程模式図……89
第72図　第１区～８区出土農具：広鍬（¼）・鋤（½）……90
第73図　第１区～８区出土農具：広鍬・同未製品・鋤先（¼）……91
第74図　第１区～８区出土農具：掘棒状木製品（約⅙）……93
第75図　第１区～８区出土農具：竪杵（¼）……94
第76図　手斧柄の形と各部名称……94
第77図　第１区～８区出土工具：手斧柄（⅓）……94
第78図　第１区～８区出土日用具：容器（½）……95
第79図　第１区～８区出土装身具：櫛（⅓）……95
第80図　第１区～８区出土恭敬具：槽と未成品（¼）……96
第81図　第１区～８区出土建築材：梯子（¼）……97
第82図　第１区～８区出土建築材：板・叉木（⅙）……98
第83図　第１区～８区出土用途不明木器（¼）……99
第84図　第１区～８区出土用途不明木器（¼）……100
第85図　第14・15区木製品出土状況図（1/60）……102
第86図　第14区出土陽根状木製品（⅙）……103
第87図　第14・15区出土建築材：根挟みのある柱材（⅙）……105
第88図　第34区～40区出土農具：鋤（⅙）……106

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景（東から）　第１区～８区近景 ……115
図版２　第１～８調査区（北から）　第36調査区から北側を望む ……116
図版３　第３区東側土層　第６区東側土層 ……117
図版４　第11・12区東側土層　第14・15・16区東側土層 ……118
図版５　第34・35区西側土層　第40区北側土層 ……119
図版６　第３区遺構・遺物出土状況 ……120
図版７　第３区検出の貯蔵穴及び第36区検出の貯蔵穴 ……121
図版８　第１区～８区遺物出土状況 ……122
図版９　第１区～８区遺物出土状況 ……123
図版10　第１区～８区遺物出土状況 ……124
図版11　第２区遺物出土状況　建築材出土状況 ……125
図版12　第35・36区遺物出土状況　第36区遺物出土状況 ……126
図版13　第14区検出の陽根状木製品埋置遺構と木製品 ……127
図版14　遺物出土状況 ……128
図版15　遺物出土状況 ……129
図版16　遺物出土状況 ……130
図版17　木製品出土状況 ……131
図版18　第１区～８区出土縄文土器① ……132
図版19　第１区～８区出土縄文土器② ……133
図版20　第１区～８区出土縄文土器③ ……134
図版21　第１区～８区出土縄文土器④ ……135
図版22　第１区～８区出土縄文土器⑤ ……136
図版23　第１区～８区出土縄文土器⑥ ……137
図版24　第１区～８区出土縄文土器⑦ ……138
図版25　第１区～８区出土弥生土器① ……139
図版26　第１区～８区出土弥生土器② ……140
図版27　第１区～８区出土弥生土器③ ……141
図版28　第11区～16区出土縄文土器① ……142
図版29　第11区～16区出土弥生土器① ……143
図版30　第21区～23区出土縄文土器① ……144
図版31　第35区～40区出土縄文土器① ……145

図版32　第35区～40区出土縄文土器② ……146
図版33　第34区～40区出土縄文土器③ ……147
図版34　第35区～40区出土弥生土器 ……148
図版35　第34区～40区出土の土製品および半島系無文土器 ……149
図版36　第１区～８区出土石器① ……150
図版37　第１区～８区出土石器② ……151
図版38　第１区～８区出土石器③ ……152
図版39　第11区～16区出土石器 ……153
図版40　第34区～40区出土石器① ……154
図版41　第36区～40区出土石器② ……155
図版42　第34区～40区出土石器③ ……156
図版43　第１区～８区出土農具・鍬・鋤柄 ……157
図版44　第１区～８区出土農具未製品・棒状木製品 ……158
図版45　第１区～８区出土竪杵・手斧柄・容器・櫛・槽未製品 ……159
図版46　第１区～８区出土建築材 ……160
図版47　第１区～８区出土不明木器 ……161
図版48　第34区～40区出土建築材・鋤・不明木器 ……162
図版49　里田原遺跡所在の支石墓 ……163

Ⅰ　調査に至る経緯

里田原遺跡については，昭和47年に発見されて以来範囲確認調査を含め26次の調査が実施されている。そのたびに重要な資料の発見があり，そこから得られる遺跡の内容の重要性に鑑みて，将来の史跡指定に備えるべく重要遺構確認地点毎に保存区域等を設定してきたが，この間，遺跡を取り巻く情勢も大きく変化した。保存希望区域にも開発の波は容赦なく及び，そのたびに不本意ながら緊急調査を余儀なくされてきた。

今回報告する区域も，昭和50年に実施した範囲確認調査によって[註1]，その幅は不明ながらも縄文晩期に属する旧河道が東西に走っていることが分かっていた地点である。

里田原遺跡は通称里と呼ばれる広さ36haを有する現水田下に横たわっているが，田平町自体この谷底平野以外に平地に恵まれないため，勢い開発がこの地区に集中することになる。諸開発が進行するにつれて当然ながら家が建ち，現道路も手狭になり，また排水溝もより規模を大きくする必要が出てくるのは自明である。

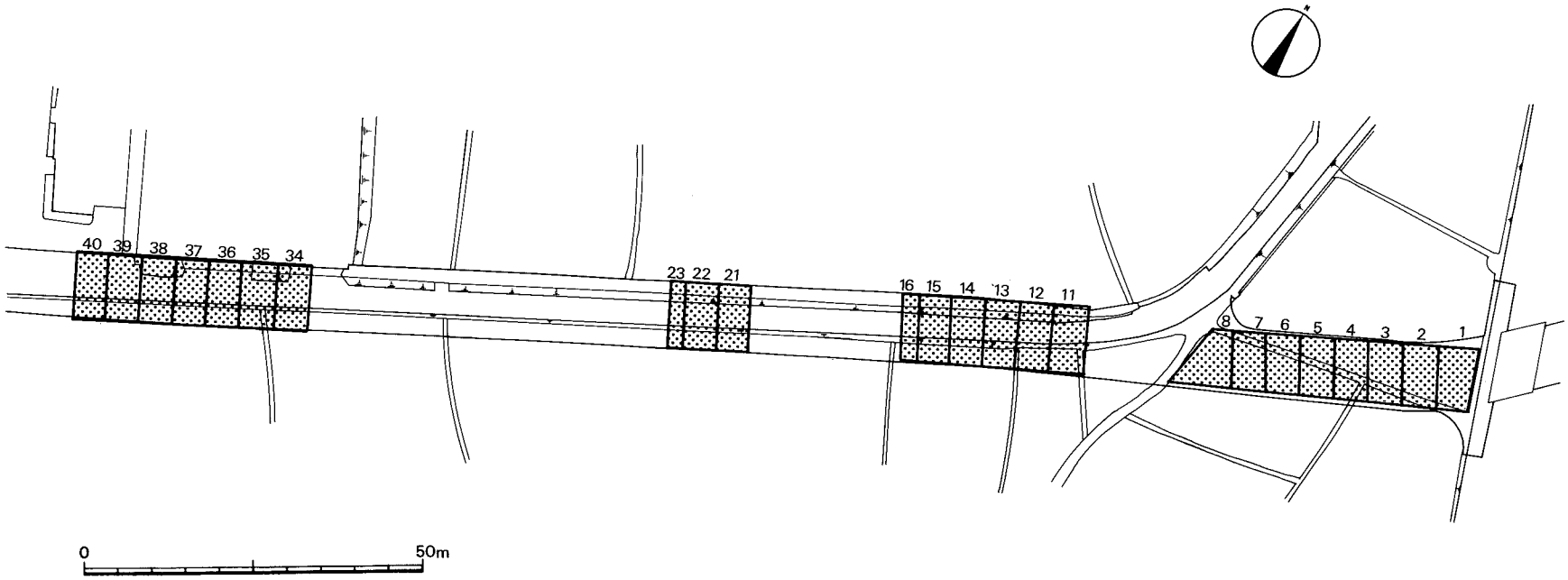
これまで緊急調査を実施してきたのは，全てこれらの宅地造成[註2]や小河川改修工事[註3]や道路改良工事に関するものばかりであり，今回報告する調査の原因も里田原西線と呼ばれる町道の改良工事にかかるものである。

里田原西線は，遺跡の西側を南北に縦断する道路で，車の通行量に対して幅が３ｍと狭く，またその北側が大きくカーブしていたため離合がしにくい状況であった。このため町はまず道路を拡幅したうえで直線にする計画をたて，平成元年１月本事業の説明が県文化課になされた。それによると平成２年度と３年度にかけて完成させるというものであり，県文化課は町当局と保存のための協議を重ねたが，緊急調査止む無しの結論になった。

調査は２か年にわけて実施することとし，初年度は平成元年12月１日から12月22日まで，２年目は平成２年11月26日から翌年１月19日まで実施した。（高野）

註

1．長崎県教育委員会「里田原遺跡」長崎県文化財調査報告書第25集1976
2．長崎県田平町教育委員会「里田原遺跡」田平町文化財調査報告書第２集1985
3．長崎県田平町教育委員会「里田原」田平町文化財調査報告書第３集1988他



第1図　調査区域図（$\frac{1}{1000}$）

II　里田原遺跡の地理的・歴史的環境

地理的環境

里田原遺跡は長崎県本土部の北辺，北松浦郡田平町里免にあり，九州の北西部に位置している。町の周辺海域には，平戸島(平戸市)・生月島(町)・度島(平戸市)・大島(村)・鷹島(町)・福島（町）など多くの離島があり，いずれも北松浦郡に属している（平戸島もかつては北松浦郡)。田平町の西海岸は，平戸瀬戸の急潮に洗われ，西方約1.5kmに平戸島を見ることができる。近年，田平町～平戸島～生月島間は橋で結ばれたため，陸路での往還が可能になり廃止された近距離航路もあるが，平戸口港は五島列島や周辺の島々に渡る定期船が発着しているため要津の地位を失っていない。

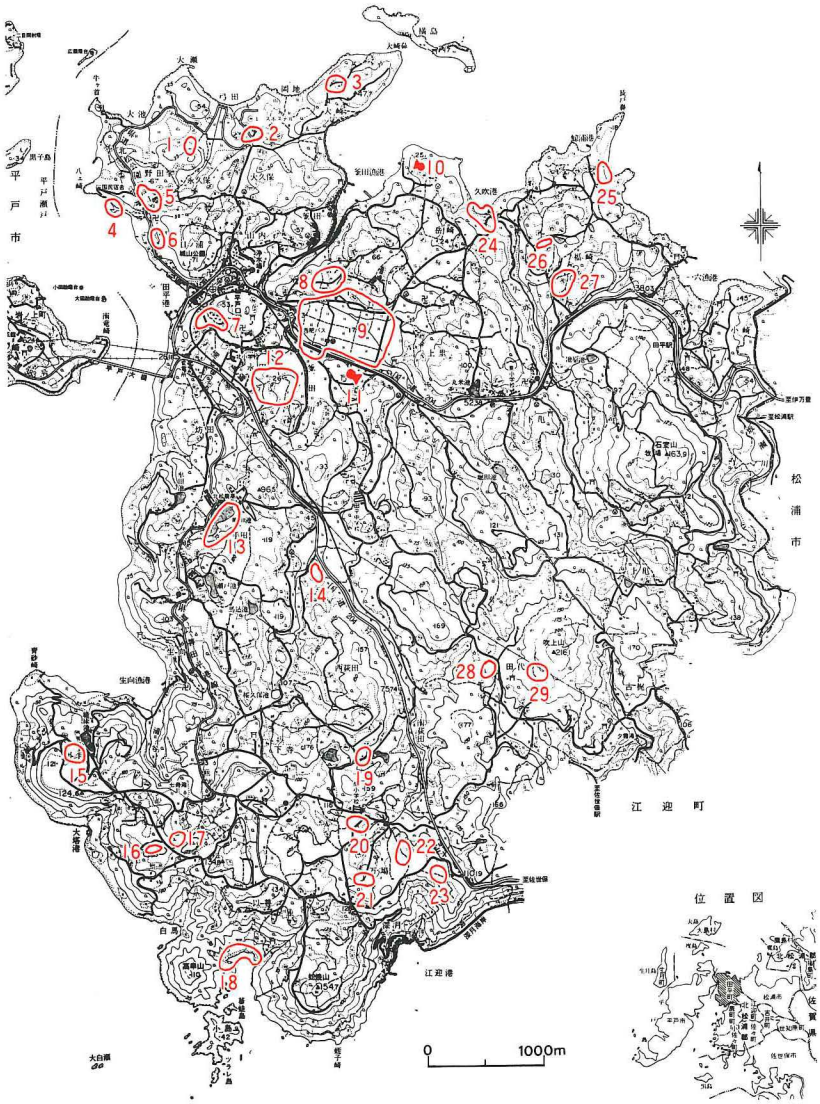
田平町にいたるには，佐世保駅から北方向にMR（松浦鉄道）で約90分を要し，バスの場合も佐世保駅前ターミナルから同じぐらいの所用時間である。佐賀県伊万里市からも西方向へMRもしくはバスで90分程度の所用時間である。いずれの方向からも，鉄道の場合「たびら・ひらどぐち」で下車，バスの場合「平戸口桟橋」で下車するとよい。

遺跡は日本西端の「たびら・ひらどぐち」駅から東方向に徒歩で約10分の距離にあるが，遺跡の南辺を鉄道と国道204号線が並行して走り，車窓の北側に遺跡の主要部を眺めることができる。「里田原」は正式な地籍上の名称ではないが地元の人々が「里田原」あるいは「里」と呼びならわしている約40ヘクタールの水田地帯で，西側を除いて低い丘陵に囲まれた盆地状の地形になっている。水田面は標高15～18mで東側がやや高く，南北辺を里川・一関川の小川がともに西に流れ，遺跡の西側を北流する釜田川に合流している。遺跡のほぼ中央部には昭和57年（1982）に設立された町立の里田原歴史民俗資料館（859-48北松浦郡田平町里免236-2 Tel0950-57-1474）があり，里田原遺跡出土の木製品を中心に展示されている。

北松浦郡一帯は，広範囲に流出した北松玄武岩が基盤になっているが，長い年月の侵食による地形の変化が著しく，現在の山頂部や山裾に熔岩流の一端を見ることができる。この北松玄武岩は摂理の間に滞水しやすく，地滑り災害の原因になっているが，一面では湧水が豊富で溜池に利用されているところも多い。湧水のあるところは，古来，人と動物の暮らしに大きく係わってきている。里田原遺跡の地下は木製品が残りやすく，弥生時代人がカシなどの堅果加工施設を多く造っているのも，豊かな地下水に恵まれているためである。

歴史的環境

九州の西北部は長崎県の南・北松浦郡，佐賀県の唐津市一帯や東松浦郡など「マツウラ」を冠する地名が多い。この古称は『魏志』倭人伝の「末盧国」，肥前『風土記』の「松浦郡」に発することが明らかであるが，マツウラを冠する地域は五島列島南端にまで及んでいる。旧北松浦郡地域には，現在の佐世保市・松浦市・平戸市が含まれているが，田平町を中心に歴史的環境を概観してみよう。



第 2 図　田平町内主要遺跡（旧：旧石器時代，縄：縄文時代，弥：弥生時代，古：古墳時代，奈：奈良時代，平：平安時代，中：中世）

1.	日ノ岳遺跡	田平町	大久保免大池　包蔵地	旧
2.	中瀬遺跡	〃	〃　ヤブ田・中瀬	縄
3.	大崎みやま遺跡	〃	〃　田ノ頭・みやま	旧・縄
4.	つぐめのはな遺跡	〃	野田免つぐめのはな	縄
5.	野田遺跡	〃	〃	〃
6.	前目遺跡	〃	山内免前目	〃
7.	永田遺跡	〃	〃　馬場崎	〃
8.	里城跡	〃	里免城	中
9.	里田原遺跡	〃	〃	弥
11.	笠松天神社古墳	〃	小手田免米ノ内	古
12.	小手田遺跡	〃	〃	縄
13.	田鳥山池遺跡	〃	〃　田鳥山	〃・弥
14.	中野ノ辻遺跡	〃	萩田免中野ノ辻	弥・古
15.	外目遺跡	〃	下寺免外目・提床・タイラ	旧・縄
16.	以善遺跡	〃	以善免大塔	〃・〃
17.	石垣田遺跡	〃	〃　石垣田	〃
18.	以善浦遺跡	〃	〃　宮ノ谷	縄
19.	萩田遺跡	〃	萩田免横田	旧・縄
20.	南小学校前遺跡	〃	深月免北河内	〃・〃
21.	万場遺跡	〃	〃　中田・大畑	〃
22.	馬ノ元遺跡	〃	〃　丸山	〃
23.	深月遺跡	〃	〃　コイ首・針大辻	縄
24.	久吹浜遺跡	〃	岳崎免久吹	〃
25.	福崎Ｂ遺跡	〃	福崎免佐賀里	〃
26.	茅場池周辺遺跡	〃	〃	〃
27.	福崎Ａ遺跡	〃	〃　北野田	旧
28.	田代Ｂ遺跡	〃	田代免小高野	〃
29.	吹上石垣田遺跡	〃	〃　石垣田	縄

旧郡域は旧石器時代の遺跡が多く，田平町内でも17箇所の遺跡がある。町の西海岸に近い日ノ岳遺跡は「日ノ岳型」と呼ばれる台型石器と炉跡・配石遺構が出土している。[註1]

縄文時代の遺跡では平戸瀬戸に面した岩礁上に成立した，つぐめのはな遺跡がある。縄文中期と前期の土層があり，中期では阿高武士器にサヌカイト製の巨大な石鏃と石鋸が伴い，縄文前期の土層では塞ノ神式土器に巨大な蝮頭状のサヌカイト製石銛が伴って出土し，クジラの骨が大量に出土していることから，捕鯨に関する遺跡と考えられている。[註2] この遺跡の背後の丘陵にある前目遺跡もほぼ同じ時期の遺跡である。[註3] 町の北岸にある久吹浜（くぶきはま）遺跡は未調査であるが，轟B式・曽畑式・橋状把手を持った阿高式土器が石鋸・磨製石斧などとともに発見され，注目されている。[註4] 里田原遺跡は弥生時代の遺跡として著名であるが，黒曜石製の石鋸（銛頭）が出土しており，縄文遺跡もあったことを意味している。[註5]

弥生時代の遺跡は多くないが，里田原遺跡の他にも国道204号線沿線に，中野ノ辻遺跡があり，箱式石棺21基が調査されている。[註6]

古墳時代の遺跡はさらに数少なく，里田原遺跡の南側丘陵に笠松天神社があり，全長34mの前方後円墳笠松天神社古墳がある。[註7]

奈良時代以降の遺跡としては，「里田原」に条里の跡がのこっている。また，里田原遺跡北側の丘陵に布目瓦の出土するところがあるが，寺院跡の伝承はない。太宰管内誌によれば，松浦郡弥勒寺が田平町にあり，類聚三代格天平17年（745）10月12日にも松浦弥勒寺のことが見えているが具体的な遺跡については不明である。（正林）

註

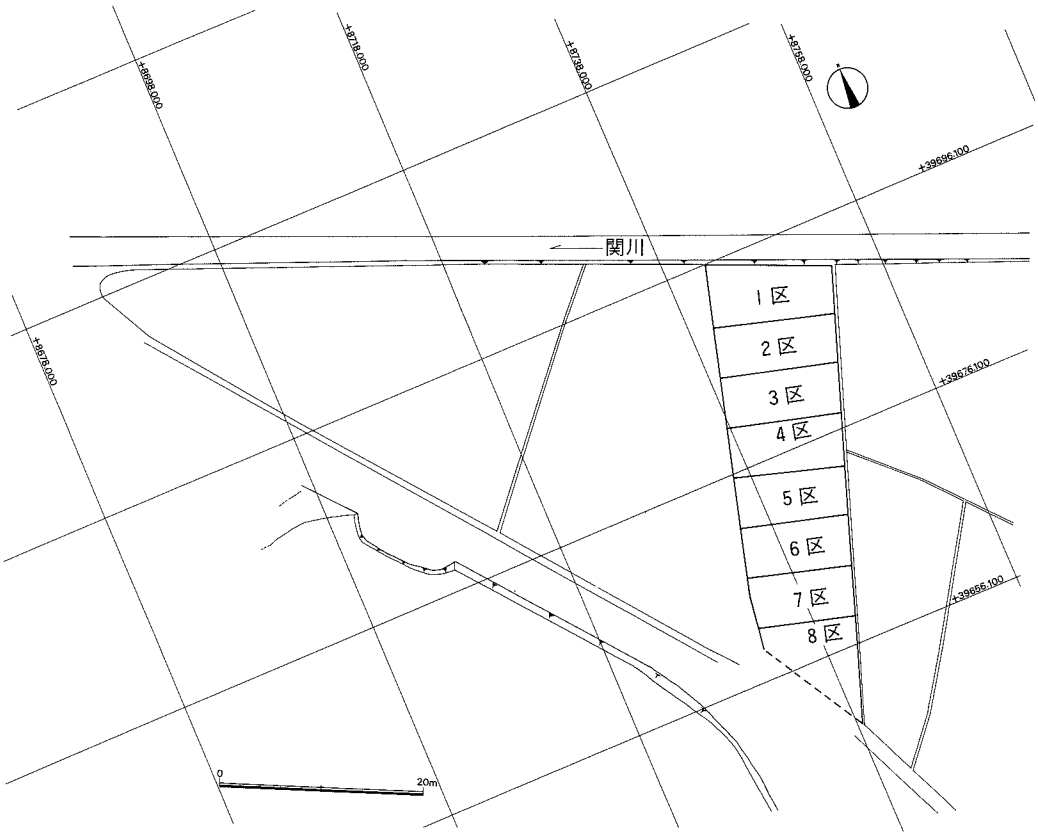
1．下川達彌・立平　進『日ノ岳遺跡』長崎県立美術博物館1981
2．正林　護・村川逸朗『つぐめのはな遺跡』「長崎県埋蔵文化財調査集報IX」長崎県教育委員会1986
3．高野晋司『前目遺跡』「長崎県埋蔵文化財調査集報X」長崎県教育委員会1987
4．安楽　勉『久吹浜出土の遺物』「里田原遺跡」「田平町文化財調査報告書第2集」田平町教育委員会1985
5．安楽　勉他『里田原遺跡』「長崎県文化財調査報告書第25集」長崎県教育委員会1976
6．高野晋司他『中野ノ辻遺跡・里田原遺跡』「田平町文化財調査報告書第1集」田平町教育委員会1982
7．藤田和裕他『笠松天神社古墳』「田平町文化財調査報告書第4集」田平町教育委員会1989

III 調　　査

(1) 第25次調査の概要（第１旧河道）

調査区の設定にあたってはまず，道路中心であるNo.15とNo.16の線を見通した線を基軸とし，その後南北に５ｍ毎に杭を打った。その呼称は北から順にＩ区～Ⅷ区とした。なお，調査区の四隅と主要な杭には町建設課に依頼して測量のための座標を組んでもらった（第３図）。

調査は，40cm程表土剝ぎを行った時点でほぼ全面に遺構がかかることが分かった。結果的にはＩ区～Ⅷ区にかけて全面に旧河道が現われたが，II区では河道を東西に切るしがらみ遺構があり，またＶ区からVI区にかけて略北東から南西に走る水処理施設と思われる杭列がみられる。出土する遺物は縄文晩期から弥生前期の資料であるが，晩期資料はより西側に集中する傾向がある。なお旧地形は東→西方向にやや低く，同時に南→北方向に低くなっていたものと思われ，また，III区からIV区にかけての護岸部にはドングリピットと呼ばれる堅果類の貯蔵施設が３基出土している。以上の各遺構については後述する。（高野）



第３図　第25次調査区域図（$\frac{1}{400}$）（国土座標Ｉ系）（1/400）

(2) 第26次調査の概要（第２旧河道～第４旧河道）

平成２年度の調査は，前年度調査区が道路新設の部分であったのに対し，今次の調査対象区は，里田原西線の直線部分の長さ150m，幅10mの範囲で実施した。

調査前の予想では，これまでの周辺の試掘調査の結果から，南側の現松浦農協田平支所前あたりに旧河道が走ることは考えられていた。また北側にもう１本の旧河道も予想されていた。しかし，大型重機を使用して表土を剝がして行くと，中央あたりにも，もう１本の旧河道が検出され，昨年からの分を入れると合計４本の旧河道が道路予定地に認められたことになる。発掘調査の完了予定は当初年内決着が考えられていたが，期間が延長され平成３年１月19日をもって終了した。

遺物の一番認められたのは第４河道における第34区から40区であり，弥生時代前期末から，縄文時代晩期終末期までの遺物が出土した。下層からは木片類も多く出土しているが，木製品は少ない。遺構は貯蔵穴が３基検出されている。第２旧河道も11区から16区まで，前者と同様の遺物が出土している。しかし大型の組合せ式の木製品が出土したことは，建築材として注目されよう。また地山層を深く掘り込み男性性殖器を埋置した状態で検出したことは，当時の生産儀礼等を考える上で貴重な資料と考えられる。

調査終了後は直ちに道路工事は行われ，完工している。

なお調査関係者は下記のとおりである。(安楽)

平成元年度第25次調査

調査担当	高野　晋司	長崎県教育庁文化課主任	文化財保護主事
	藤田　和裕	〃	〃
	村川　逸朗	〃	文化財保護主事
	正林　　護	〃	文化財調査員
	伴　耕一郎	〃	〃

平成２年度第26次調査

調査担当	安楽　　勉	長崎県教育庁文化課主任	文化財保護主事
〃	正林　　護	〃	文化財調査員
特別参加	白　　雲翔	中国社会科学院考古研究所	
事務局	松田　正幸	田平町教育委員会教育長	
〃	中西　正人	〃	教育次長
〃	安河内　毅	〃	主事
〃	松永　雅範	〃	派遣社会教育主事

(3) 土　　層

2年次にわたる里田原西線の調査区土層は，その長い範囲を反映して一貫した堆積状態とはなっていない。やはり旧河道によって堆積の変化が観察される。標高もわずかながら北から南へ低くなっている様子が窺える。ここでは第1旧河道から第4旧河道に位置する各調査区の土層について観察する。

①第1区～第8区　（第1旧河道）（第4図）

1，2層は何れも耕作で70cm程の厚みを持つ。3層は黒褐色粘質土で30cm程の厚みで，東側に移行するにつれ黒色から灰色に変わる。4層も30cm程の厚さの粘土層であるが，3層に比べてやや黄色味が増す。遺構が無い地点ではこの4層面には青灰色の粘土層が堆積する。5層は灰褐色砂質土層，6層は黒褐色砂質土層でともに20cm程の厚みを持つ。7層は岩盤である。

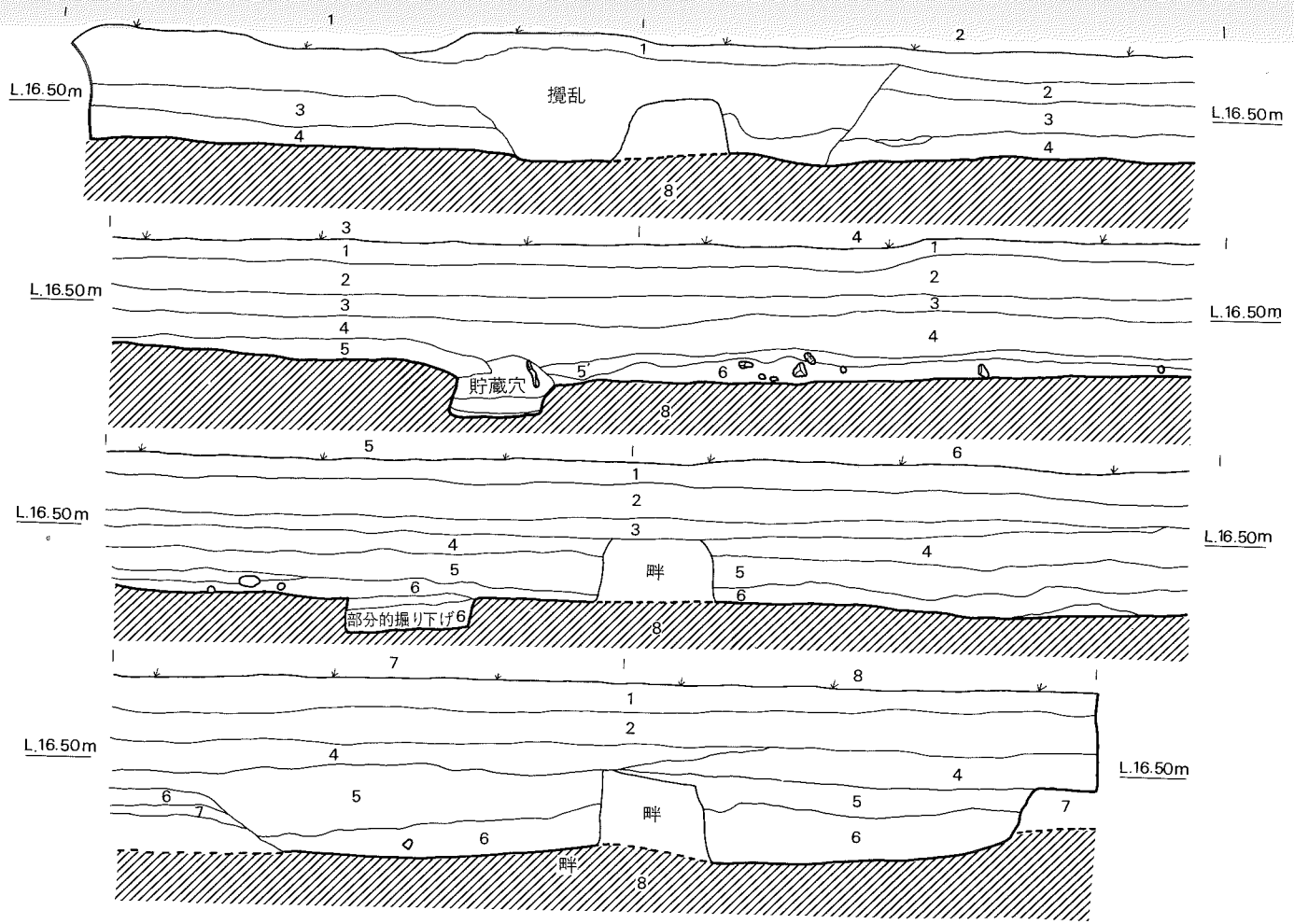
この内，遺物を包含するのは4層以下であり，4・5層からは弥生時代前期の資料が多く，6層からは縄文時代晩期の資料が多く出土する。ドングリピットは6層の黒褐色砂質土層と岩盤を切って護岸部分に構築されている。水の流れと湧水を意識した作りである。

②第11区～第16区　（第2旧河道）（第6図）

この区の旧河道の幅は約15mが考えられ，北側においては落ち込み部が顕著に認められる。第1・2層は耕作土層であるが，2層が灰色を呈し明瞭に区別がつく。厚さ約40cmを測る。3層は黄灰褐色粘質土で，鉄分を多く含み石灰質状に固った堅い石状のものを含む。この層は弥生時代の遺物が包含される。4層は黒灰色粘質土層で14区の途中から認められる。ここからは弥生土器と夜臼式土器が混在して出土する。5層は灰褐色粘質土層で，13・14区では色調がやや黒褐色に近く夜臼式土器を含むが，15・16区では灰緑色に近く，遺物を含まない。6層は灰黒色粘質土層で5層より色が濃くなる。7層は黒褐色粘質土で一段落ちた旧河道内に堆積し，夜臼式土器が含まれる。8層は黒褐色腐植土層で植物の堆積が見られ，粘質土は含まれない。この層には自然木が多く含まれるほか，木製品，丸太材と思われる焼けたものも含まれる。また遺物は上部に夜臼式土器が含まれるが，下部の層にかけては含まれない。9層は褐色粘質土の，いわゆるローム質層で黒曜石と縄文晩期終末の土器を含む。10層は灰緑色粘質砂利層で，旧河道落ち込みの肩の部分に堆積している。（高野）

③第21区～第23区　（第3旧河道）（第6図）

この区間は耕作土層である1・2層は機械で剝ぎ取ったため3層以下しか図示していないが土層の性質および名称は同じである。ただ若干違う部分は7層の黒褐色粘質土層に材木が含まれることである。また21区北側には掘りくぼんだ部分が見られ，7層が黄灰褐色粘質土と灰褐色粘質土に分れている。遺物の出土状況も前者と変化ないが，量的には少ない。また河床面である地山層の面は第14区が標高14.70mに対して第22区では標高15.20mで50cm程旧第2河床面



1・2層 耕作土層　3層 灰(黒)色粘質土層　4層 黄灰色粘質土層，明灰色粘質土層　5層 灰褐色粘質土層，5層 5層よりやや黒味ある層　6層 黒褐色土層（有機質を含む）　7層 青灰色粘質土層　8層 灰色砂利層

0　5m

第4図　第25次調査第1区～8区土層図（1／60）

が高くなっている。

④第34区～第40区　（第４旧河道）（第６図）

この旧河道では，第35区の北東隅と第39区の南西隅を旧河道の落ち込みが認められ，河道の流れは南東から北西方向に蛇行していることが想定される。

層位は１・２層が耕作土で約55cmを測る。３層は灰褐色粘質土層で弥生時代の遺物を少量出土する。４層は灰褐色粘質土層で板付II式以前の遺物や木片を含む。５層は黒褐色粘質土層で木片や有機質を多く含んでおり，遺物は夜臼期が主体である。６層は暗灰色粘質砂利層でここでも遺物が含まれる。またこの層から地山層を掘り込んだ貯蔵穴が３基検出されている。なお，この旧河道の地山河床面は標高15.30mで，第３旧河道河床面とあまり変わらない。（安楽）

(4) 遺　　構

町道里田原西線改良工事に伴う発掘調査は，遺跡の北辺を流れる一関川の南側の延長約200m，幅約10mの区域を対象に実施した。各調査区は北から順に１～41区とし，それぞれ南北５m，東西10mとした。

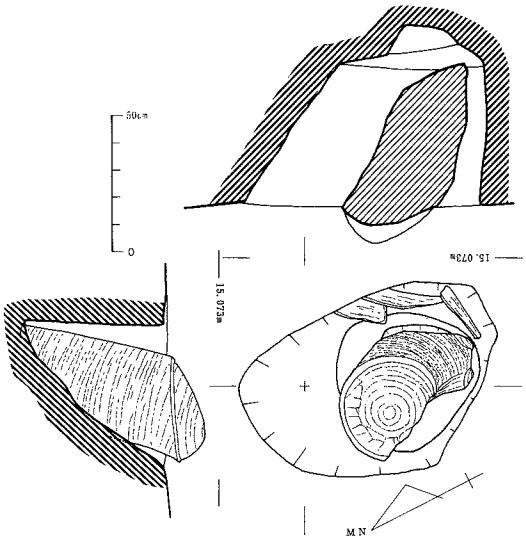
試掘調査の結果，微高地と沼沢状の低湿地部分があり，微高地形の部分では遺構・遺物は検出されず，低湿地形の部分で遺構・遺物が包含されていることが確認された。この試掘調査の結果に基づき，調査を実施したのは１～８区（平成元年度），11～15・21～22・34～40区（平成２年度）の合計22区である。

これらの調査において，低湿地形は全体として北→南方向にわずかに下降傾斜し，現在の水田面の高低差とほぼ一致していることが確認できる。遺構・遺物の包含状態は土層の項で触れたとおり上下２層にわたっている。

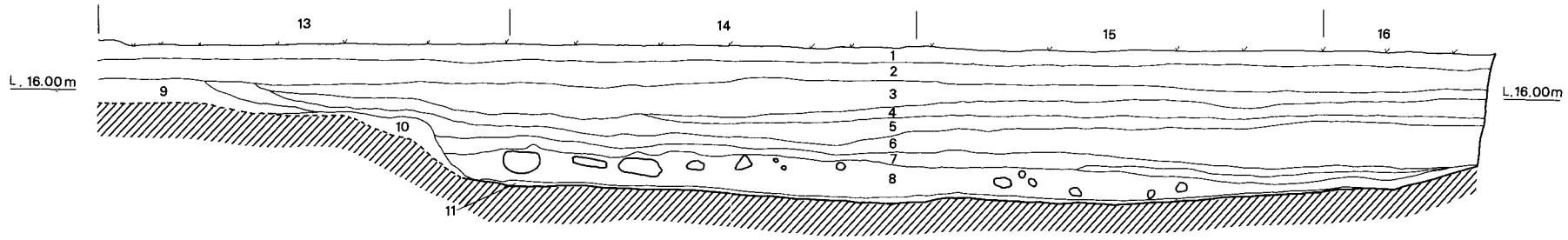
陽根状木製品埋置遺構（第５図）

14区の西半部で１基を検出した。直径70cm，深さ約80cmの土壙に陽根状木製品を埋置した遺構である。土壙は，乳房状の形に掘られ，下段は木製品ぎりぎりの規模になっていて木製品の安定を意図している。底に粘土が詰められているのも同じ意図によるものであろう。

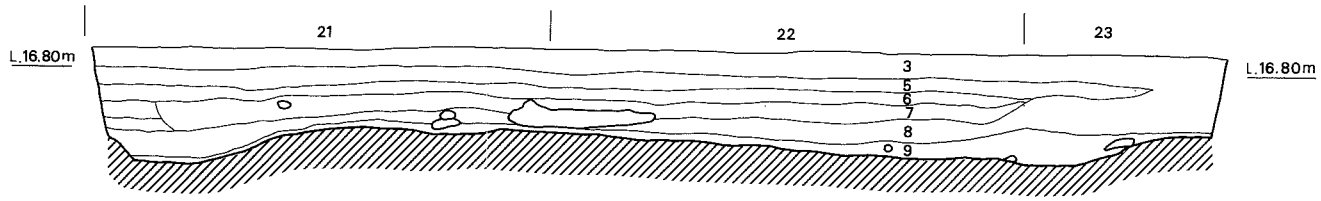
陽根状木製品は全長約73cm，直径約34cm，亀頭状部分を上にして約80°の角度で土壙に立てられていたが，本来は直立状態であった

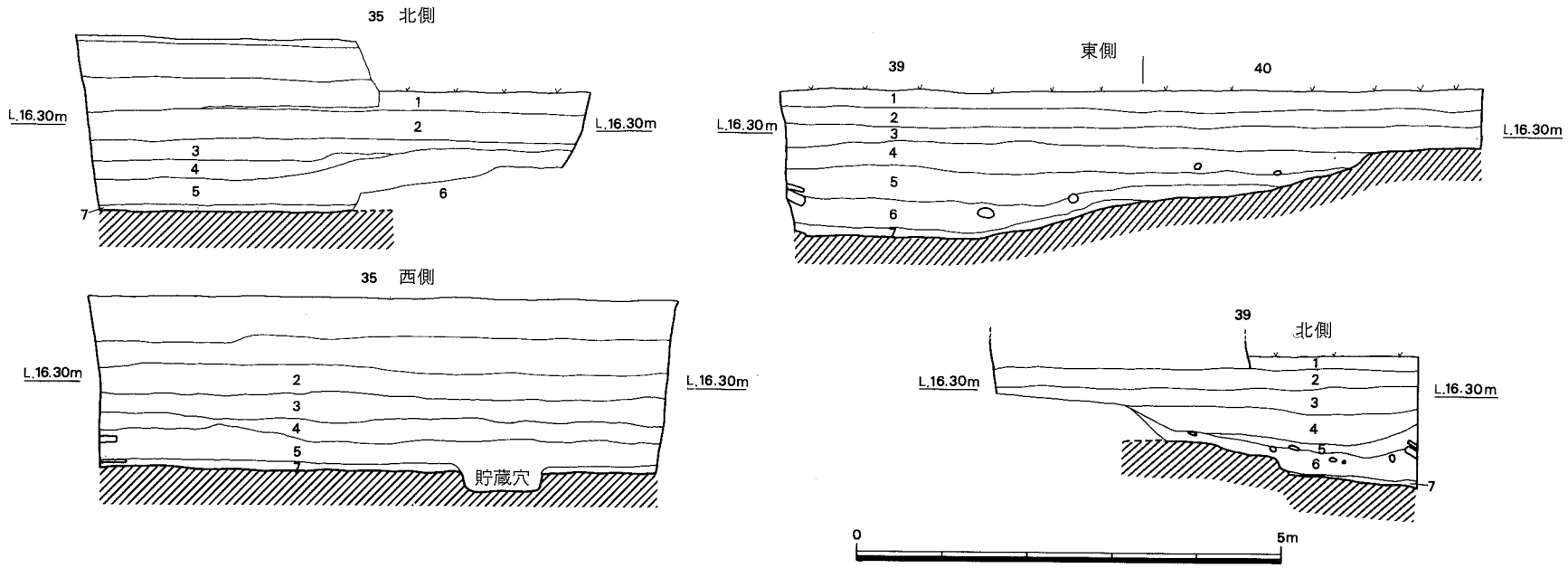


第５図　第14区陽根状木製品埋置遺構図（1/30）



1層　耕作土層　　2層　灰色粘質土層　　3層　黄灰褐色粘質土層　　4層　黒灰色粘質土層
5層　灰褐色粘質土層　　6層　灰黒色粘質土層　　7層　黒褐色粘質土層　　8層　褐色腐植土層
9層　褐色粘質土層　　10層　緑灰色粘質土層　　11層　灰色砂利層





第6図　第26次調査第11区～40区土層図（1/80）

と考えられる。土壙の切りこみは第Ⅴ層中からであり，この遺構が弥生前期後半の時期に所属していることを示している。この遺構が構築されていた部位は沼沢状低湿地の北岸にあたっていて，遺構構築の目的は定かではないが，「塞の神」的な目的で埋置された可能性を考えておきたい。

この種の遺物で弥生時代に関するものは，今のところ53例が知られ，この内木製のものは7例が知られている[註1]が，規模の点では最大級に属している。

堅果加工施設（第7～10図）

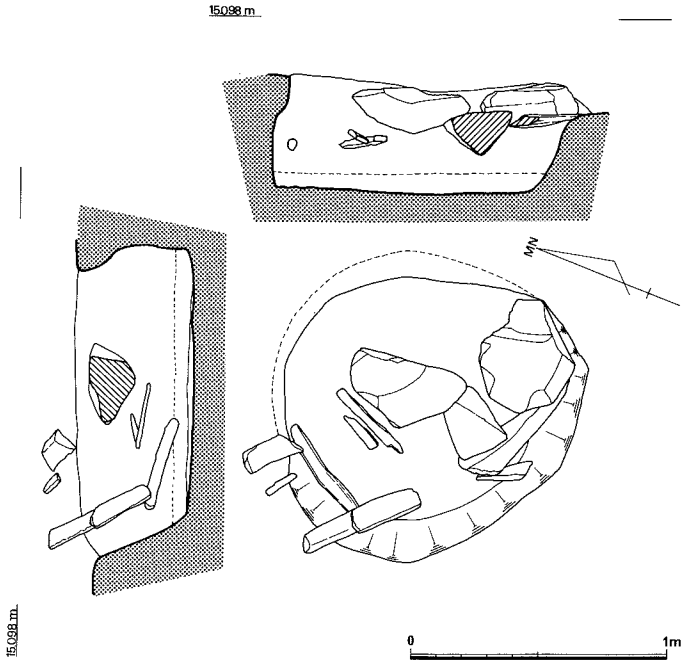
3区の北辺で3基，36区の北辺で3基が検出された。いずれも灰黒色の粘土質土層下面から掘りこまれ，緑灰色の砂利層ないし基盤である青白色の粘盤岩にまで掘りこまれている。平面形は直径1mほどの円形，深さ50～80cm程度の土壙で，断面形がビーカー状になっている。

本来は，土壙の縁を保全する板をめぐらし，この上に板蓋をかぶせ，蓋の浮遊防止のため礫を置いた構造であることが，従前の調査で判明している。今回の調査で検出された遺構も板や礫の残ったものがあり，同様の構造であったことを知ることができる。今回検出した遺構は弥生前期に属している。

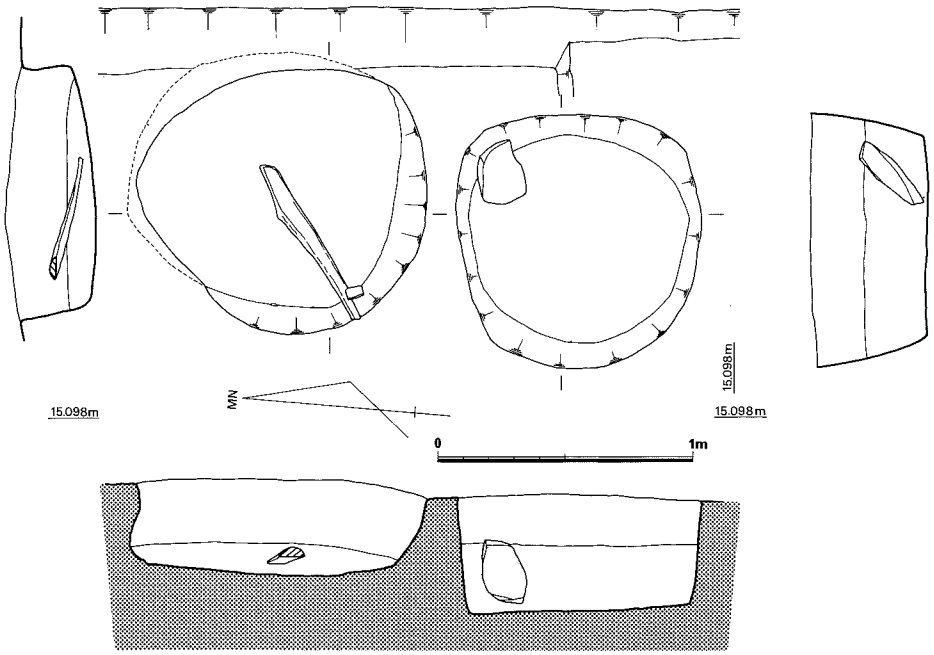
3区の1号遺構は，東西115cm，南北110cm，深さ40cmの土壙で，土壙の北東壁面がややオーバーハングした形になっている。土壙を縁どっていた板材が一部残り，板蓋を押さえていたと考えられる自然石が3箇，土壙の中に途中まで落ちこんでいて，板蓋の腐敗消滅したことを示している。3区2・3号遺構は北壁に近い位置に2基，近接して構築され，北側が2号である。2号遺構は南北110cm，東西93cm，深さ約40cmの浅い竪穴が掘られている。壙底はやや中くぼみになっており，北東側がオーバーハング気味になっている。厚目の板1枚残り蓋材の一部と考えられる。3号遺構は東西95cm，南北90cm，深さ45cmで床面は平らになっている。人頭大の礫1個が壙底に落ちこんでおり，蓋を押さえていた礫であると考えられる。

35区でも3基の堅果加工施設が発見された。1号遺構は南壁に半分がかかった状態であり，上縁で直径約120cm深さ約25cmの浅い皿形の遺構である。丸太状の木材4本が残っており，土壙上縁に使用されていたらしい。2号遺構は形が1号に似ており，東西95cm，南北80cm，深さ20cmの浅い皿状の土壙で1個の礫が残っている。この2基は壙底を掘りさげる途中の未完成の遺構であったかもしれない。

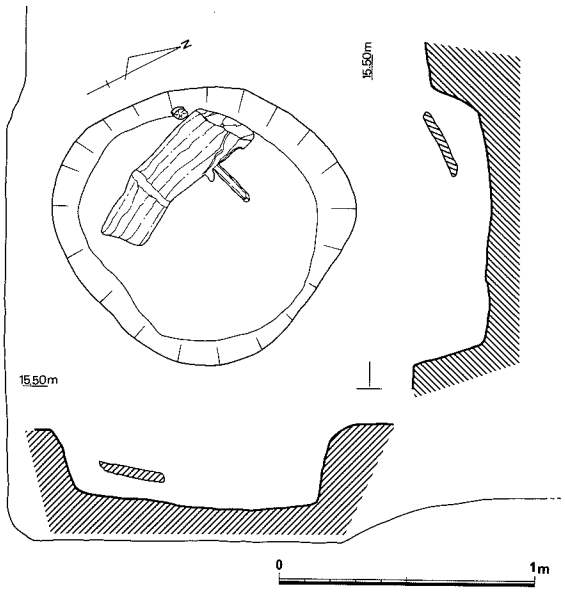
この種の堅果加工施設は従前の里田原遺跡の調査で33基以上が調査され，カシの実などの堅果が充塡された状態のものや，ペースト状になった澱粉が遺存した状態のものが確認されている。縄文時代からの伝統的な澱粉採取技術で，県内でも壱岐名切遺跡（縄文中～晩期[註2]）・福江市中島遺跡（縄文後期[註3]）のほか，弥生時代遺跡では南高来郡北有馬町の今福遺跡（後期[註4]）で確認されている。



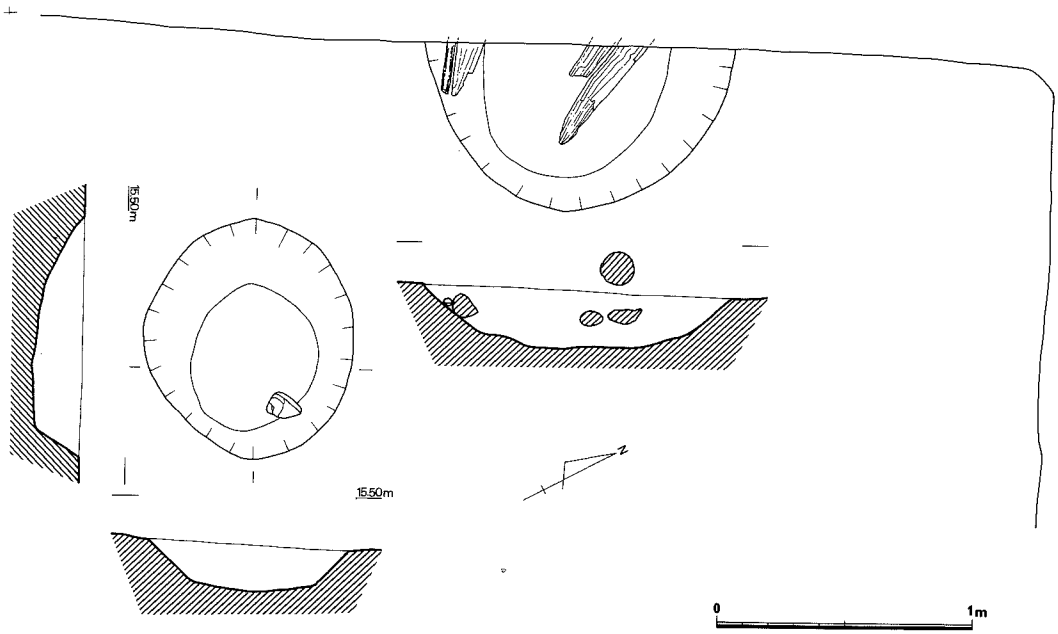
第７図　第３区出土の貯蔵穴実測図(1/30)



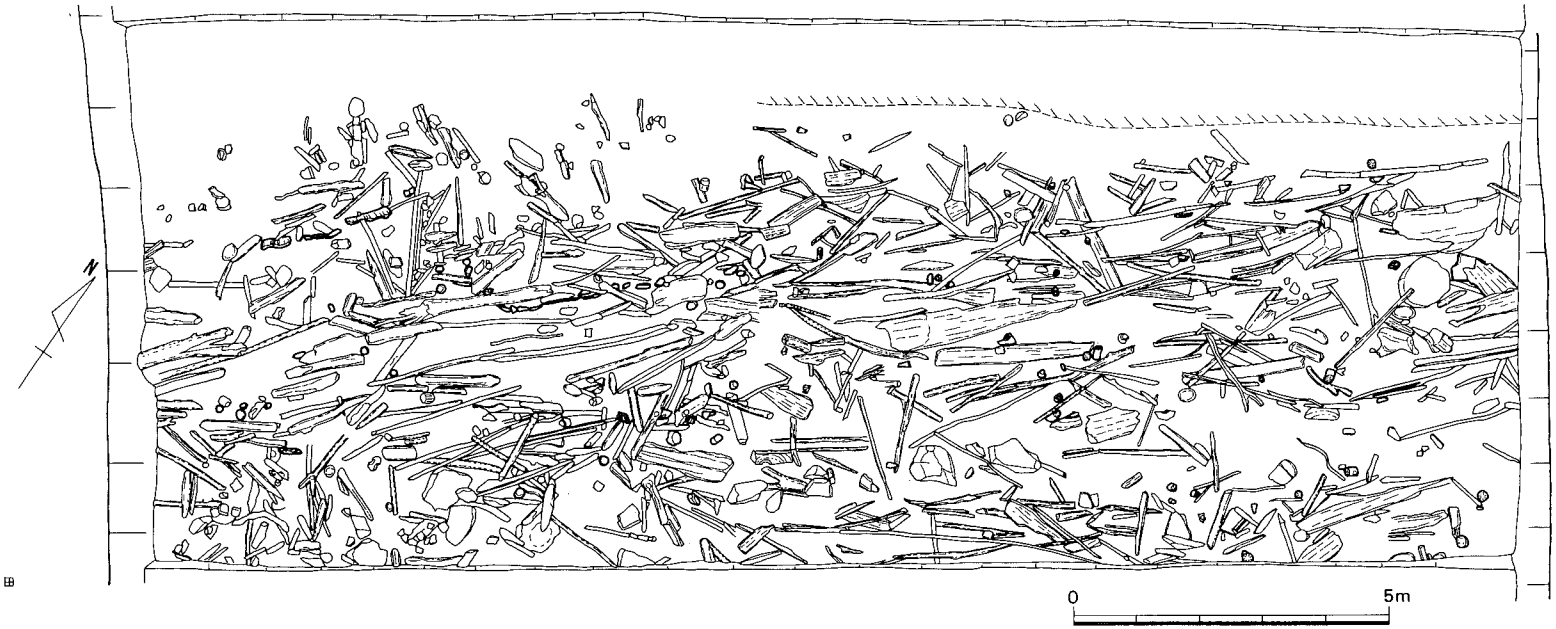
第８図　第３区出土の２号・３号貯蔵穴実測図(1/30)



第９図　第35区出土の貯蔵穴(1/30)



第10図　第36区出土の貯蔵穴(1/30)



第11図　第Ⅰ区出土杭・矢板列実測図(1/80)

杭・矢板列（第11図）

発掘調査範囲の北辺，一関川に近い１～８区において，丸杭と矢板を並列させた遺構が検出された。これらは弥生前期の土層から打ちこまれており，所属時期を示している。遺物などを取り上げた後，並列状態の杭・矢板，折れるなどして原位置を失った杭と矢板材を残した状態が第11図である。第９区以南の調査区では杭が若干認められるものの，明確な列をなす遺構は確認されていない。

１区は杭が中央部にかたまった状態が確認されたが，杭列としては方向が確認できない。杭と矢板を並列させた遺構は，２区をほぼ東西に走る第Ⅰ列・２区の東南隅から３区の西南隅に走る第Ⅱ列・６区東南隅から５区の西辺に走る第Ⅲ列がある。

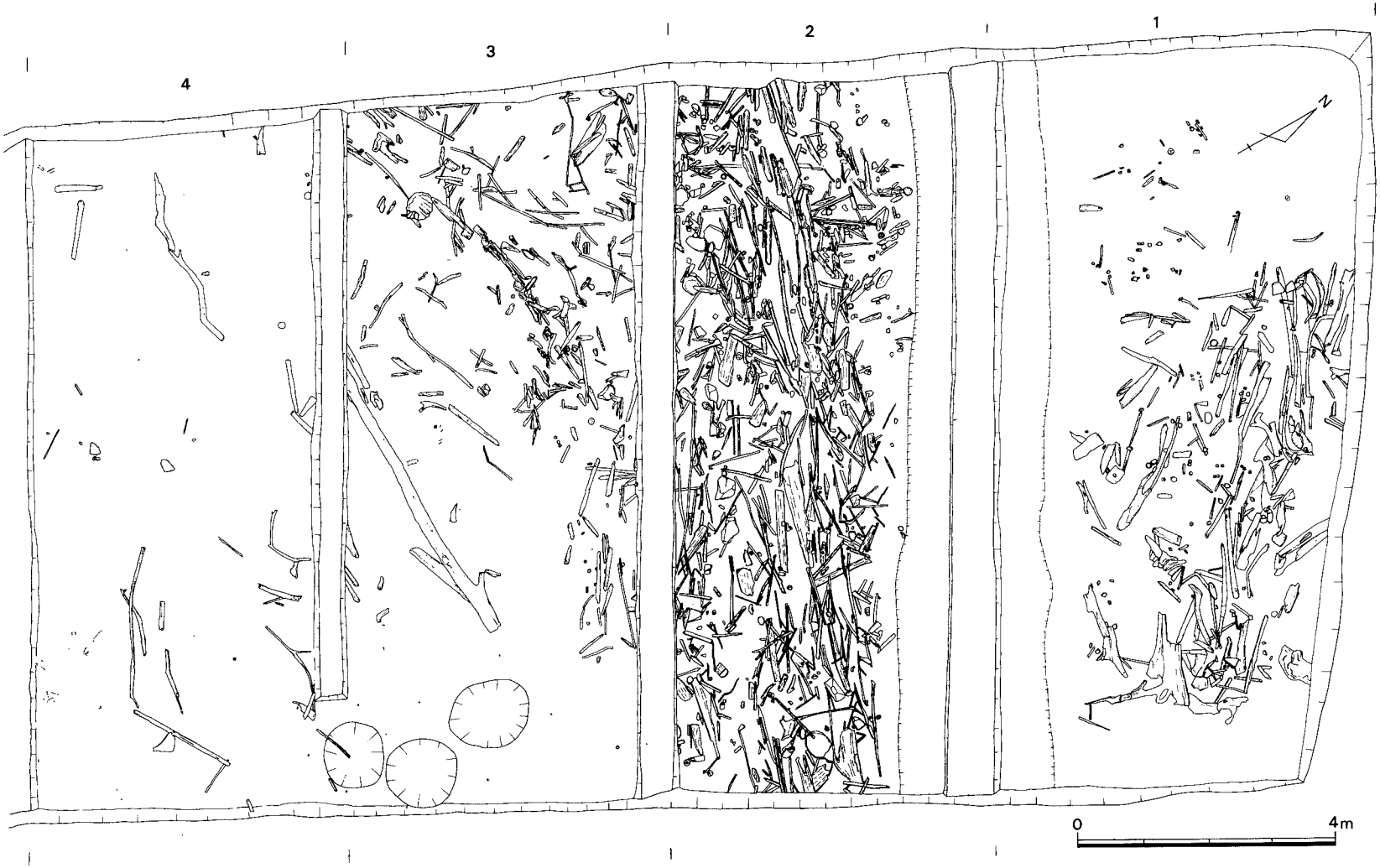
第Ⅰ列と第Ⅱ列はほぼ並行に近い状態に構築されているが，Ⅰ・Ⅱ列の間隔は東辺で約１m西辺では２m強あって，西方向ほど広がる傾向がある。ただし，第Ⅰ列と第Ⅱ列の間には不規則な位置にも杭が見られ，両者は畦畔のような一体の遺構と考えられる。この遺構を西南の方向に，第Ⅲ列の遺構を北西方向に延長すると，４区西辺に近い未発掘部分で直交することが考えられ，３区の一部から６区のあたりは低湿地が確保されることになる。この遺構構築の目的は調査区の東西辺を広く発掘することによって明らかになると考えられるが，里田原の南辺の里川の改修工事に伴う発掘調査で，旧河川の厳重な護岸施設が検出されており，類似の遺構であることも考えられる。[註5]

(5) 遺物の出土概況

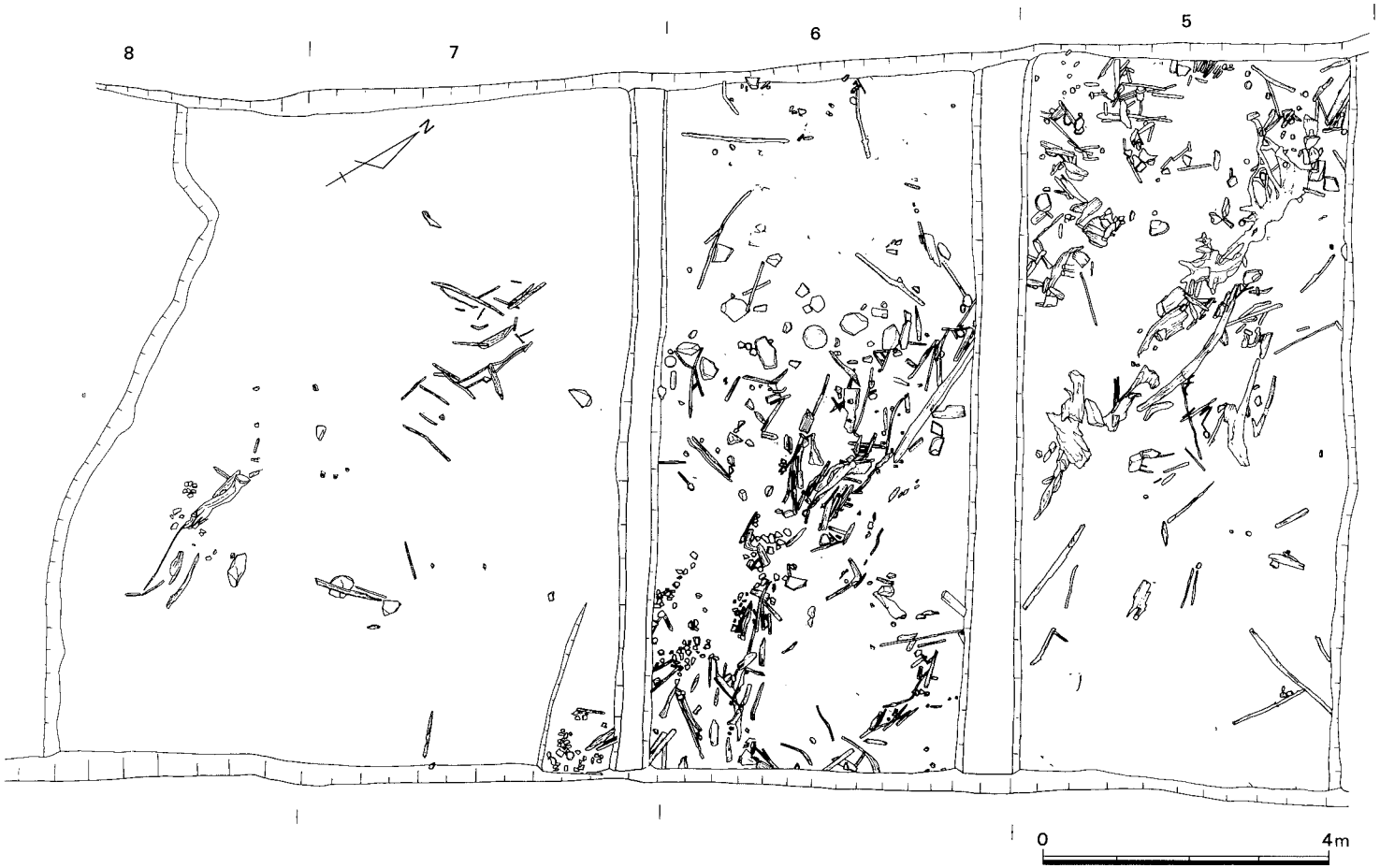
低湿地部分の土層は，①耕作土②軟らかい灰褐色の粘質土③黄灰色の粘質土④黒灰色の粘質土⑤灰褐色粘質土⑥灰黒色粘質土⑦黒褐色粘質土⑧黒褐色腐食土⑨茶褐色粘質土⑩灰緑色砂利⑪粘板岩（地山）の順になっている。地点によって遺物包含状況に粗密があるが，⑤～⑧は弥生前期の遺物を含み，⑨～⑩は縄文晩期の遺物を包含している。

遺物は，河床ないし沼沢状の低湿地に流入した状態で出土しているが，遺物の磨耗は少なく出土地点に近い場所からの流入であることが考えられる。

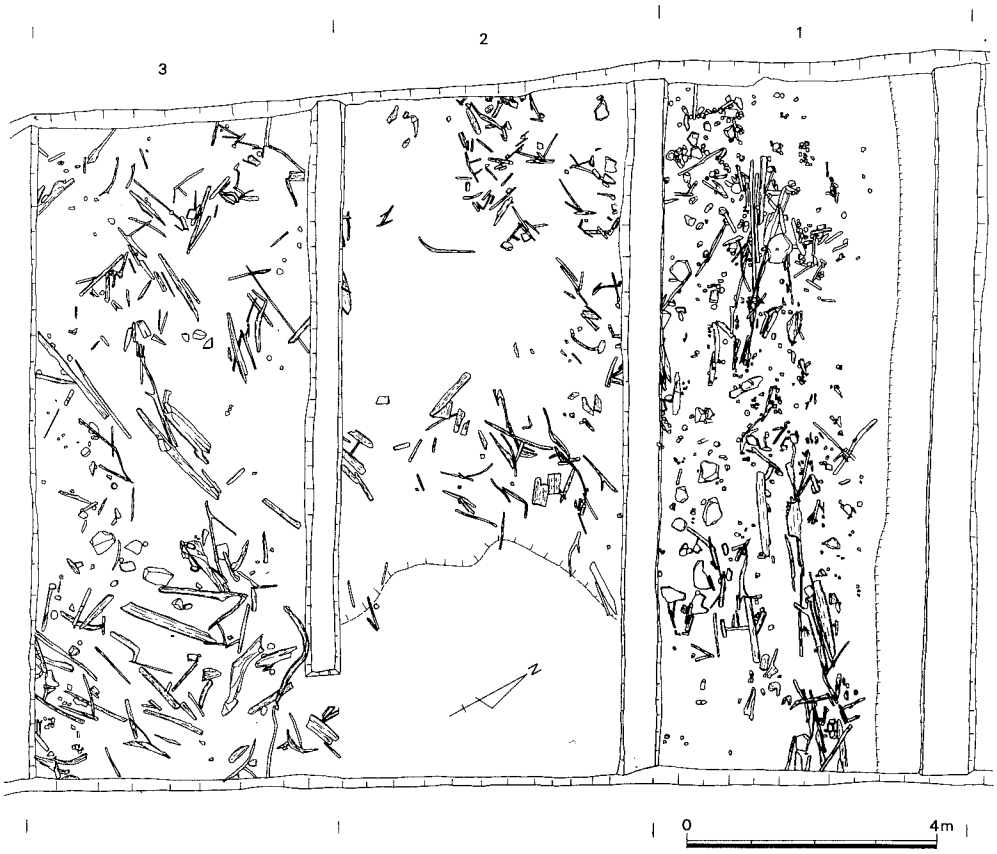
従前の調査で大量の遺物が出土しているが，今回の調査での出土品は比較的少ない。従前の調査で大量の遺物が出土したのは弥生前期末～中期初頭の時期であり，今回出土した遺物はやや先行する時期であることと関係することが考えられる。特に木製品の場合，従前の調査に比較して，器種・量ともに少ないのは，第一に時期の差によることが考えられる。第二に製作途中の未製品が少ないことからして木製品工房から離れているためと考えられる。しかしながら従前大量に出土していた西北九州型の広鍬などの農具が前期後半以来の形態的伝統をもっていること，一方竪杵の場合，前期後半と中期末とで形態的に異なることが確認されるなど，内容の面で重要な知見があったことは成果として評価に値する。



第12図　第１区～４区上層遺物出土状況図(1)(1/100)



第13図　第５区～８区上層遺物出土状況図(2)(1/100)

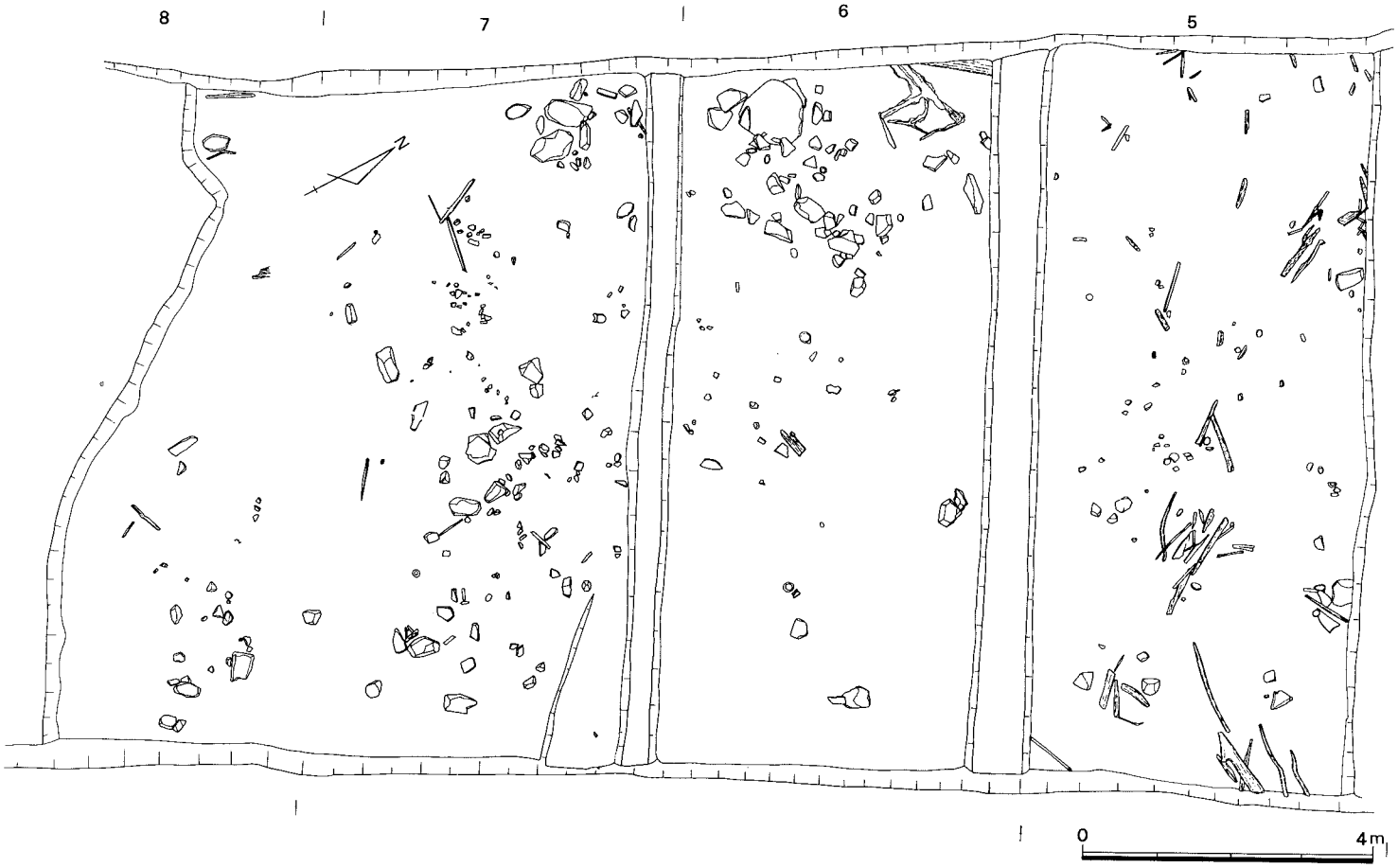


第14図　第１区～３区中層遺物出土状況図(3)(1/20)

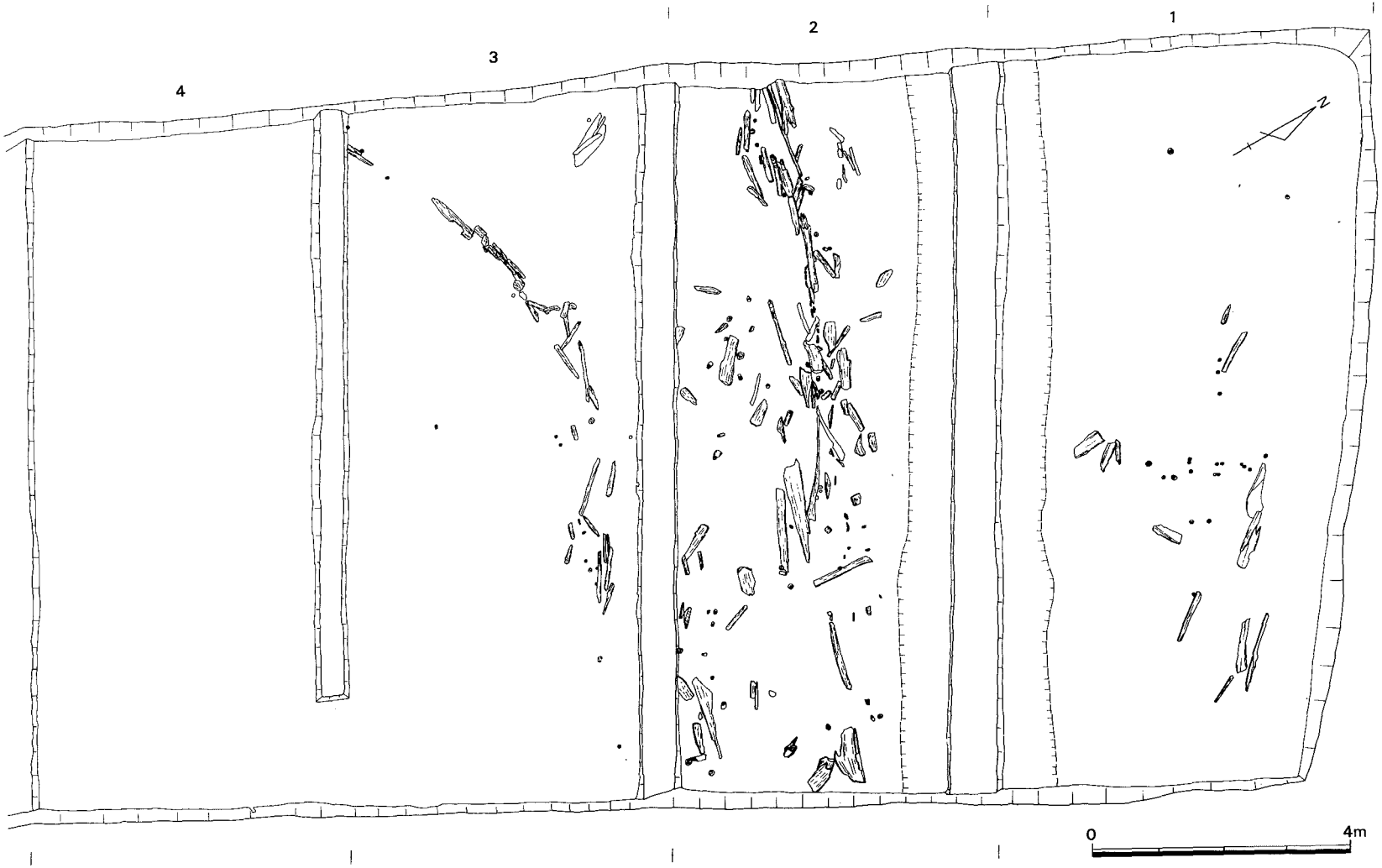
今回の調査で縄文晩期終末の遺物がかなりの量出土したことで，この時期の実像が浮かぶことになったことは重要である。遺物の詳細については，当該の項目で述べる。(正林)

註

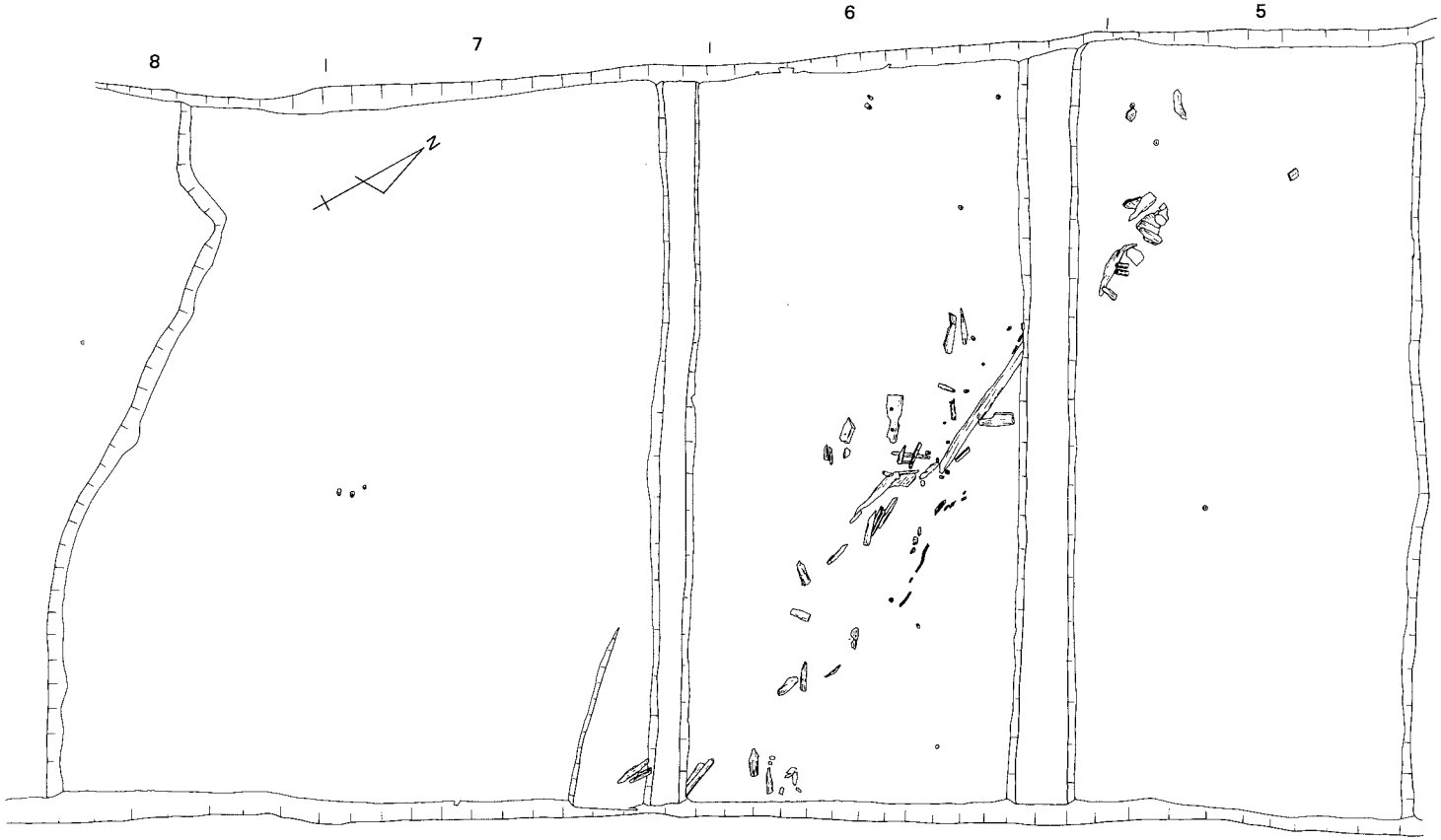
1．国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告第７集』「古代の祭祀と信仰」附篇1985．３
2．安楽　勉他『名切遺跡』「長崎県文化財調査報告書第71集」長崎県教育委員会1985
3．正林　護他『中島遺跡』「福江市文化財調査報告書第３集」福江市教育委員会1987
4．宮崎貴夫他『今福遺跡Ⅰ』「長崎県文化財調査報告書第68集」長崎県教育委員会1984
5．正林　護他『里田原』「田平町文化財調査報告書第３集」田平町教育委員会1988



第15図　第５区～８区中層遺物出土状況図(4)(1/100)

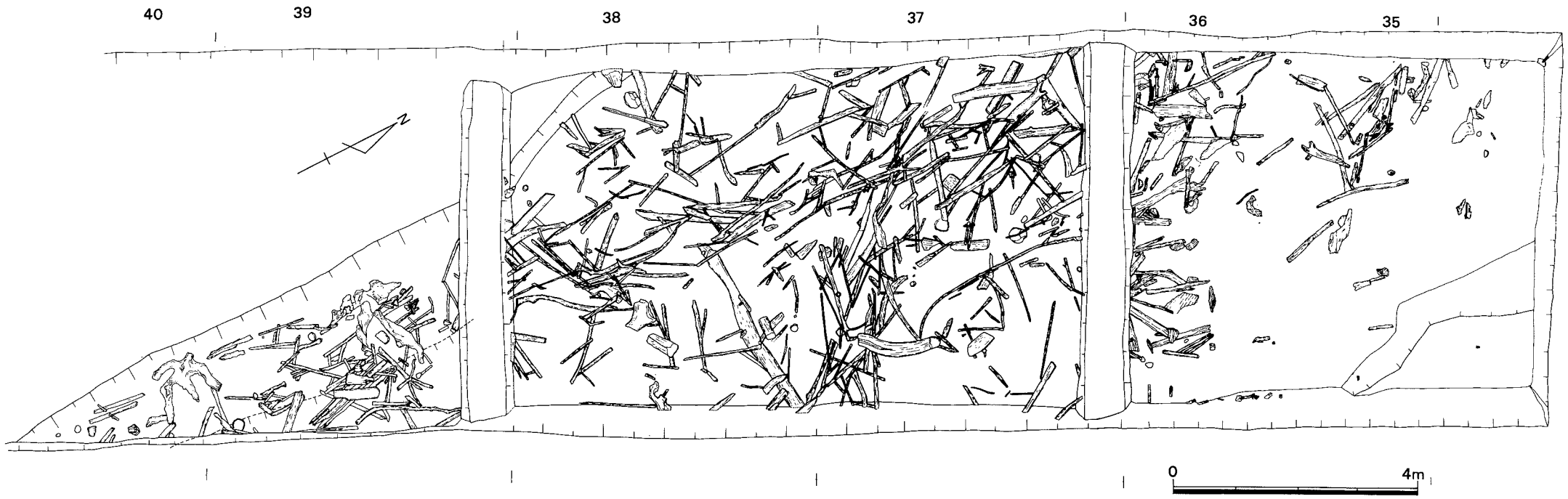


第16図　第Ⅰ区～4区下層遺物出土状況図(5)(1/100)

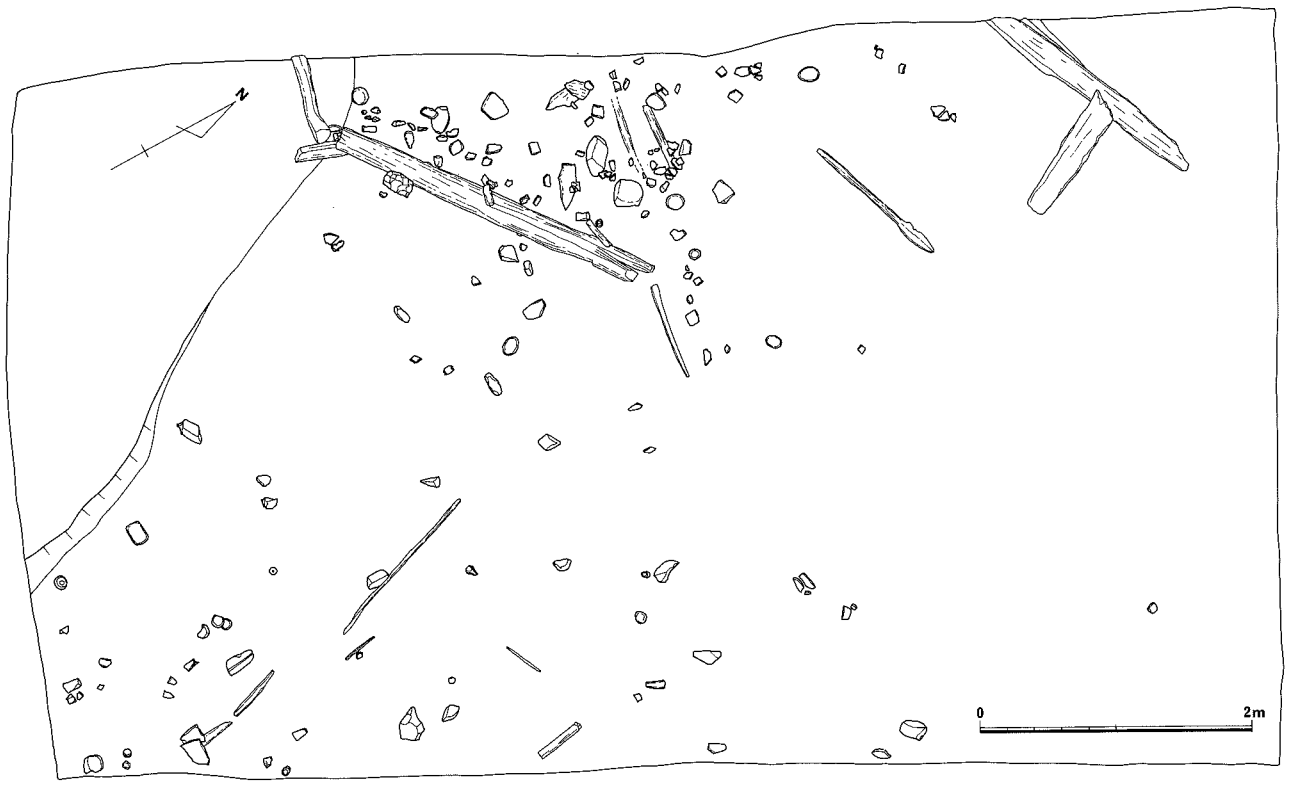


第17図　第5区～8区下層遺物出土状況図(6)(1/100)

0　4m



第18図　第35区～40区上層遺物出土状況図(1)(1/100)



第19図　第36・37区下層遺物出土状況図(1/60)

Ⅳ 遺　　物

里田原西線改良工事に伴う今回の調査で得られた遺物は，第１旧河道から第４旧河道内で得られたものが殆どである。

縄文時代晩期終末から弥生前期末頃までの土器・石器・土製品・木製品などである。最も遺物が多く認められたのが第１区から第８区で，次いで第36区から第40区である。

遺物は旧河道を中心として取扱い，区単位としては扱っていない。土器の器種は甕・壷・鉢に大別され，さらに類別に細分している。石器は，これまで出土例が少なかった扁平打製石斧が目立っているが，旧第４河道に集中している。遺物の取上げについては出来るだけ慎重を期したが，緊急調査と水田という制約上，層位的に取りあげることは困難を極めた。そのため分類については若干の混乱が見られるが，古いタイプの土器は下層からという原則に従ったものもあることを明記しておく。(安楽)

(1) 第１区～第８区出土の縄文土器

以下図示する資料は,何れも第１区～８区内の第１旧河道と呼称した遺構から出土したものであり，器形としては，壷・鉢・甕類が見られる。

器形によって大きく次の３種に分ける。

甕類（第20図～第23図）

全体の特徴から以下のIII類に分類する。

Ⅰ類（第20図１～14）

口縁部が内傾気味に直口し，肩が屈曲しないタイプのものである。何れも粗製で器壁も厚い。

１は口径26.5cmの粗製甕である。口縁部はやや内傾しながら胴部に至る。暗褐色で胎土に雲母と角閃石を含む。内部は貝殻条痕が顕著で外部は荒いナデによる調整を施す。12～14は波状口縁の資料である。12は内外面に荒い貝殻条痕が残る。

II類（第21図１～６）

口縁部が外反気味か，内反する資料で肩が屈曲するタイプであるが，刻目が施されない資料である。やや厚目であり，焼成は良好であるが，何れも粗製の甕である。暗褐色か黒褐色で胎土には雲母を多く含む。

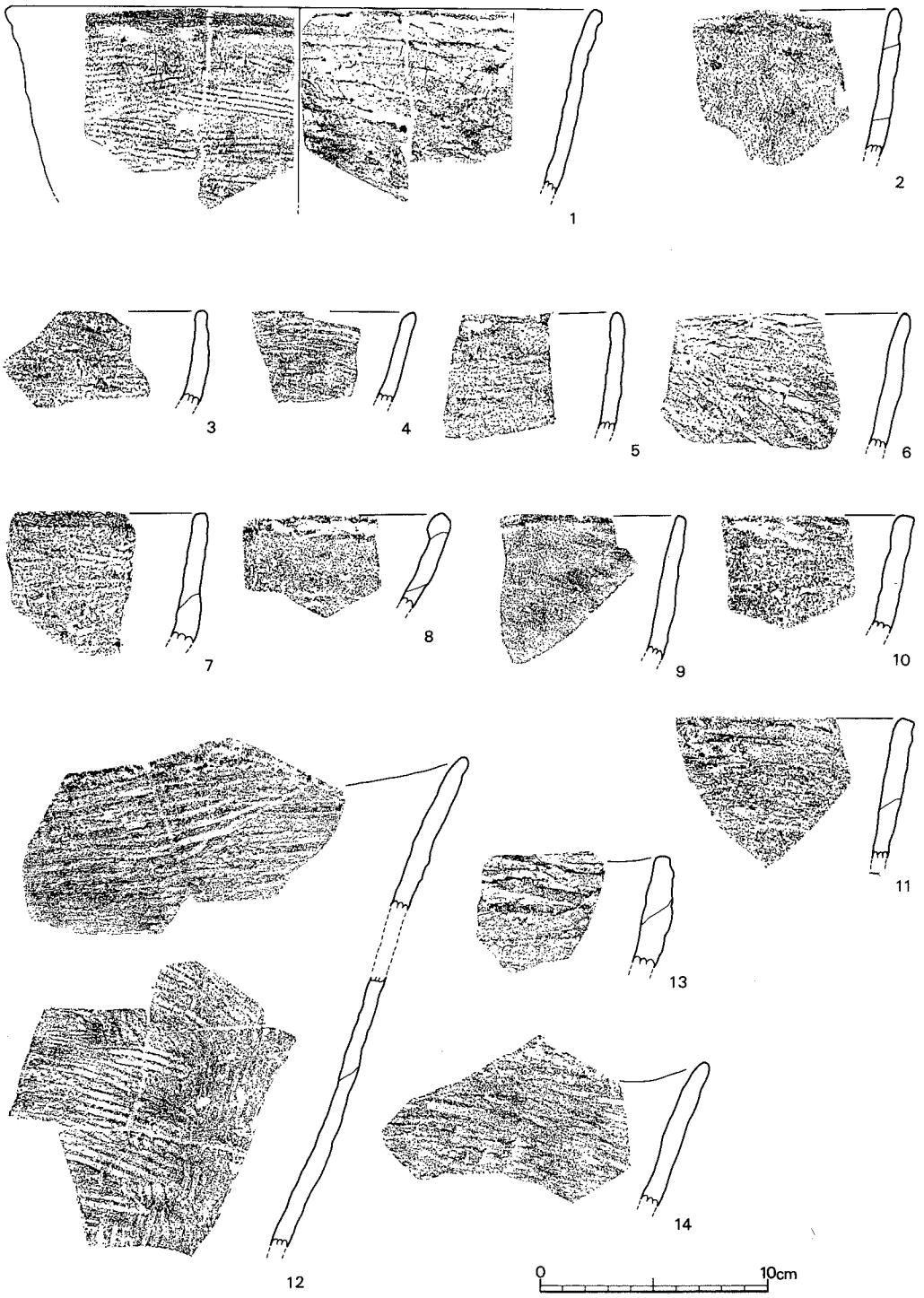
III類（第22図～第23図）

所謂刻目突帯文土器であるが，突帯の位置によって，以下の３種に小分類できる。

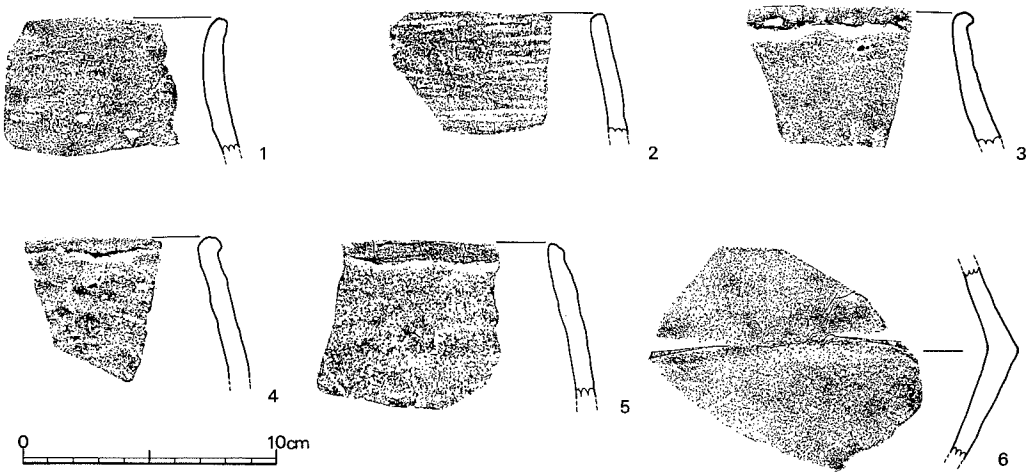
III－１（第22図１～９）

突帯が口縁部上端にあるタイプである。刻目は丸い棒状の先端部による大きく深いものや(１，３，５）や箆先による細く浅いもの (2，9)がある。色調は暗褐色か黒褐色系で，胎土には雲母

と角閃石を含むものが多い。調整は貝殻条痕(1)に加え，板状の擦過痕の上を箆によってナデ消す調整方法が見られる。



第20図　第Ⅰ区～8区出土縄文土器(1)(1/3)



第21図　第Ⅰ区～8区出土縄文土器(2)(1/3)

Ⅲ－2（第22図10～21，第23図22～30）

突帯が口縁部から少し下がった位置にあるタイプで，胎土，色調，調整方法共にⅠ類に似る。

Ⅲ－3（第23図31～35）

突帯がさらに下部に移動したタイプである。刻目はⅠ，Ⅱ類に比べて浅く規則的なものが多い。その他の諸特徴はⅠ，Ⅱ類に似る。

鉢類（第24図～第26図）

鉢類は以下の3種類に分類する。

Ⅰ類（第24図）

口縁は僅かに外反する。長い頸部を持ち，肩の屈曲は弱い。大部分は精製土器である。器壁は比較的薄く，焼成は良好である。胎土に雲母を多く含み，色調は暗褐色のものと黒褐色のもある。調整は板状工具による擦禍痕の上を篦ミガキするものが多い。

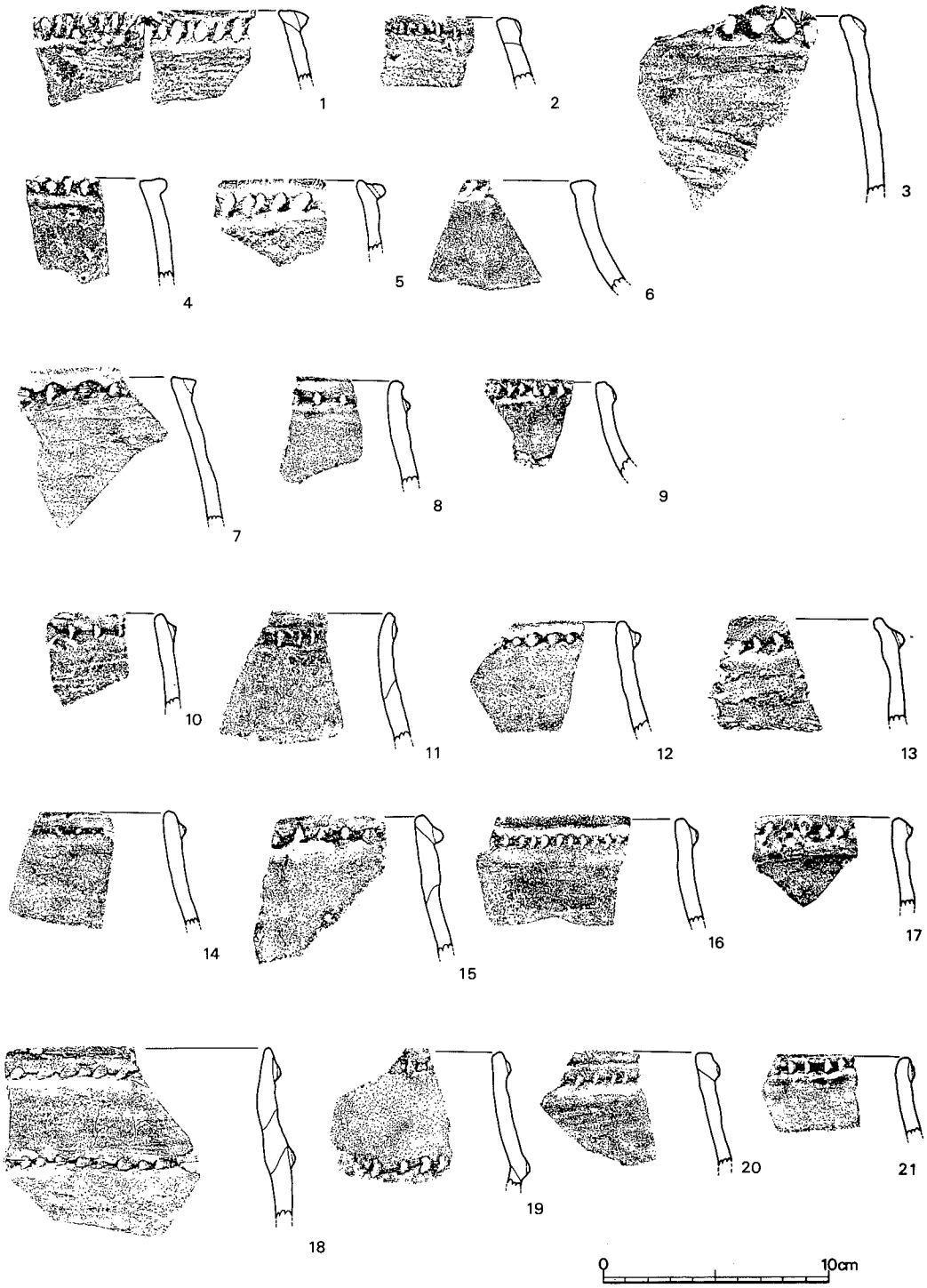
Ⅱ類（第25図）

精製浅鉢である。口縁部は僅かに外反し，頸部は短く肩部で強く屈曲するタイプのもの（1～5）と屈曲が弱いタイプのもの（6～9）がある。口径は22cmから28cm位のものが多い。色調は大部分が黒褐色で，胎土には雲母は角閃石を含む。器壁は薄く，焼成は良好である。5は高杯の可能性がある。

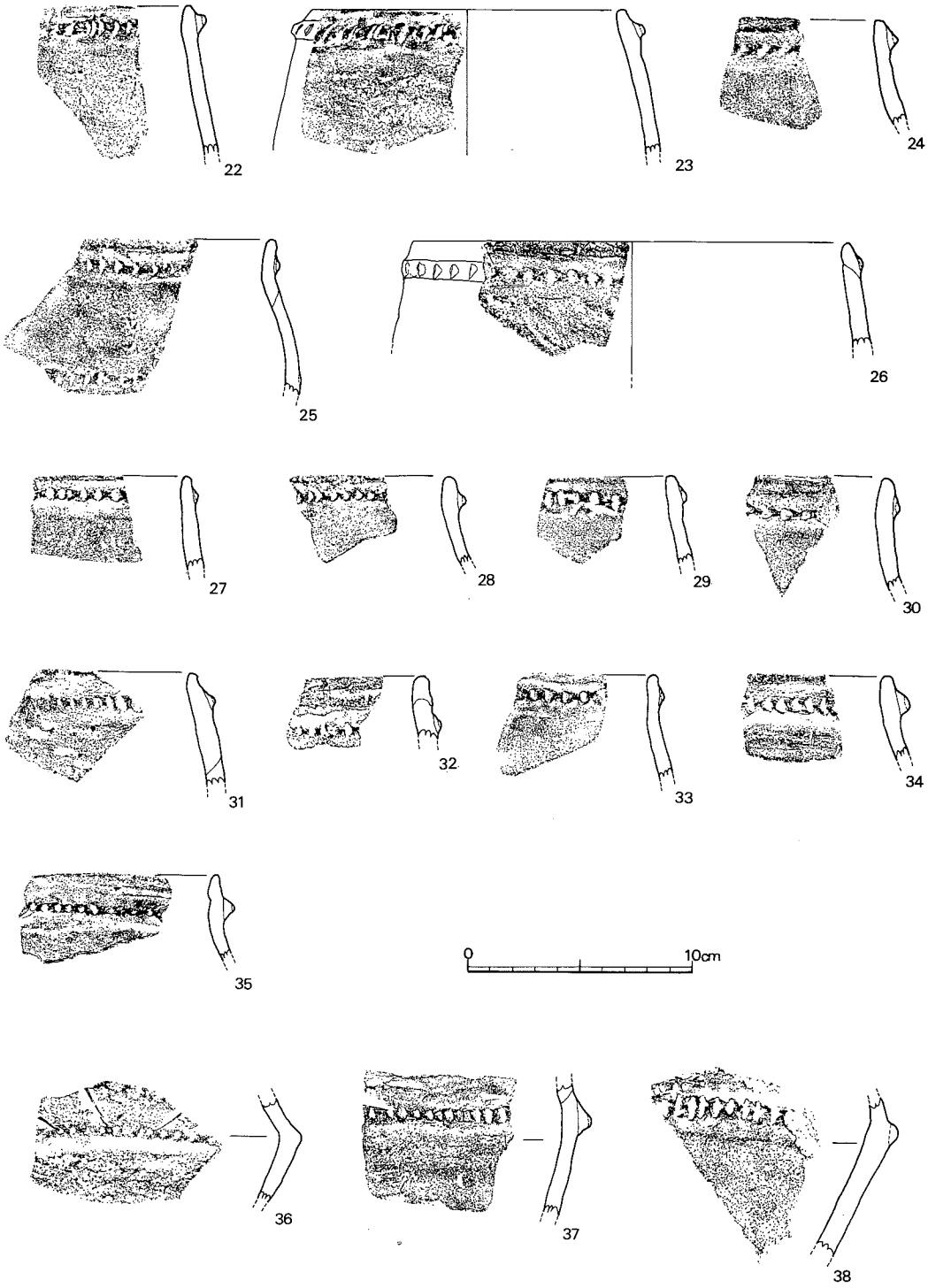
Ⅲ類（第26図）

粗製の鉢で，胴下半部から底部にかけて所謂組織痕を持つ資料である。口縁部は直口するかやや内反し，丸底気味の底部に移行する。1は口径30cmで器高は15cm程になる。黒褐色で胎土に多量の雲母を含む。器壁は一定せず，粘土の継ぎ足し痕が顕著に観察される。内面は篦ナデ

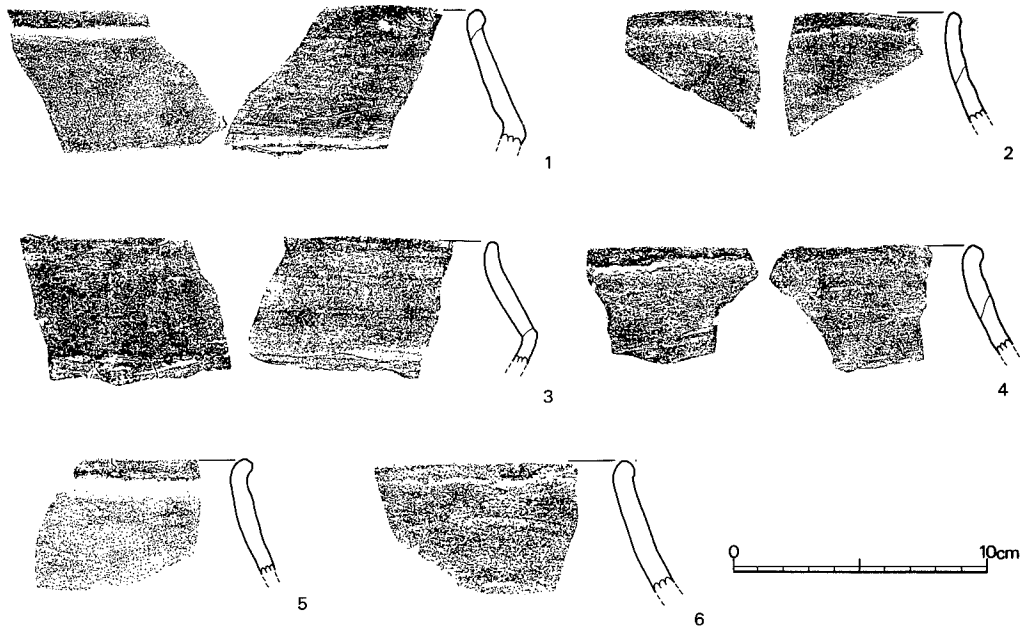
によって調整し，外面は網痕の上を荒くナデ消している。ほぼ全面にわたってススが付着している。他の資料も大旨１と同様な特徴を持っている。



第22図　第１区～８区出土縄文土器(3)(1/3)



第23図　第Ⅰ区～8区出土縄文土器(4)(1/3)



第24図　第Ⅰ区～８区出土縄文土器(5)(1/3)

壷（第27図）

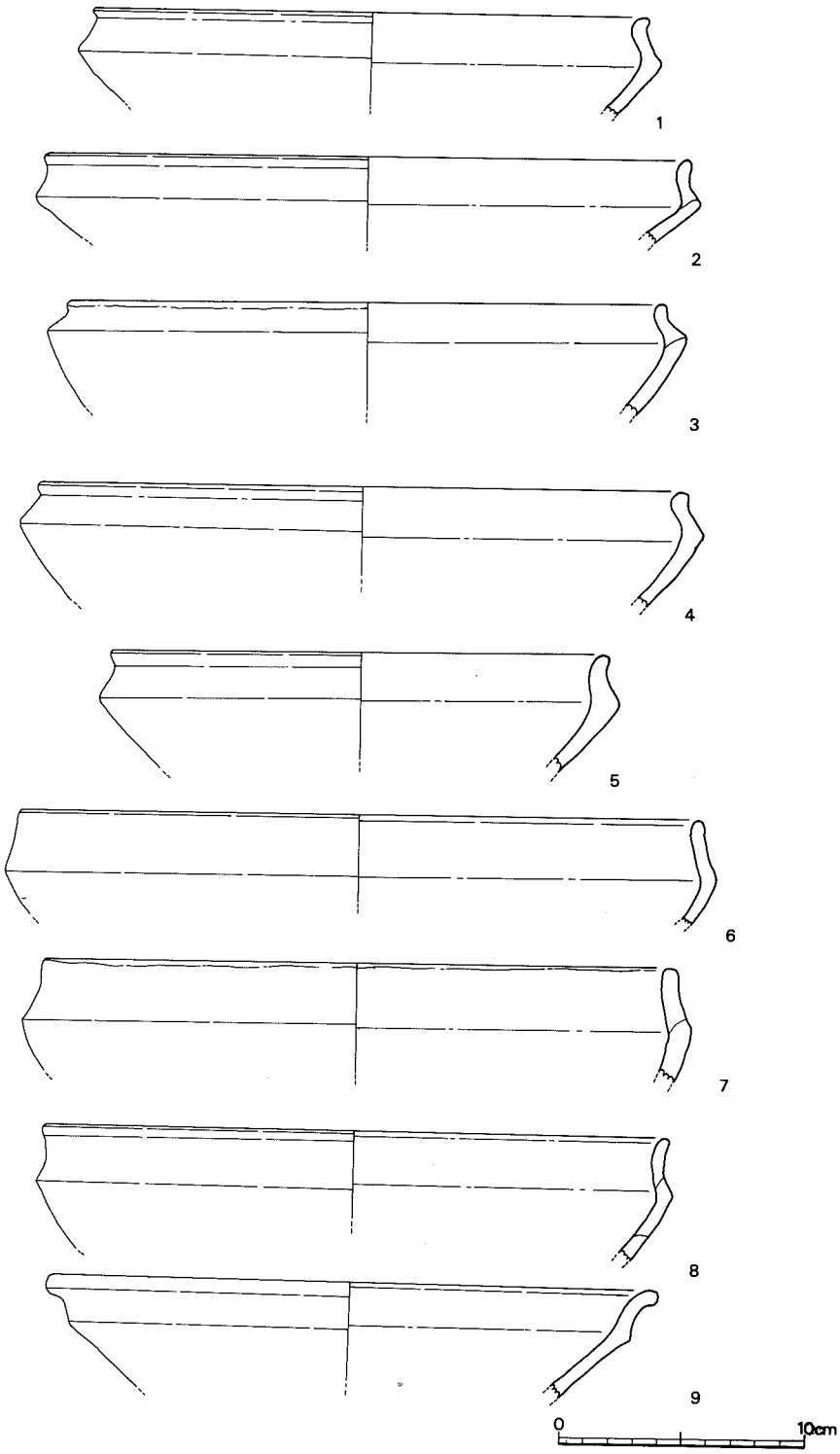
壷は丹塗磨研と黒色磨研資料がある。１は大型の壷で最大径が胴上半部にあり，44.2cmを測る。丹塗磨研資料である。３は復元口径が10cm程の小形の黒色磨研壷である。口縁下に小孔を穿っている。６も黒色磨研壷で胴部に篦描き沈線と綾杉文が見られる。

底部（第28図～第29図）

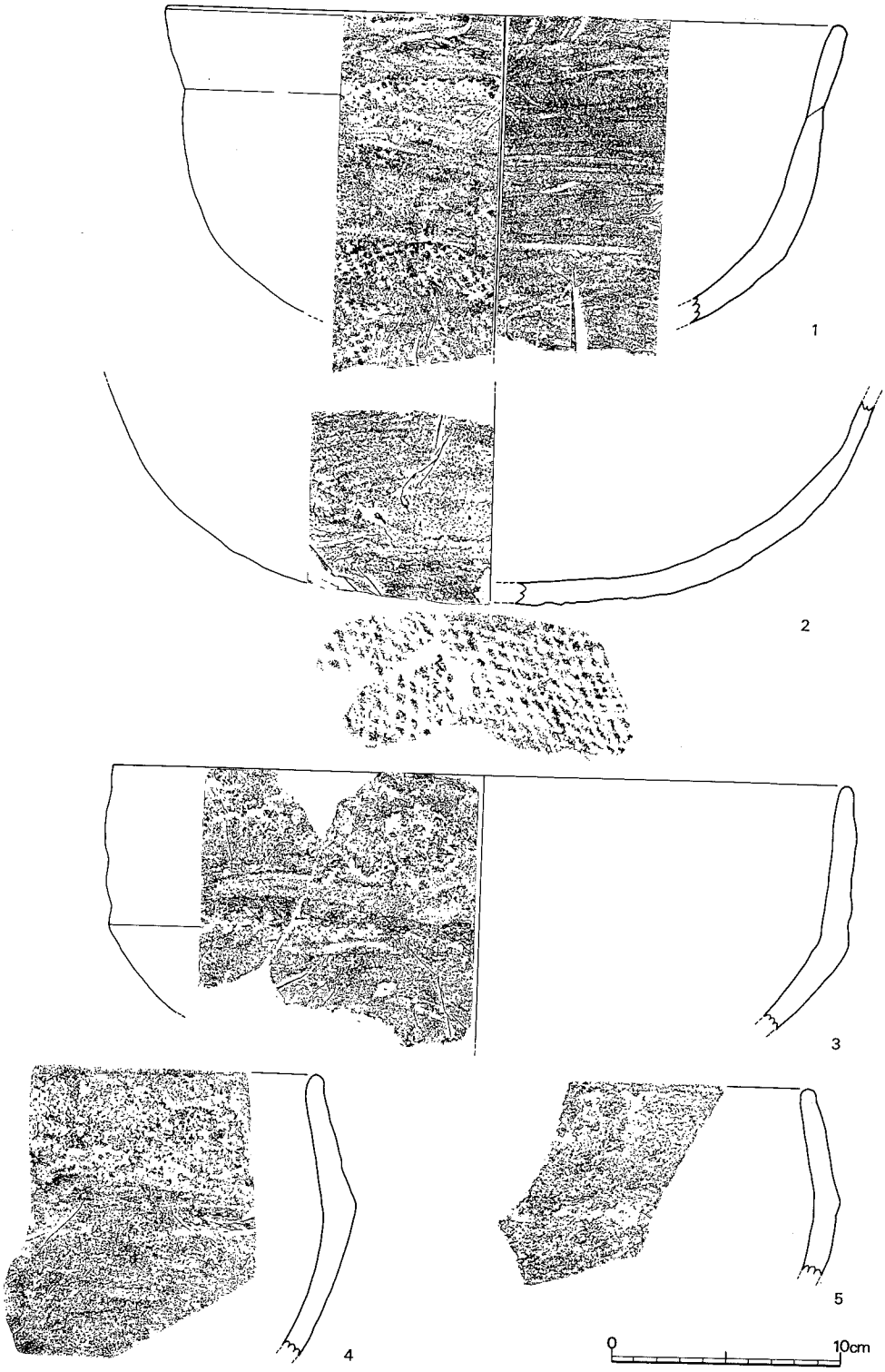
壷，浅鉢，甕の資料がある。

１～４は胎土，色調，調整痕から見て壷の可能性が高い資料である。何れも研磨を施す。色調は黒褐色が大半で胎土に雲母と角閃石を含む。焼成は良好である。調整は篦による横方向のナデ仕上である。１は底にくびれが無いもので，やや外傾しながら直線的に立ち上がる。

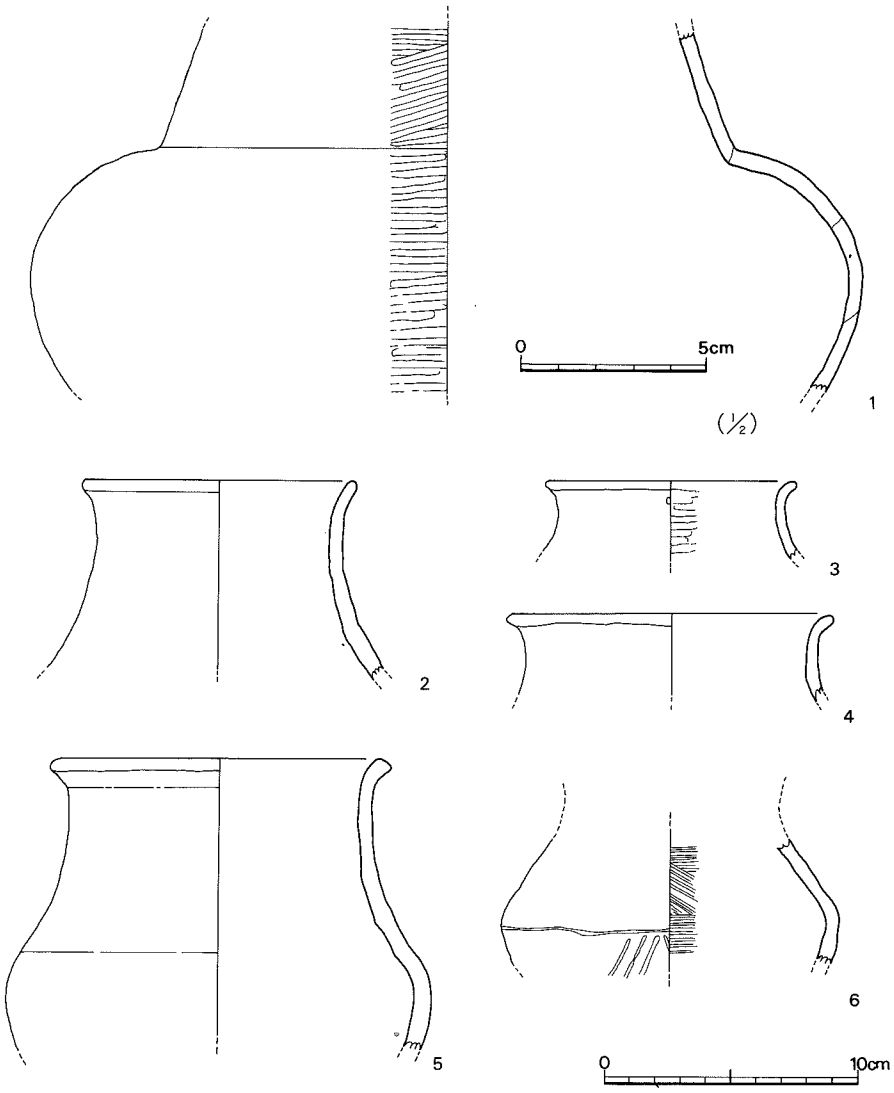
５～11は浅鉢であろう。暗褐色か黒褐色を呈し，研磨を施す。焼成は良好で胎土には雲母を多く含み，若干の角閃石が混入する。底部はやや上げ底気味で，底径が3.5cmのミニチュア的土器的なものを含む。底径は５cmから７cmで６cm前後のものが最も多い。９は底のくびれ部に突帯を持つもので，浅い規則的な右廻りの刻目を施す。底は篦先状の原体で押圧して上げ底を作りだす。10は底がハの字形に張り出す。指で押圧して上げ底にしている。11は突帯はあるが刻目は無い資料である。これらの資料の調整は横方向のナデかミガキ仕上げである。鉢Ⅱ類の底部であろう。



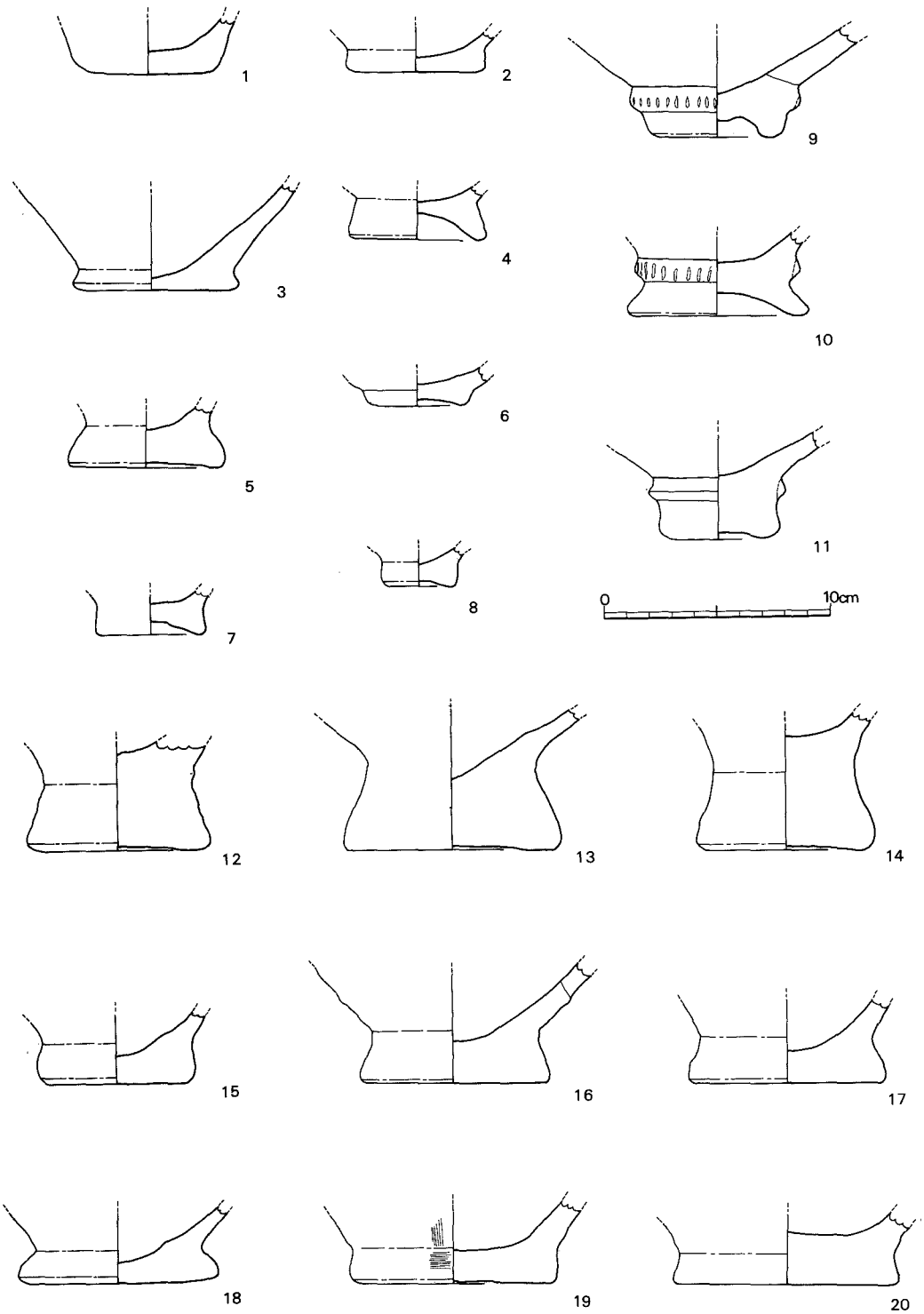
第25図　第Ⅰ区～8区出土縄文土器(6)(1/3)



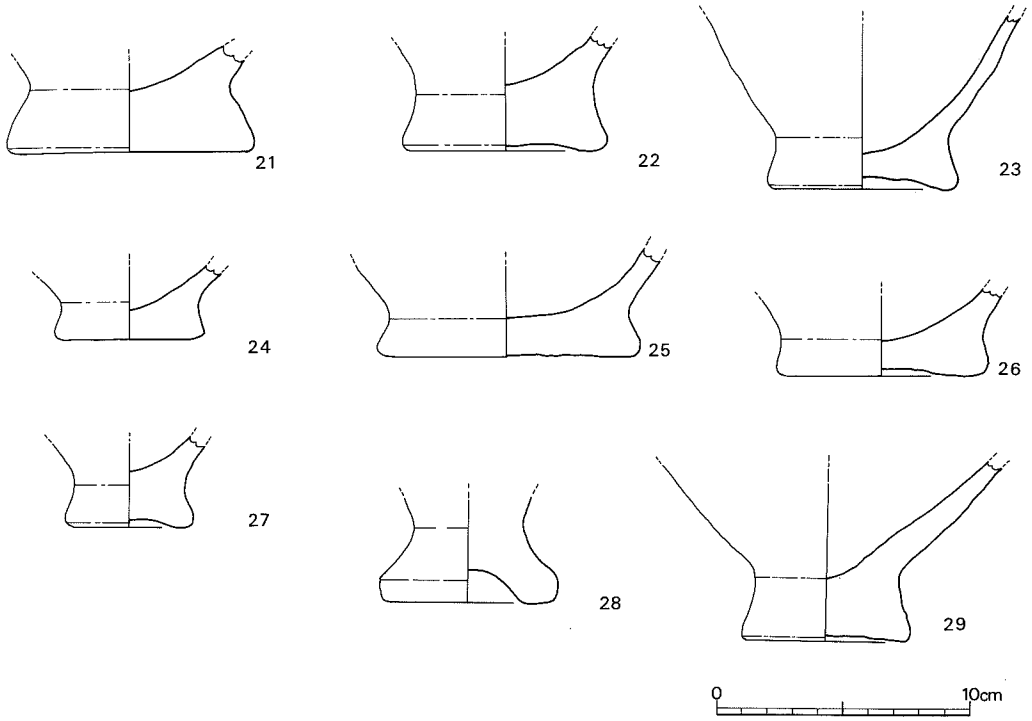
第26図　第Ⅰ区～8区出土縄文土器(7)(1/3)



第27図　第Ⅰ区～8区出土縄文土器(8)(1/3)



第28図　第Ⅰ区～8区出土縄文土器(9)(1/3)



第29図　第Ⅰ区～8区出土縄文土器(10)(1/3)

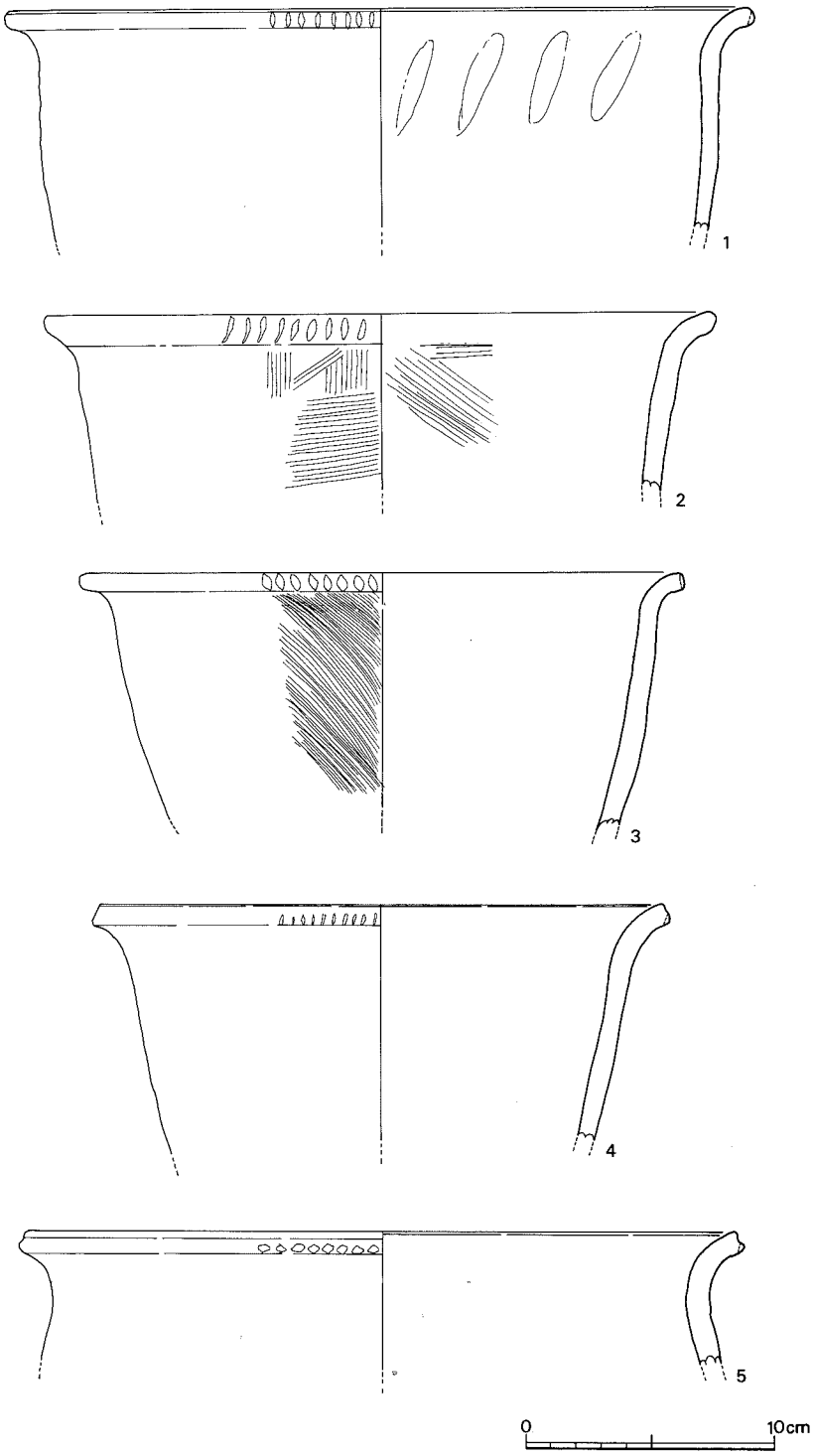
12～29は甕である。何れも粗製の資料で底が分厚いものや上げ底気味の資料を含む。色調は暗褐色か黒褐色で胎土には雲母，角閃石を多く含む。調整は荒く，板状原体による擦過痕がよく観察される。焼成は良好である。

底径は8cmから11cm程であるが，9cm前後の資料が最も多い。(高野)

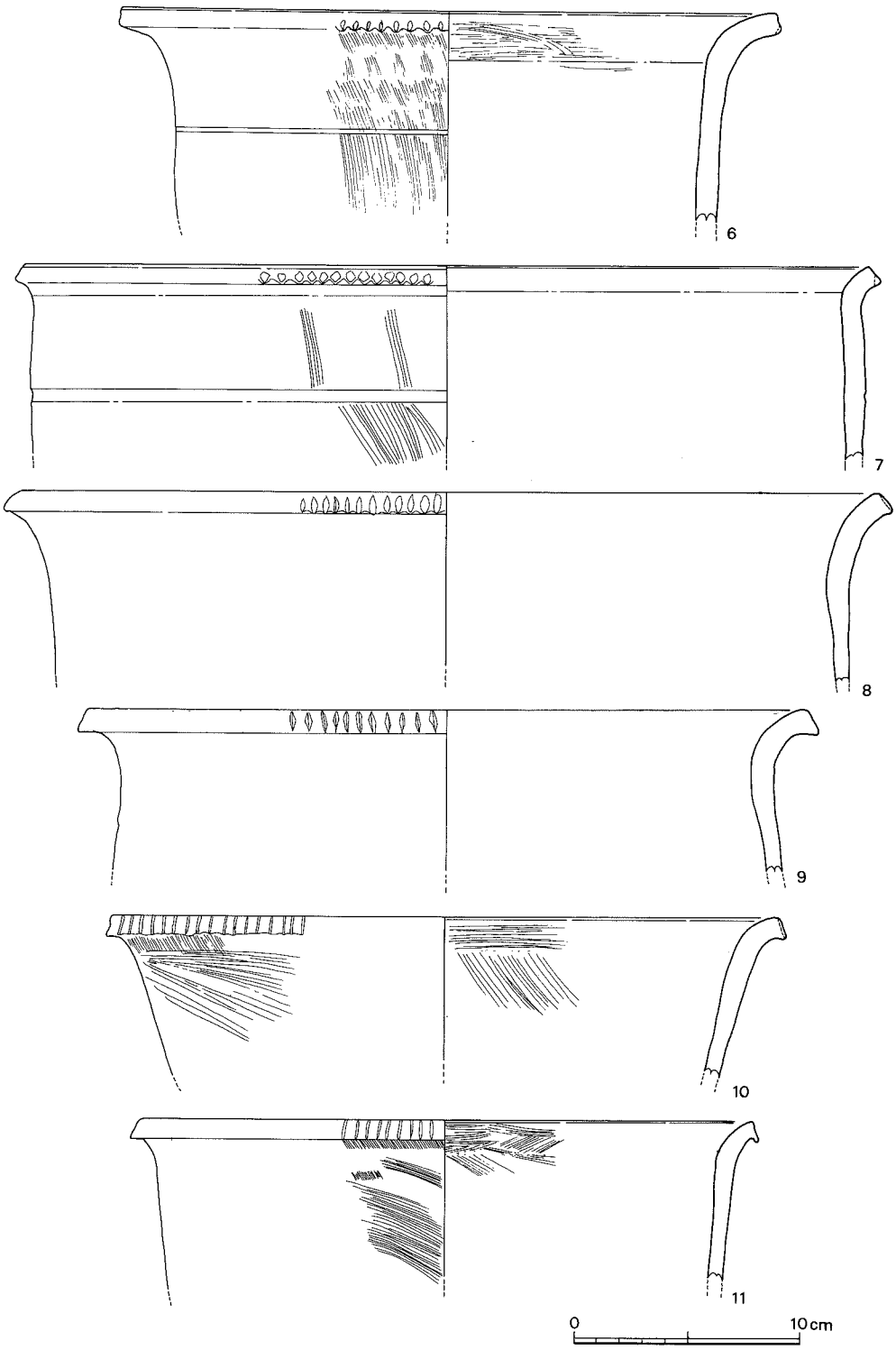
(2) 第1区～第8区出土の弥生土器およびその他の土器（第30図～第35図）

出土した土器を大きく分けると，如意形口縁の甕（1～11），藤尾慎一郎氏が板付系統と刻目凸帯文系統との折衷系統としたもの[註1]（12，14，18，19），刻目凸帯文系統のもの（13），如意形口縁の甕であるが，口唇部が肥厚するもの（15～17，20～23）があり，壷では、無文のもの（24，25）と，有文のもの（26～36）がある。また，その他の土器としては，土師器の高台付の椀（37，38，56）と，高台が無いもの（57）等がある。

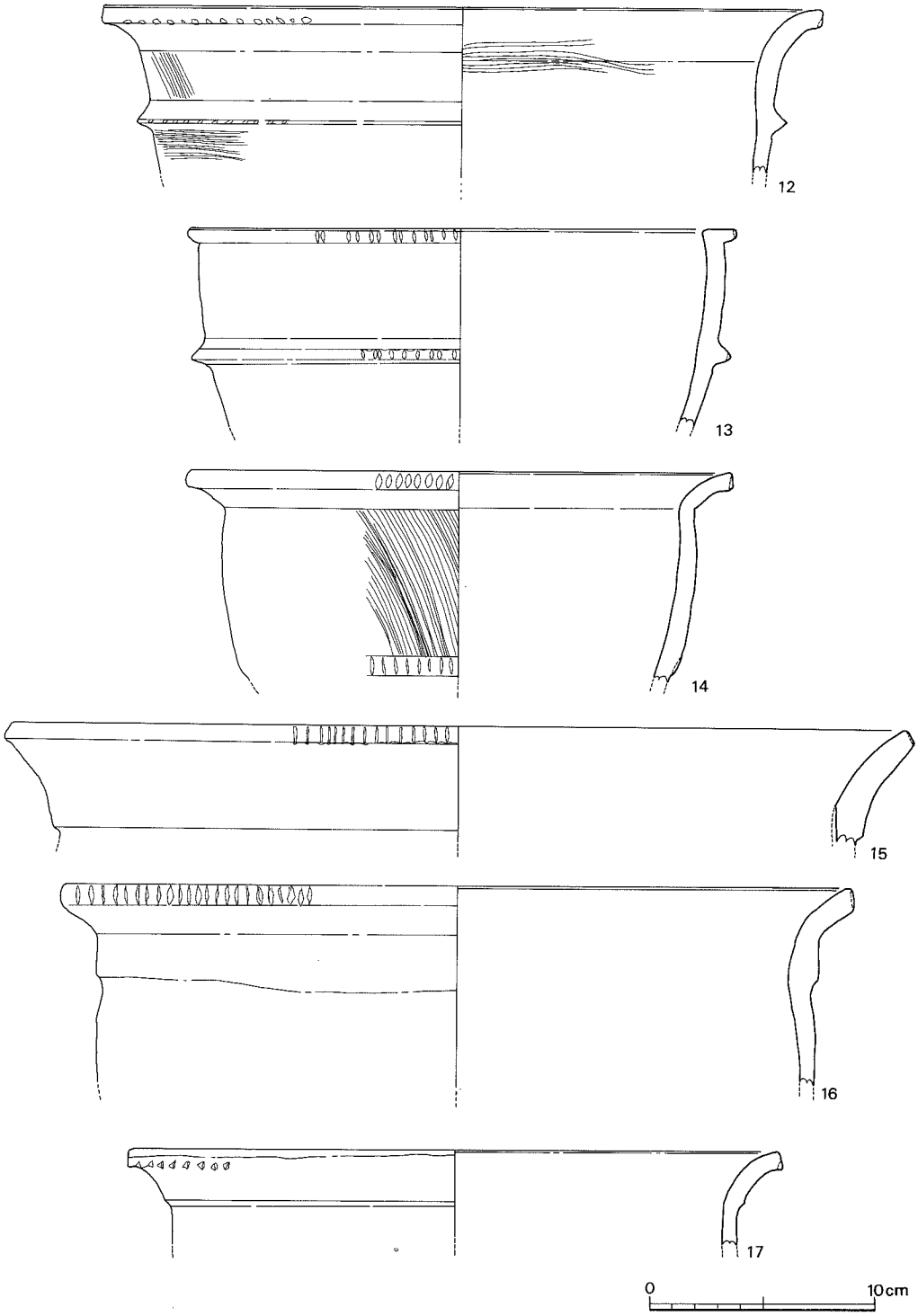
1は2区の3層からの出土で，胴部上半部のみ残存。口縁部下の内面には，指押しの後ナデ調整を，他の全面に研磨を行っている。石英粒，金雲母を含み，ススの付着が著しいために内外面とも黒色を呈している。2は4区の出土。口縁部下の内面の指押しの跡は，その痕跡がわずかにわかるぐらいの感じで刷毛目調整が施されている。外面の口縁直下はタテ方向，その下方はヨコ方向の刷毛目調整を施している。内面も口縁部はヨコ方向，その下部は斜め方向の刷毛目調整を施している。石英粒，金雲母を含み，淡黄褐色を呈する。3は7区の出土である。如意形口縁の端部全面に刻目を入れている。胎土も，石英粒と金雲母を含む。暗黄褐色を呈し，部分的に黒色を呈する。内外面とも斜め方向の刷毛目調整を施す。内面の口縁部はヨコ方向。4は1区の5層の出土で，口縁部の刻目は口縁端部の下部にのみ施される。石英粒，金雲母を含み，内面は暗灰色，外面は黒色を呈する。5は2区の出土である。口縁部上部のみの残存であるが，内面にヨコ方向の刷毛目調整を施す。黒褐色を呈する。6は口縁下端に小さな刻目を入れる。また，胴上半部に一条の沈線も施している。外面に細かな刷毛目調整をタテ方向に施す。口縁端部，刻目の下部に指押しの跡が残っている。内面はナデ調整，口縁部はヨコ方向の刷毛目調整，石英粒を含む，暗灰色，外面はススの付着があり黒色を呈する。7も6と同じく胴上半部に一条の沈線を施している。ただ，施文具を2回まわしているためにその幅は6に比し広い。外面に刷毛目が残っている。内面はナデ調整。暗灰色を呈す。4区の出土。8～11はいずれも，平らな口縁端部全面に刻目を施すものである。8は3区の出土。内外面にかすかな刷毛目調整が残る。石英粒，金雲母を含む，暗灰色を呈する。9は4区の出土。内外面ともナデ調整を施す。石英粒，金雲母を含む。明赤褐色を呈す。10は2区の出土。石英粒，金雲母を含む。内外面とも斜め，またはヨコ方向の刷毛目調整を施している。暗灰色。11は5区の出土。石英粒，金雲母を含む。内外面とも斜め，またはヨコ方向の刷毛目調整を施す。黒色を呈する。12は折衷系統のもので，口縁下端に細かな刻目と胴上半部に断面三角形の凸帯を施している。内面には指押しの跡が残る。石英粒，黒雲母等を含む。ヨコ方向の刷毛目を施す。灰褐色，部分的に黒色のススの付着がある。5区の出土。13は刻目凸帯文系統のもので，3区の出土。口縁部と胴上部に断面三角形の凸帯を貼り付け，それに刻目を入れている。内外面ともナデ調整を施している。内面は暗灰色，外面はススの付着が著しく黒色を呈している。器形としては，胴部がふくらみをもち，口縁部付近で若干すぼまるところから，田崎博之氏分類の甕B①の型



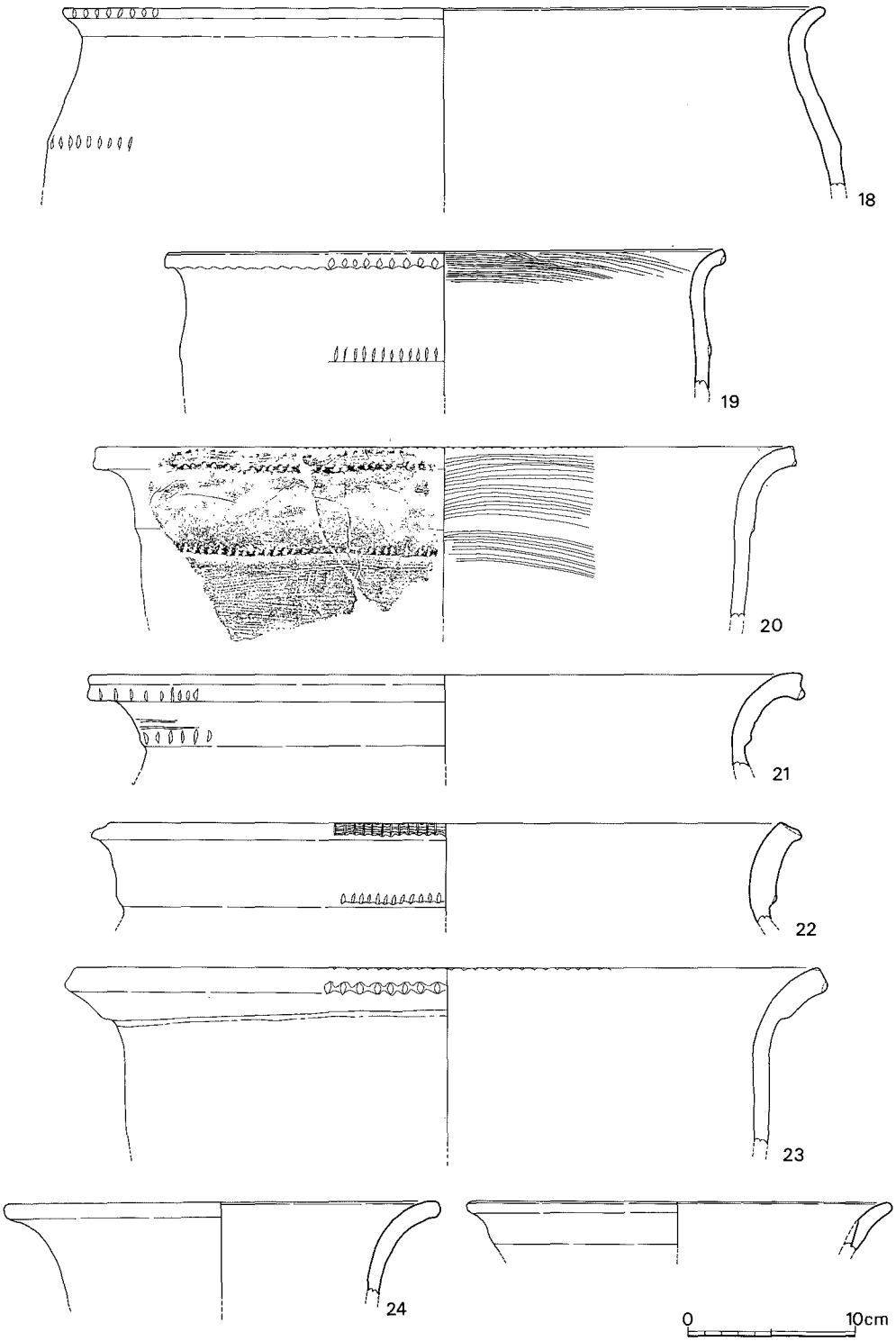
第30図　第１区～８区出土弥生土器(1)(1/3)



第31図　第Ⅰ区～8区出土弥生土器(2)(1/3)

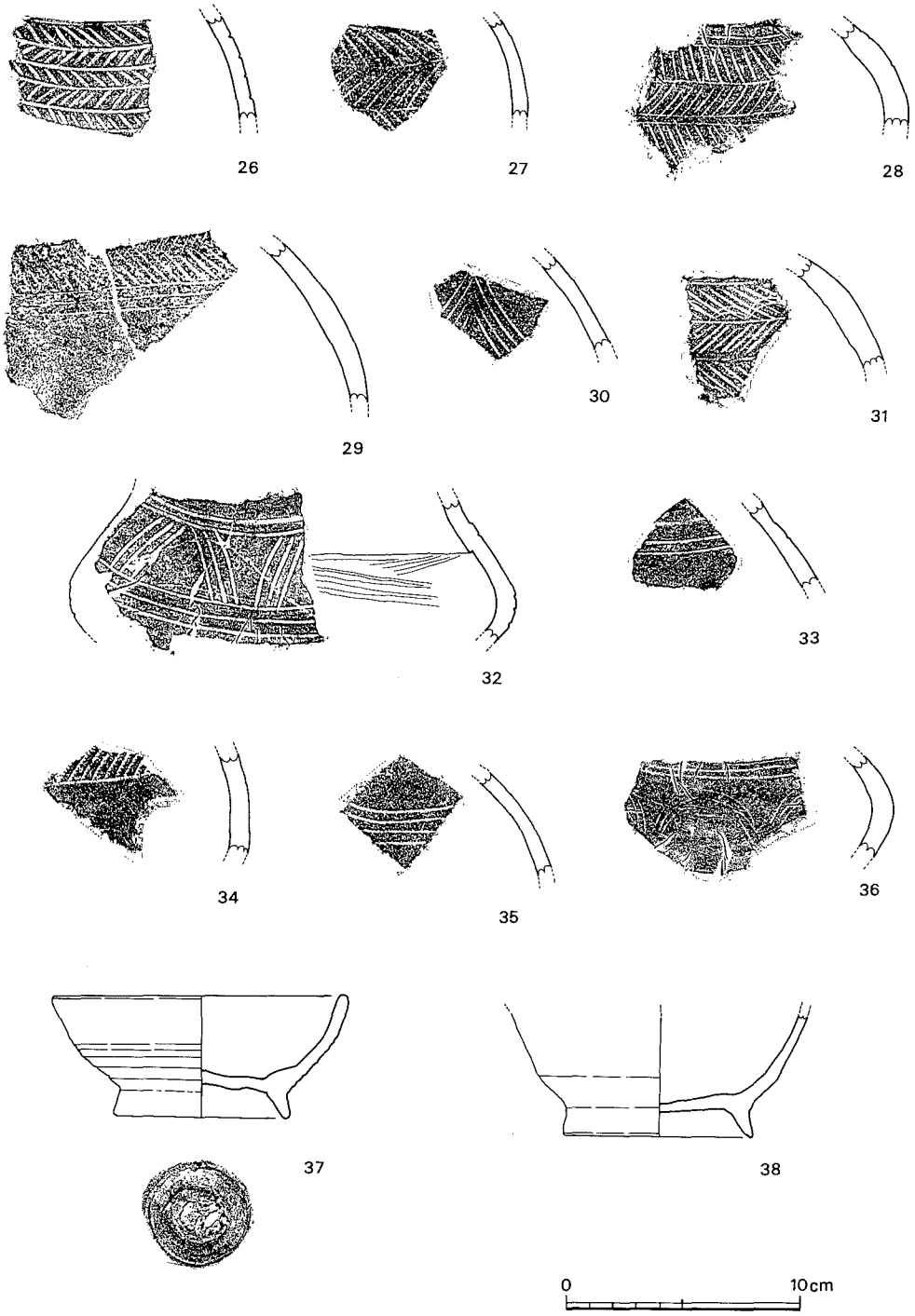


第32図　第Ⅰ区～8区出土弥生土器(3)1/3



第33図　第Ⅰ区～8区出土弥生土器(4)1/4

式のもの[註2]で，板付２式の古段階に位置するものだろう。石英粒と金雲母をわずかに含んでいる。14は２区出土のもので，口縁部を肥厚させ，その肥厚部と胴部の接する線で外に屈曲している。外面は斜め方向の刷毛目文様を施し，内面には指押しの跡が残っている。石英粒と金雲母をわずかに含む。全んど黒色を呈し，外面はススの付着が著しい。また，鉄分の付着も認められる。折衷系統のもの。15は４区出土のもので，肥厚部の下端には斜めに１cm程の幅でヘラ状の調整具の跡が残っている。石英粒，金雲母を含む。灰褐色を呈する。16は４区出土。肥厚部のほぼ中央部でゆるやかに外反する。内外面ともナデ調整され，内面には指押しの跡がある。暗灰色を呈し，外面はススの付着が著しい。石英粒，金雲母を含む。17は３区の３層出土。肥厚した口縁部がゆるやかに外反する。石英粒，金雲母を含む。ナデ調整される。18は１区の出土。ゆるやかに外反する口縁部とゆるく屈曲する胴上部に刻目を施している。石英粒，雲母，金雲母を含む。内外面ともナデ調整される。黄褐色を呈するのが珍しい。19は６区の出土。外反する口縁端部の下端と，胴上部までわずかに肥厚させる，その肥厚部の下端に刻目を入れている。石英粒，金雲母を含む。内面の口縁部にヨコ方向の刷毛目調整を施す。淡赤褐色を呈する。20は２区の出土。19と同様に口縁部から胴上部まで肥厚させ，その肥厚部の下端と，口縁端部の上下端に刻目を入れている。肥厚部下端部の刻み目は猫のひっかき疵のような施文具の跡がついている。内外面ともヨコ方向の刷毛目調整を施している。石英粒，金雲母を含む。21は４区の出土。口縁端部下端と肥厚部下端に刻目を入れる。内面はヨコ方向の刷毛目調整。石英粒，金雲母を含む。22は４区の出土である。肥厚した口縁部の口縁上端部の端部全域と，肥厚部下端に刻目を入れる。あまり外反せずに口縁上端部の端部全域に刻目を入れる特徴をもつ。石英粒，白，黒，金雲母等を含む。暗灰色を呈する。23は３区の出土。口縁部を肥厚させ，口縁端部の上下端に刻目を入れている。石英粒，金雲母等を含む。内面は淡灰黄色，外面はススの付着が著しく黒色を呈する。24，25はいずれも丹塗りの壷の口縁部片である。24は１区の出土。石英粒を含む。25は４区の出土。石英粒，金雲母を含む。26～36は有文の壷であるが，ヘラによる有軸羽状文を施すものが，26，28，31で，貝殻複縁による有軸羽状文が27，軸の有無がわからないものが34，ヘラによる重孤文を施すものが30，32，36，ヘラによる平行する沈線と，複線山形文の彩文を施すものが33である。胎土では石英粒を含むものが，27，29～31，33，34，35，石英粒と金雲母が確認できるものが28，石英粒等を殆んど含まず精良な土を使用しているのが26，32，36である。色調は26～28，30，33～35が暗灰色，31が淡いサーモンピンク，36が赤褐色，29，32が黒色である。また，32は肩部の内面に粘土つぎの段があるところから板付Ｉ式の範疇に入るものだろう。36が１区，28，29，31，32が２区，27が３区３層の上位。26，30，33～35が４区からの出土である。37，38は土師器の高台付の椀である。37，38はともに７区からの出土で，37はほぼ完形。39，40，42は壷である。口縁端部を肥厚させ，短く外反するもの42と，肥厚部の幅が広いもの40，そして，肥厚部の幅が広く，かつ内面も肥厚させるもの39がある。いずれも石英粒，金雲母を含む。色調は39，40が灰色，42が暗赤褐色である。39，42が



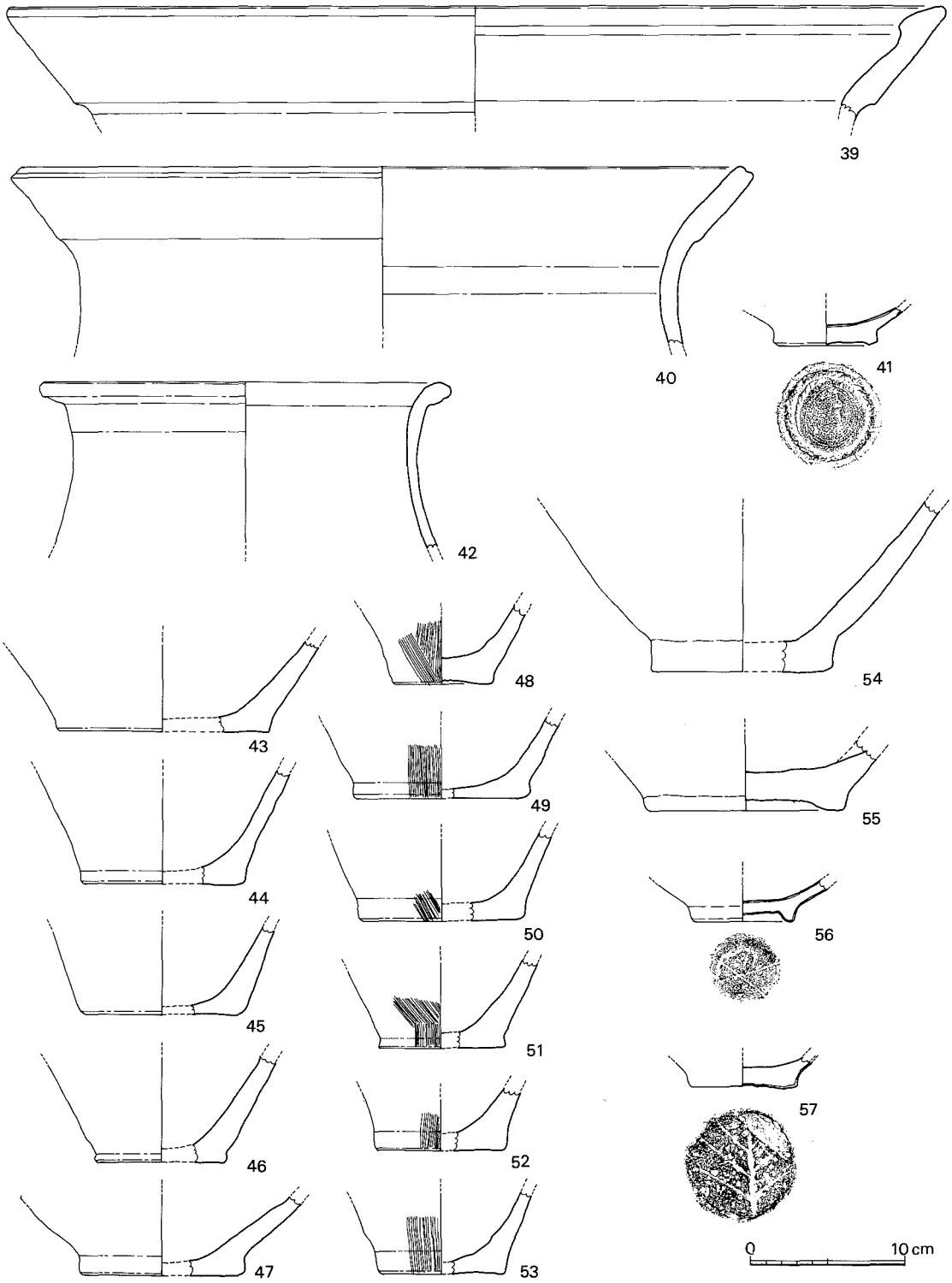
第34図　第Ⅰ区～8区出土弥生土器及びその他の土器(1)1/3

6区，40が2区からの出土。41は中国製輸入陶磁器，白磁の底部である。43～57は底部である。47，54は壷，56，57は土師器の椀の底部で，それ以外は甕の底部である。平底の裾部から胴部下半へとふくらみをもつ特徴をもつ底部として43，48，ほぼ直線的にひろがる特徴をもつ底部として45，底部の裾がほぼ垂直に立ち上がる特徴をもつもの44，50，52，53，底部の若干上方がくびれて裾が張り出す特徴をつもの49，51があり，底部の裾が張り出すもの46がある。また，55は上げ底の底部である。44は暗灰色。45，46，48～53，55は淡赤橙色。47は赤褐色を呈する。43，48～50，52，53が2区，47は3区，45，46，51は4区，44は7区の出土。56の土師器の椀の底部には「〆」印のヘラ記号がある。7区の出土。灰色を呈する。57の平底の底部には木の葉の圧痕がついている。1区の出土。暗灰色を呈する。(村川)

註

1．藤尾慎一郎　Ⅶ2—1　弥生式土器，『諸岡遺跡』—第14・17次調査報告—　福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集 1984　福岡市教育委員会 p.p. 67～69

2．田崎博之　土器と集団㈠ 『九州文化史研究所紀要』第33号，九州大学九州文化史研究施設　1988



第35図　第Ⅰ区～８区出土弥生土器及びその他の土器(2)1/4

(3) 第11区～第16区出土の縄文土器

第2旧河道から出土の遺物である。基本的には第1旧河道出土の遺物と同じであり際立った変化は見られない。形態的には甕形土器が一番多く，次いで鉢型土器，壷形土器の順である。

甕形土器はII類に分けられる。

I類

刻目突帯文土器であるが，さらに3類に区分される。

I—1　第36図1～2

口縁に直かに施されており，口縁から胴部にかけてはほぼ直行している。両者とも刻目は浅く付けられている。胎土には雲母，角閃石，白い砂粒を含み焼成は良好。2は器壁うすいが口径は大きい。刻目は浅く付されている。

I—2　第36図3～7

刻目は口縁部から若干下方に位置し，口縁部から胴部にかけては，ゆるく外反している。文様帯以外の調整は板目状擦過痕かナデによるものである。胎土には雲母，角閃石，白い砂粒が多く見られ暗褐色を呈するものが殆どである。刻目は小ぶりで浅い。

I—3　第36図8～13

刻目は口縁に巡り，口縁から胴部にかけては，わずかに内湾する。刻目は退化の様相を見せ細く刻まれている。胎土，焼成に変化は見られない。ただ9は，貝殻腹縁で突帯を削り取った状況が観察される。また内面は貝殻条痕調整である。13は口縁に刻目を持たないが，口縁部が肥厚し突帯に似た感じになっている。

14～23は胴部を中心とした刻目突帯文土器である。14～17については刻目が丸型で大きくはっきりしているが，20～23の土器は刻目が縦型で弥生期に移行する過渡期の様相を示している。

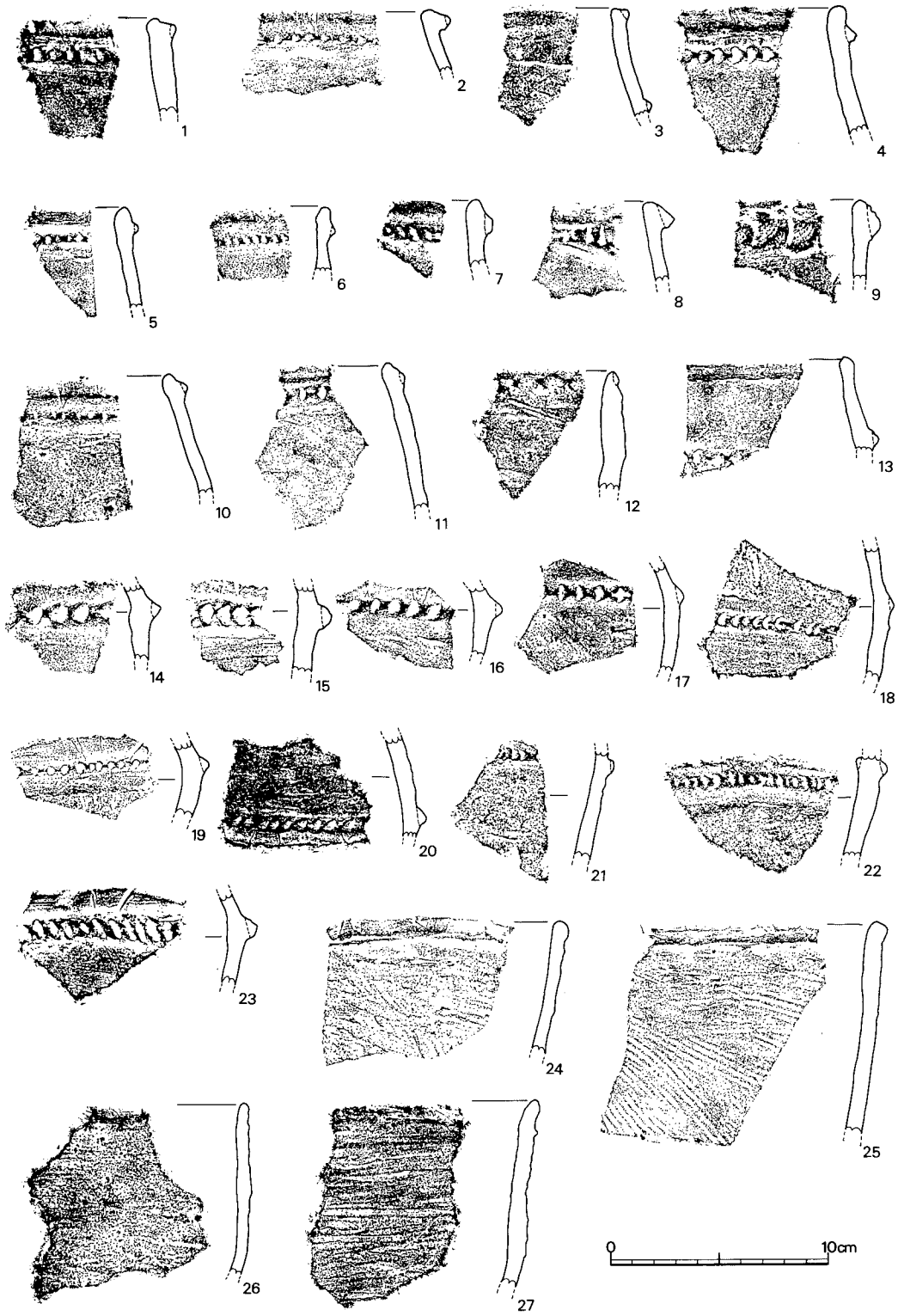
II類　第36図24～27

粗製土器で口縁から胴部にかけてわずかにふくらむ一群として捉えた。胎土に角閃石や雲母，白い砂粒などが含まれ，焼成はよい。24は他の3点と比較して口縁は内湾気味である。外面は貝殻条痕調整のあと擦過調整され，口縁部がわずかに外に作り出されている。内面は貝殻条痕による調整。25は外面は貝殻条痕で丁寧に仕上げられ，内面は貝殻条痕の上を箆状の工具で磨かれている。27は箆状工具で粗く擦過されている。

III類　第37図28～32

浅鉢の類である。浅鉢にも粗製と精製土器が見られるがあえて区別していない。

28・29は同様の粗製浅鉢であるが，中鉢の部類に入るものであろう。28は外面は板状擦過による調整であるが，内面は磨かれて，丹塗りの痕跡がわずかに残る。30は半精製で焼成された土器で灰色がかった軟質をしている。内面にはスス状のものが多く付着している。31は30と同

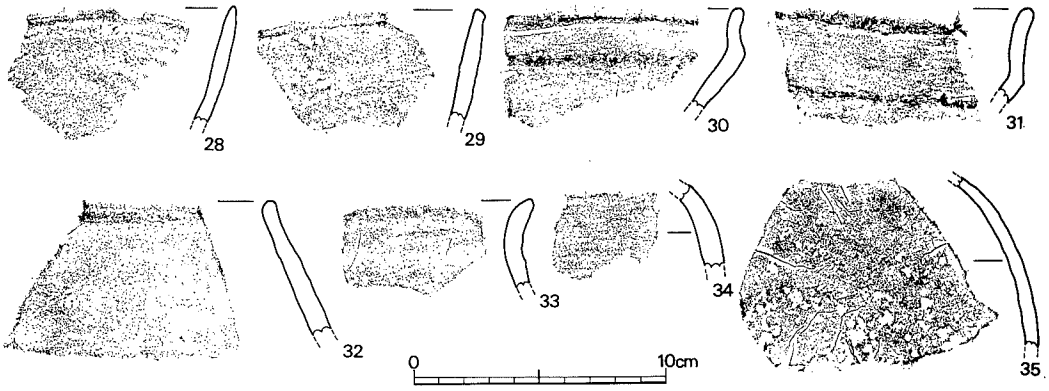


第36図　第11区～16区出土縄文土器(1)(1/3)

様の器形だが粗製土器である。32は器形がはっきりしないが，くの字形に折れる鉢形を呈すると思われ，丁度接目のところで割れている。内面は擦過による調整だけで粗いが，外面の仕上げは丁寧である。

IV類　第37図33～35

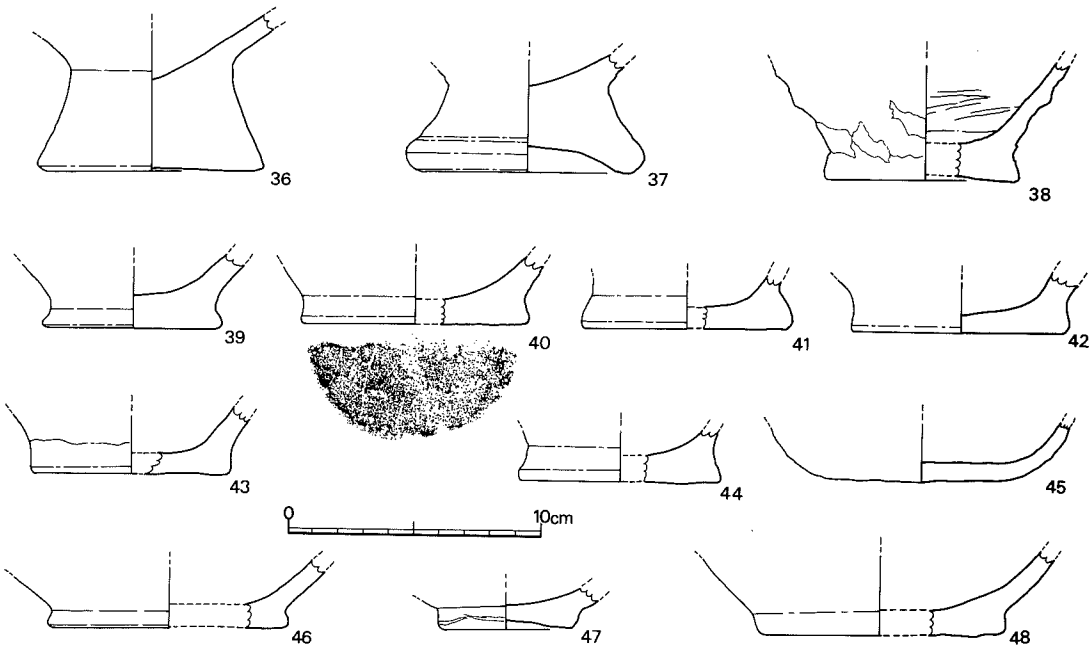
壷の破片3点である。33は口縁部が外反しており端部はやや尖がり気味に丸くおさめられている。全体の器形は不明である。胎土は精製されているが焼成は甘い。丹塗り痕がわずかに残っているが，外面はかすかに残る程度で，灰色の地肌が殆どである。13区6層からの出土。24は小破片ながら全体に丹塗りがよく残っている。胴部である。35は壷胴部であるが，外面に丹塗りの痕が比較的残っている。胎土には石英粒と白い砂粒が目立つ。両者とも14区4層出土。弥生期に近い壷とも考えられる。



第37図　第11区～16区出土縄文土器(2)(1/3)

底部　第38図36～48

甕，鉢，壷の底部である。36は台形状の高台を有す甕底部である。底は板状のもので中央部がわずかに掻き取られ，わずかに上げ底状を呈し，非常に安定感がある。37は台形状に広がる上げ底を有する底部である。底の端部から立ち上がり部分には一条の沈線を付している。胎土には角閃石や砂粒を多く含み焼成はやや甘く黄灰色を呈している。この器形は沈線を有するところから中鉢になるとも考えられる。38～44は甕底部だが，40は木の葉文を有する。45～48は壷底部である。45は全体が丸底で台を有しない。底は平坦面を作り出し安定性がある。内面は全体に箆状工具で条痕が施されている。外面も丸く立ち上がる部分に条痕が付されている。この種の壷は各部分がはっきり区別されない古タイプの器形と考えられる。14区6層出土。他は台を有する壷底部であるが47は精製土器で内外とも黒色研磨されているが外面はやや粗い。浅鉢タイプになるかも知れないが，底部から胴部へ立ち上がる変化から壷と考えた。48は比較的大型壷になる器形であるが弥生期に入るものとも思われる。



第38図　第11区～16区縄文土器底部(3)(1/3)

(4)　第11区～第16区出土の弥生土器

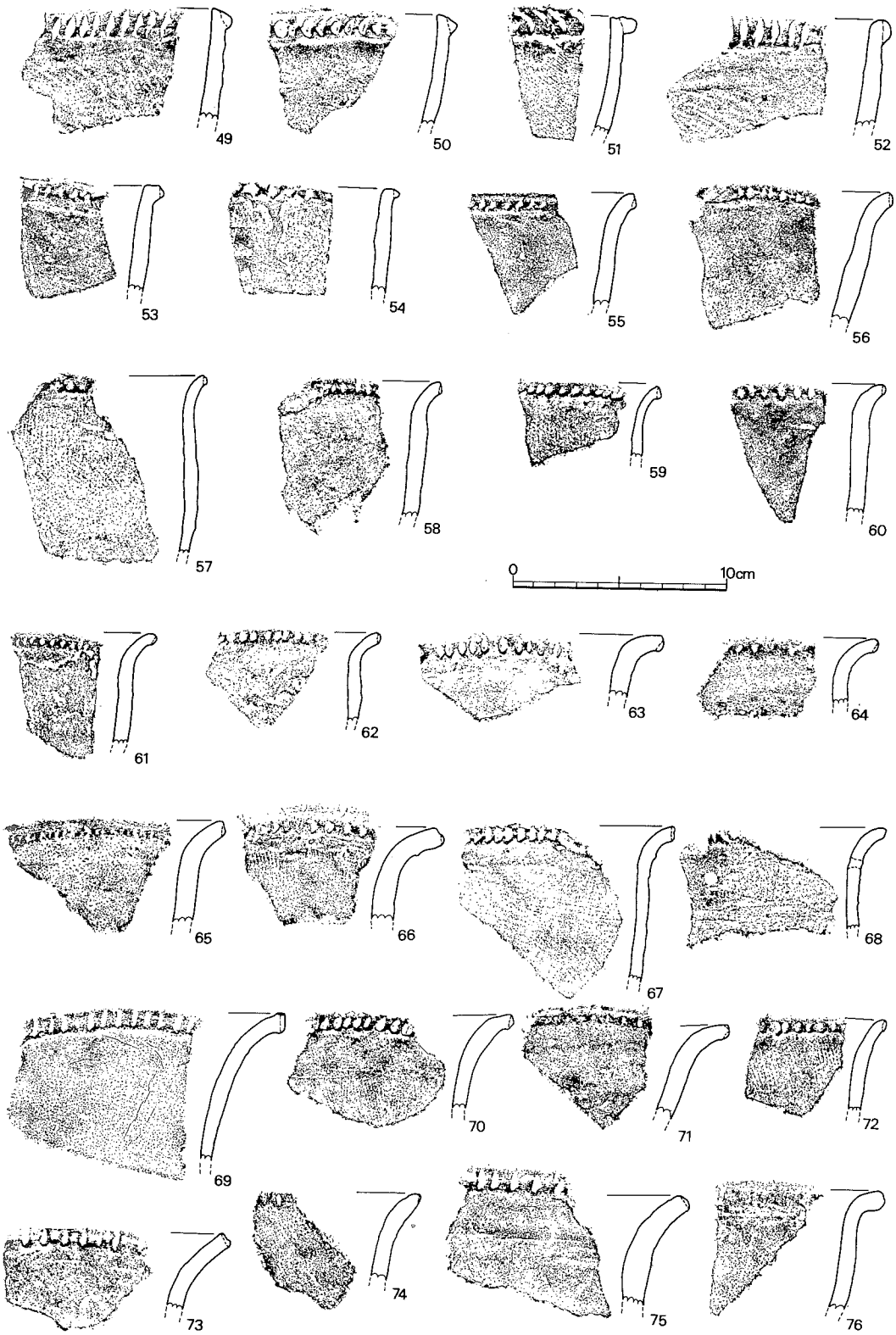
II・III層を中心に出土する弥生時代の土器は刻目突帯および刻目を主体とする弥生前期の一群で甕と壷が見られる。

甕　第39図

49～54の土器は口縁上端に突帯を設け，篦状の工具で刻んでいる。切り口は鋭利で縦長である。器形は口縁から胴部にかけてわずかにふくらみ底部へ移行するものである。外面には条痕で調整された後に，弱擦過が施されている。内面はススが多く付着している。胎土には石英粒と白い砂粒が目立ち，縄文晩期の土器とは異なっている。しかし晩期的様相は強く残されており弥生時代の古いタイプと見ることができる。

55～60の土器は口縁部が外反するが，屈曲度はそれ程強くなく口唇部に刻目を入れている。55は突帯の上に刻目を入れ，前者の一群との中間的な土器である。57や59には胴部に刷毛目調整が見られる。これらの土器は，いずれも暗褐色を呈しススの付着を見る。胎土には石英粒や長石を含んでいる。板付I式の範疇に含まれるものである。

61～75は口縁部の反りが強く，いわゆる如意形口縁を呈するものである。口唇部に刻目を施し，胴部にかけては刷毛目調整である。刻目は口唇部のやや下端に入るものが多く，板付II式として捉えられる。土器出土量としてはこの一群が最も多く，出土層位は第3層が主体である。76～80は口縁部が外反するものの，刻目を有しない土器で前者に供伴するものである。



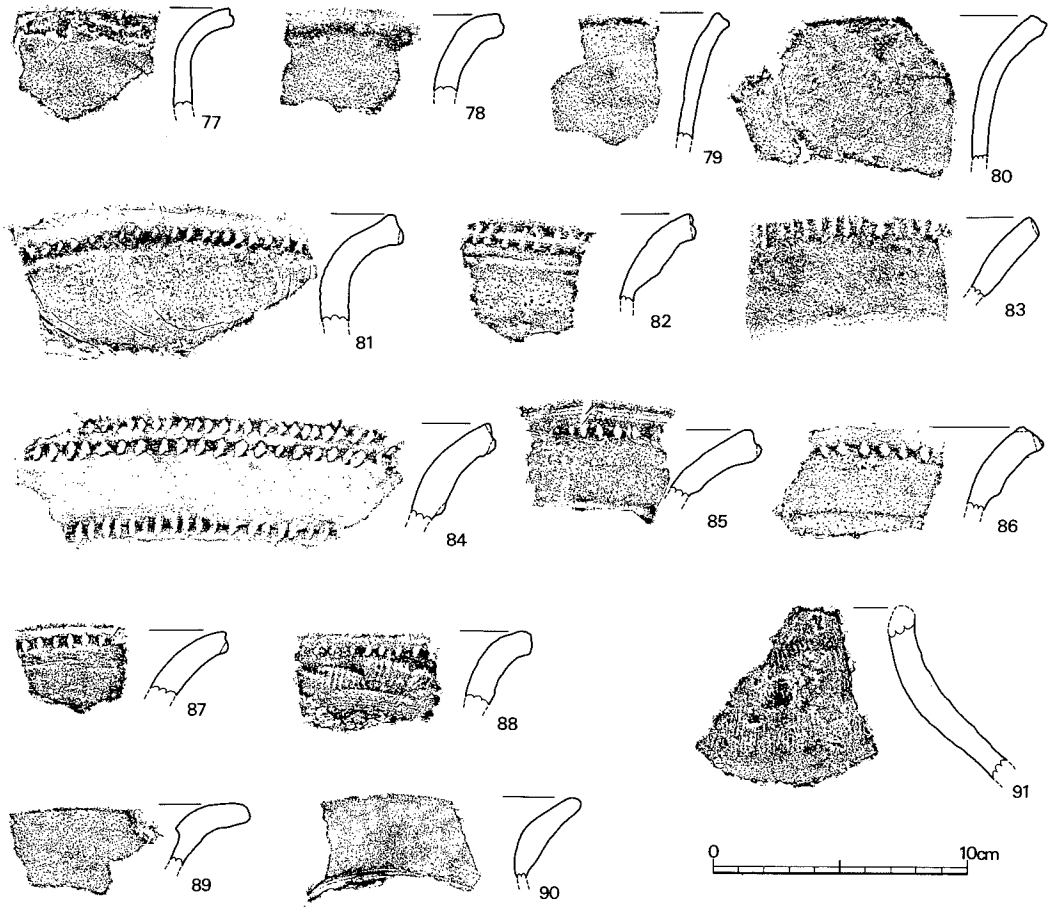
第39図　第11区～16区出土弥生土器(1)(1/3)

壷　（第40図　81～90）

いずれも口縁部である。81は如意形口縁であるがゆるい波状を呈し，口唇部の下端に刻目を施している。82～88は頸部がしまり段が付く。84は大形の壷になるもので，口唇部には２段と頸部に刻目を施している。胎土には石英，長石を含み焼成も良好である。89は胎土が精製され研磨された壷口縁で，口唇部内面は明瞭な段を有する。90も胎土が精製され器面は研磨されている。頸部で割れているが，80・90の土器はいずれも小型壷である。

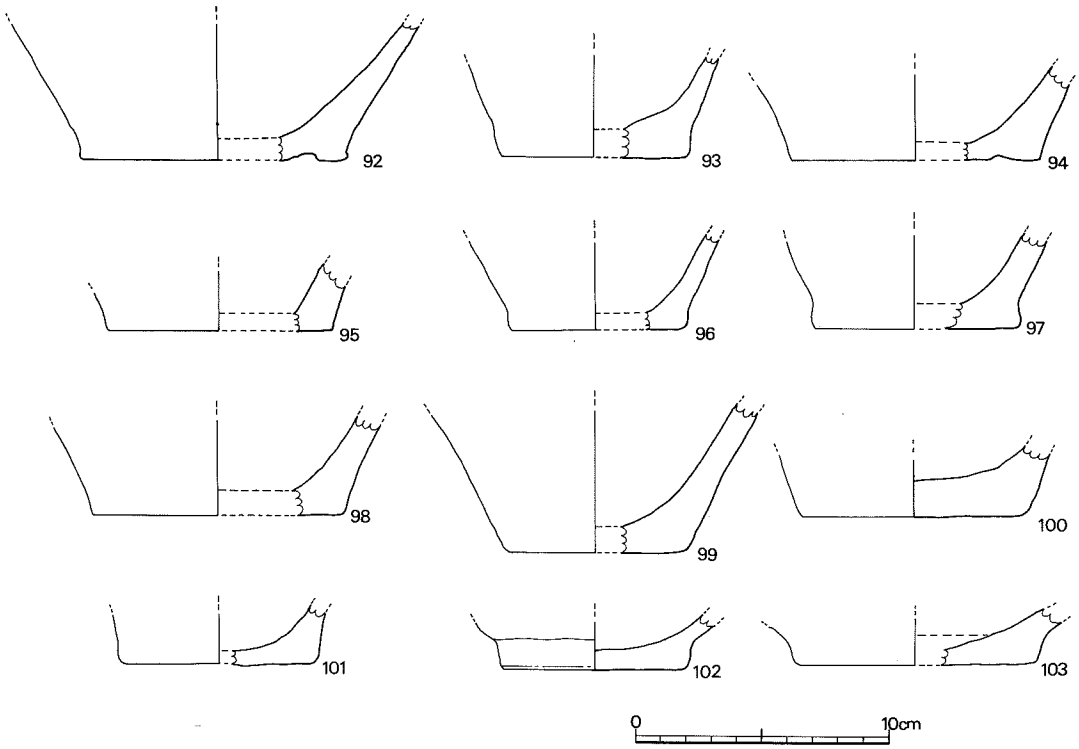
底部（第41図　92～103）

甕と壷の底部が見られる。甕は，92・94のように底がわずかに上げ底状になるものと，93・96・97のように立ち上がり部がくびれやや内湾気味に胴部につながるものと，底は平底で立ち上がり部が外反するように広がるものとに区分される。胎土には石英粒が目立ち焼成は良い。



第40図　第11区～16区出土弥生土器(2)(1/3)

101～103は壷底部である。101は垂直に立ちあがり上部を欠くが，内面はややきつい湾曲を示す。102は円盤貼り付けに近い底部で胎土も細かく焼成も良い所から小型壷と考えられる。103は胎土がやや粗く，102よりは大型の壷になると考えられる。

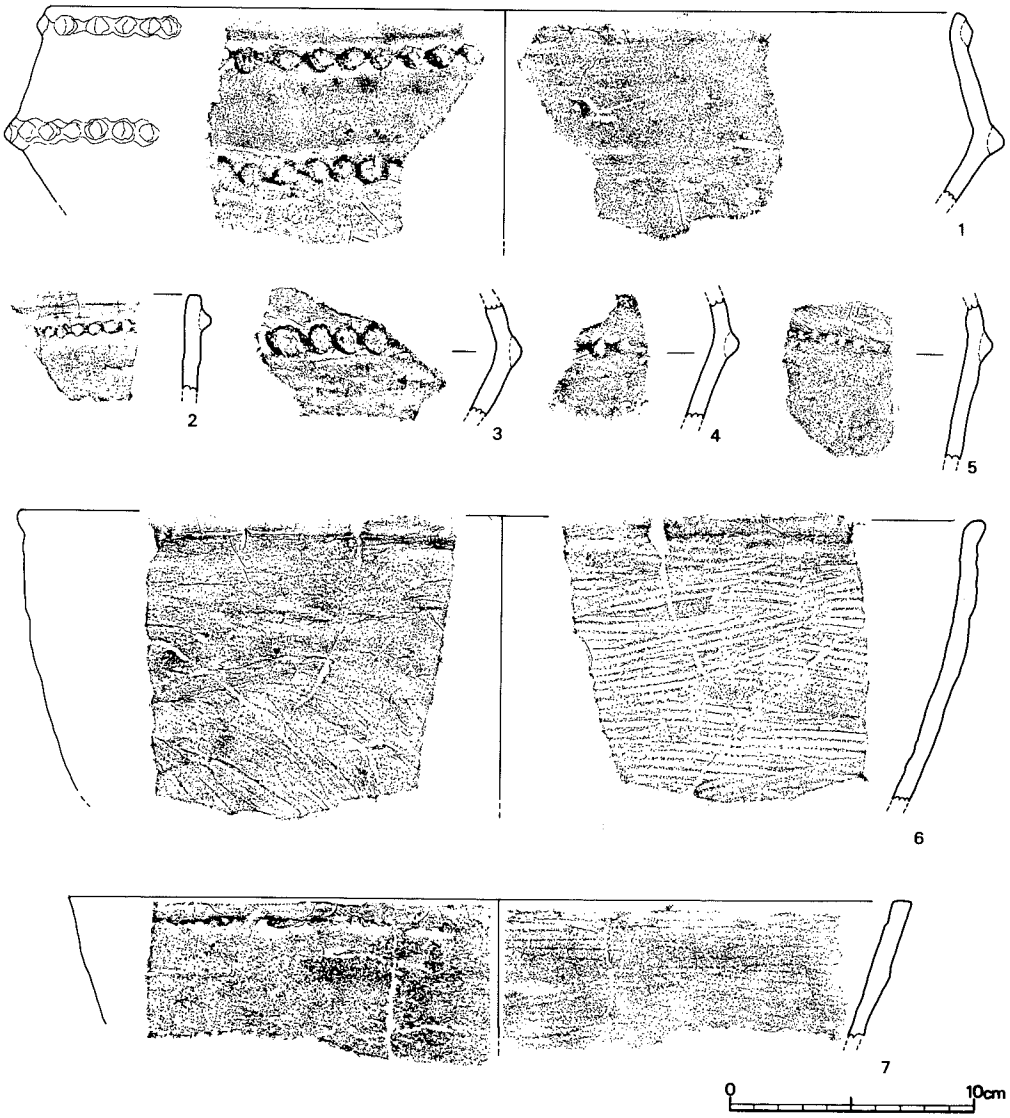


第41図　第11区～16区弥生土器底部(3)(1/3)

(5) 第21区～第23区出土の縄文土器

第1旧河道から南へ20mに位置する第2旧河道内からの出土である。この旧河道は，今次調査の中では一番小規模で幅約12mである。ここでは弥生土器は図示するだけの出土はなく縄文土器も比較的少ない。出土層位は5層・6層である。

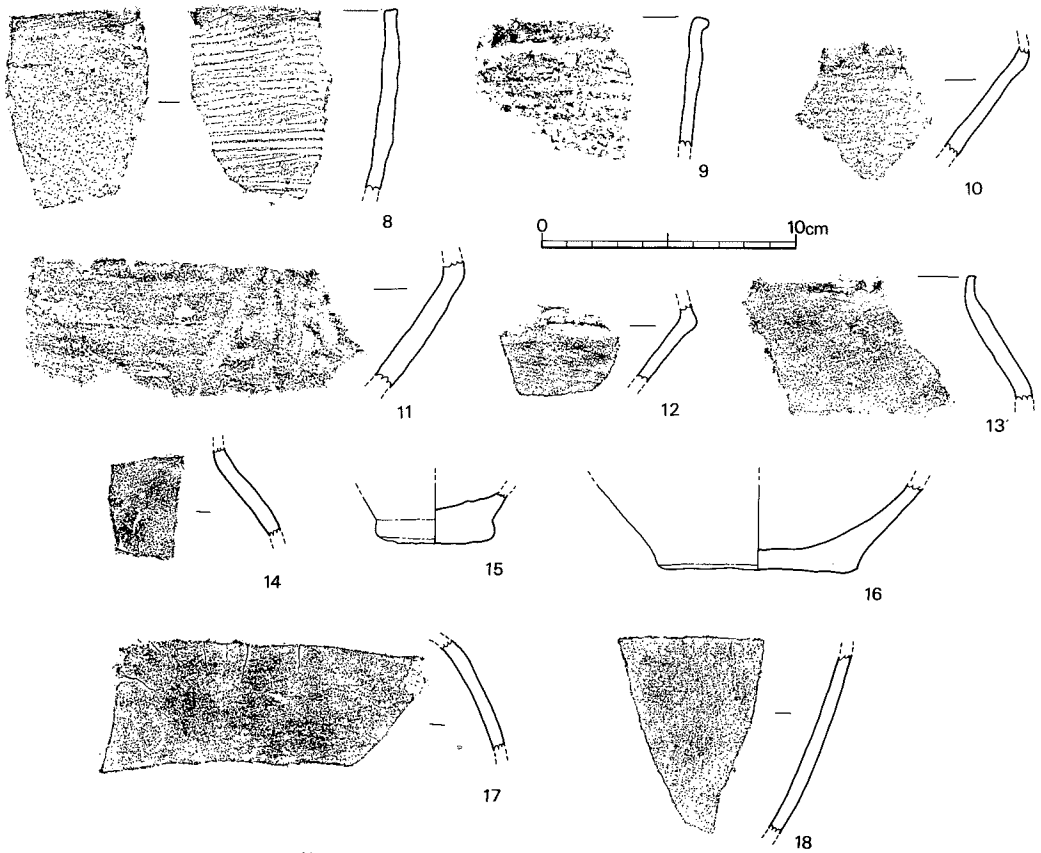
1は甕Ⅰ—2類とした口縁直下に刻目突帯をもち胴部にかけてゆるく外反した器形である。口縁部と胴部の刻目は，突帯をはみ出して大きく付されている。頸部から胴にかけてはナデによる調整であるが，胴部以下は擦過による調整が行われ，ススが多く付着している。内面も擦過痕が残る。胎土には角閃石や雲母，白い砂粒を含み焼成良好。2は口縁直下に小ぶりな刻目



第42図　第21区～23区出土縄文土器(1)(1/3)

突帯が付され，直行する器形でⅠ—1としたものである。3～5は胴部に刻目突帯を有するもので，3は1と同様で山の寺式土器の系統である。

6～9は粗製無文の甕形土器である。6は鉢形に近いもので口縁外面がわずかにくびれ，胴部へかけてゆるくふくらむ。粗い擦過調整のあとナデが行われている。内面は条痕が斜めおよび横方向に施されている。胎土には角閃石・雲母・砂粒を含み焼成は良好。外面にはススが付着する。7は6に比べるとやや直行形で口唇部は平坦に押さえられている。外面には粘土の積上げが残っており擦過による調整が行われている。内面は貝殻状の条痕が横方向に丁寧に施され胎土焼成とも良好である。8は内面の条痕はさらに明瞭に残る。9は磨耗が著しいが，前者と同様の器形を呈する。10・11は粗製浅鉢である。両者とも胴部くの字形に屈曲する部分で欠失している。内面は丁寧に調整が行われているが，外面は擦過による調整だけである。11は復原形はかなり大形になる。13～18は壷の各部である。13・14は粗製で口縁くびれ部は外反している。14は丹が塗布されている。15・16は底部，15は粗製で径が小さく雑な作りで安定性を欠く。16はわずかに上げ底である。内外とも丁寧に仕上げられ，外面は研磨されたあとが窺える。17・18は壷胴部で精製され外面には丹が塗布されている。焼成は軟質がかっており断面や内面は灰色である。



第43図　第21区～23区出土縄文土器(2)(1/3)

(6) 第35区～第40区出土の縄文土器

この調査区域は南側に位置する第4旧河道で，河道の落ち込み部が第35区と第40・41区に斜行しており，川幅が認められる。この旧河道西側では第8次調査の際夜臼式土器を含む層より竪杵が出土している。また現在する鎮石と呼ばれる支石墓との距離は約75mである。

縄文土器の出土量は第1旧河道に次いで多く木材や有機質を含んだ第7層の下層に位置する。第8層からが殆どである。土器は第1～第3旧河道から出土したものと基本的な変化は見られず甕，壺，鉢などである。

Ⅰ類，甕刻目突帯文土器の一群でⅠ－1～Ⅰ－4類に分けられる。

(1) Ⅰ－1類 (第44図1)

比較的突帯文全体に大きな刻目を施しており，内外とも擦過による調整のあとナデている。胎土には雲母，角閃石，白い砂粒が含まれ焼成も良好である。

(2) Ⅰ－2類 (第44図2～3)

刻目突帯文は口縁部直下に施され，胴部の屈曲部までは直行するタイプである。2は1より刻目は小さいが両面より削り取っている。胎土・焼成はⅠ－1と変化ない。

(3) Ⅰ－3類 (第44図4～17)

口縁部直下に刻目突帯文を有し，胴部の屈曲部までは外反する。従って口縁から胴部までの距離は短く感じる。また刻目は左から縦に切り込み，右から斜めに切り込んで削り取っておりその切り口はシャープなものが多い。器壁は擦過のあとナデられている。胎土・焼成は良好である。

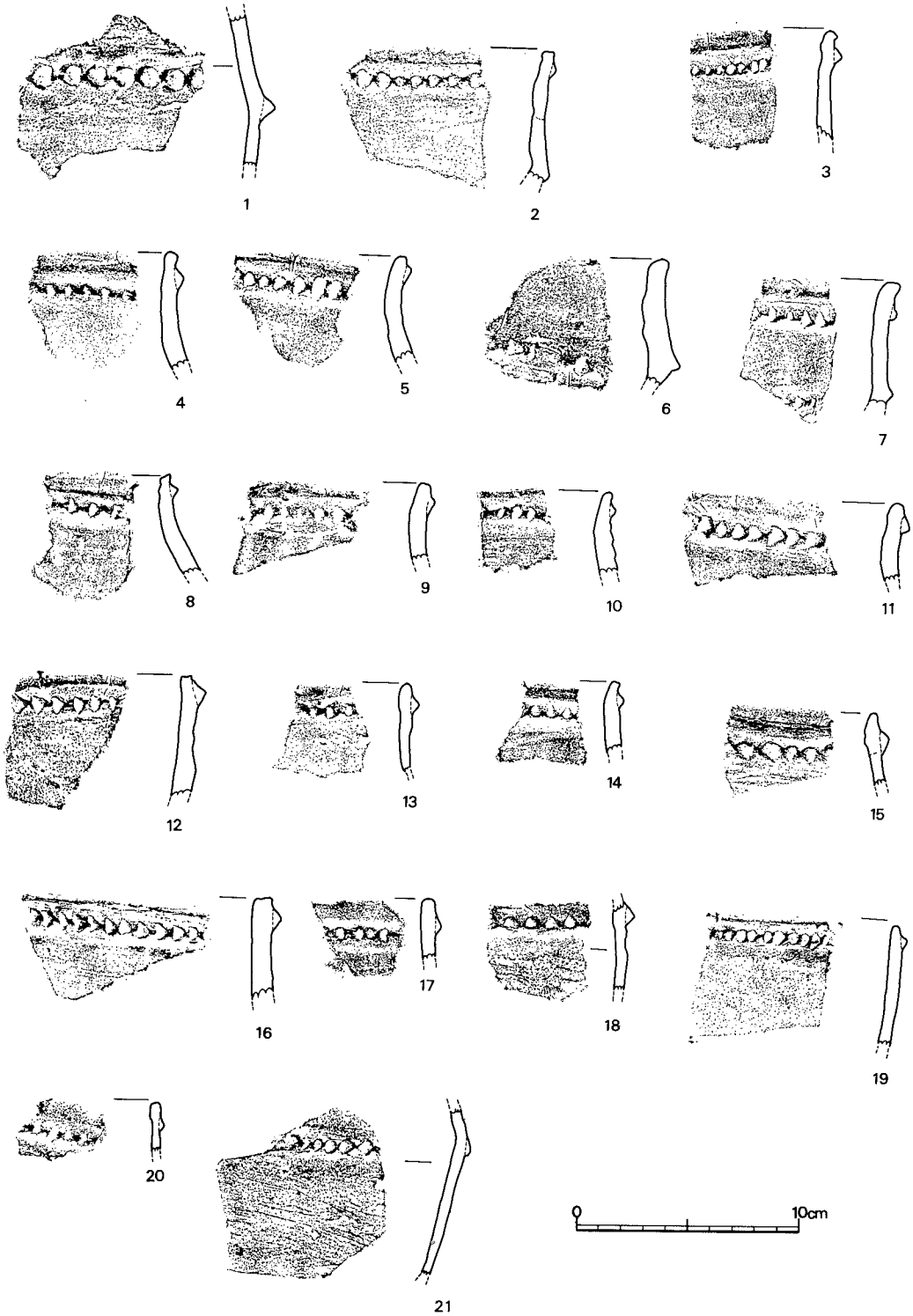
(4) Ⅰ－4類 (第44図19)

30代区ではこの1点しか図示しなかったが量的には少ない。口唇部は丸くおさめられ，直下には刻目突帯を付す。刻目は小ぶりで両端から削り取っている。胴部は屈曲せず内湾する。19は小形の部類に属する。外面は擦過のあとナデを行っているが，凹凸がある。胎土には角閃石や白い砂粒が多く含まれ，焼成は良好である。

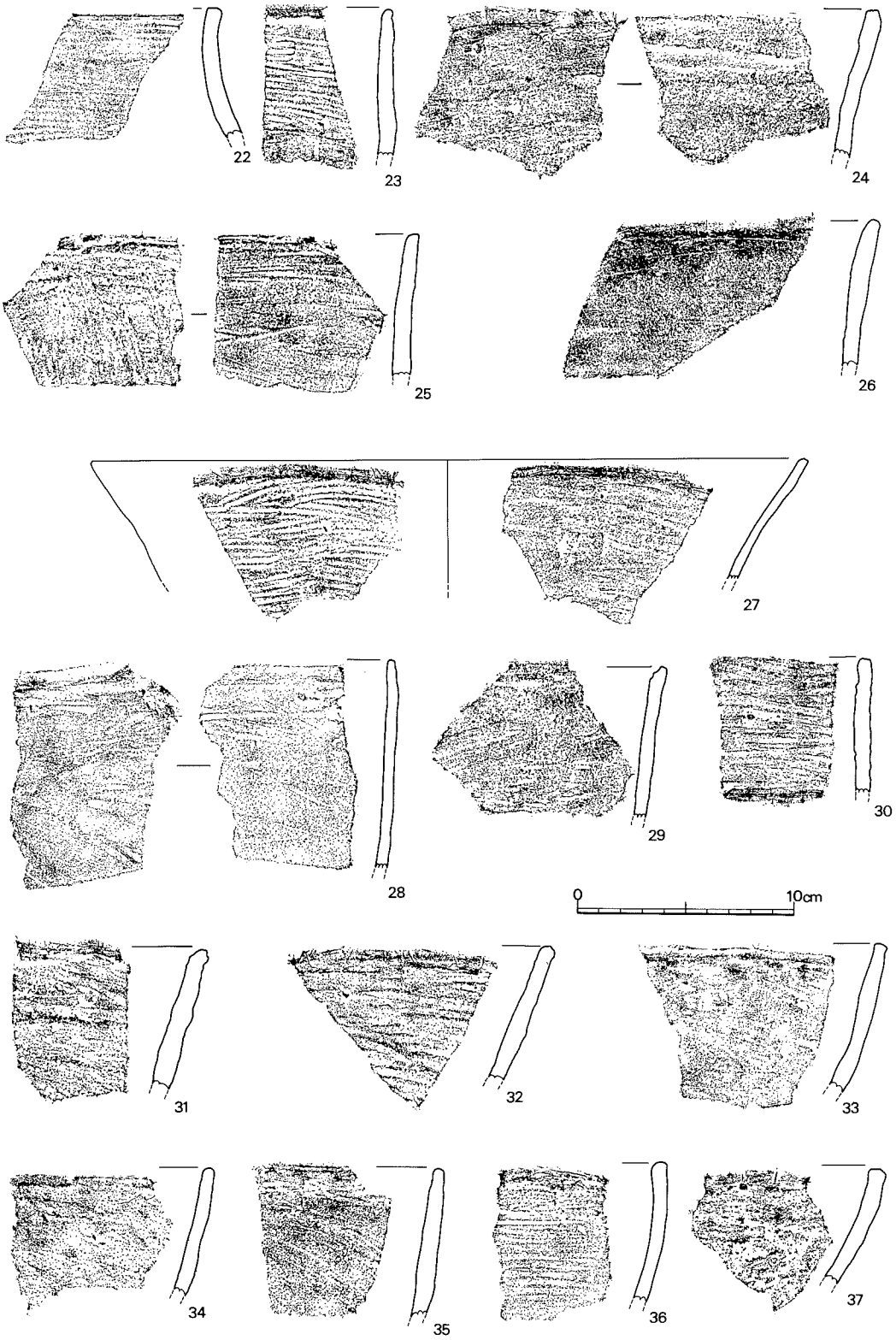
Ⅱ類 甕・無文土器の一群でⅡ－1～Ⅱ－3類に分けられる。

(1) Ⅱ－1類 (第45図22・23)

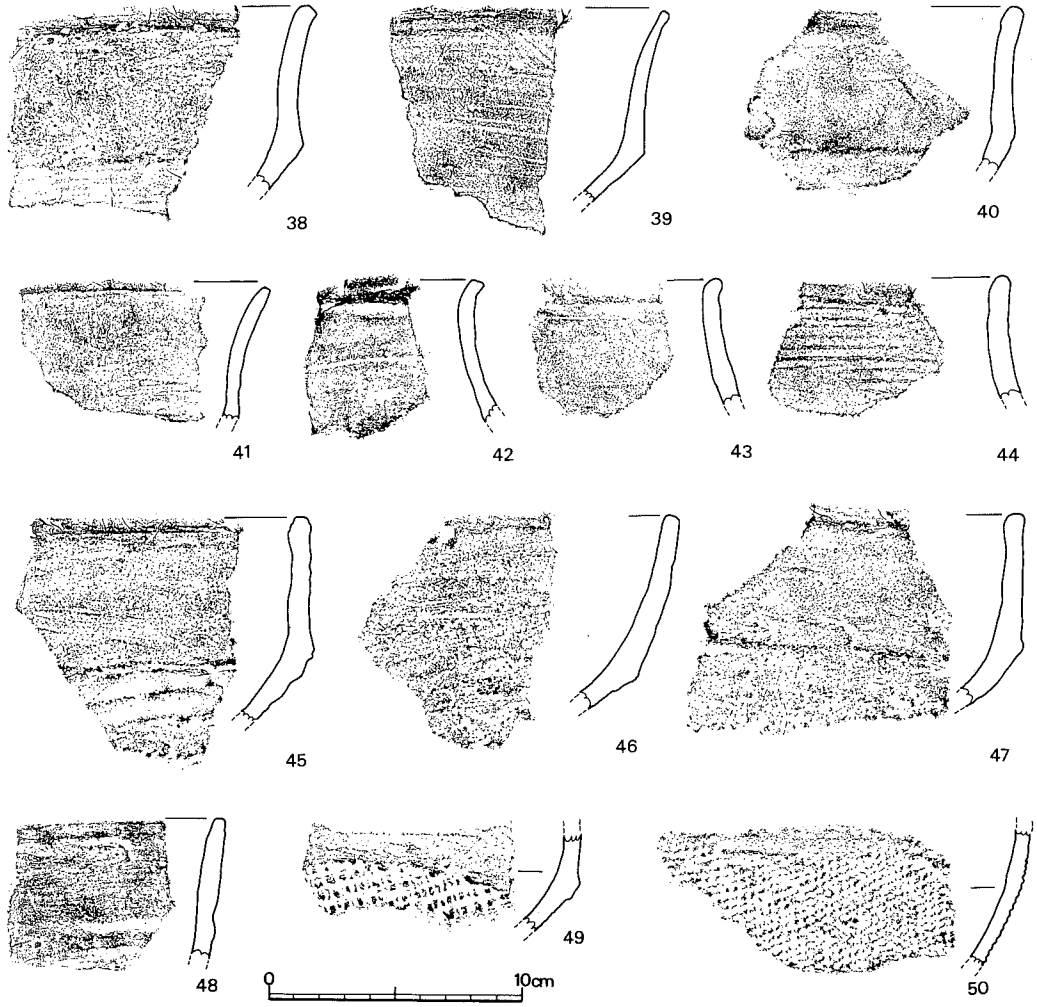
口縁部から胴部にかけて外反する土器である。22は口唇部は平坦であるが，中央に浅い沈線が1本巡る。内面は条痕が施されているが，上部はヨコナデされかなり消されているが，下部にはよく残っている。外面も条痕調整が行われているが，上をさらにヨコナデされているため条痕は全体にうすく残っている。胎土は精撰された土で細く，よくしまって焼成も良好である。23は22ほど強い反りは持っていないが，外面は口縁から胴部までは貝殻条痕と思われる施文が明瞭に残る。また胴部から下は擦過で調整されている。内面は条痕調整のあと指頭によるヨコナデが行われている。胎土・焼成とも良好である。



第44図　第35区～40区出土縄文土器(I)(1/3)



第45図　第35区～40区出土縄文土器(2)(1/3)



第46図　第35区～40区出土縄文土器(3)(1/3)

(2)　II－2類　(第45図24～27)

口縁部から胴部へかけてわずかに外反するが，胴部は屈曲しないタイプである。24・25は内面は条痕調整を受けたあと擦過調整されている。外面は強い擦過だけで調整され，内面より粗い。26は内面は貝殻条痕文だけの調整が行われ，外面は，粘土接ぎ目が凹んでいる他，全体がヨコナデである。この土器の口縁はゆるく波状を呈すると思われる。27は甕というより鉢に近い器形を呈する。外面はやや粗い貝殻条痕が横および斜めに施されている。内面も条痕文が施されているが，その上をヨコナデされ消されている。胎土には角閃石や雲母も含まれ，焼成は堅緻で良好である。復原口径は22.6cm。2類の土器は比較的大形を呈するものが多い。

(3)　II－3類　(第45図28～37)

口縁部から胴部，さらに底部にかけて内湾するタイプである。28は内面はヘラ磨きされてい

るが，外面は粗く成形された面の凸状になった部分を擦過調整している。内外ともにススが全面に付着する。その他擦過調整を主体としたものが31・33・34・35・37，貝殻条痕調整が32・36であり，外面には比較的ススの付着が多い。

Ⅲ類　粗製鉢を主体とする1群で組織痕文土器も含む。

(1)　Ⅲ－1類　（第46図38～44）

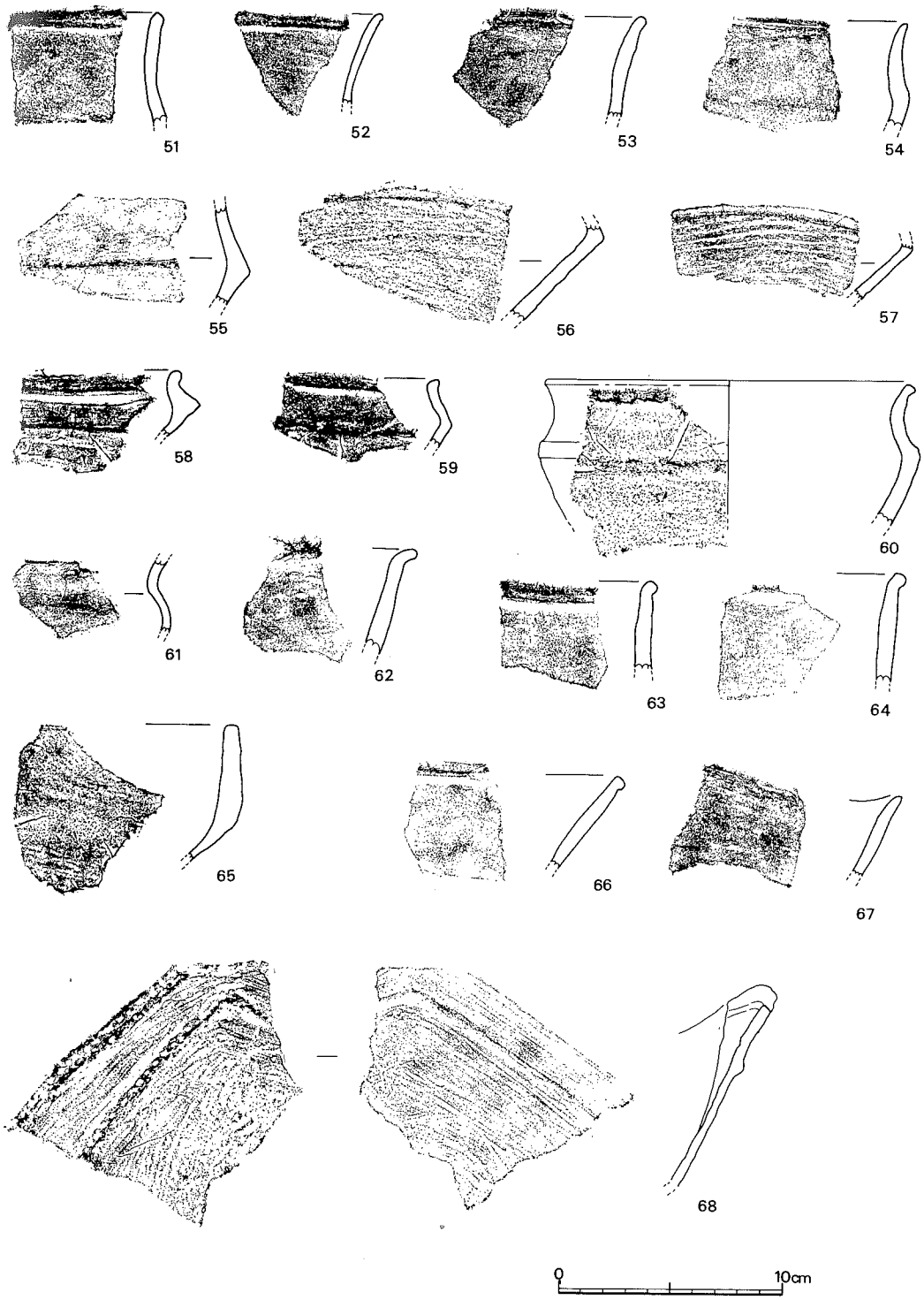
口縁部から胴部にかけて外反し，胴部は屈曲する中形の鉢である。38は内外とも条痕調整したあと，内面はヨコナデ，外面は頸部だけをヨコナデしている。胸部は条痕が残されたままになっている。頸部外面にはススが全体に付着している。胎土はよく精撰され，焼成は良好。39も形態的にはほぼ同一であるが，胴の張りがよりシャープである。40は口縁に厚みをもち反りも弱く，胸部の張りもないが，器面の調整形態は前者と同じである。41～44は口縁部分だけである。41～43は半精製の土器で器壁は比較的薄い。44は外面に条痕が見えるが，内外面ともに黒色の化粧土を塗ったようになり，その上にススが付着している。

(2)　Ⅲ－2類　（第46図45～50）

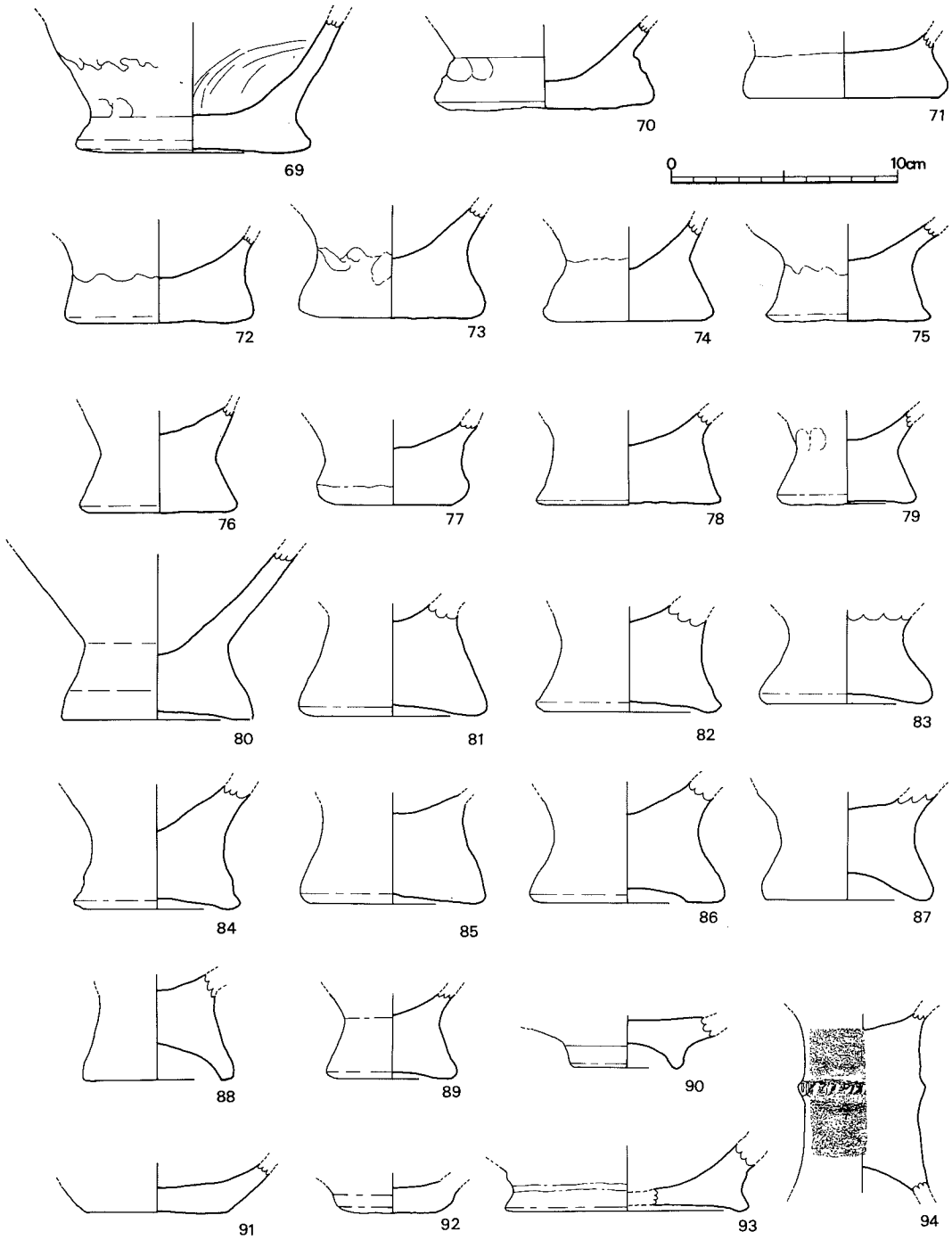
鉢状を呈し，組織痕文を有する土器である。45～48は口縁部から胸部にかけて破片であるが，この直下から組織痕が始まると思われる。45は胸部張り出し直下に指頭によると思われる太型の凹文が見られ一段とくびれた様相を示す。おそらくこの下に繋る文様が49・50の組織痕文土器である。49は一辺が4㎜程の網目圧痕であるが結節はよくわからない。内面は黒色の化粧土と思われるものが塗布されている。50は49より細かい網目で結び目は不明瞭である。内面はよく磨き上げられている。30代区における出土はこの2例だけである。

浅鉢　（第47図51～68）

ここにあげた一群の土器は浅鉢を基本としているが，中鉢的なものも含む。51～53は精製された黒色研磨の土器で頸部が長く中鉢である。54～59はいわゆる浅鉢である。54は胴の張りはゆるやかだが，外面の頸部と内面口縁部に丹を塗布している。55～57は半精製の胎土であるが外面は条痕調整の上をヘラで粗く磨いている。内面は丁寧に磨かれ黒色を呈している。58・59は小形の浅鉢で胎土も精選されている。特に58は胴部の張り出しもシャープで焼成も良いが59は焼成甘く黄褐色で軟質である。60は粗製土器であるが，頸部が内湾し，一見壺的な印象を与える。外面にはススが多く付着している。61～64については黒色研磨の鉢に類すると思われるが，器形が今一つはっきりしない一群である。65は椀に近い粗製研磨の土器，66・67は黒色研磨の浅鉢である。68は方形の浅鉢である。内面には幅約2㎝の口縁を作り出し，胴部は一段低く抑え，古いタイプであることを示峻している。外面は口唇部に刺突文を巡らし，頸部にあたる部分にも突帯文に刺突を配している。方形の頂部にあたる部分は山形になり，文様帯も平行している。内外とも条条痕の上をヘラ状のもので粗くナデている。下部の胴部はややふくらみをもっている。



第47図　第35区～40区出土縄文土器(4)(1/3)



第48図　第35区～40区出土縄文土器(5)(1/3)

底部　（第48図69～94）

底部はすべて粗製で比較的多く出土している。甕形土器の底は直径が大きく，厚みをもち安定感をもつ。69～72がそうであるが，底部は平坦で，成形時についた凹凸の器台の跡が見られる。内外ともに削られ，擦過の跡も付けられている。73～89は台形上に高く成形された底部で，平底と上げ底に区別される。上げ底部分はヘラにより削り取られているものが多い。90は高台状の部分を貼り付け，指頭による成形を行っている。底の部分は平坦で皿状を呈する器形の可能性もある。91～93は壺底部と思われるもので底はうすく仕上げてある。94は高坏脚部である。胎土はある程度精製され，中心部は粘土が充塡されている。中央に貼り付け突帯に刻目を付しているが，ヘラ状のもので細く付けられ，新しいタイプの傾向を示している。

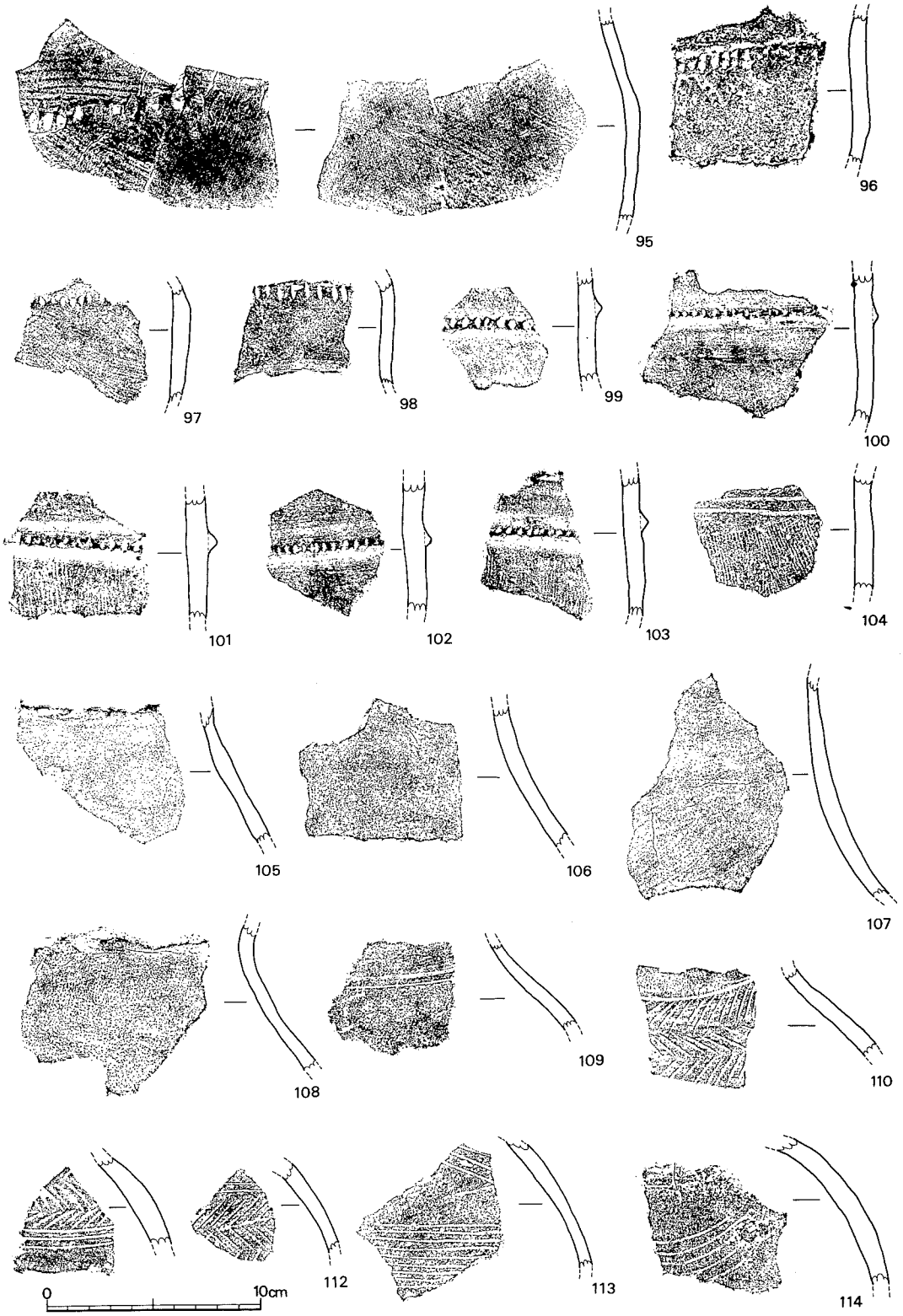
(7)　第34区～第40区出土の弥生土器

甕　（第49図95～104）

95口縁部を欠失するが，胴部にかけては若干外反している。胴屈曲部には刻目が施してある。刻目は鋭利なヘラ状の工具で両方より抉られている。外面の胸部から上は条痕が残り，下部は擦過による調整が見られる。調整法や胎土・焼成から見ると縄文的であるが，突帯でない刻目文などは新しい傾向が見られ，過渡期的なものとしてこの項で取扱った。97・98は低い段に細長の浅い刻目を入れた板付II式の胴部である。胎土には少量の雲母と石英粒および白い砂粒が目立ち，焼成は良好。98は内外とも黄褐色を呈するが，円がわずかに観察される。99～103は突帯に刻目が施された一群である。突帯はやや細く，上面がなだらかであるのに対して下面は水平に近く，刻目は小刻みに入れている。器表面は刷毛目調整で100・102がヨコ，その他はタテに入れ，殆どがススの付着を見る。これらの土器は亀の甲タイプとされたもので弥生前期後半に位置付けられる。104は口縁部を欠くが，頸部のくびれに2条の浅い沈線が巡る。その下の胴部には丁寧な刷毛目が施され，表面には全面ススが付着している。おそらく中期初頭の城ノ越式土器である。胎土には石英粒が目立ち，焼成は良好。

壺　（第49図105～114）

105はわずかに口縁部を欠失している。胎土は精選され内外とも黄灰色であるが，器表には丹塗の痕跡をとどめる。106は器には丹が全面に塗布され良く残っている。胎土は精選されているが，石英粒と白い砂粒が目立つ。107は頸部がよく外反し，丹の残存状態は比較的良好である。108は口縁部内側と外面頸部に丹塗りが認められる。これらの壺形土器は長胴あるいは短胴に連なるものであるが，比較的大形の器形を維持し，板付式系の土器に供伴するものである。109～114は，文様を有する壺である。109は頸部と胴部に明瞭な変化はないが2条の細い沈線を巡らし，わずかに丹の痕跡が残る。110は頸胴界に1条の沈線を入れ，胴部上段には研磨のあと鋭利なヘラ状工具で羽状文を描いている。色調査灰褐色で焼成は甘い。111も同様に羽状文であるが，下段に3条の沈線を入れている。胎土には雲母を含み焼成は甘く瓦質に焼き上がっている。



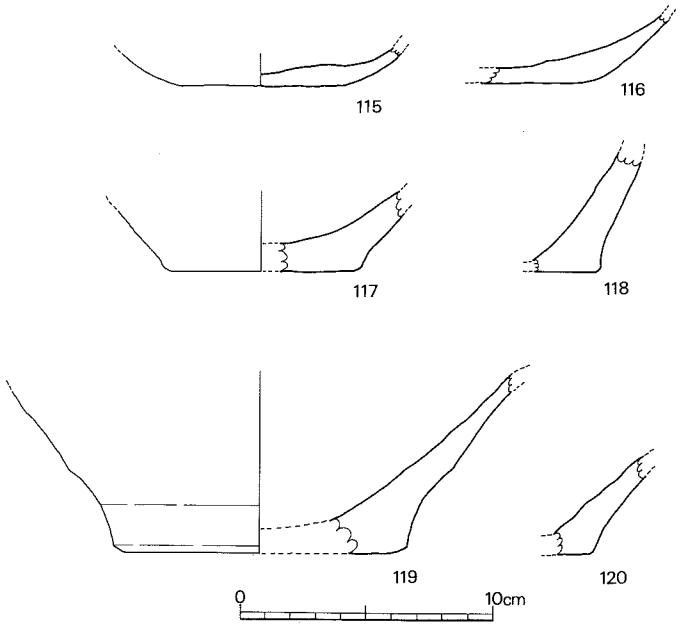
第49図　第35区～40区出土弥生土器(1)(1/3)

112は胎土も精製され，表面は黒く研磨されている。上段に2条の細沈線とその下に貝殻による羽状文が見られる。113・114は数条の沈線が部分的に曲線化した。重孤文土器である。器表は研磨されているが，ススの付着が著しい。また114は内側にもスス状の付着物がある。

時期的には前期中頃を中心とした一群として捉えられよう。

底部　（第50図115～120）

115～117は壺底部である。115・116は丸底で内外とも黒色を呈し，胎土に石英粒を多く含んでいる。117は貼り付け底だが，高台部の周縁だけに限っている。胎土には石英粒を多く含んでいる。119から120は甕底部である。底部から立ち上がりが急で胴部はあまり張らない。胎土は石英粒などを含むが全体が粗く，焼成も甘い。弥生土器の底部は量的には少ない出土である。

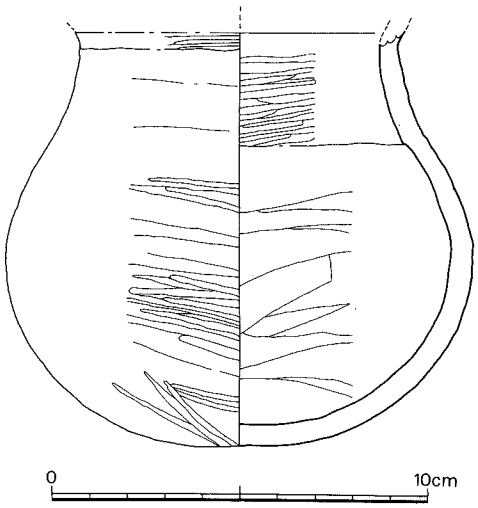


第50図　第35区～40区出土弥生土器(2)(1/3)

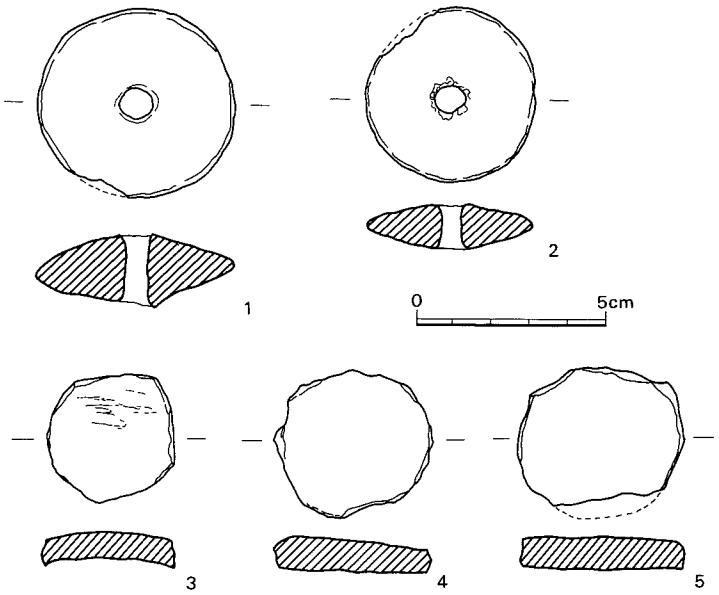
半島系無文土器　（第51図）

丁寧に仕上げられた，丹塗磨研壺である。口縁部を含めて全体の1/3強を欠失しているが，原型はほぼ復原できる。口縁部は口唇の部分が失われているが，外反するくびれの部分はよく特徴を残している。頸部から胴部にかけては弱くしまり，胴部は球形状に丸くふくらみ底部に続くが，底部は器を安定させるだけのわずかな平坦面を有する。

器面外側は，全体的に横方向にミガキが施されるが，底部はザラついていてスス状のものが付着している。色調は暗赤褐色を呈している。内面は口縁から頸部までは横方向にミガキが施されたあと，丹が塗布されている。頸部から胴部にかけては，明瞭に段がつき，横方向に幅0.5cmから1cm幅のケズリ痕が認められる。色調はケズリのあとは灰褐色で，胎土は精選され，焼



第51図　第38区出土半島系無文土器(1/2)



第52図　第35区～40区出土土製品(½)

成は良好である。

なお，器形の中央部縦全体に幅0.5～0.7cm程のザラついた部分が残るが，紐ずれ痕のようにも見えるが，いかなる理由で付いているものか不明である。この土器の出土状況は第4旧河道のほぼ中央最深部の砂利層に接した部分で，縄文晩期終末として捉えている層である。

各地の遺跡から無文土器の出土は報告されているが，国内で製作されたものが多いと思われる中にあって，本例は将来品と考えてよいのではないかと考えられる。ただ頸部の幅が広いのが，気になる特徴ではある。

土製品　(第52図1～5)

ここにあげた土製品は紡錘車2点とメンコと称される3点で，縄文晩期終末に属るものである。1は38区出土でわずかに一部を剝落しているが，ほぼ完形である。直径5.2cm，厚さ1.8cm，孔径8㎜，現重量40ｇである。胎土は細かい長石や白い砂粒を含み，焼成良好で固い。形状はいわゆる円盤状を呈し，周縁は丸くおさめられ，中央の孔のまわりはわずかに隆起している。2は37区出土で，1よりもひと回り小さく，直径4.4cm，厚さ1.2cm，孔径7㎜，現存重量21ｇである。中央部が厚い円盤状で，周縁の一部をわずかに欠失している。胎土には長石や白い砂粒を含み精選されている。

3～5は夜臼式の甕形土器の破片の周縁を丸く打ち欠き，形を整えたもので，メンコと呼称されているもので，3は黒色磨研土器を利用，4・5は粗製土器を利用している。詳細に洗い直してみれば類例は増加すると思われる。(安楽)

石　　器

今次調査において出土した石器は，弥生前期後半と縄文晩期終末のものがある。弥生時代に属する石器には，石鏃，掻器，剝片，石核，石包丁，扁平片刃石斧，方柱状抉入石斧，打製・磨製石斧，環状石斧，敲石，磨石，穿孔石器などがある。縄文時代に属する石器には，打製石鏃，石槍，石核，打製・磨製石斧，扁平打製石斧，石錘，敲石，磨石ながある。

今次の調査は南北に長い区域に渡って実施されており，各石器についての説明は，遺構・遺物の包含状態のある1～8区・9～13区・34～41区毎に行い，更に弥生時代と縄文時代に分けて行うことにする。

(1)　第1区～第8区出土の弥生時代石器（第53図～59図）

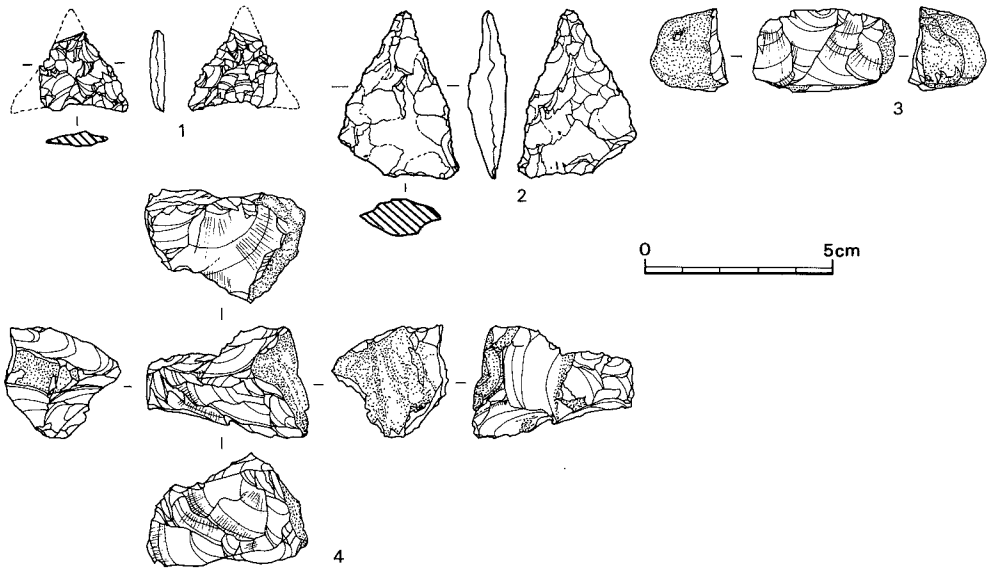
1は黒曜石製の大型の打製石鏃，2は玄武質の大型打製石鏃である。今次の石器では大型の石鏃の多いことが注目される。3は小型の黒曜石原石を用いた石核で調整された打面はなく，自然面からの直接打撃によって縦長の剝片を剝離している。4も黒曜石製の石核で，打撃の方向は不規則である。3・4ともに伊万里市腰岳産の黒曜石と考えられる。5～10は黒曜石以外の石材を用いた掻器である。1は青白色の硬質砂岩製であり，扁平片刃石器などに多用される石材で対馬産と考えられる石材を使用しており，本例は別の目的で搬入されたものが転用されたものと考えられる。6～10は良質の安山岩製であるが原産地はよく分からない。11は石包丁の未成品である。全体が半分に割れ，図の上辺部分を欠損しているが，穿孔途中の状態が観察され下辺は整形がかなり進んでいる。

12～14は扁平片刃石斧である。上下10cm内外，幅4cm程度，厚み1cm程度である。刃部はともに片刃で，12・14は曲刃，13は直刃である。12の石材は青灰色の頁岩，14も頁岩であるが灰色である。ともに磨製石剣などに多用される石材で対馬産と考えられる。13は淡い青灰色の緻密な砂岩でこれも対馬産の石材と考えられる。15・16は方柱状抉入石斧である。15は刃部がわずかに欠損（使用による）が見られるがほぼ完形品で上下長12.7cm・幅2.8cm・厚み4.2cmである。対馬産と考えられる良質の硬質の砂岩が使用されている。抉入部は粗い研磨の状態が観察される。16は下半部分が欠損しているが幅2.9cm・厚み4.4cmで15とほぼ同じ規模であったと考えられる。灰黒色の頁岩製で対馬産の石材と考えられる。17は上半部が欠損した片刃石斧で粗い頁岩を利用した片刃石斧である。上半部が欠損し，全体に風化が進んでいる。18・19は大型の半磨製石斧である。18は上下16cm・最大幅7cmであるが，縦半分に割れていて厚みは3.5cm程度であったと推定される。対馬産の硬質頁岩と考えられる。19は上下端が欠損しているが石材は対馬産頁岩である。20は上下8cm・最大幅4.5cm・厚み1.3cmの小型の磨製石斧で全体によく研磨されている。黒い斑晶部分の多い青白色の蛇文岩であり，長崎半島産の石材であろうか。

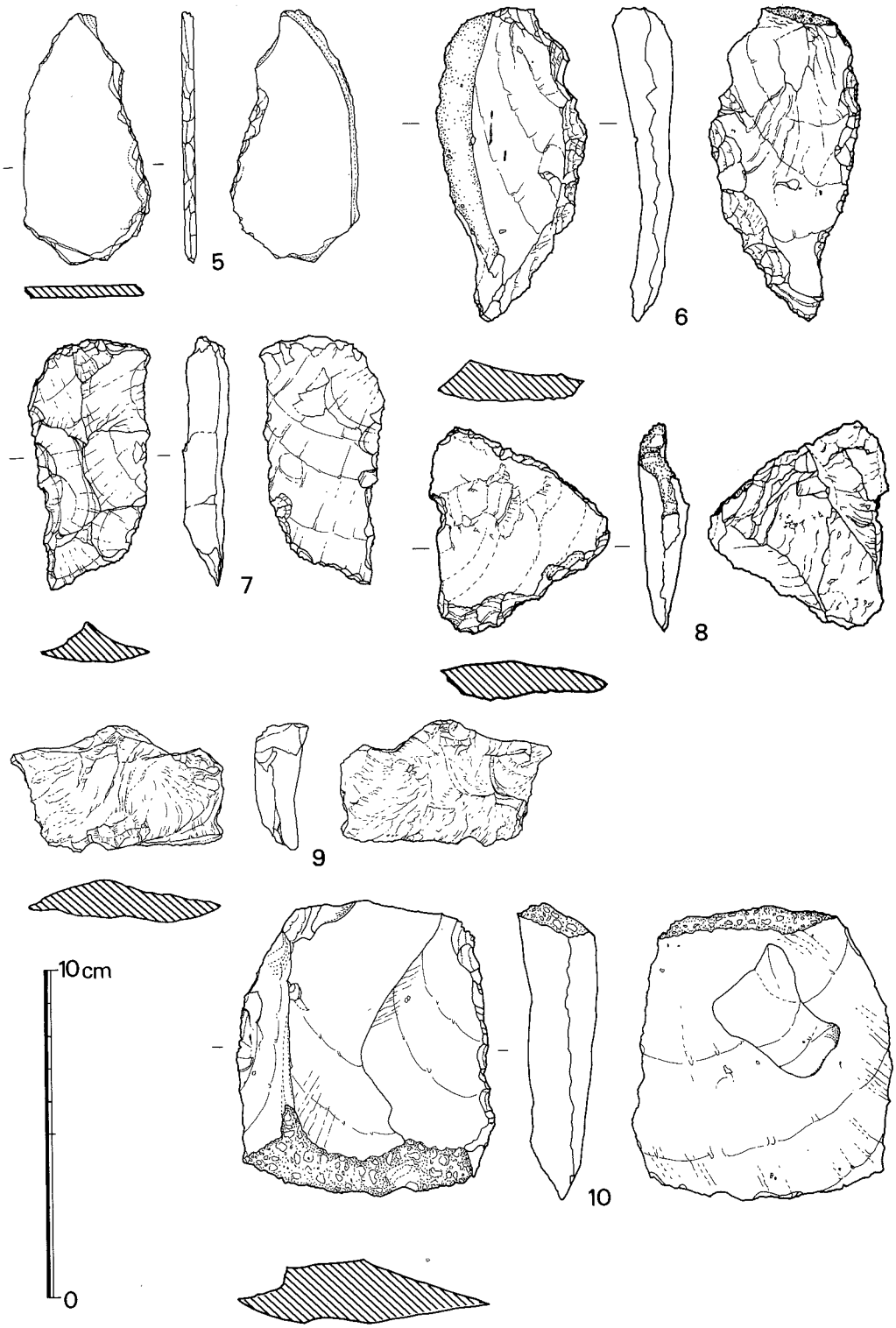
21は上下9.8cm・最大幅5.1cm・厚み2.7cmで，全体がよく研磨された磨製石斧である。緑灰色の蛇文岩製であるが，わずかに石英の貫入が認められ原産地は不明である。22は上下9cm・最大幅5.9cm・厚み1.6cmの玄武岩製で，小型の扁平打製石斧である。23は半磨製の石斧であるが，全体の4分の1程度が残ったもので旧状はかなり大型であっただろう。表面に黒斑が多く生じており，対馬産の硬質頁岩製と考えられる。24は上下15.8cm・最大幅5.7cm・最大厚4.2cmの半磨製石斧である。研磨は下半部分と上端部分に見られる。全体が心もち曲がり，刃部は直刃に近く，縄文系の石斧である。硬質緻密な砂岩と考えられる。25も大型の石斧であるが縦方向に半分に割れ，刃部も欠損しているが研磨はかなり綿密である。灰色の硬質頁岩が利用されており，表面に黒斑が多く生じている。対馬産と考えられる石材である。26は灰色の玄武岩製の扁平打製石斧である。

27は環状石斧である。中央に，両面からのロート状の穿孔作業によって穿たれた直径11mmの孔がある。ロート状部分は回転作業の跡が残り，鈍端な穿孔具の回転によっていることが分かる。全体は敲打作業による円形の整形が施されており未成品と考えられる。灰白色のやや軟質の安山岩が用いられている。この種の石器の穿孔用と考えられる石器が今回の調査で1点，従前の調査[註1]で2点出土している。

28・30・32・34は敲石と磨石であり，いずれも円形に近く，やや平な浜石を利用している。28は1720g，30は950g，32は980g，34は800gである。浜石の選定には一定範囲の重量が考慮



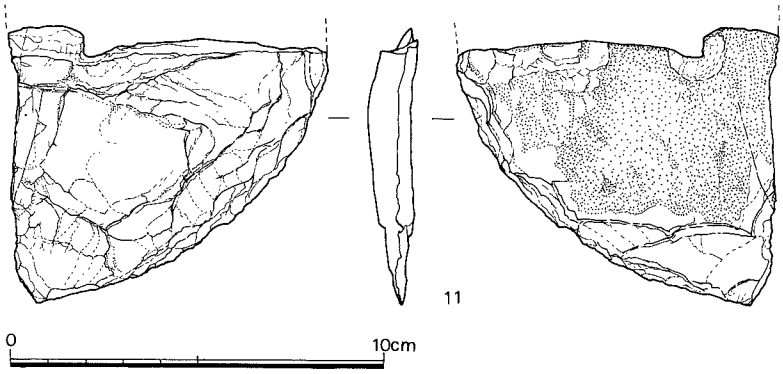
第53図　第1区～8区出土石器(1)(1/2)



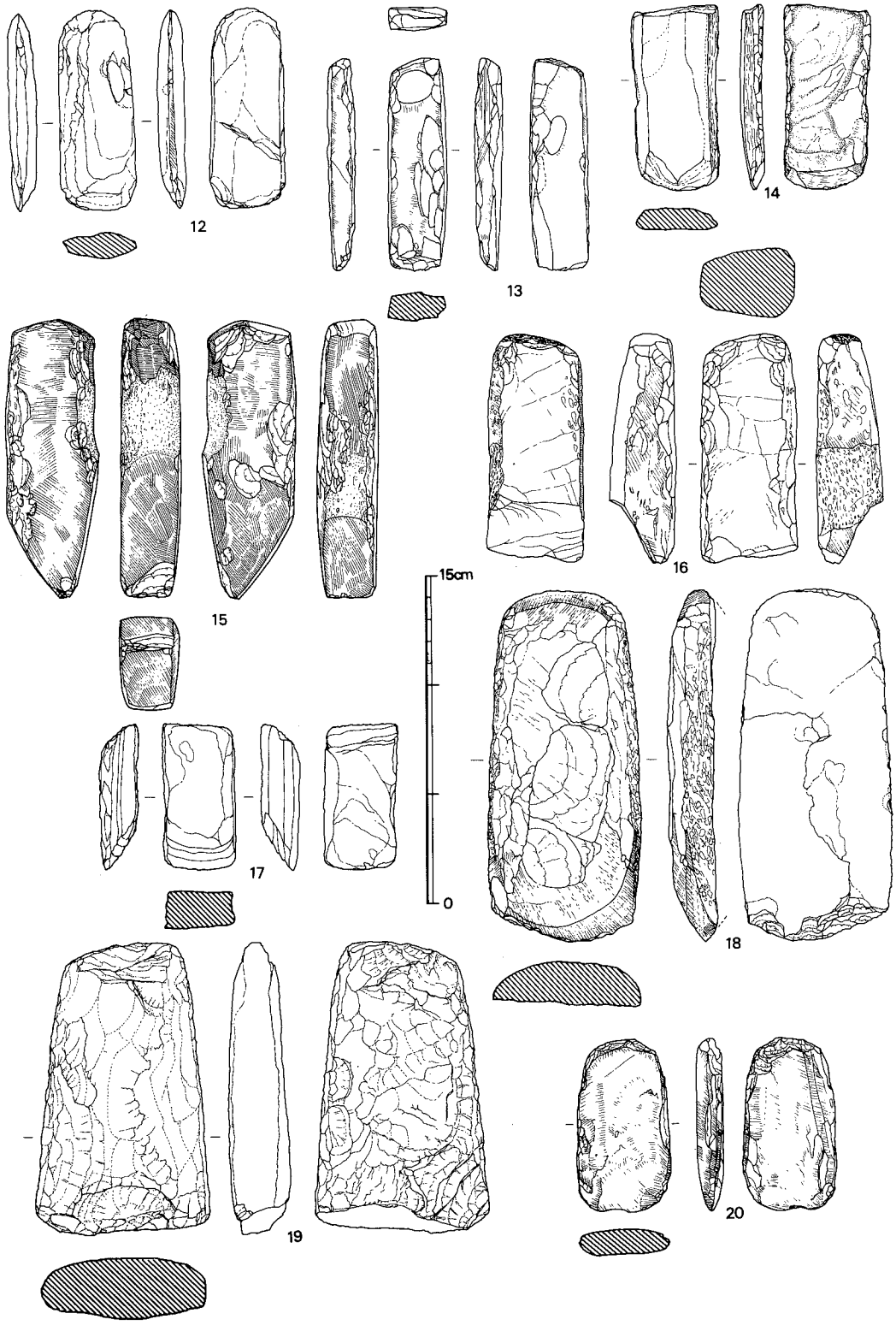
第54図　第Ⅰ区～8区出土石器(2)(1/3)

されているらしく，今次調査で出土したこれらの石器55例について，破損した18例を除いた37例について計測してみると，平均1067ｇの平均値が得られている。度数分布を見ると，600ｇ未満＝１例（2.7%），600～1200ｇ＝24例（64.8%），1300～1600ｇ＝10例（27%），1700ｇ以上２例(5.4%)，となり約２／３が600～1200ｇの中に入る。この重量度数分布が意味をもつか否かにわかには分からないが，片手で保持しての作業に適した重量であることは指摘できるであろう。

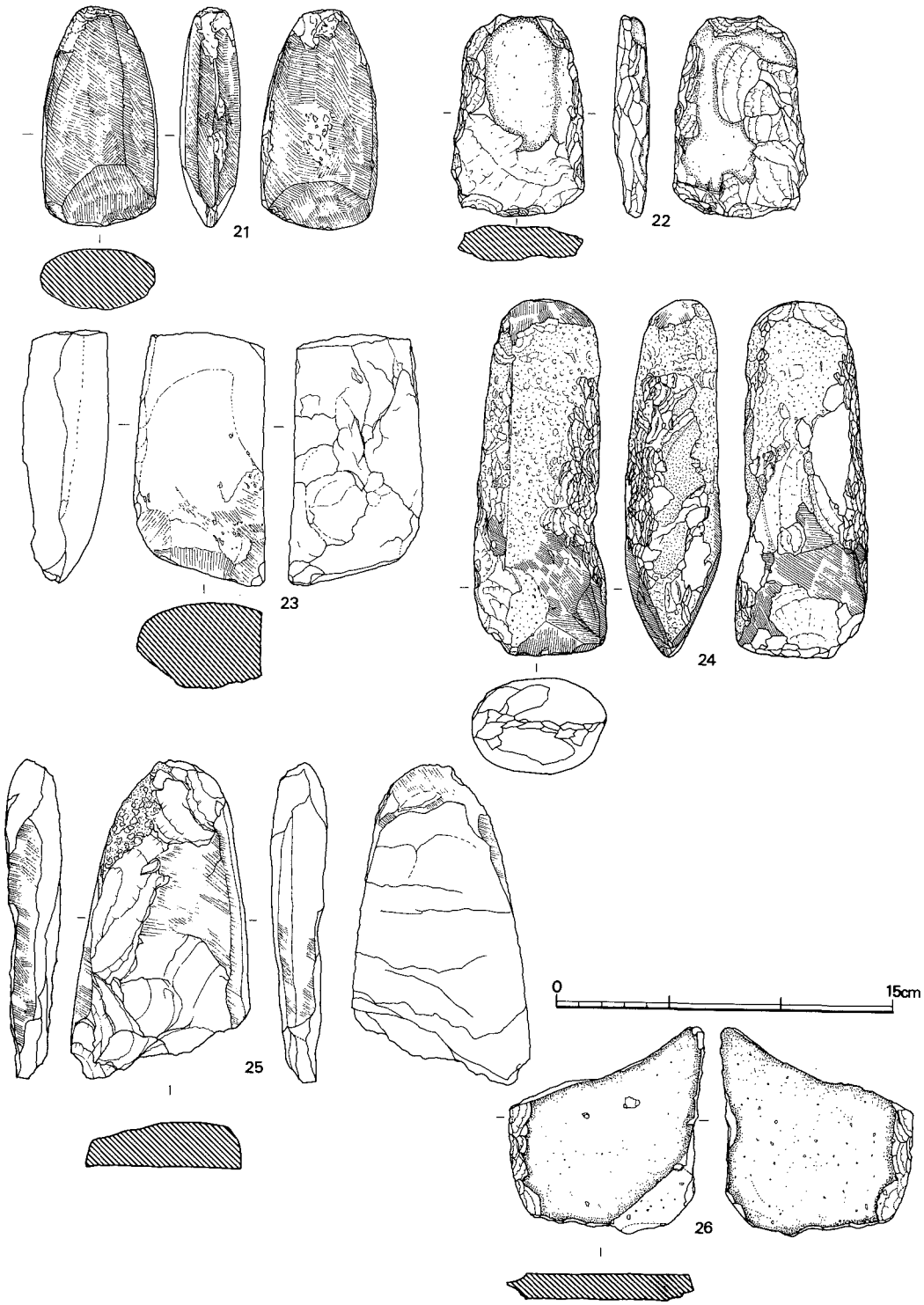
29（400ｇ）のようなボール状の円礫が３点出土している。それぞれ500ｇ・400ｇ・230ｇで平均377ｇの重量がある。形状からして敲石の類とは考えにくいものであり，投擲用の投弾であろうか。31・33・35はやや長細い礫の下端に使用痕のある資料である。



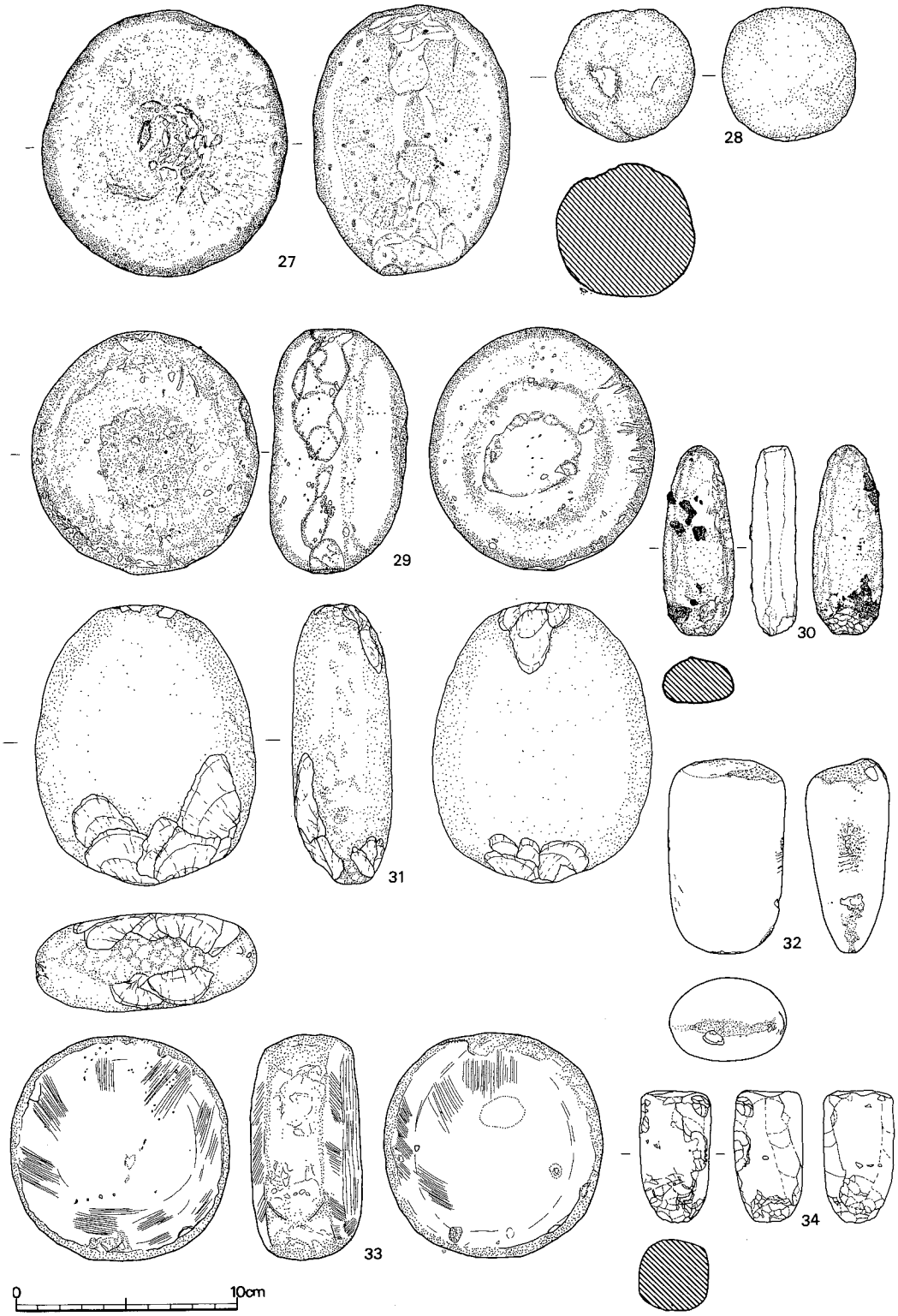
第55図　第Ｉ区～８区出土石器(3)(½)



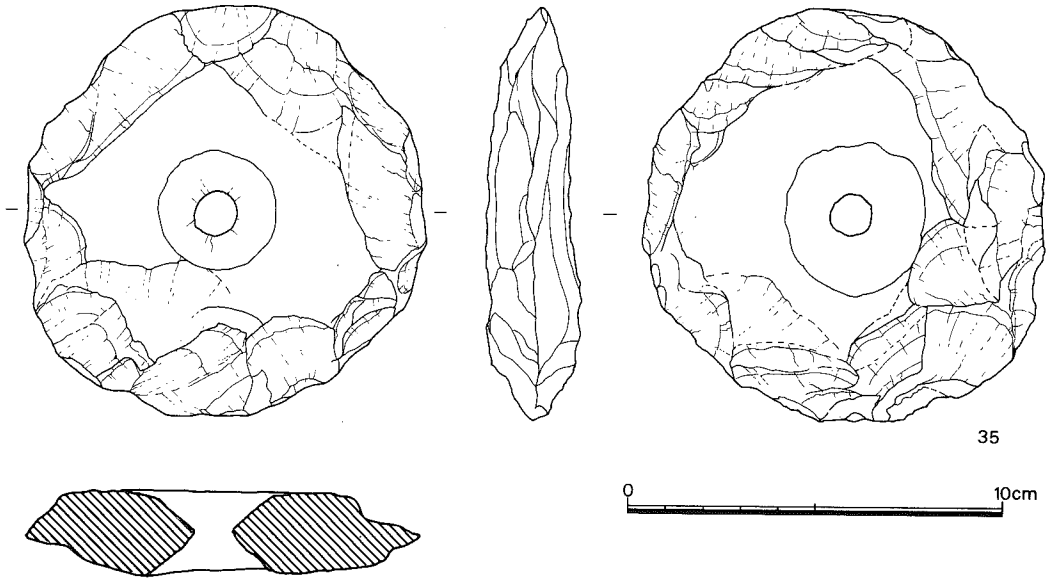
第56図　第Ⅰ区～8区出土石器(4)(1/3)



第57図　第Ⅰ区～8区出土石器(5)(1/3)



第58図　第１区～８区出土石器(6)(1/3)

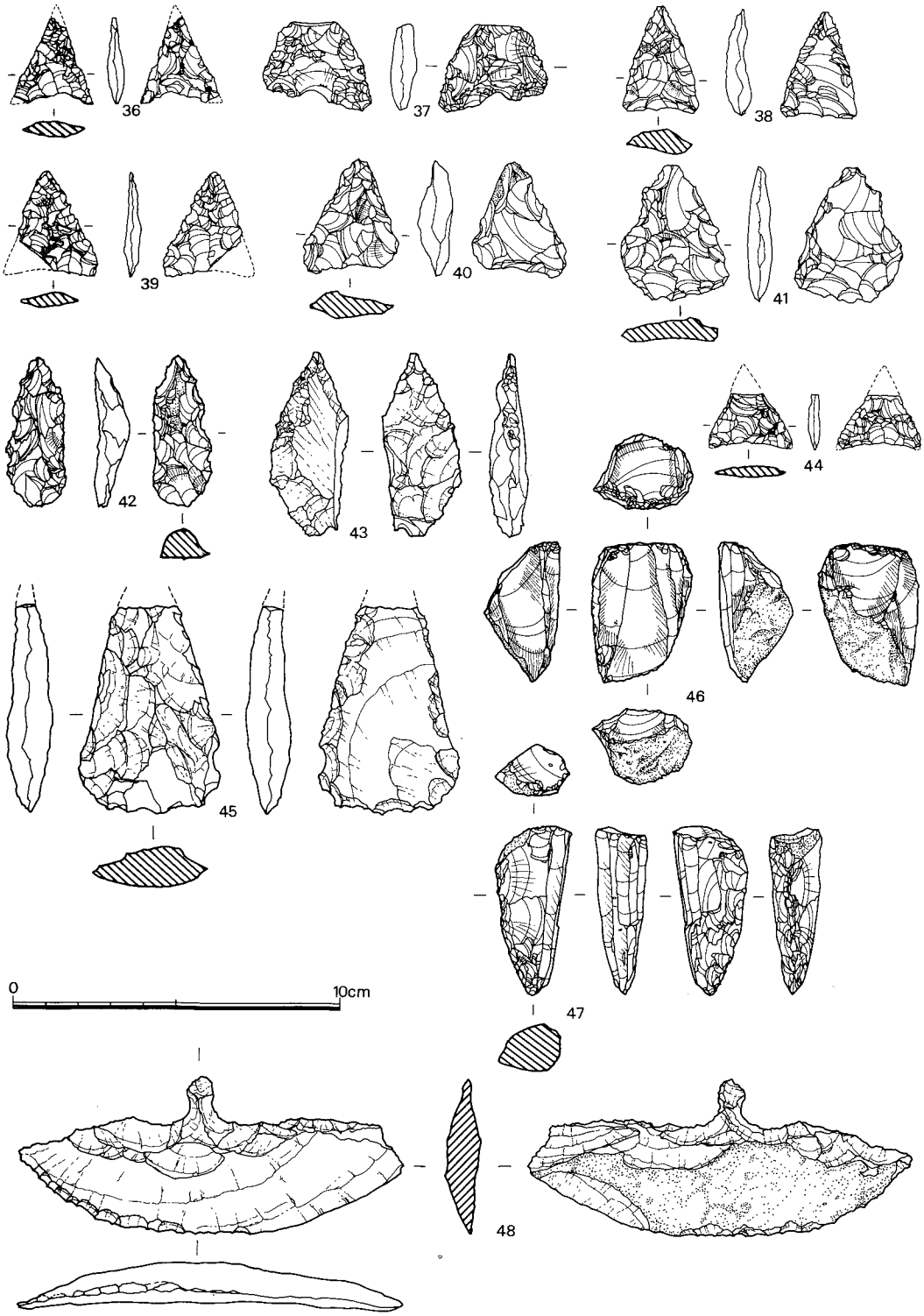


第59図　第１区～８区出土石器(7)(1/2)

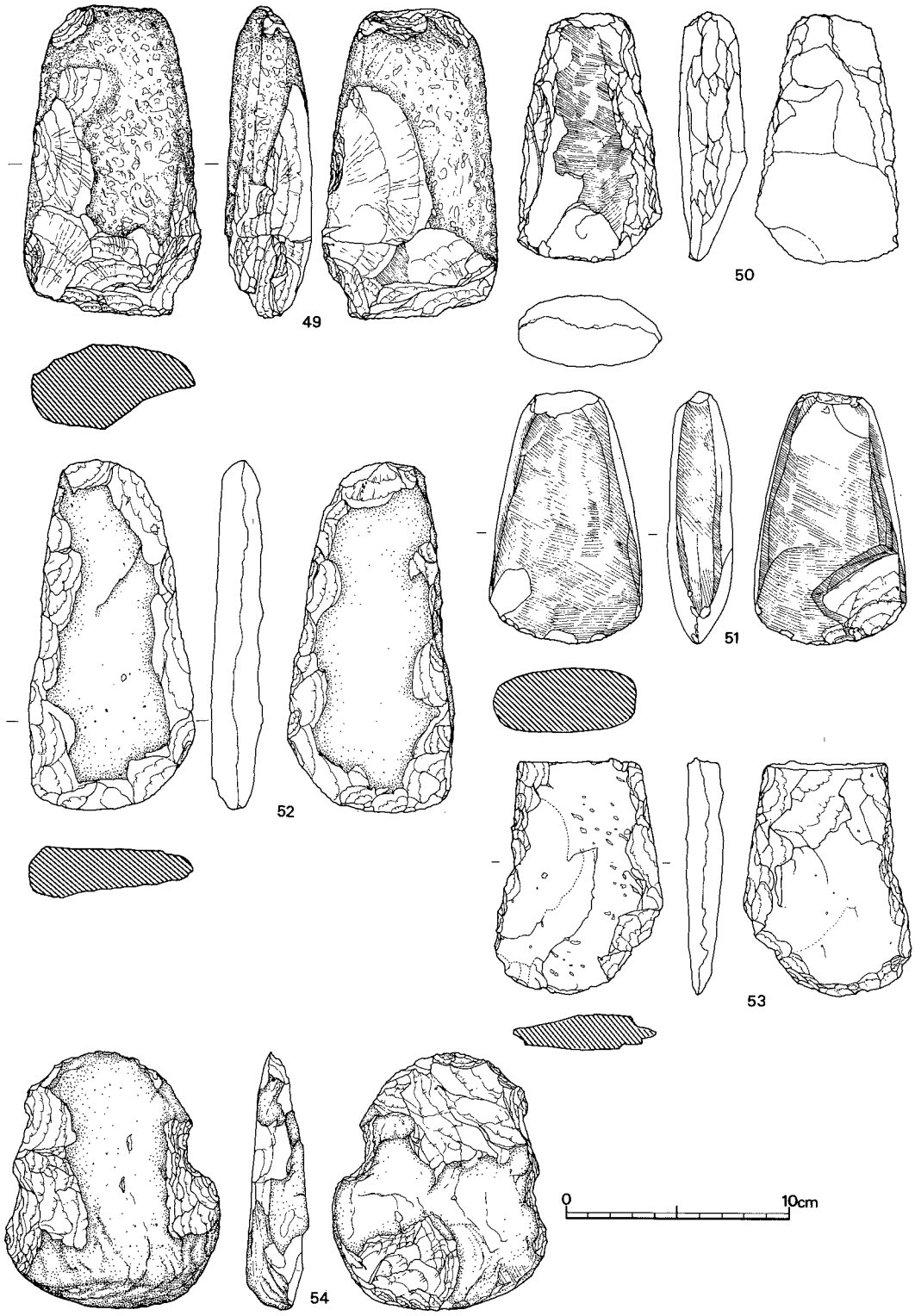
(2)　第１区～第８区出土の縄文時代石器（第60～62図）

36～41・44は黒曜石製の打製石鏃でかなり大型品が目立つ。いずれも黒色半透明の良質な石材が用いられており，腰岳産の石材の可能性が強い。42は黒曜石製で長さ4.5cm，43は青灰色安山岩製で長さ5.6cmの尖頭器である。45灰白色の安山岩製で尖端を欠損しているが旧状は８cm程度の長さが推定される大型の尖頭器である。46・47は黒色の良質な黒曜石製の石核で，46は打撃面を調整して縦長の剝片を連続して剝離している。47は良質の黒曜石製で著しく古色を帯びた細石刃核である。打撃面を調整して細石刃を連続して割りとっている。縄文の所産ではなく，旧石器時代末葉の石器が混入したものであろう。48は灰色の良質な安山岩製の横型の石匙である。左右12.7cmの大型石匙であるが，一面につまみ方向から剝離されたことを示す巨大なバルブが残り，全体に反りがあるところからして翼状剝片を二次加工したことを示している。縄文晩期より古い時期の所産であろう。

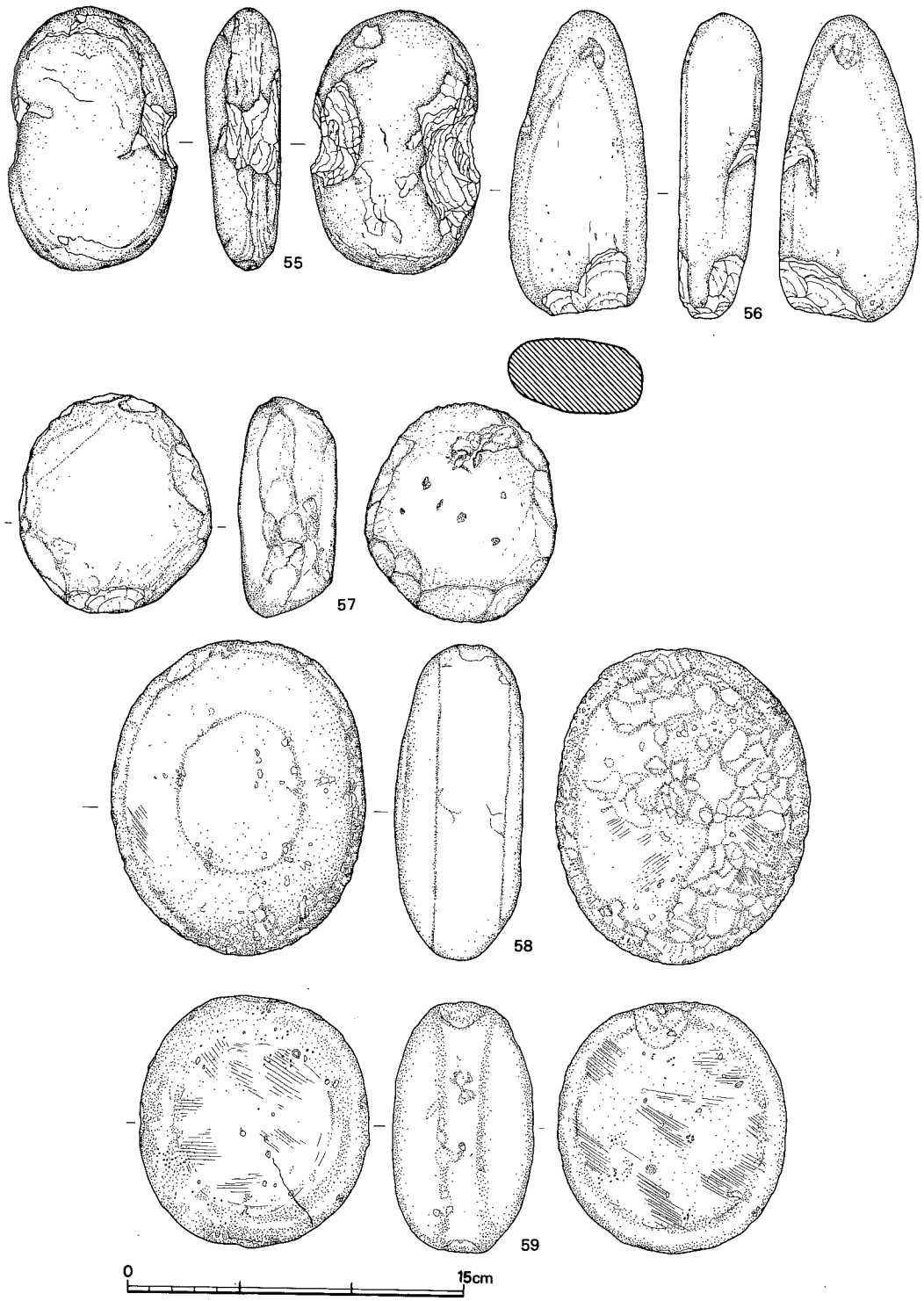
49は青黒色の半磨製石斧である。一面に研磨面が一部残っており，半磨製石斧の刃部が破損した資料であることを示している。50も下端が破損した磨製石斧であり，黒斑が多く見られる頁岩である。51は上端をわずかに欠損しているが完形に近い資料で上下11.3cm，最大幅6.9cm最大厚2.9cmの磨製石斧である。淡い青灰色の緻密な安山岩製で全体がよく研磨されている。52・



第60図　第Ⅰ区～8区出土石器(1)(1/2)



第61図　第Ⅰ区～8区出土石器(2)(1/3)



第62図　第Ⅰ区～8区出土石器(3)(1/3)

53は扁平打製石斧である。52は上下15.8cm，最大幅7.5cm，最大厚2.3cmで灰色の扁平な玄武岩の礫の周辺に細かく剝離して形を整え，刃部は曲刃になっている。53は上半部を欠損しているが曲刃の扁平打製石斧である。

54・55はいずれも扁平な安山岩礫を用いた石錘で，ともに短軸上に深い抉入加工を施している。54は390ｇ，55は420ｇである。

56～59は敲石である。56は長円礫の下端に敲打痕がある。57は円礫の側縁に激しい敲打作業を示す痕跡が残り，58は円礫の側縁と平面上に敲打痕が残っている。58は礫の両面上に擦過痕が残っており，敲石に敲打・擦過の機能のあることが分かる資料である。

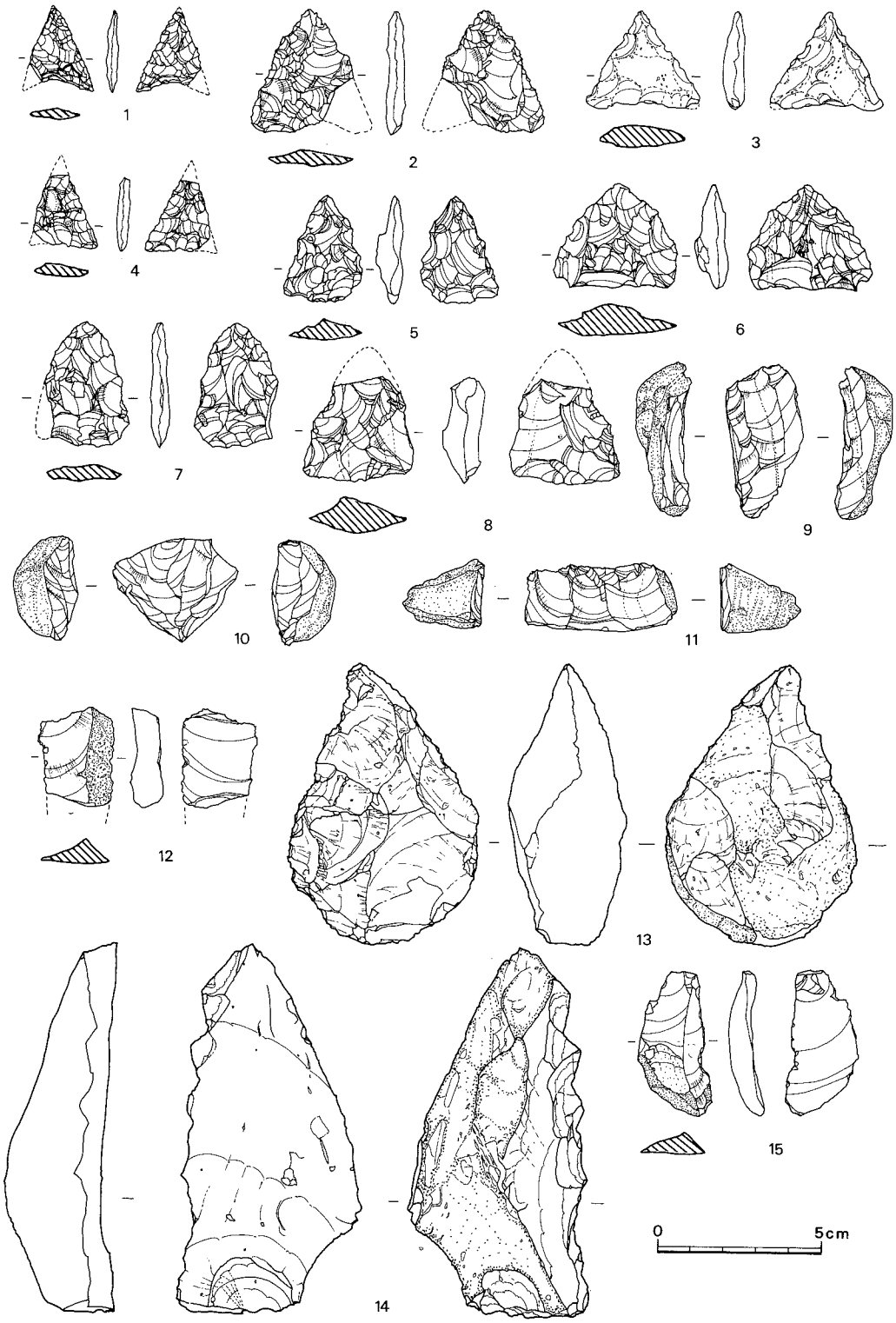
註

1．正林　護他『里田原』田平町文化財調査報告書３集1988

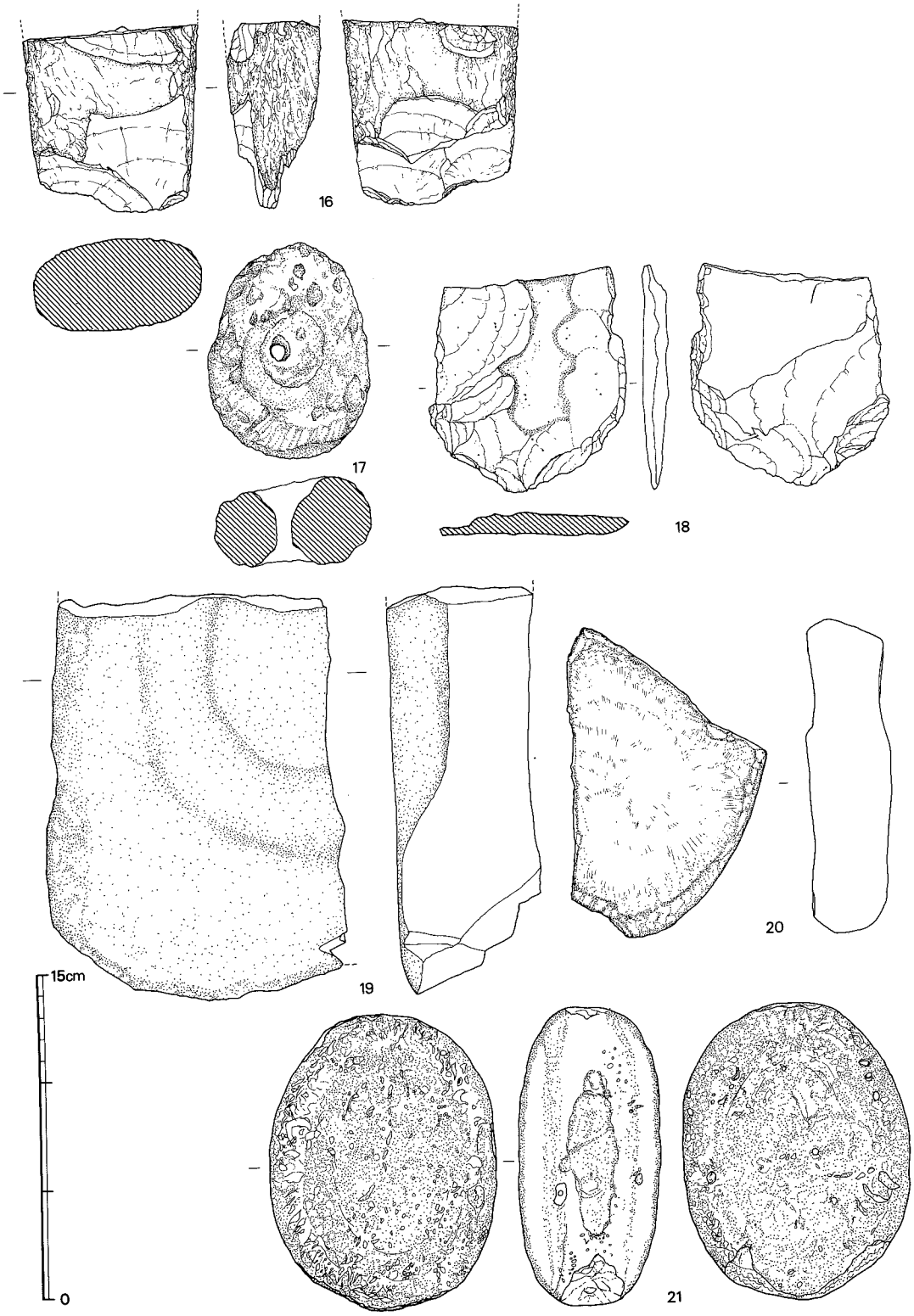
(3)　第11区～第16区出土の弥生時代石器（第63図～64図）

１～８は黒曜石製石鏃である。いずれも腰岳産と考えられる黒色半透明の良質の石材を用いている。９～11は黒曜石製の石核である。いずれも自然面を打撃して縦長剝片を割り落としている。12・15は黒色半透明の良質な黒曜石製の縦長剝片である。13は黒灰色の上質な玻璃質安山岩を用いた尖頭器である。一面に自然面を一部残しているが全体的に粗い剝離が見られ，肉厚に作られている。上下長8.5cm。14も良質の玻璃質安山岩の大型縦長剝片を用いた掻器である。母核からの剝離面はそのままにして，他面の一側に粗大な二次加工を施している。

16は黒灰色の安山岩製の石斧片である。図版の上片で半分に折れ，下半分も大きく損傷している。17は軽石製の浮子である。両面から鈍端な穿孔具による穿孔が施されている。この種の軽石製石器は南九州の縄文遺跡に顕著に見られる。19は粗い黄灰色の玄武岩を用いた石皿の四半割した資料である。大部分は自然面のままであるが，凹みの推定直径は20cm程度であったと考えられる。20も粗い砂岩を用いた石皿片である，側縁の整形が施されており側縁部分いっぱいに緩やかな凹みがつけられている。21は安山岩製の敲石で外周部分にこまかな使用痕跡がある。



第63図　第11区～16区出土石器(1)(½)

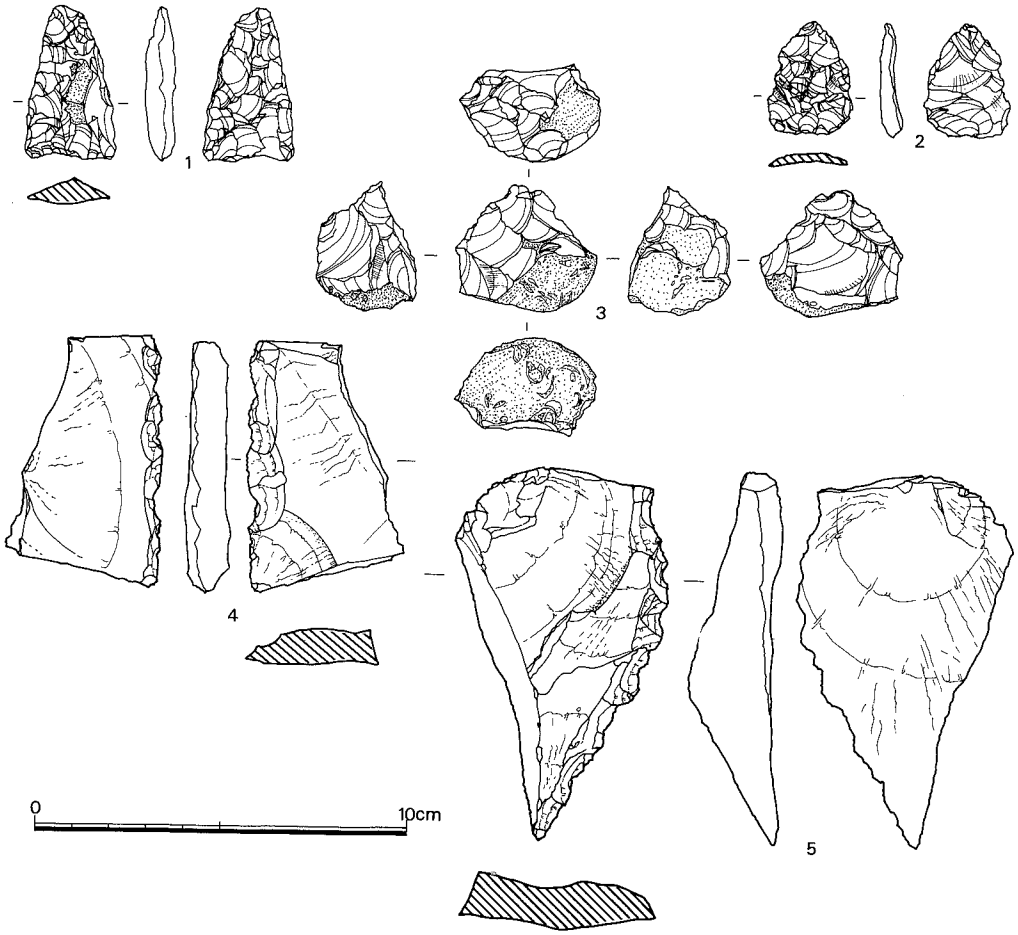


第64図　第11区～16区出土石器(2)(1/3)

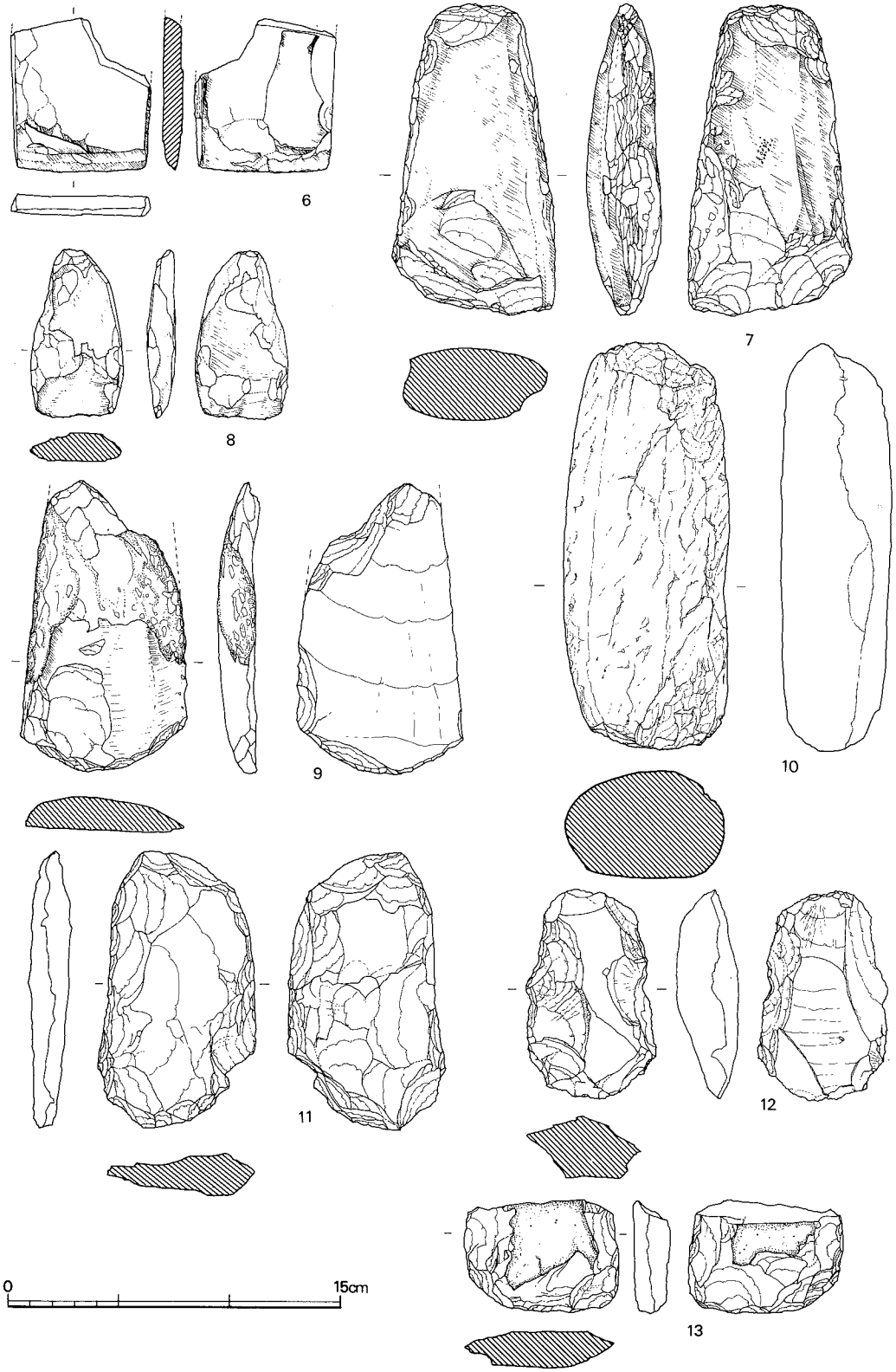
(4) 第34区～第40区出土の縄文時代石器（第65～70図）

1・2は黒曜石製の打製石鏃である。3は黒曜石製の石核で小形の原石が利用され，多方向から縦長剝片を割り落としている。4は黒灰色の玻璃質安山岩製の翼状剝片を利用した掻器，5は同様石材の縦長剝片を利用した掻器である。それぞれ剝片の一側縁に粗い剝離加工を施している。4は上下6.5cm，5は上下9.9cmである。

6は上辺を欠損しているが，最大幅6cm，厚み0.9cmの扁平片刃石斧である。刃はいろの硬質頁岩を素材とした資料で刃部には入念な研磨が施されている。8は黒灰色の頁岩製の磨製石斧である。上下13.7cm，最大幅7.4cm，最大厚3.3cm，刃部をやや欠損しているが斜刃であった。可能性が強い。側縁を除いてよく研磨されている。7は濃緑斑のある淡緑色の蛇文岩製の磨製



第65図　第34区～40区の石器(1)(1/2)



第66図　第34～40区出土石器(2)(1/3)

石斧で刃は片刃気味に研磨されている。上下7.6cmの小型品である。9は黒灰色の頁岩製の半磨製石斧で断面図の右半部分が欠損している。10は石斧の未成品と考えられる長円礫で上下端が損傷している。11は青黒色の玄武岩で小型石斧の未成品である。

11・13〜23は扁平打製石斧であり，粗目の玄武岩が多用されている。この種の石斧は縄文晩期に出現することが知られているが，扁平な原礫の側縁に簡単な加工を施し，このため自然面を残したものも多く見られる。この種の石斧の形態を宮田A遺跡[註1]では2種類に大別し，さらに，刃部の形によってそれぞれを2種類に細分類している。図式的に表せば，

Ⅰ型…側縁がほぼ並行なもの ┌a．刃部が直線的なもの
　　└b．　〃　曲線的なもの

Ⅱ型…側縁が刃部に向けて徐々に広くなるもの（撥型）… ┌a．刃部が直線的なもの
　　└b．　〃　曲線的なもの

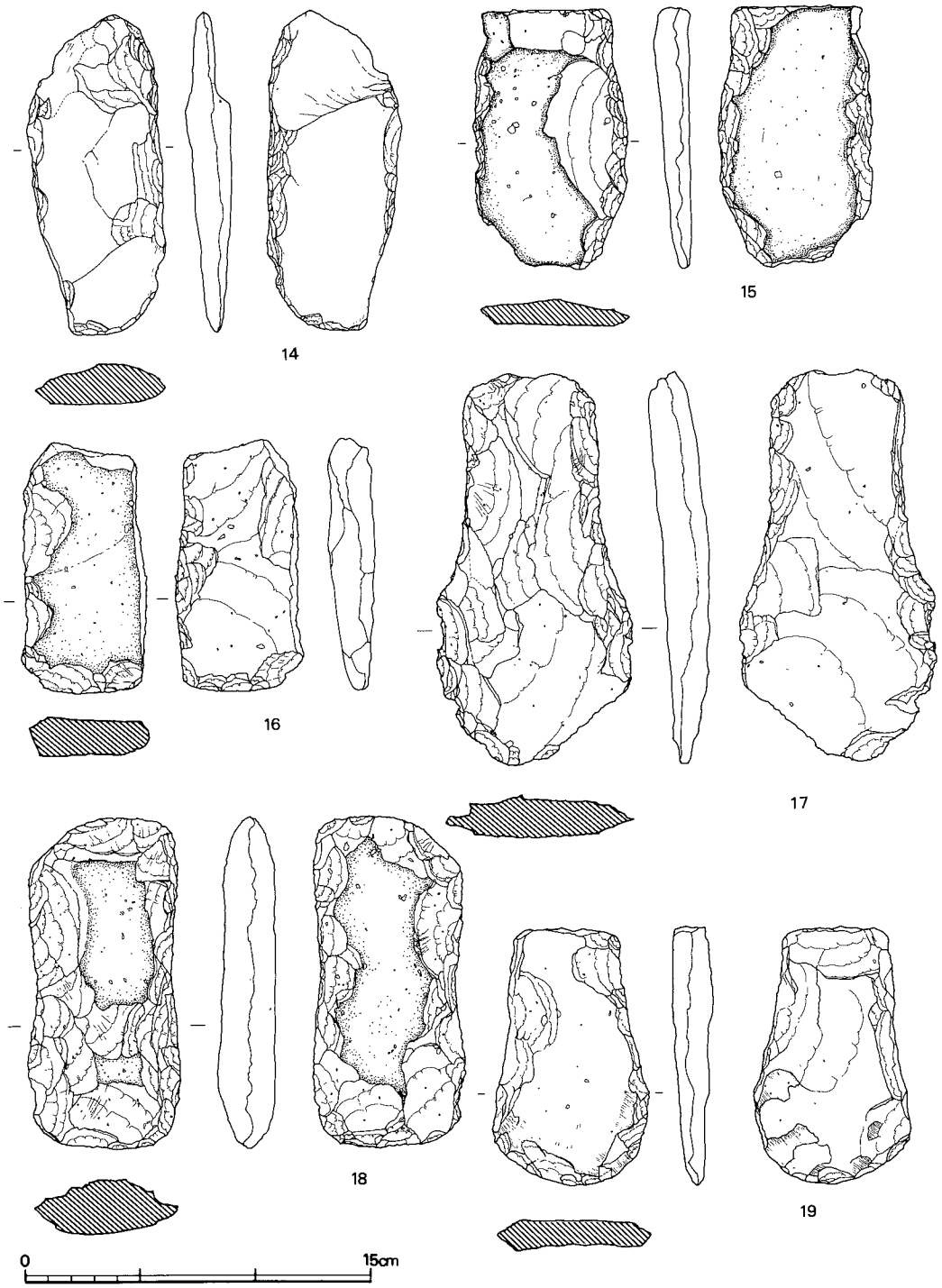
となる。本報告においてもこの分類に従って，全体の形状を知ることができる14例を分類すればⅠ型（Ⅰａ2点・Ⅰｂ5点），Ⅱ型（Ⅱａ1点・Ⅱｂ3点）となるが，この分類にあてはまらない17・20・22の三点がある。17・20・22は「刃部に向かって幅が拡大する」点ではⅡ型に近いが「徐々に」ではなく，下半部を大きくふくらましている点でⅠ・Ⅱ型とは異なるものである。特に22は蝮の頭状の平面形に整形されている。本報では，宮田A遺跡の分類に加えてⅢ型があり，刃部が直線的なⅢａ型（20）と刃部が曲線的なⅢｂ型（17・22）に細分類できることを報じておく。宮田遺跡の分類でも「例外的」資料として「分銅型」として1例が図示されているが，Ⅲ型として分類可能な資料である。今回報告の扁平打製石斧を上下長でいえば，最小例は16の10.6cm，最大例は17の16.8cmがあり，この種の石斧の大方の規模を示している。

21は投弾であろうか，直径7.5cmの球状の礫の表面に敲打の痕跡がある。23は直径6.8cmの矢や扁平な礫の側縁に敲打痕があり，小型の敲石であろう。

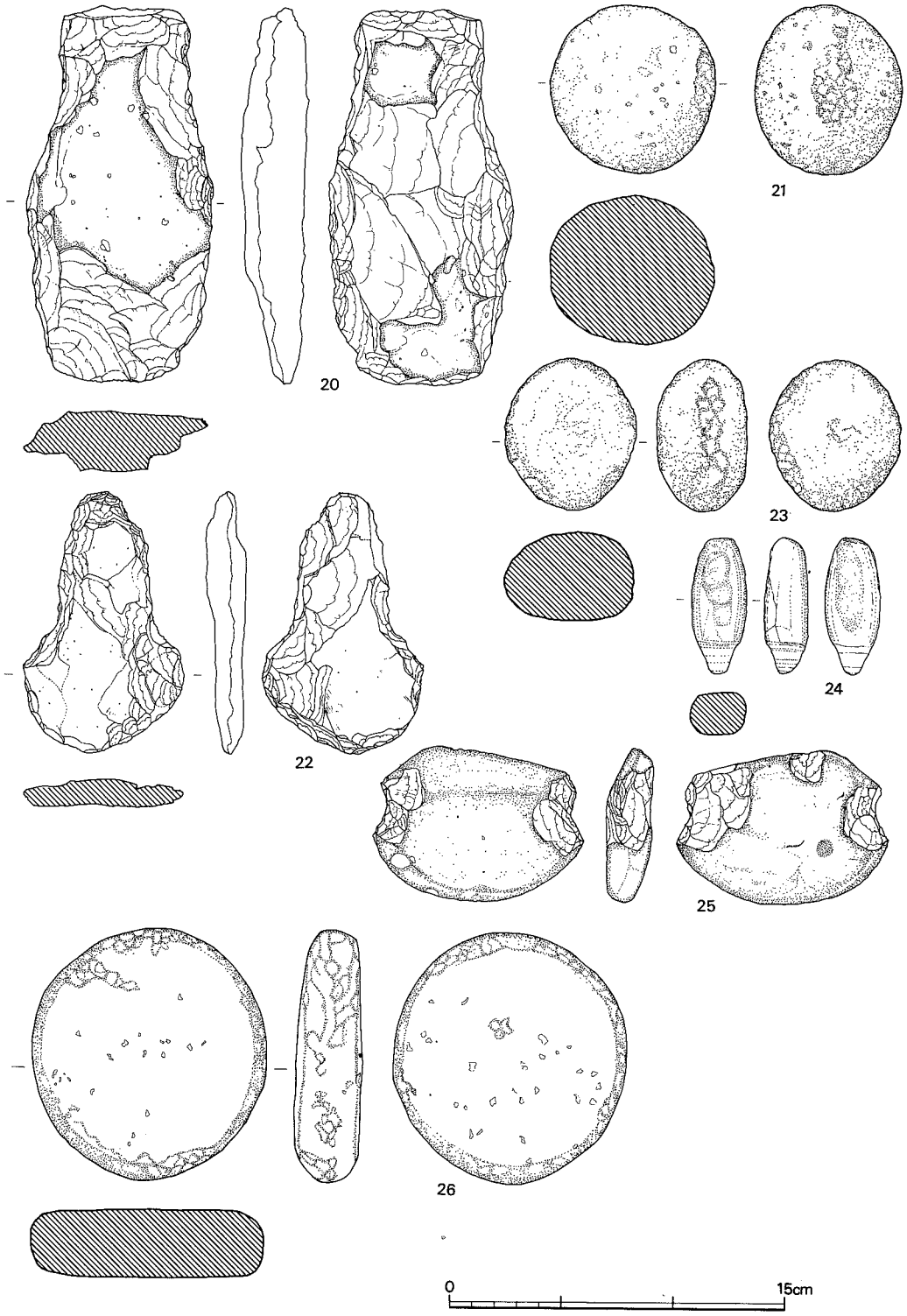
24は穿孔石器である。上下長6.1cmの長めの黄灰色の砂岩礫が用いられている。図の下端部分が緩くくびれ，回転運動（揉錐作業）が行われたことを示している。図の「くびれ」部分以外は研磨による稜が見られ，指先による保持を計ったものと考えられる。この種の石器は縦前の里田原遺跡の調査[註2]でも弥生前期後半の2例があり，曲田遺跡[註3]では弥生「早期」例が報告されている[註4]。この種の「穿孔具」については西谷正氏の文献[註4]があり，①大阪府池上遺跡・四ツ池遺跡で従前「石錘」とされてきた石器の両端に回転運動の痕跡を残すものがあり，砂岩を用いた例が多いことと併せて環状石斧の「穿孔具」として報告されていること。②朝鮮半島では京畿道楊平郡大心里遺跡でも無文土器時代の遺物と考えられる砂岩製の「穿孔具」が採集されていること。③中国でも仰韶・竜山文化期諸遺跡に砂岩製の穿孔具が見られること，をあげて日・朝・中の先史時代に共通した穿孔技術の存在したことが述べられている。

25は長軸上の両端に抉りをつけた石錘（180ｇ）であり安山岩の扁平円礫が用いられている。

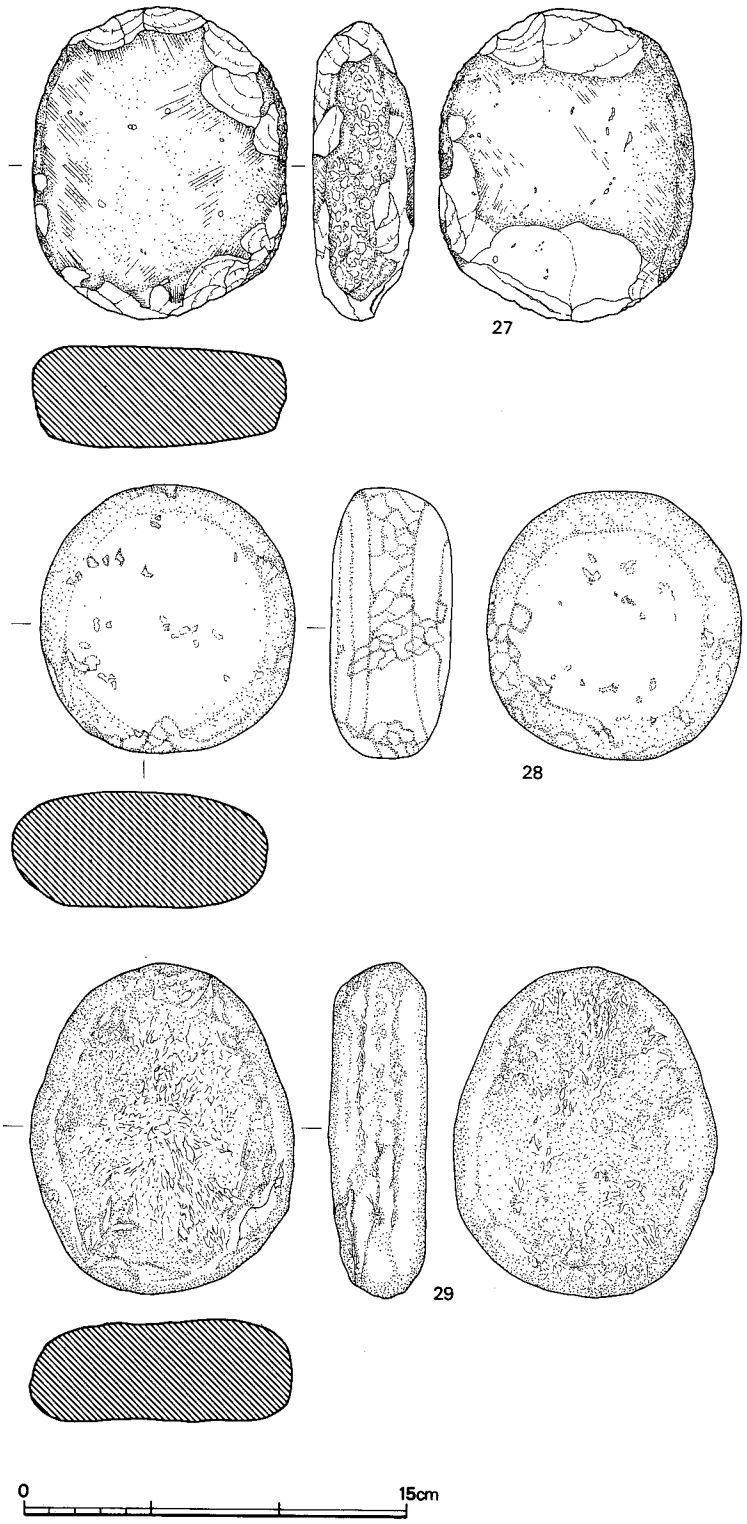
26〜29は扁平な円礫を用いた敲石である。いずれも側縁部に敲打痕ないし敲打による損傷が



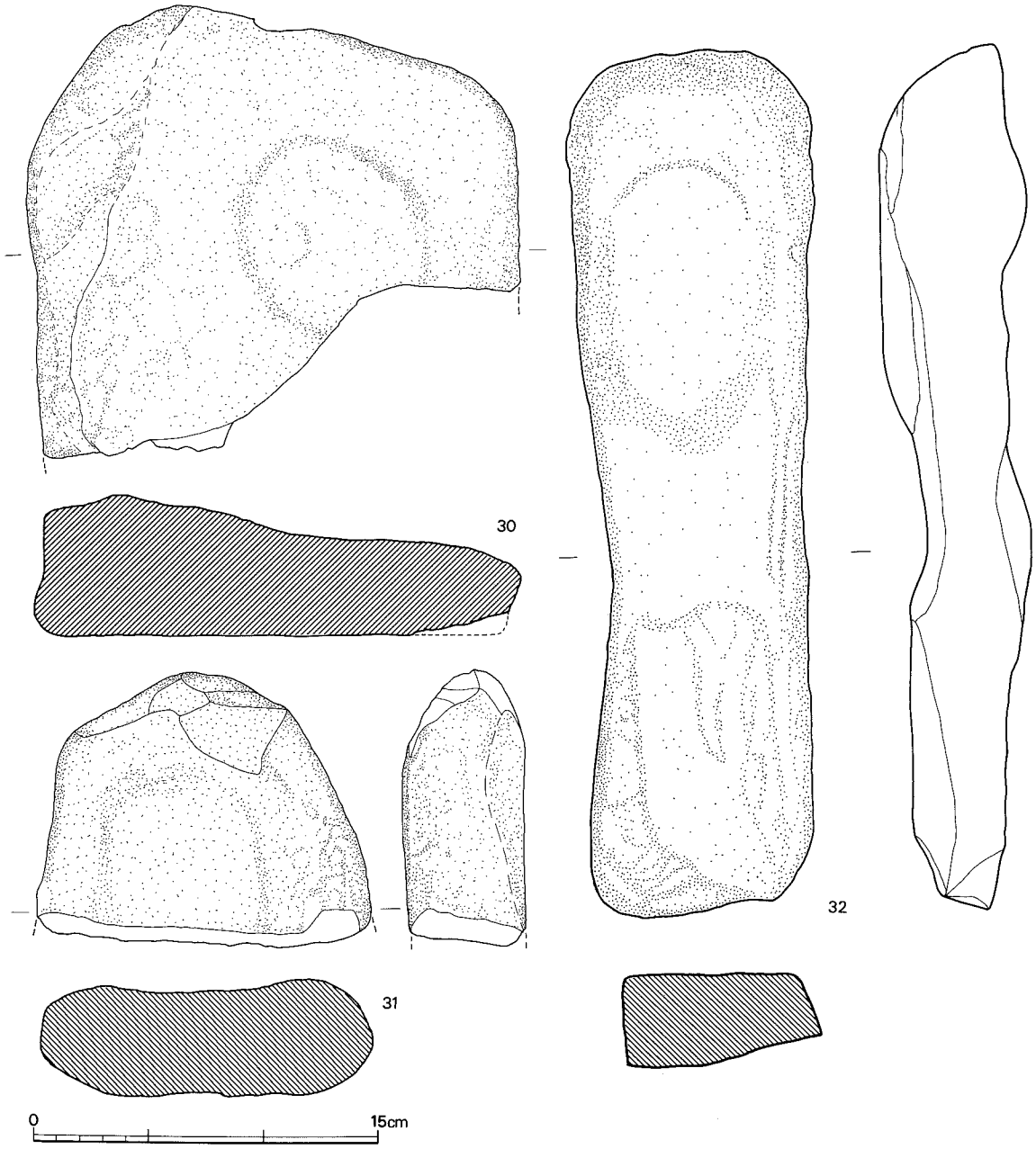
第67図　第34区～40区出土石器(3)(1/3)



第68図　第34区～40区出土石器(4)(1/3)



第69図　第34区～40区出土石器(5)(1/3)



第70図　第34区～40区出土石器(6)(1/3)

ある。(正林)

註

1．高野晋司『宮田A遺跡』「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ」長崎県文化財調査報告書第93集　長崎県教育委員会1989
2．正林　護他「里田原」田平町文化財調査報告書第3集　田平町教育委員会1988
3．橋口達也『九州における縄文と弥生の境』「季刊考古学第23号」有山閣1988
4．西谷　正『朝鮮の環状石斧用穿孔具について』「朝鮮学報」第99・100輯1981

木　製　品

今回の調査区域の旧地形を見ると，平成元年度に調査した１～８区全体・同２年度に調査した中の11～16区・21～23区・34～41区の４地区で浅い沼沢状ないし河川状の低湿地が認められ遺構・遺物はこの低湿地形で認められている。これらの低湿地は，方向は不規則ながら概して東→西方向に緩く流下している。今回の調査で出土した木製品は遺構材を除いて，これらの低湿地形に流入した状態で出土しているが，１～８区・11～16区・34～40区の低湿地に限られている。これらの木製品の破損・消耗の度合いからすれば，ごく近い場所から流入したことが考えられる。

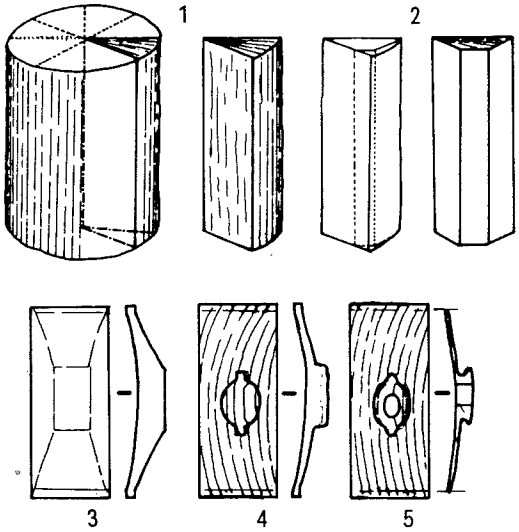
今回の調査区域では良好な弥生時代前期後半と縄文時代晩期の良好な遺物が出土しているが確実に縄文時代晩期に属する木製品はごく一部に限られ，大部分の木製品は弥生時代前期後半に属するものである。

今次調査で出土した木製品は，現在までに里田原遺跡で発掘された木製品（大部分は中期初頭）と比較すると，全体的に数量は少ないが，①農具・②工具・③狩猟具・④日用具・⑤恭敬具・⑥建築材・⑦遺構材などの器種に分けることができる。以下３箇所の低湿地ごとに木製品について説明する。

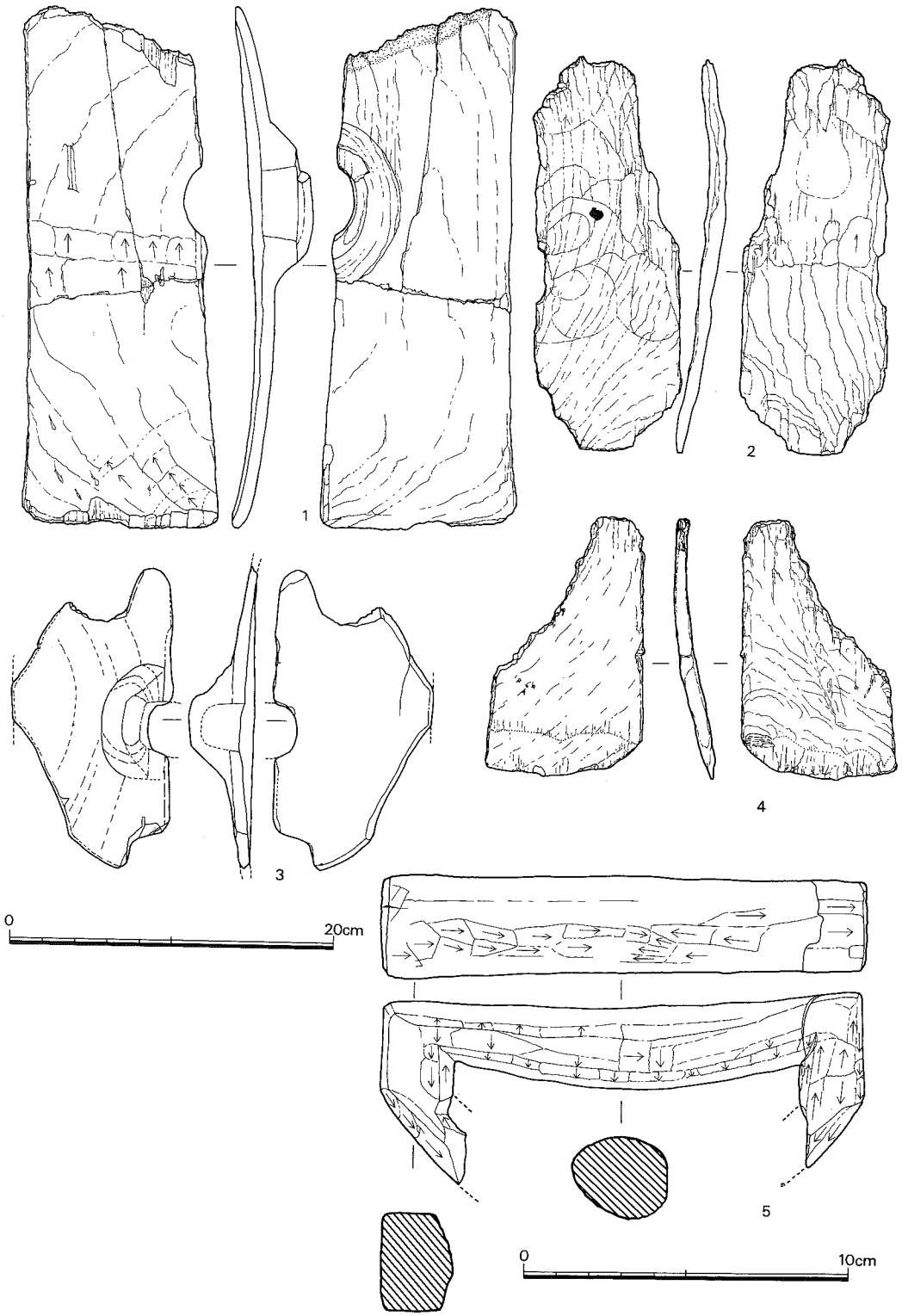
(1)　第１区～第８区出土の木製品

農具：広鍬（第72・73図）

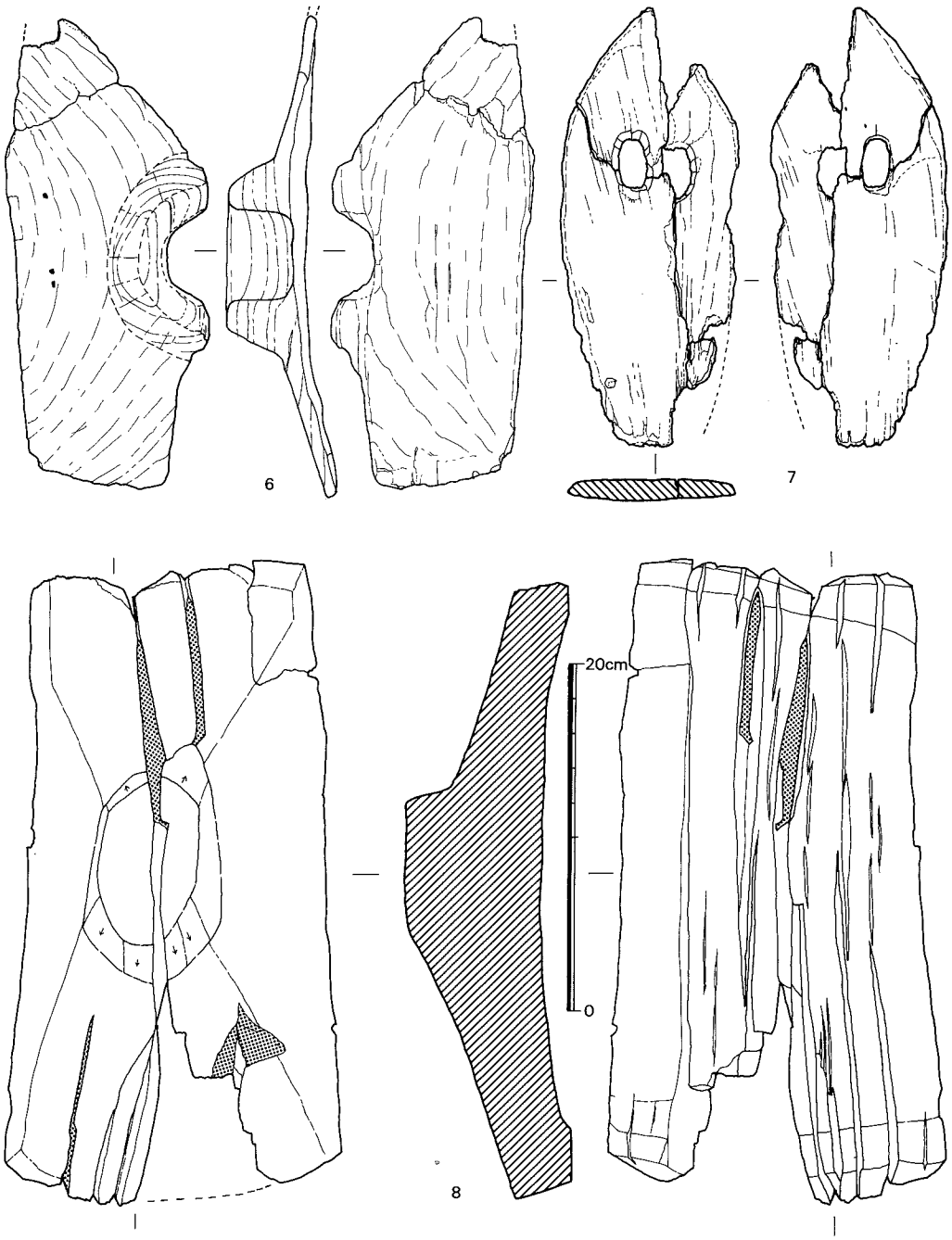
１～４・６・８の６点がある。このうち柄壷の状態が分かるものは１・３・６があり，８は未製品である。樹種はイチイガシと考えられる。この種の広鍬は従前の調査でも最も大量に出土しているもので，成品だけで30点以上があり，未製品を含めれば50点を上まわる。成品の規模は長さ約35cm，幅約15～16cm程度で，反りがある。中央両端に突起をもつ柄壷を凸両側の中央につけ，柄は直角に装着する。１・３・６は柄壷の部分で縦に割れており，２・４は柄壷の部分を失っているが，木取りに



第71図　鍬製作工程模式図



第72図　第Ⅰ区～8区出土農具：広鍬(1/4)・鋤(1/2)



第73図　第Ⅰ区～8区出土農具：広鍬・同未成品・鋤先(1/4)

よって広鍬片であることを知ることができる。従前の里田原遺跡の発掘調査[註1]や比恵遺跡[註2]でもこの形の広鍬が弥生前期後半に出土しているので，北部九州から西北九州にかけてこの種の広鍬製作技術の確立していたことを知ることができる。

農具：鋤（第72図）

5は鋤の握把部分，7は組み合わせ式の鋤先部分である。5は一木から削り出れたもので，左右の幅15cmで削り痕がよく残っている。7は磨耗と損壊が進んでいるが2孔が残っており，柄に緊縛して使用していたことを示している。

農具：掘棒状木製品（第74図）

今次の調査で目立つものに，掘棒状の木製品がある。弥生前期後半に属し，中期初頭の遺物では目立たなかったものである。直径3～4cm程度の栢を材料にし，一端を鉛筆状に尖らせたものである。長さは12のように1m内外のものから9のように130cmのものまであるが，杭と比較して，①直径が細く，②12・14のように紐掛けと考えられる部分を削りこんだものがあり遺構材ではないこと，③材料には繊維が長く強靭な栢が材料に選ばれていること，以上の点からして掘棒状木製品として，杭と区別して報告しておく。

農具：竪杵（第75図）

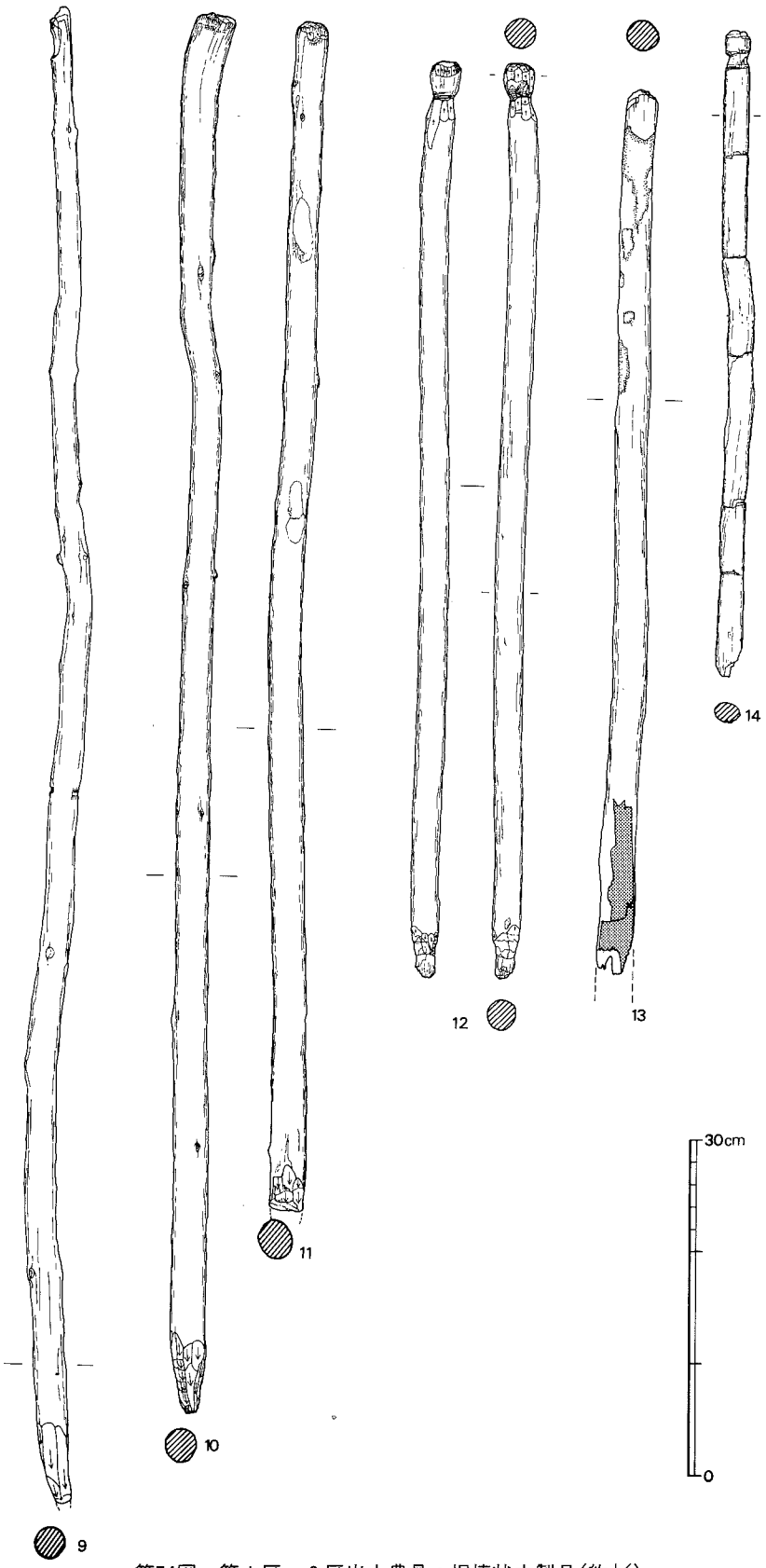
14・15の2点がある。14は握把部に算盤玉状のつくりだしたもので，弥生中期の竪杵とは異なった形状である。直径約7cmで上端は半円状になっている。旧状は長さ130cm程度と推定される。15は握把部分を欠損していて旧状は不明であるが，直径は約7cm，上端はやや平たく整えられている。

工具：手斧の柄（第77図）

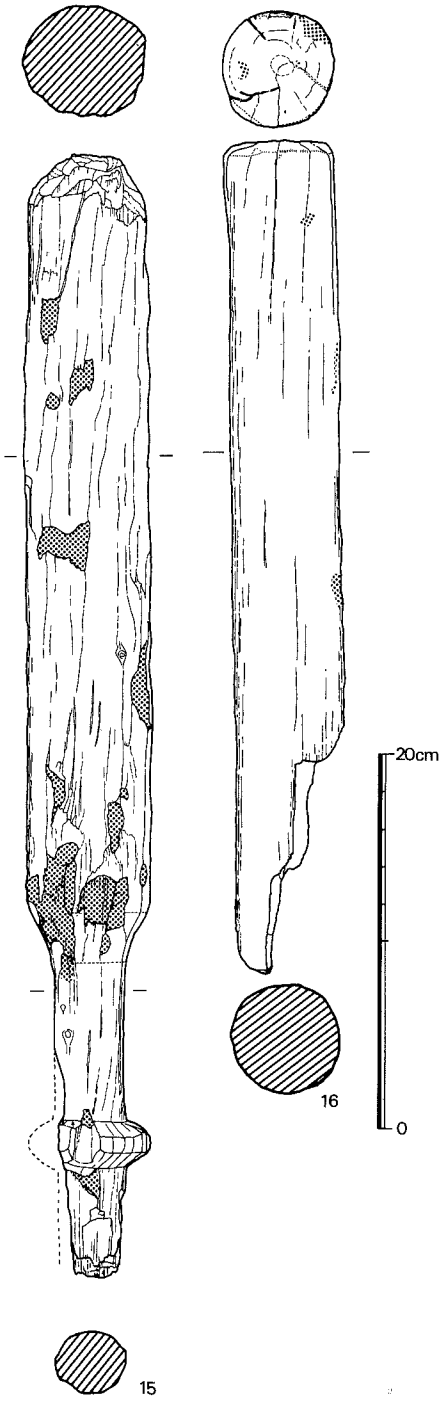
17の一点のみ出土した。握把部分の下半部と台部の石器装着溝部分が欠損していて詳細は定かでないが，①全体に小型である，②台部上面が丹念に削られ反りがつけられていることからして第76図[註3]の手斧のII型であることが確実である。この種類の工具は従前の調査で弥生時代中期初頭の良好な資料が出土しているが，前期後半には工具としての手斧のセットがあったことを示している。

日用具（第78図）

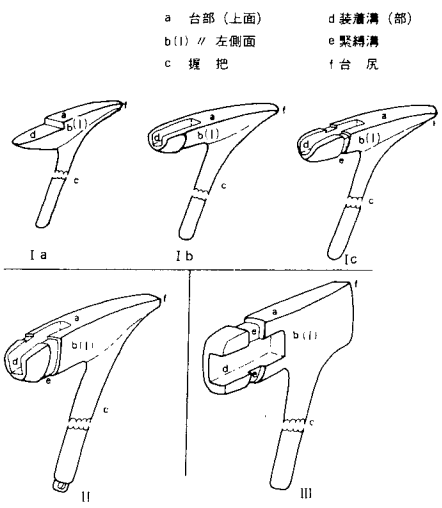
弥生時代前期後半の土器に共伴したもので半割した状態の堅果（ヤシ）製の容器である。口縁部にあたる部分が欠損しているが，一部に削りの痕跡が残り，人工による一孔があることから，容器として使用したことが確実である。底部の孔は人工のものか否か明瞭ではない。底に



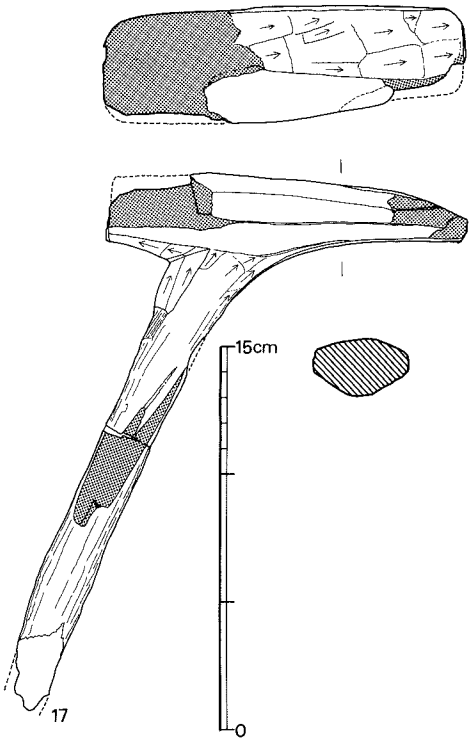
第74図　第Ⅰ区～8区出土農具：掘棒状木製品(約1/6)



第75図　第Ⅰ区～8区出土農具：竪杵(1/4)



第76図　手斧柄の形と各部名称

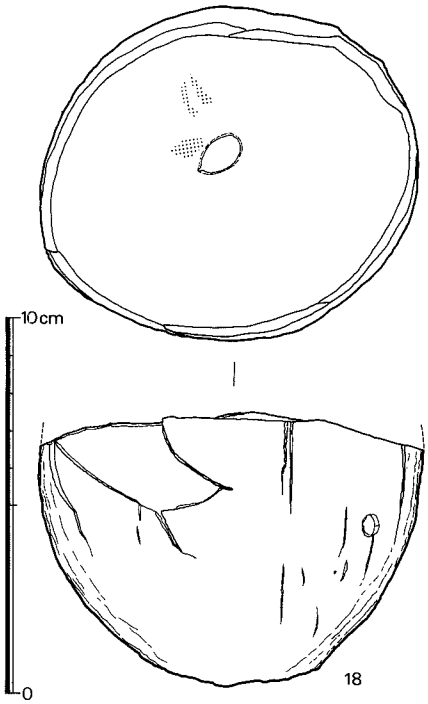


第77図　第Ⅰ区～8区出土工具：手斧柄(1/3)

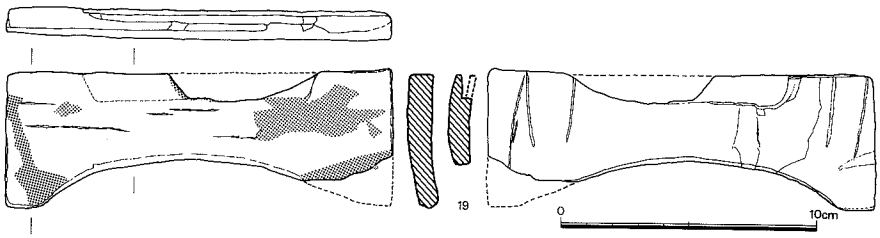
当たる部分に朱の跡があり，顔料をいれた容器であろう。口縁部の長径9.8cm，短径8.2cmでややいびつな形であり，高さ約7.3cmである。

恭敬具・櫛状木製品（第79・80図）

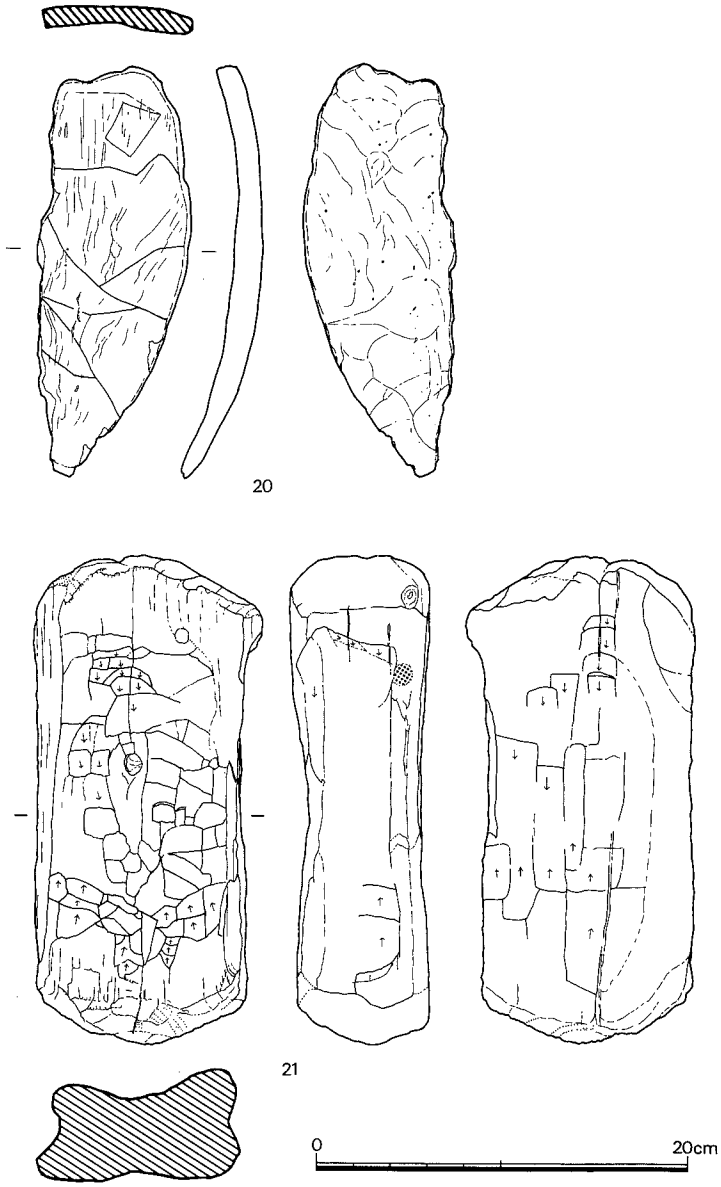
左右15cm・上下約5cm・厚さ約1.2cmで下辺が中凹みの緩い曲線を描いた木製品である。上辺には左右約9cm・深さ1.2cm・幅約3mmの溝がつけられている。全体を側面から見るとわずかな反りがあり，一面には黒漆の跡が残っている。この種の櫛状木製品は里田原遺跡で薄い竹を溝に植えた出土例があり[註4]，本例も薄い竹片を植えていた可能性が強い。20は，樹種は定かでないが堅い樹種を用いた容器片で反りがつけられている。脚の有無は分からないが恭敬具の槽である可能性が強い。21は，上下26cm強・幅約11cm・厚み約6cm強の長方形に近い形状の木製品で，四面を中凹みの状態に削りこんだ容器の未製品と考えられる。従前の出土資料で下駄脚状の低い脚を一木から削りだした槽があり[註5]，本資料は断面図の上下の凹みのいずれかが槽の面で，片方が下駄脚状の支脚になるものと考えられる。



第78図　第Ⅰ区～8区出土日用具：容器(1/2)



第79図　第Ⅰ区～8区出土装身具：櫛(1/3)



第80図　第Ⅰ～8区出土恭敬具：槽と未成品(1/4)

建築材（第81・82図）

梯子・広い板材がある。22は左右の幅約17cmの梯子の末端部分であり，一段の足かけが残り末端は丁寧に仕上げられている。23～27はミカン割りの木取による板材で，幅10～18cm・厚味1.5～3cm程度の厚味があり，針葉樹を材料にしている。両端の残った資料がなく，全体の長さが不明であるが，23のように残存長で130cmを超えるものがあり，建築材の一部と考えられる。27は直径約9cmの樹木とその枝を利用した木製品である。下端を尖らせ，叉状部を短く切りそ

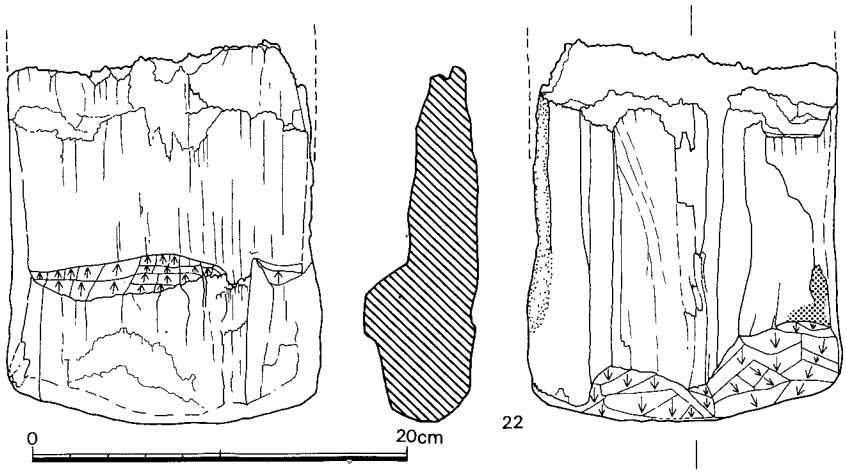
ろえたもので，地表に立てて横木を支えるものと考えられるが，具体的な利用方法は不明である。

用途不明の木製品（第83・84図）

28は，下端が欠損した現存長32cmの木製品である。上半部に造りだしがあり，あたかも「よき」の未成品の観があるが針葉樹が使用されていることからして，「よき」とは考えられず，用途不明の木製品である。29は，残存長47cmで下端で欠損している。長径6cm，短径4.4cmの楕円形の硬質の木材であるが，図の上半部に近い一部分を残して両側に片側する削りこみを行っている。30は全長43cm，直径70cm強の丸太材の両端を短く尖らせている。31は直径約3.5cmの丸木の一端を加工したもので，図の上端部分を欠損している。下端部分の片側は平に削り片側はくびれをつけ，端部は鋭く削り落としている。32・33は樹種は未同定であるが堅い樹種を用いて方形無いし長方形に整形された木製品であり，容器の種類とも考えられるが反りがなく現状では用途不明の木製品である。34は方形の孔を穿孔途中の板状木製品，35は3cm×2cmの楕円形の孔をあけた板状木製品であるが，ともに用途不明である。（正林）

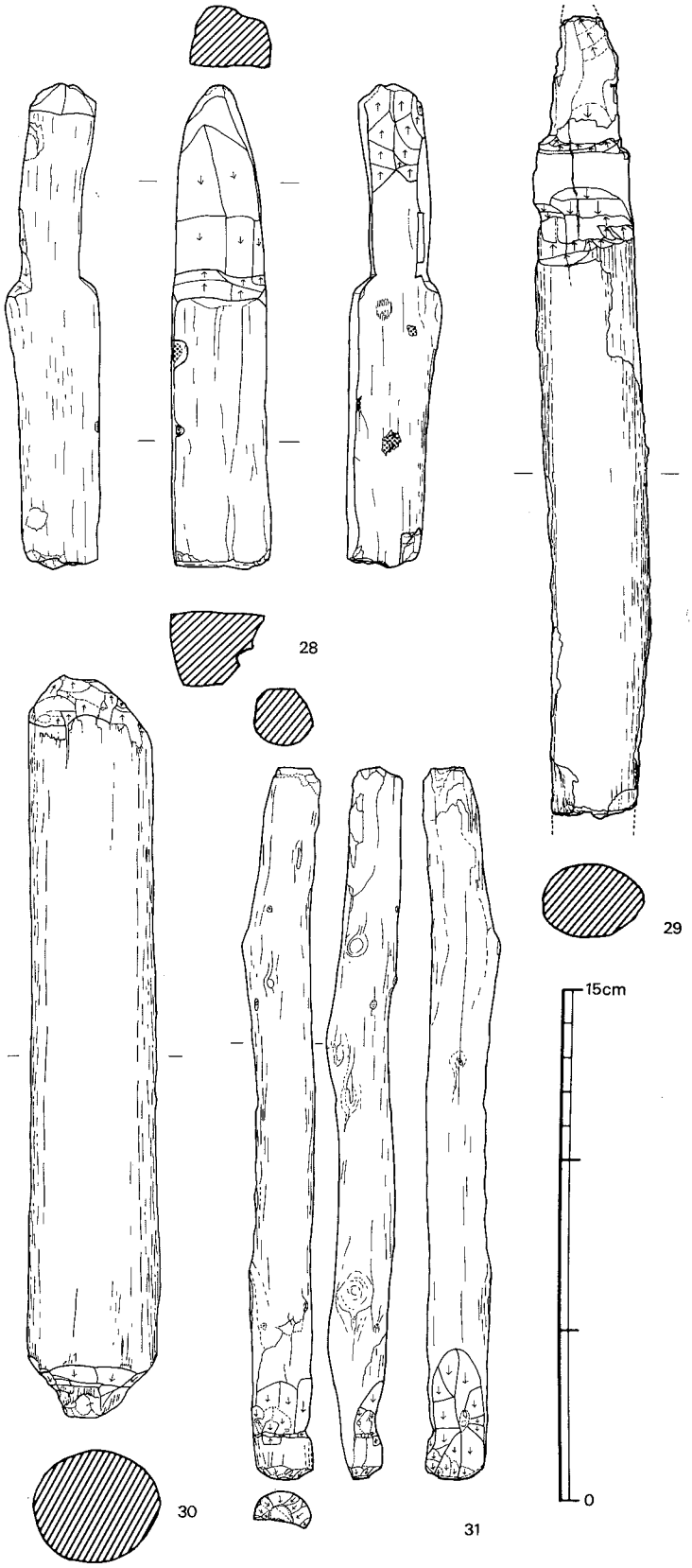
註

1．正林　護他『里田原』田平町文化財調査報告書第3集　田平町教育委員会1988
2．吉留秀敏他『比恵遺跡群10』福岡市文化財調査報告書第255集　福岡市教育委員会1991
3．註1に同じ
4．正林　護他『里田原遺跡　略報II』長崎県文化財調査報告書第18集　長崎県教育委員会1974
5．註1に同じ

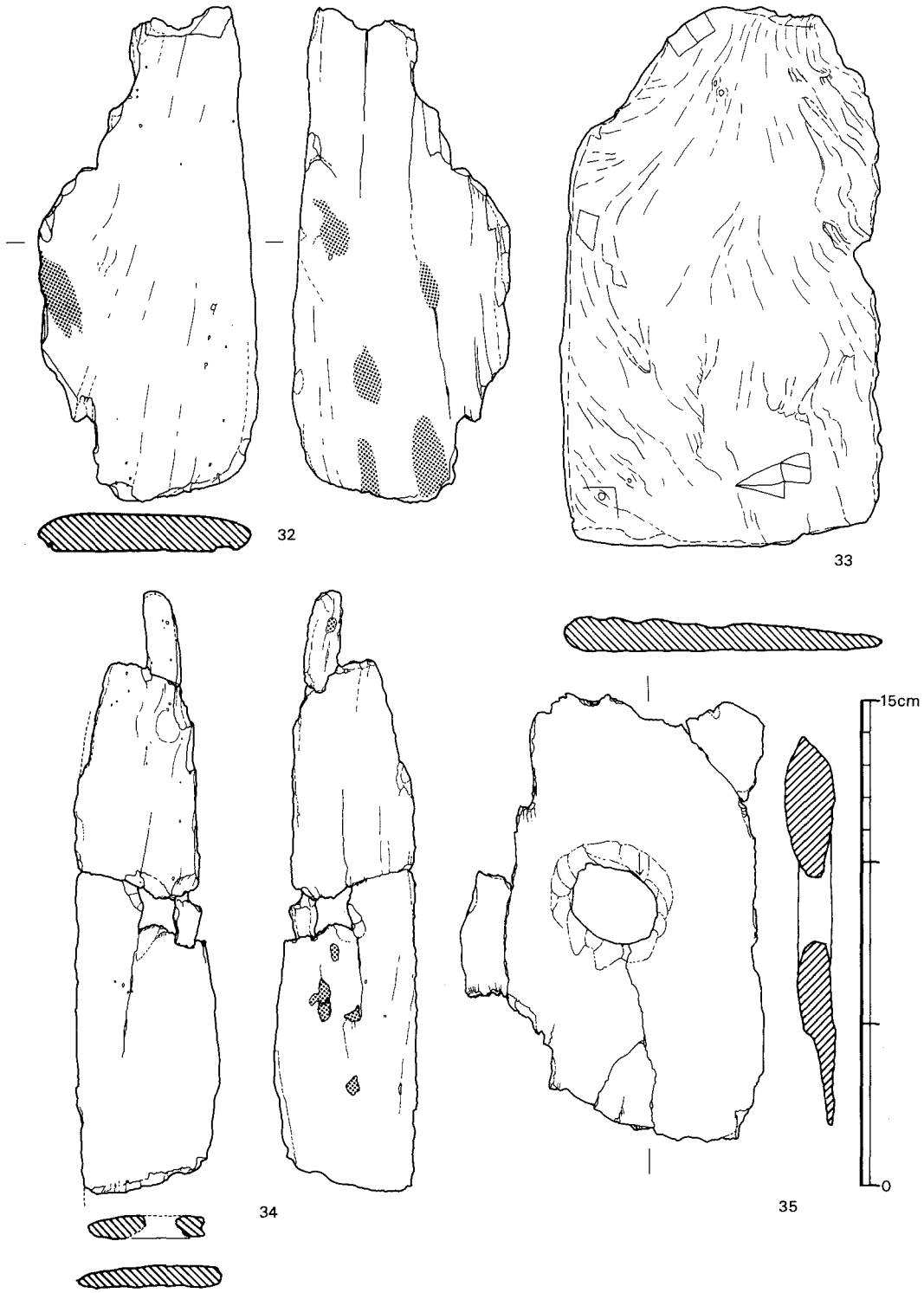


第81図　第Ⅰ区～8区出土建築材：梯子（1/4）

第82図　第Ⅰ区～８区出土建築材：板・又木(1/6)



第83図　第Ⅰ区～8区出土用途不明木器(1/4)



第84図　第Ⅰ区～8区出土用途不明木器(1/4)

恭敬具：陽根状木製品（第86図）

遺構の項で概要に触れた木製品である。低湿地形の岸辺付近に掘りこまれた土壙に直立に近い状態で亀頭状部を上にして埋置されていたものであるが樹種は不明。現存長73cm，最大径35cmである。中央部分は樹皮を残し，樹木のコブの部分は表皮を削り落としている。亀頭状部は樹皮を斜断して剝離され，樹芯を外して尖りぎみに削り出されリアルな表現が見られる。

建築材：根挟みのある柱材（第87図）

現存長188cm，最大幅16cm，根挟み部分の長さ28cmの柱材である。全体に断面は楕円形を呈し，根挟みの部分を太く削り残しているため，やや中膨れの形になっている。根挟みの部分は頑丈で10cmほど太い基部をもっている。根挟み部分は幅が約9cm，深さ約18cmである。根挟み部分の独特の加工と形状は装飾性を感じさせるものがある。今のところ，この根挟み部分が柱の下端にあたるか上端にあたるか不明であるが，折れた部分が太くなっていることを考えると柱上部にあたることを考えておきたい。

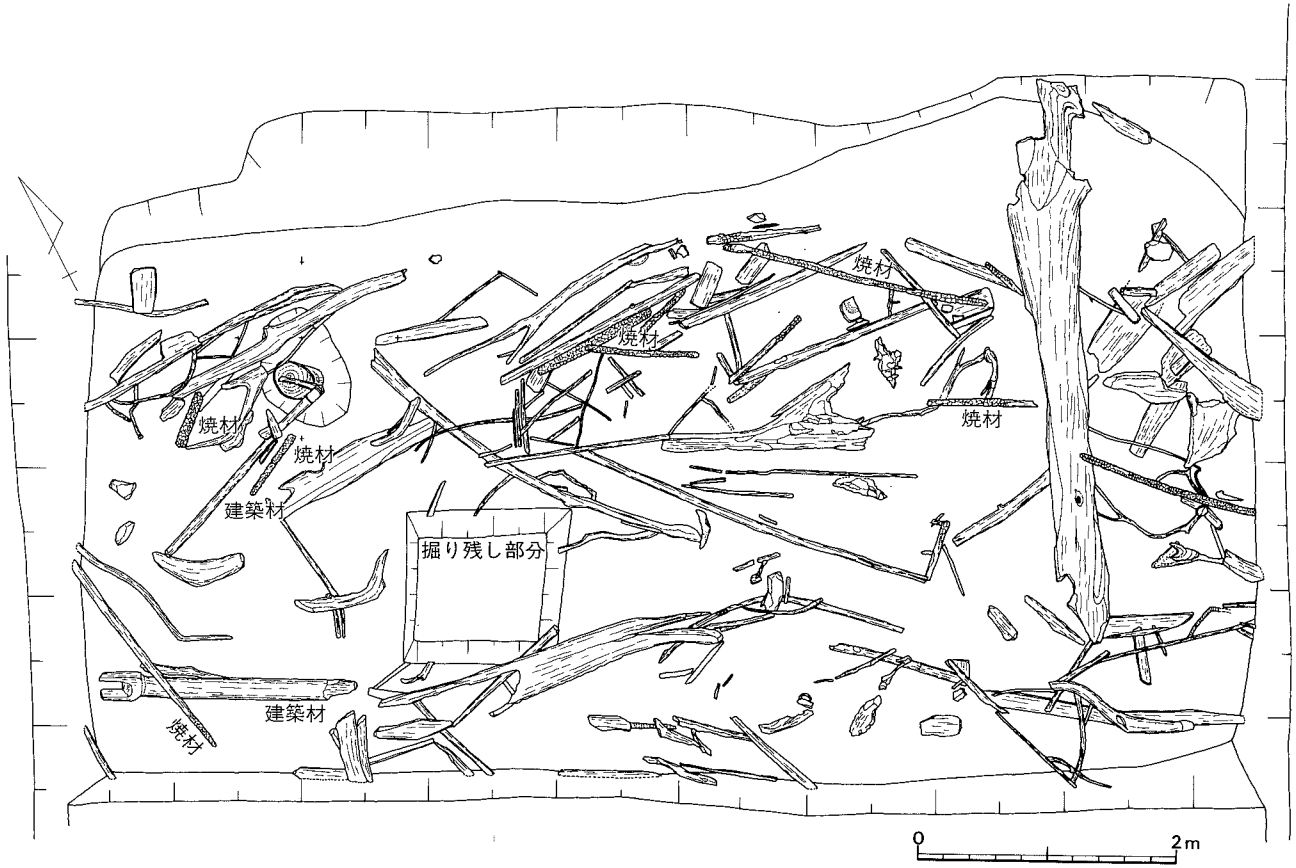
(2) 第34区～第40区出土の木製品（第88図）

農具：鋤

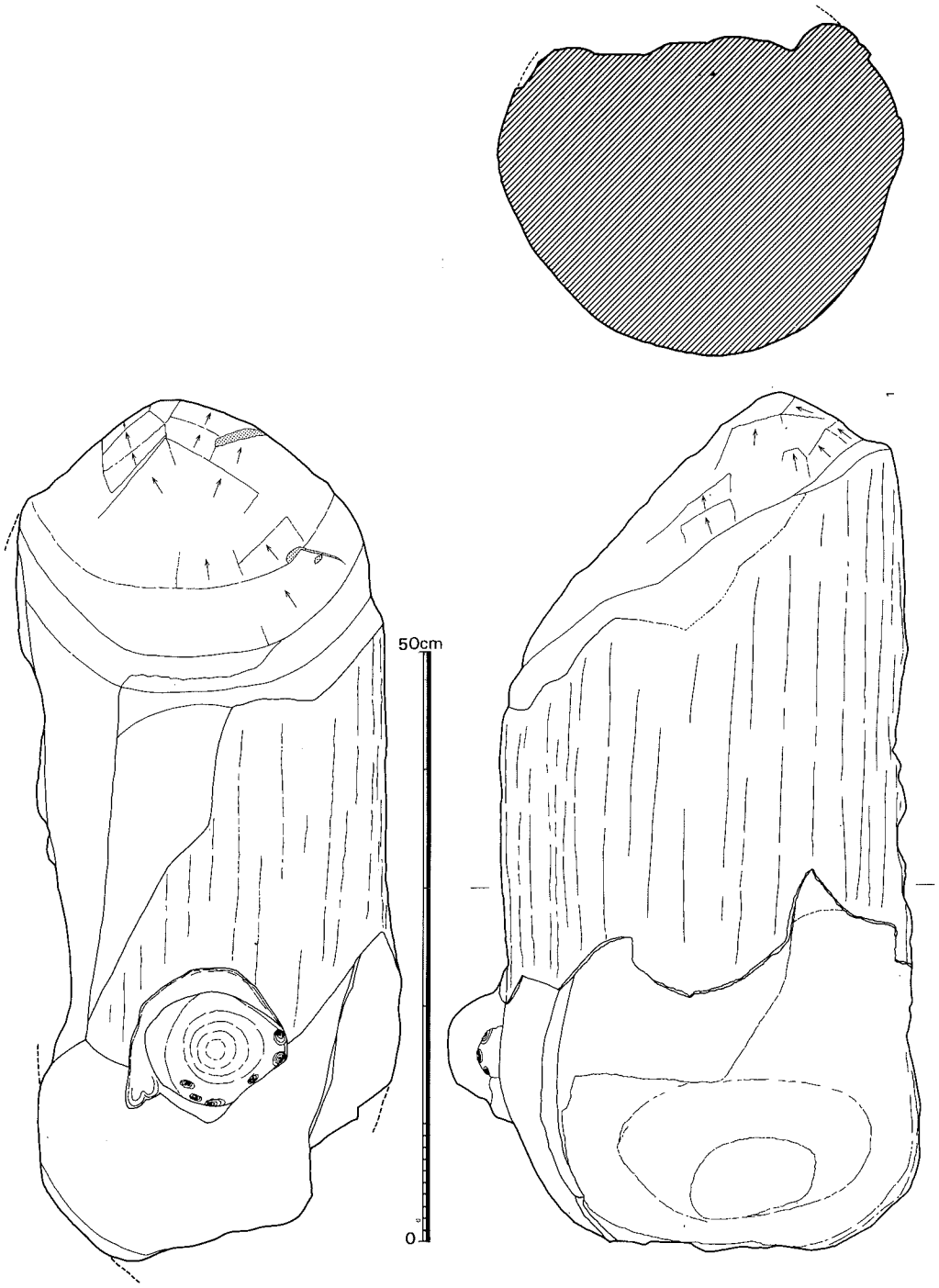
1は今回の調査において唯一点確実に縄文晩期土器に伴った一木造りの木製鋤である。残存在長108cmで鋤先部分は幅8cm・長さ約30cmであるが，復元長は35cmあるらしい。握把部分の形態は不明であるが柄の部分はおおむね断面が楕円形に削られている。鋤先部分の片側はやや反りがつけられ，片側は中央部分を「しのぎ」状削り残している。やや損耗が進んでいるが，かって里田原遺跡で出土した縄文晩期終末の竪杵[註1]とともに注目すべき農具である。

註

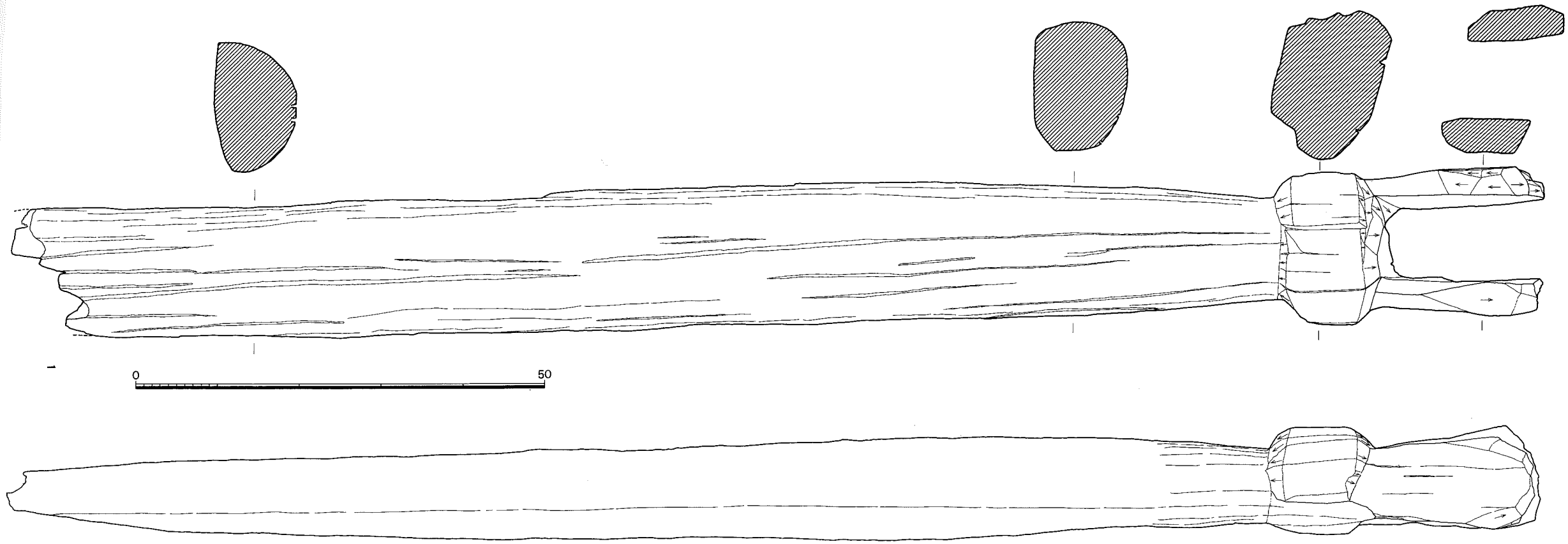
1．安楽　勉他『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告書第21集　長崎県教育委員会1975



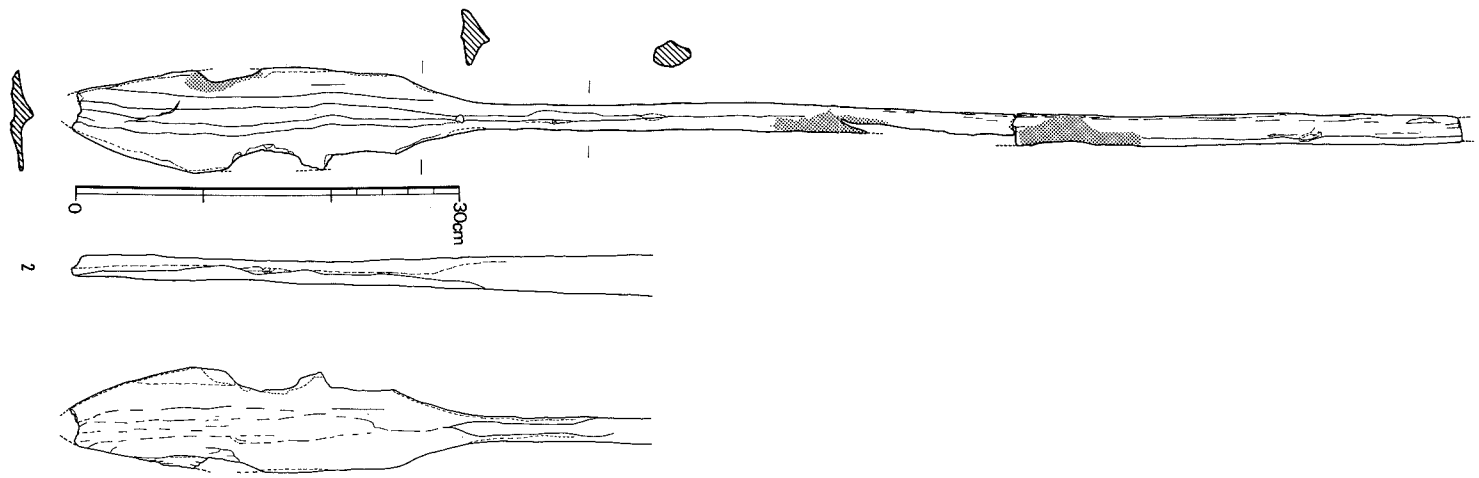
第85図　第14・15区木製品出土状況図(1/60)



第86図　第14区出土陽根状木製品（1/6）



第87図　第14・15区出土建築材：根ばさみのある柱材(1/6)



第88図　第34区～40区出土農具：鋤(1/6)

V. 里田原遺跡出土土器の赤色塗彩について

福岡市埋蔵文化財センター　本田光子
㈶京都市埋蔵文化財研究所　岡田文男
宮内庁正倉院事務所　成瀬正和

赤色塗彩が認められる土器片4点について，顕微鏡観察とX線分析を行い，赤色塗彩の状態，特徴，赤色顔料の種類等を調べた。試料の一覧と分析結果および推定される赤色顔料の種類を第1表に示す。

試　　料

No.1～3は焼成前塗彩であるが，No 1とNo 2，3では表面の赤色の状態が異なる。前者は塗彩が器面に密着し透明感があるが，後者はぶ厚く透明感がない。これらに対してNo 4は焼成後塗彩であり，赤色部分は所々剝げている。

顕微鏡観察

土器片をそのままで反射光により40～100倍で検鏡し，赤色顔料の有無，その種類，付着残存状態を観察した。赤色部分から針先に付く程度の量を採取しプレパラートを作成し，透過光・反射光40～400倍で検鏡した。また，土器片の破断面より数ミリ厚さの細片を削り取り，これをエポキシ樹脂に封入し，研磨により厚さ数ミクロンmの薄片に仕上げたものを検鏡した(写真)。観察結果は以下の通りである。

No.1．土器表面の表層付近の観察では表面付近に2層の胎土の違う土が塗布されている。土器表面がやや褐色に見えるのは表層のごく薄い褐色の土が塗布されたことによるものである。表層の赤色層の厚さは60ミクロンm。赤色部分にはベンガラ粒子は非常にわずかで，大半はいわゆる広義のベンガラと呼んでいる赤い土砂の粒子からなる。

No.2．土器断面の観察で表層に赤褐色の層を認める。赤色層はベンガラ粒子から成るが，他に繊維様物質が多く認められる。厚さ110ミクロンm。

No.3．土器表面に細かくひび割れた赤褐色層を認める。断面観察では表層に茶褐色で不純物の少ない均質のベンガラ粒子からなる厚い層（650ミクロンm）を認める。

No.4．土器の表面に赤色の塗彩が見られる。土器表面の観察では塗彩は非常に薄く（厚さ10ミクロンm)，塗彩部分にパイプ状粒子を確認できる。この塗彩は木製漆器の漆塗膜に見られる層構造に類似しており，パイプ状のベンガラ粒子を含むことから，漆を塗布したものと思われる。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。土器片そのものを測定試料

とした。理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置を用い，X線管球；クロム対陰極，印加電圧；40 kV,印加電流；20mA,分光結晶；フッ化リチウム，検出器；シンチレーション計数管，ゴニオメーター走査範囲（2 θ）；10～65°の条件で行った。

蛍光X線分析では水銀および鉄の有無のみ表中に記した。赤色顔料の主成分元素としては，鉄のみが検出された。この他，マンガン，ストロンチウム，ルビジウムなどの元素が検出されるが，それらはみな主として胎土部分に由来するものなので，省略した。但し土器資料では鉄は胎土部分にも必ず含まれ，採取を行わない今回の分析では赤色顔料由来のものとの区別は困難である。

X 線 回 折

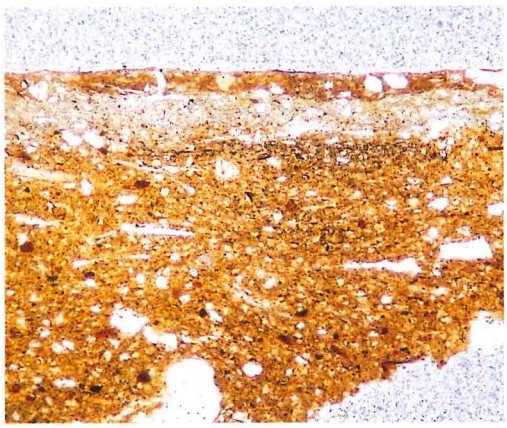
赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。土器片そのものを測定試料とした。理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置を用い，X線管球；クロム対陰極，フィルター；バナジウム，印加電圧；25kV，印加電流；10mA，検出器；シンチレーション計数管，発散および受光側スリット；0.34°，照射野制限マスク（通路幅）；4㎜，ゴニオメーター走査範囲（2 θ）；30～66°の条件で行った。

X線回析では辰砂（Cinnabar 赤色硫化水銀），赤鉄鉱（Hematite 酸化第二鉄）の有無のみについて記した。赤色顔料の主成分鉱物としては2，3，4に赤鉄鉱を同定した。この他，石英，長石などが確認されたが，それは主として胎土部分に由来するものなので省略している。

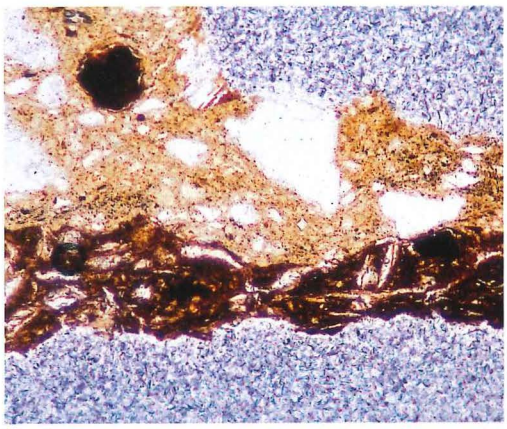
ま と め

土器の赤色塗彩技法は大きく焼成前塗彩と焼成後塗彩に分かれる。焼成前塗彩で得られる赤色は土器の場合酸化鉄によるものであり，今回のNo 1～3はベンガラ（酸化第二鉄）による赤色である。但し，No 1については赤色顔料としてのベンガラを使用したとは考えにくい。いわゆるスリップをかけ赤く焼き上げたものと思われる。No 2，3は塗料としてベンガラを塗り，焼いたものであろう。No 4は焼成後の土器に赤色顔料としてベンガラを塗彩している。

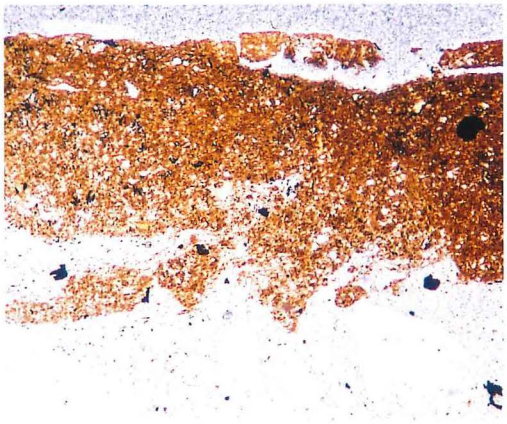
縄文土器の赤色塗彩は一般に焼成後に行われる。晩期末から弥生時代前期には，今回の資料のように大きく3通りの赤色塗彩技法が認められる。*焼成後塗彩の場合は赤色顔料の種類がベンガラと朱の2種となる。従来「丹塗り」あるいは「丹塗磨研」と呼んできた土器の赤色塗彩技法についてはさらに多数の資料を調査する必要があろう。またこの時期の焼成後塗彩の「丹塗り」土器に用いられた赤色顔料については，漆製品に用いられた赤色顔料の種類**も含めて分析資料の増加が望まれる。



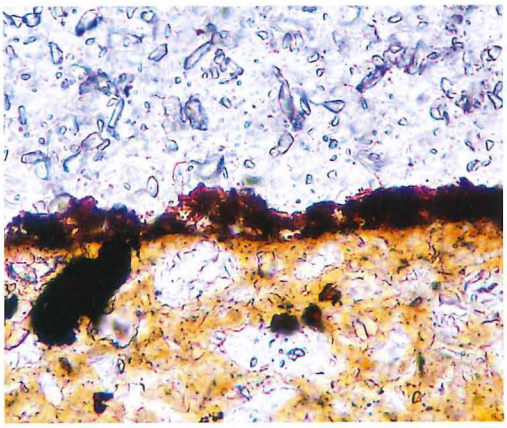
H R P 380　4 × 5



H R P 381



H R P 382　4 × 5



H R P 383　4 × 5

*

成瀬正和・本田光子・岡田文男（1991）「彩文土器木胎漆器の赤色顔料について」『比恵遺跡群10』福岡市埋蔵文化財調査報告書255

本田光子・成瀬正和（1992）「土器の赤色塗彩に用いられた赤色顔料について」『比恵遺跡群11』福岡市埋蔵文化財調査報告書

岡田文男（1992）「福岡市内出土の縄文晩期から古墳時代にかけて漆器の漆塗膜調査」『比恵遺跡群11』福岡市埋蔵文化財調査報告書

本田光子・成瀬正和（1992）「土器の赤色塗彩に用いられた赤色顔料について」『脇山A遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書

本田光子・成瀬正和（1992）「赤色顔料について」『那珂遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書

**

里田原遺跡出土漆器（脚付杯，鉢形容器）の漆塗膜層（『里田原』田平町文化財調査報告書3）は比恵遺跡出土漆器（脚付杯）のそれと，塗り重ねの状態・赤色顔料の種類（ベンガラ（P））等が酷似している。

No.	試　料	蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類
		鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂		
1	壺形土器	＋	－	?	－	ベンガラ(広)	ベンガラ(広)
2	浅　鉢	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ
3	浅　鉢	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ
4	小型壺形土器	＋	－	＋	－	ベンガラ(P)	ベンガラ(P)

＋は検出，－は未検出を表す。(広)は広義のベンガラ，(P)はパイプ状粒子

Ⅵ まとめ

里田原遺跡の調査は，昭和47年の第１次調査に始まり今次の調査で26次を数えるが，現在も範囲確認調査や緊急調査が継続され新しい資料が得られている。

これまでの調査で判明したことは，地形的には面積40haに及ぶ盆地状の水田地域に遺跡の拡がりが見られ，標高では16mから19mに達している。また水田下は複雑な様相を呈し，遺物の出土する地点は殆んど泥炭層が下部に堆積した底湿地型である。水田の現地形は平垣面で，東側の山系から流れ出た水は北側の一関川と南側の新川に集まり，西側に位置し，南から北へ流れる釜田川に合流し釜田湾に注いでいる。

これに対して旧地形は，東から西への流路こそ変化はないが，試掘調査で得られた結果を総合してみると，かなりの小さな流路が複雑にからみ合い，微高地も処々に存在していたことが窺われるのである。この流路は，現河道に対して旧河道と呼ばれるものである。全体に河道名が付されているのではなく，今回は便宜上第１～第４河道と呼称したにすぎない。調査区は南北を縦断する形で土層の観察が出来た訳であるが，それによれば地山層にあたる緑褐色砂利層は第１河道が高く，次いで第３，第４河道となり第２河道が１番低くなっている。このことは現水田面の地形と符号する所もあり，また詳細な検討の余地がある。

支石墓は現在３基程が残っているが，これは周辺の調査でも微高地とはっきりしている場所を選んでいる。なおまだ他にも数基の支石墓と考えられる遺構が存在していたが，破壊されたと伝えられている。里田原遺跡の支石墓については，まだ調査は成されていないが第１号支石墓については撑石の下部は短い形の箱式石棺の構造である。

盆地状に営まれた時期的な背景を大観して見ると，今回調査地区は全体的に縄文晩期終末から弥生前期中頃までが主体を占め，南側の一関川に近くなる程弥生前期から中期頃までが中心となる。また東側の第２・３号支石墓周辺では古墳時代の遺物，またそれより南側寄りでは押型文土器なども出土しており，永い期間生活の場として営まれていたことがわかる。

出土土器の特徴は，山の寺期から夜臼期にかけての甕・壺・鉢がセット関係で出土している。この土器の組成から見る限り福岡曲り田遺跡[註1]に云う晩期Ⅳ式から曲り田古式および曲り田新式の範疇に入るもので，菜畑遺跡出土の晩期土器群も同様である。さらに最近では，佐世保市四反田遺跡[註2]の調査でも同様の資料が得られているほか，支石墓も確認されている。

これらの土器に伴う半島系の土器として小型丹塗り磨研土器が出土したが，この土器はこれまで各地域から出土しているものと比較しても極めて将来品と考えられるものである。因に本遺跡では，朝鮮系無文土器の口縁が１点だけ弥生時代の層から確認されている。

弥生時代の土器は板付Ⅱ式を主体として見られ，下限は城ノ越式土器どまりで，固体数も一番量的に多くなることや，中心部が南側へ移動していることは，水田耕作と深くかかわっていることも予想される。

旧河道とされる流路には夥しい限りの自然木や材木片などが，流れに沿った方向で観察され，その中から木製品も出土している。1～8区では弥生前期に属する木製品が殆んどであったが，11～14区においてはやはり同時期と考えられる建築材が出土している。しかもこの材は端部が叉状を呈し，柱になる部分はわずかながらふくらみをもたせるように加工されていた。また周辺には火災に遭ったと考えられる焼け材が数本あり，弥生前期における建築技術が高度な水準を保っていたことを窺せた。

遺構では11区における男性性器を形どり地山層に埋置した，特異な状況が検出された。旧河道中に埋置された背景は不明な点が多いが，今日の陰陽的な単なる信仰上の理由からではないように思われる。

36～40区にかけて最下層から出土した木製品の鋤は，刻目突帯文土器に伴うものであり，これまで類例のないものである。昭和48年の第8次調査[註3]の際に出土した竪杵があるが，この時の供伴した遺物にやはり刻目突帯文土器があり，今回の調査で第4旧河道に含まれることが確認された。

石器は，大陸系の石器の他に扁平打製石斧が出土している。この種の石斧もこの第4旧河道からだけであり，現在のところ他の河道に及んでいない。

これまでの里田原遺跡の調査では，木製品をはじめとして貴重な遺物の発見が相次いだが，一番発見が期待されていた水田跡の検出もなされていない。また建築材などが確認されながら住居跡も未確認であり，今後の調査はこの二つに絞って追求することが必要である。

これまでは，あまりにも遺物の出土する底湿地部分に目を向けていたきらいがあるが，今後は微高地の部分についても見直す必要がある。(安楽)

註

1　橋口達也他，『石崎曲り田遺跡』今宿パイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集1985

2　久村貞男『四反田遺跡発掘調査概報』佐世保市教育委員会1992

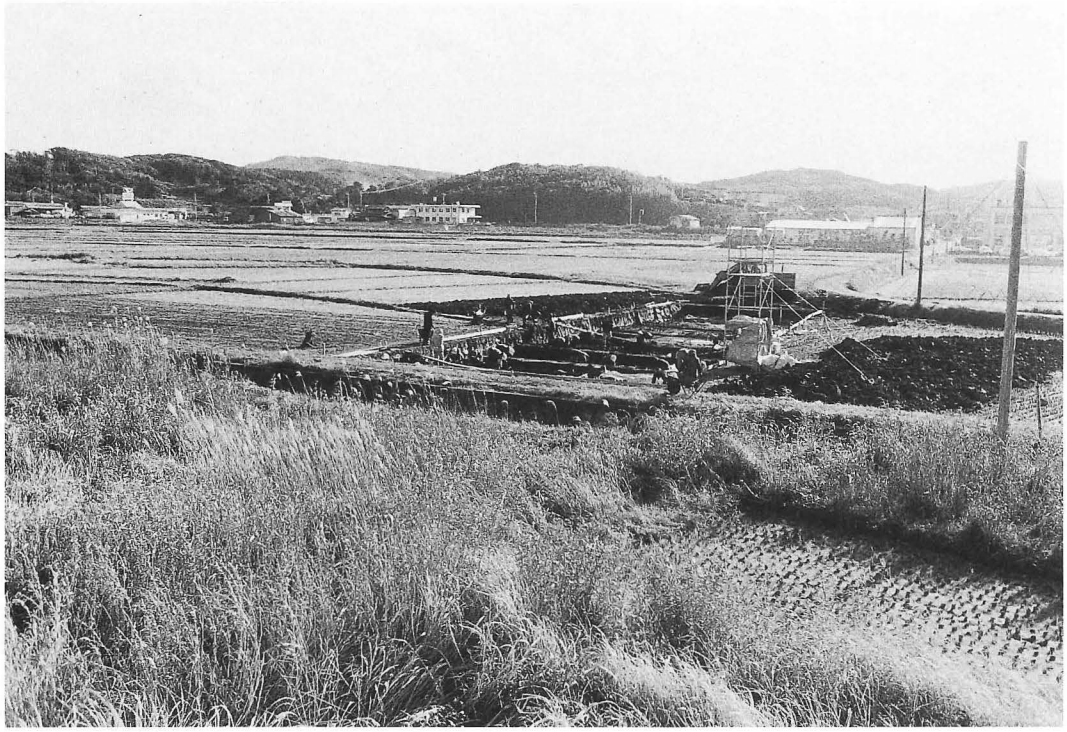
3　安楽勉他　『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告第21集1975

図　　版

遺跡遠景（東から）

第１区～８区近景

図版　2



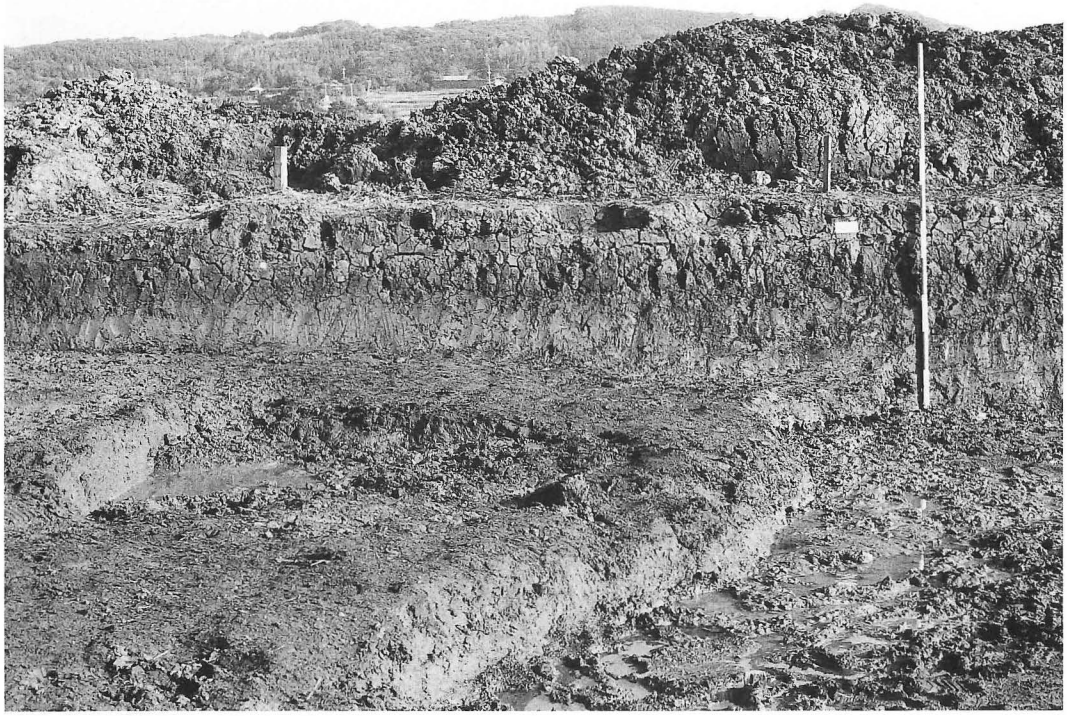
第１～８調査区（北から）

第36調査区から北側を望む

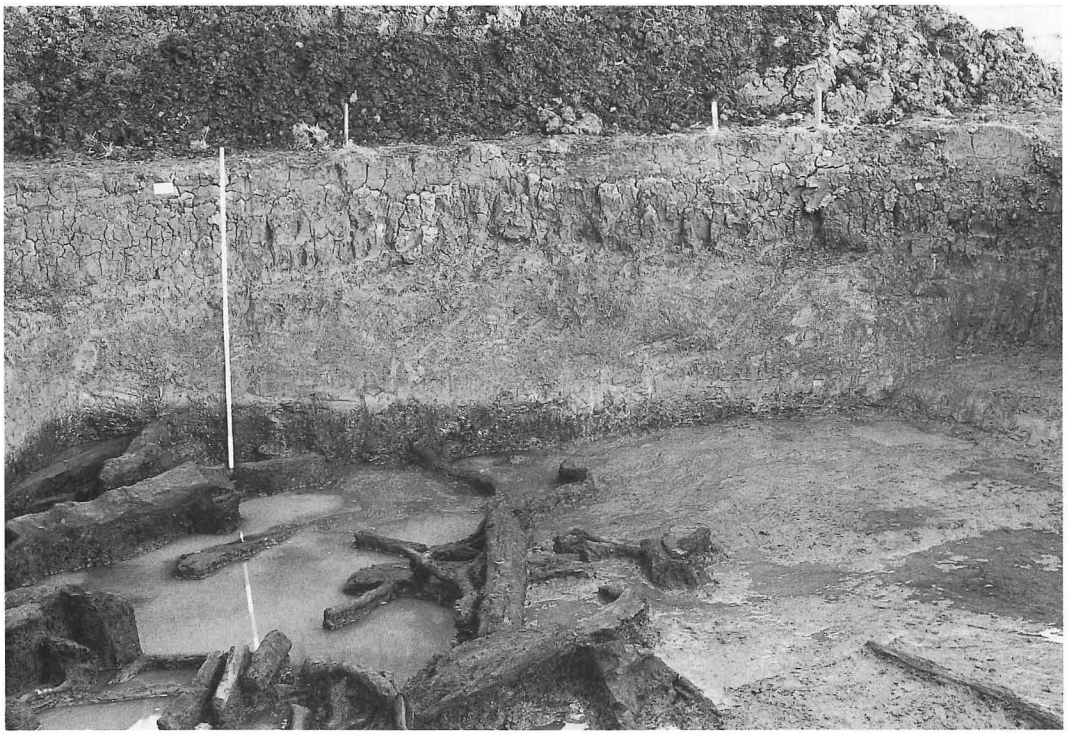
第 3 区東側土層

第 6 区東側土層

図版　4



第11・12区東側土層



第14・15・16区東側土層

第34・35区西側土層

第40区北側土層

図版　6

第３区遺構・遺物出土状況

第 3 区検出の貯蔵穴

第36区検出の貯蔵穴

梯子状木器出土状況

土器出土状況

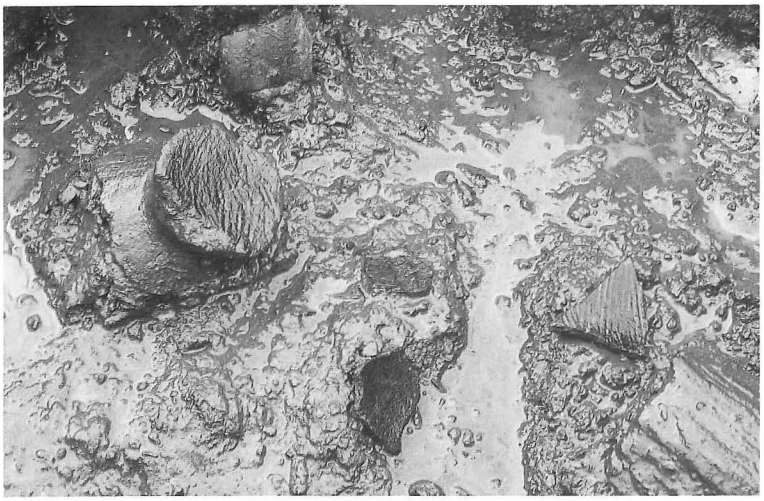
第Ⅰ区～8区遺物出土状況

第 6 区遺物出土状況

第 2 区遺物出土状況

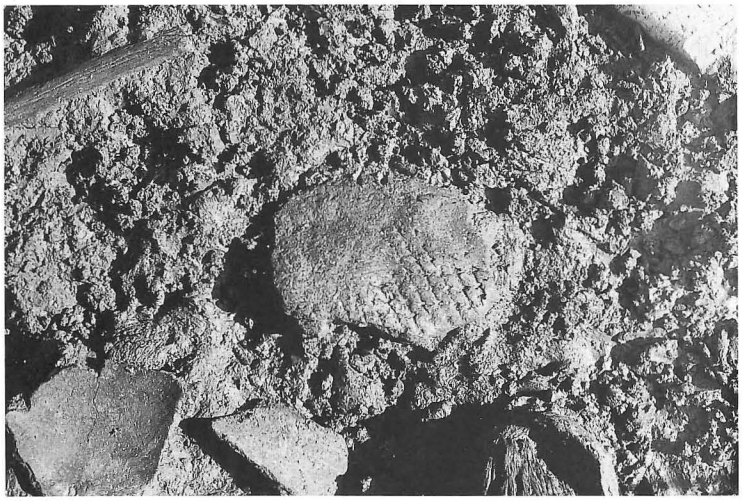
第 1 区～ 8 区遺物出土状況

図版　10



夜臼式土器

高坏土器



組織痕土器

第１区～８区遺物出土状況

第2区遺物出土状況

建築材出土状況

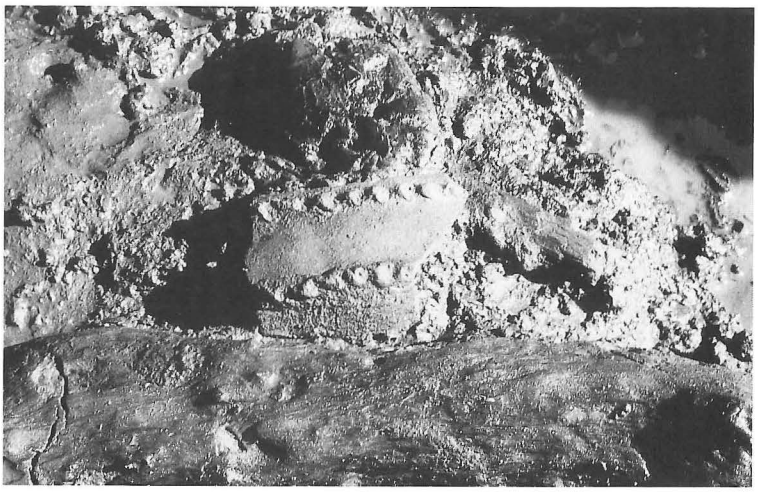
図版　12

第35・36区遺物出土状況

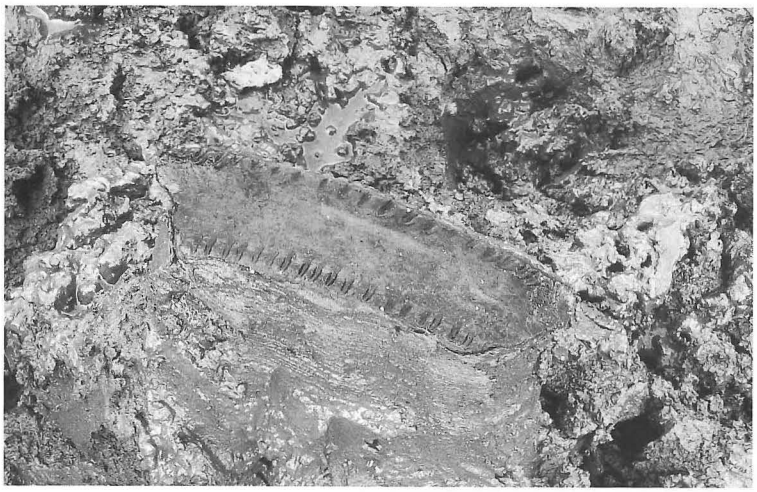
第36区遺物出土状況

第14区検出の陽根状木製品埋置遺構と木製品

図版　14



晩期土器

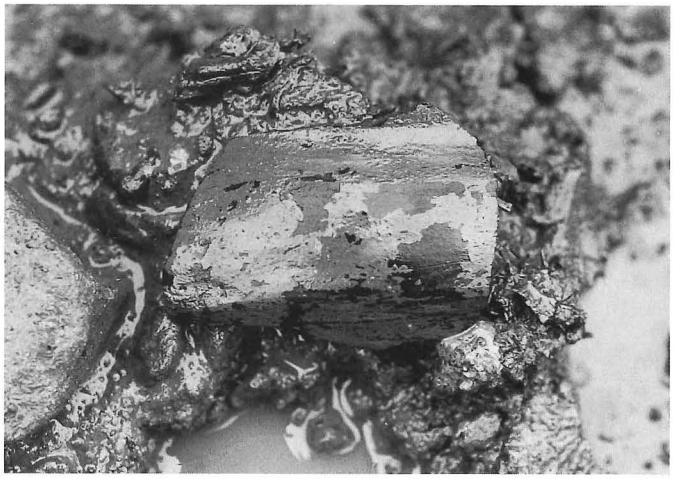


弥生土器

晩期土器および石器

遺物出土状況

土器および石器出土状況



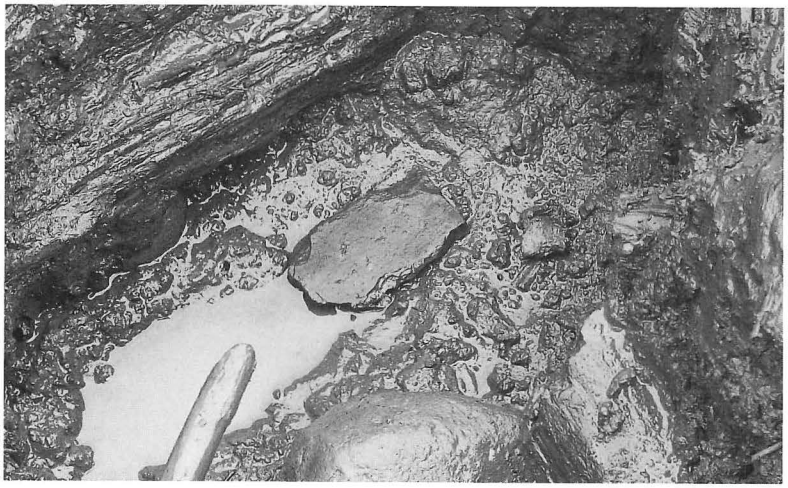
丹塗り浅鉢

紡錘車

遺物出土状況

図版　16

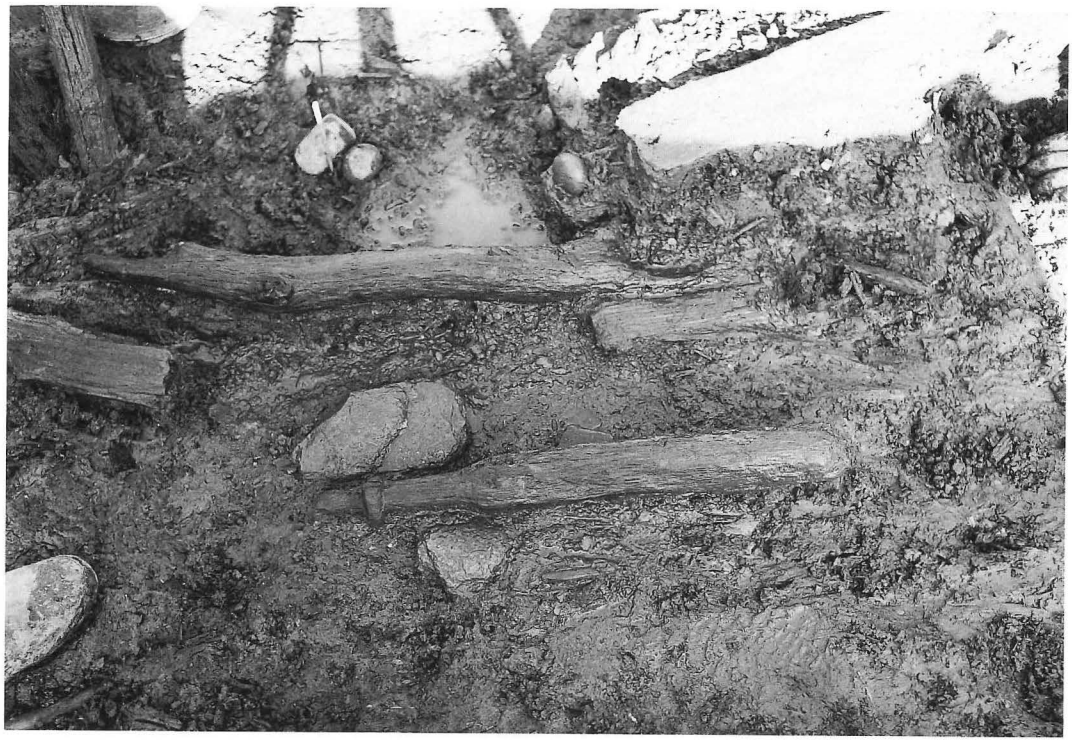
土器および石器出土状況



扁平打製石器

扁平打製石器

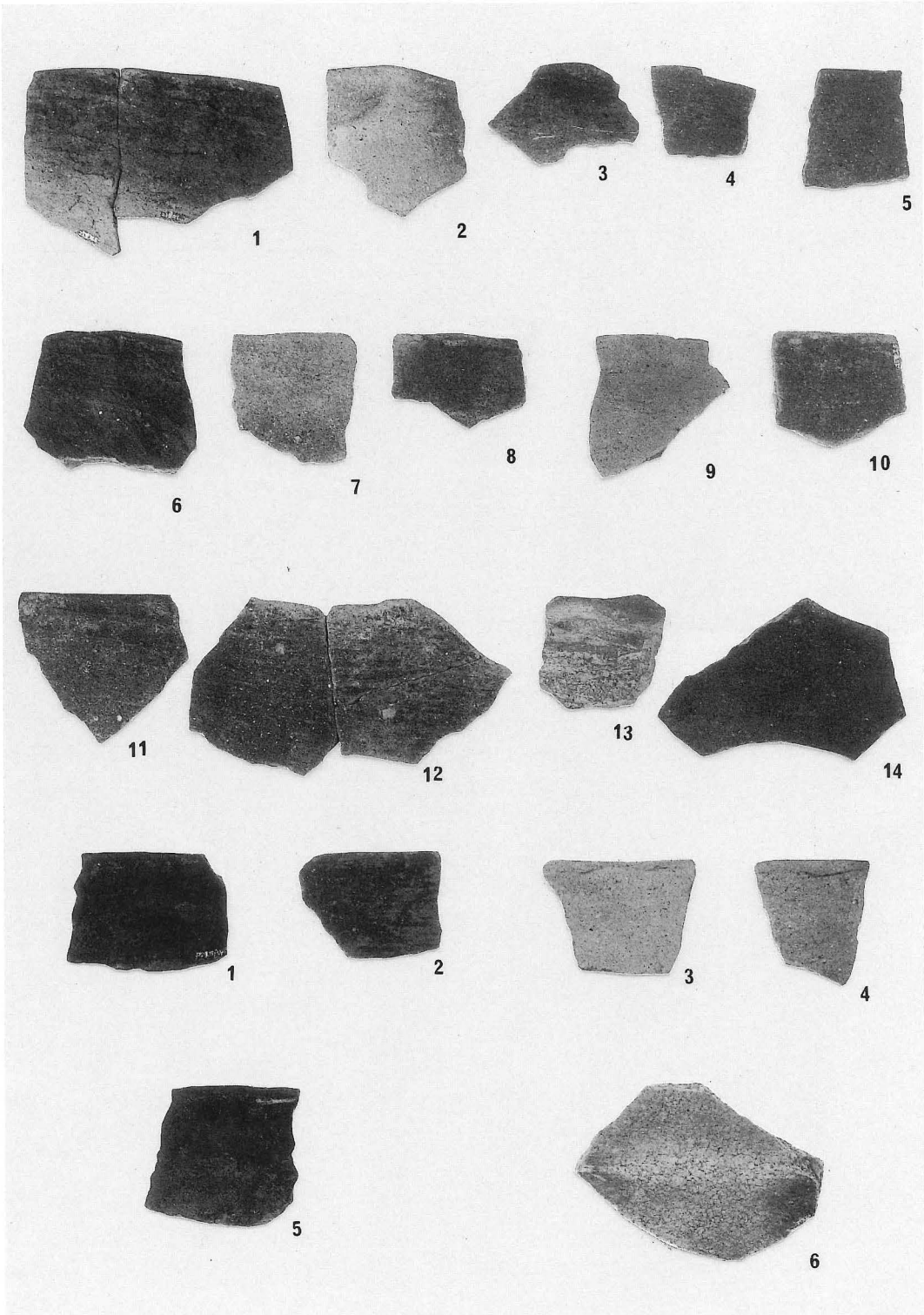
遺物出土状況



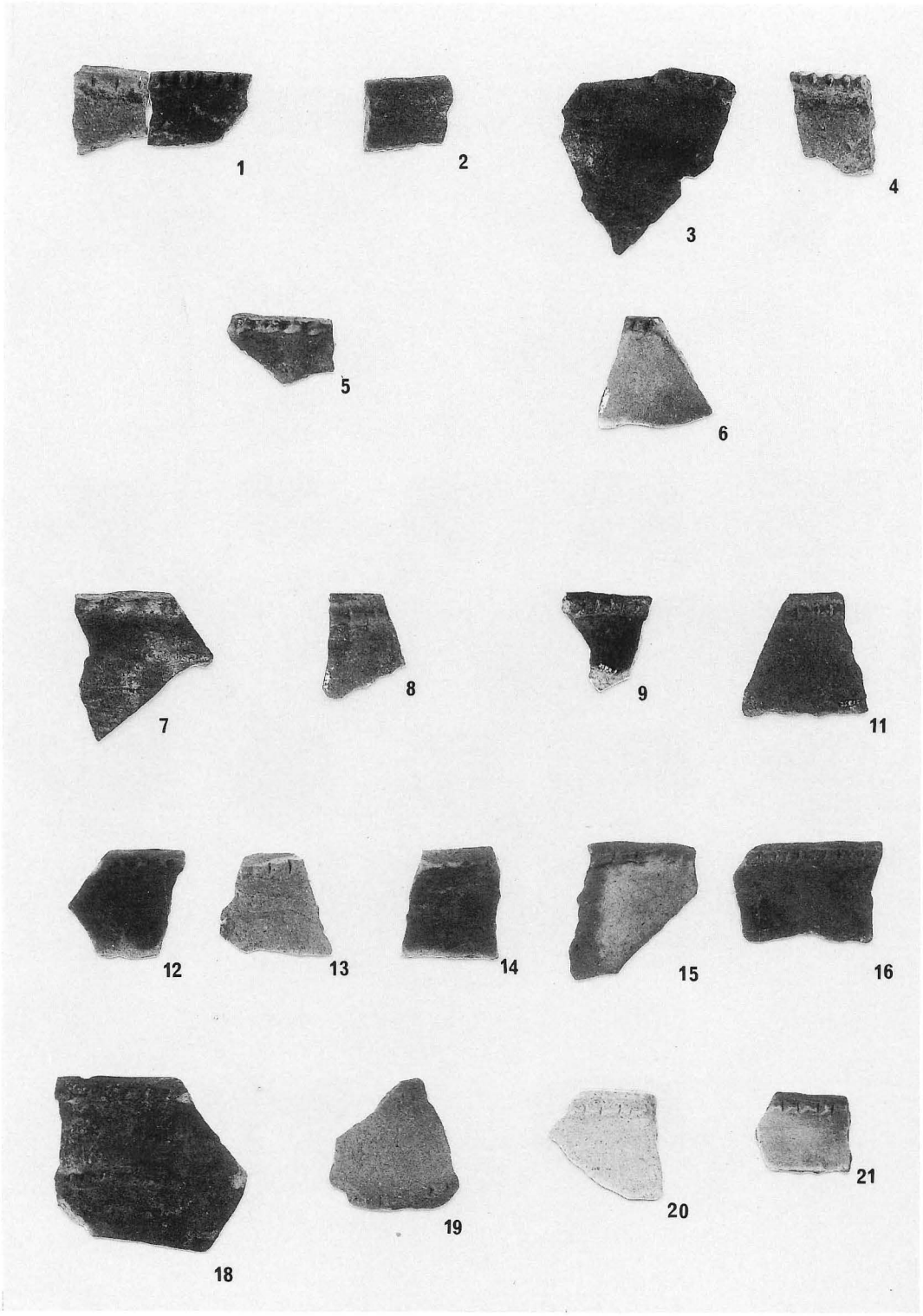
竪杵出土状況

鋤出土状況

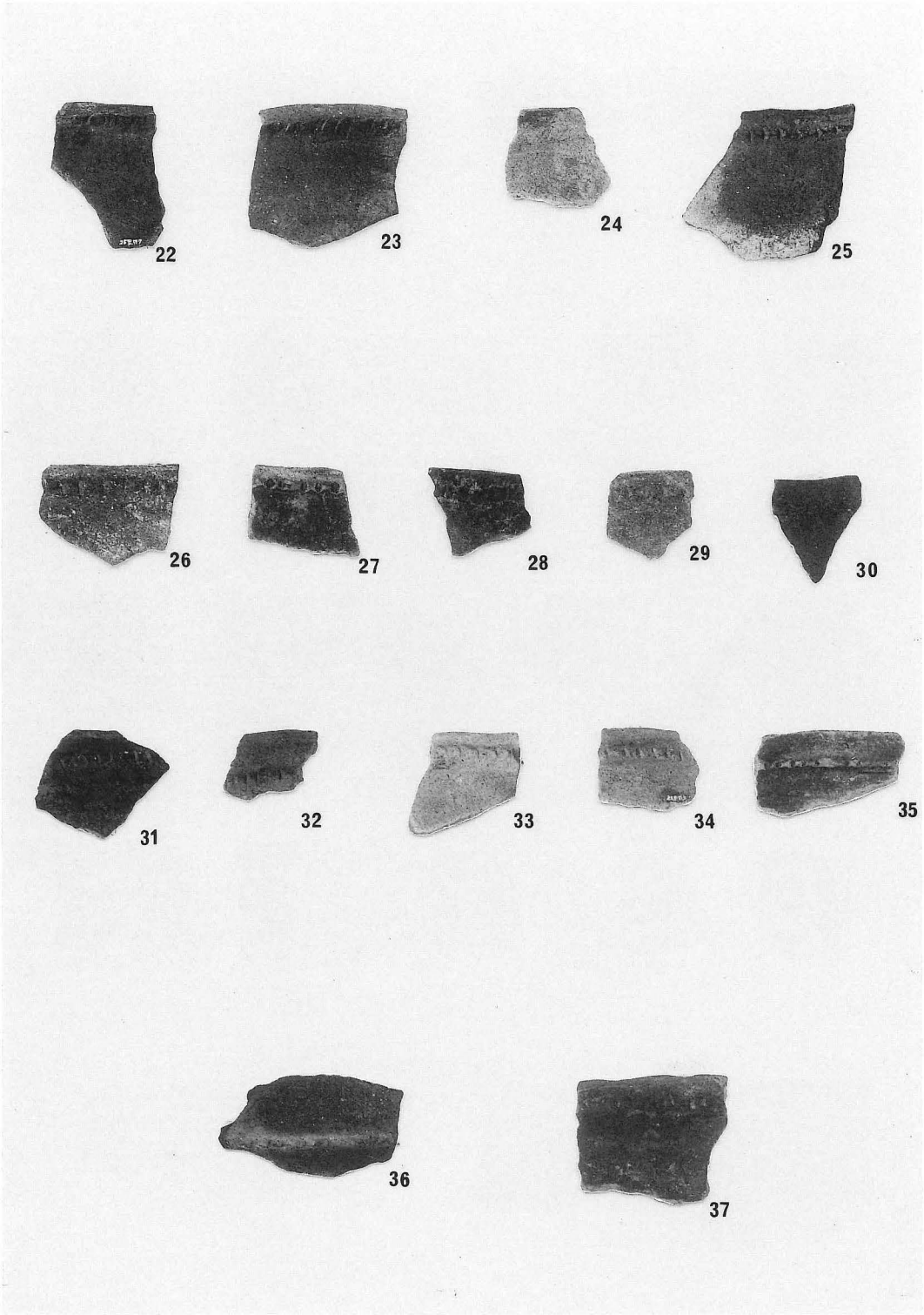
木製品出土状況



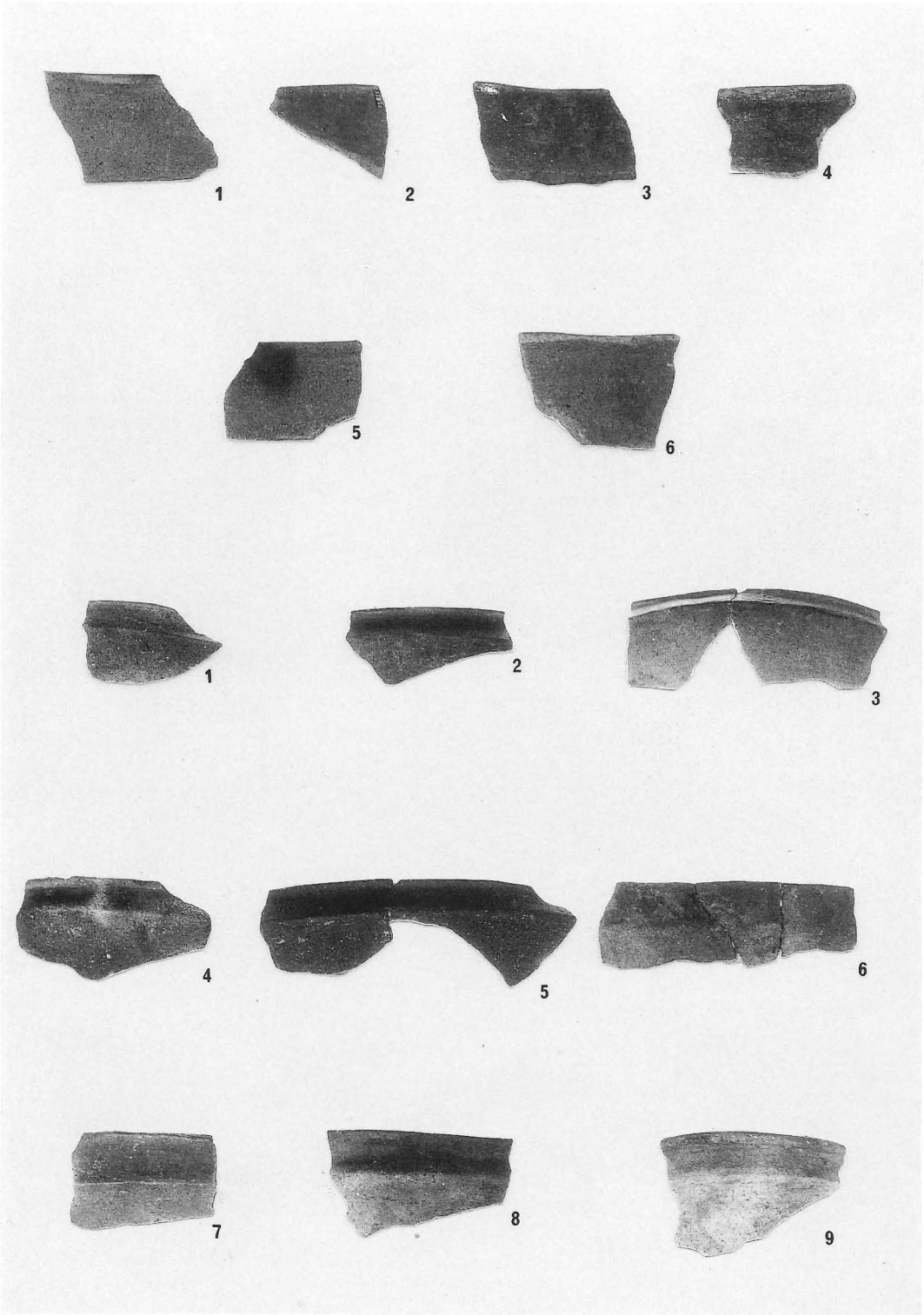
第Ⅰ区～8区出土縄文土器①(第20・21図に同じ)



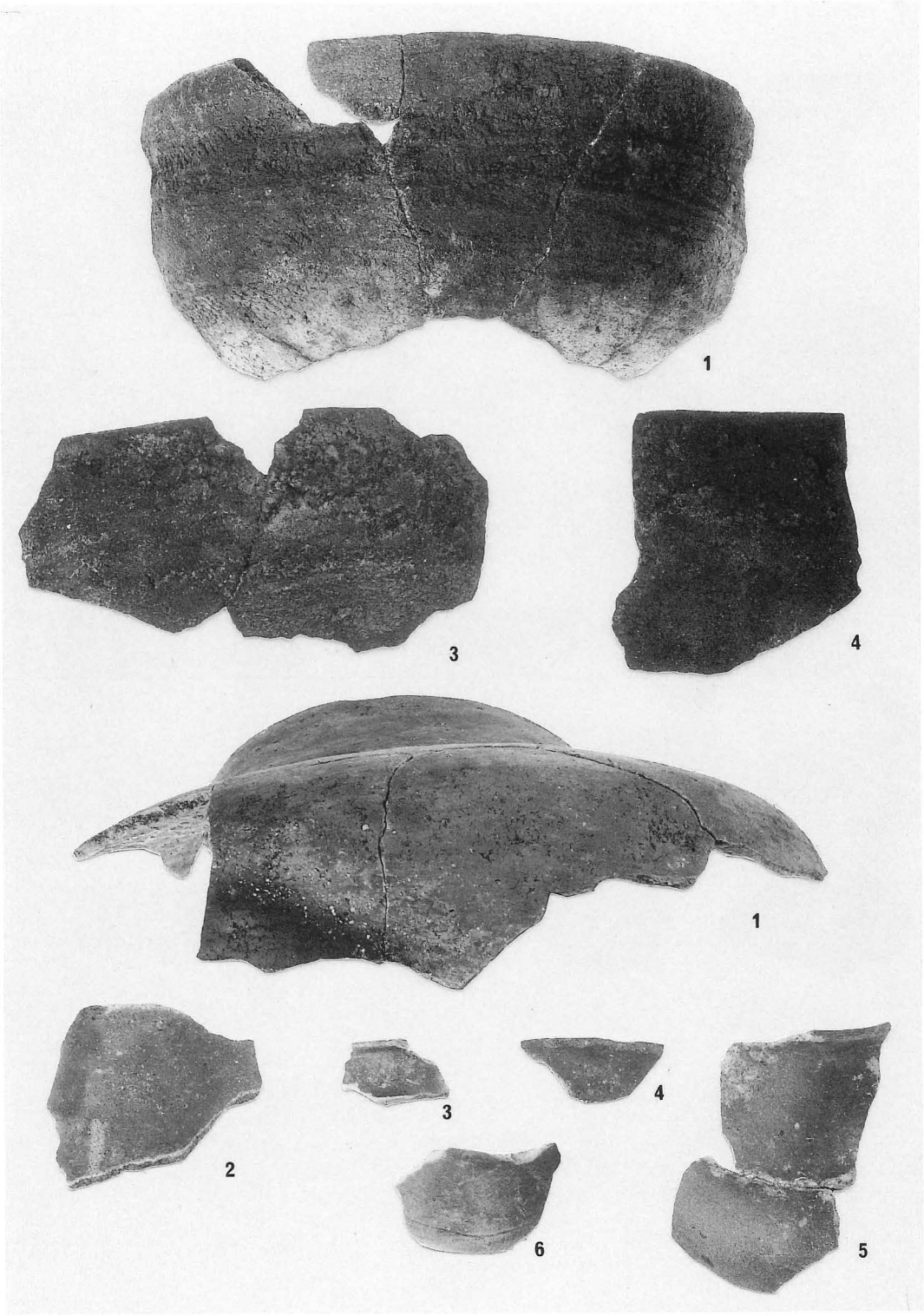
第Ⅰ区～8区出土縄文土器②(第22図に同じ)



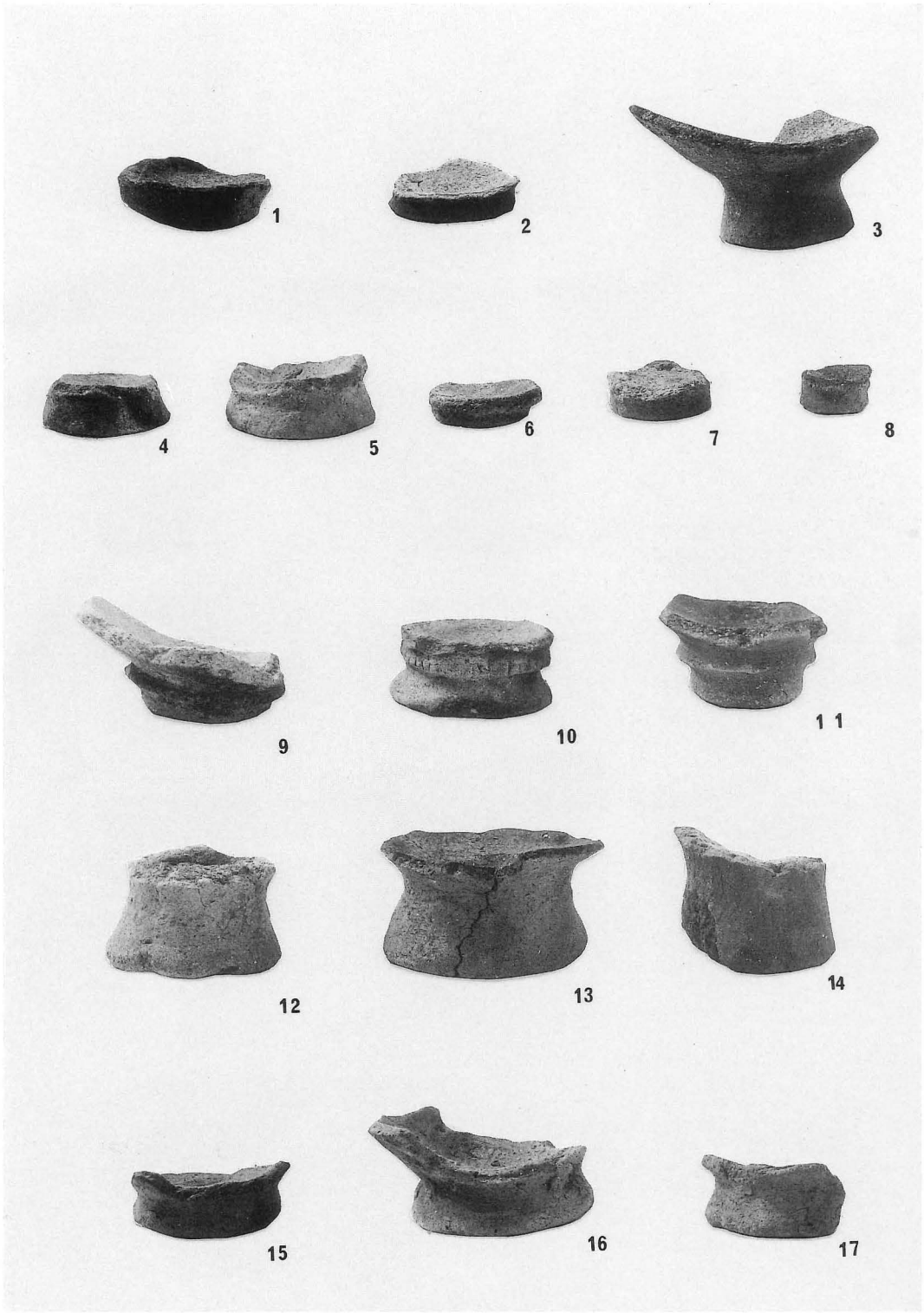
第Ⅰ区～８区出土縄文土器③（第23図に同じ）



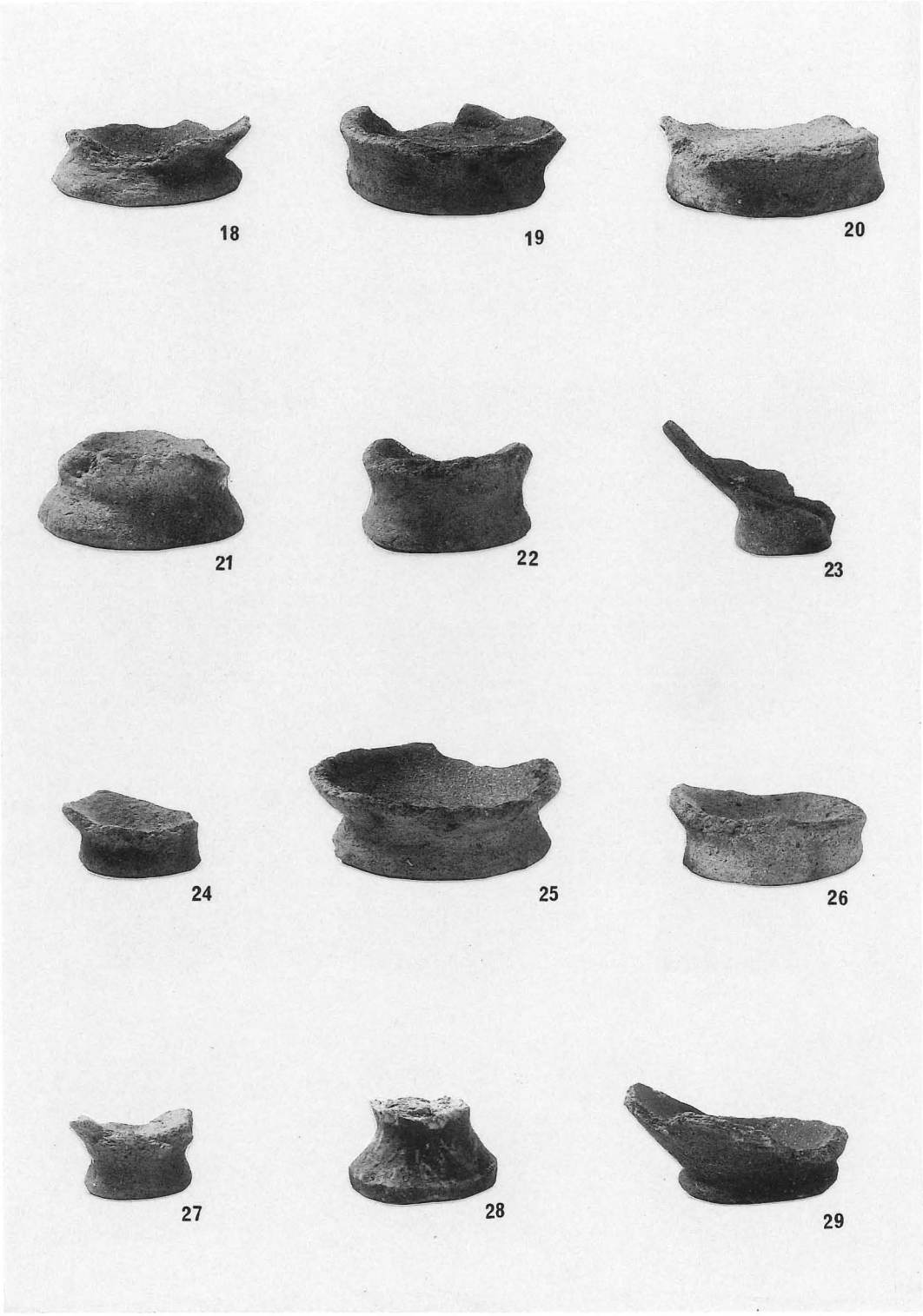
第Ⅰ区～8区出土縄文土器④(第24・25図に同じ)



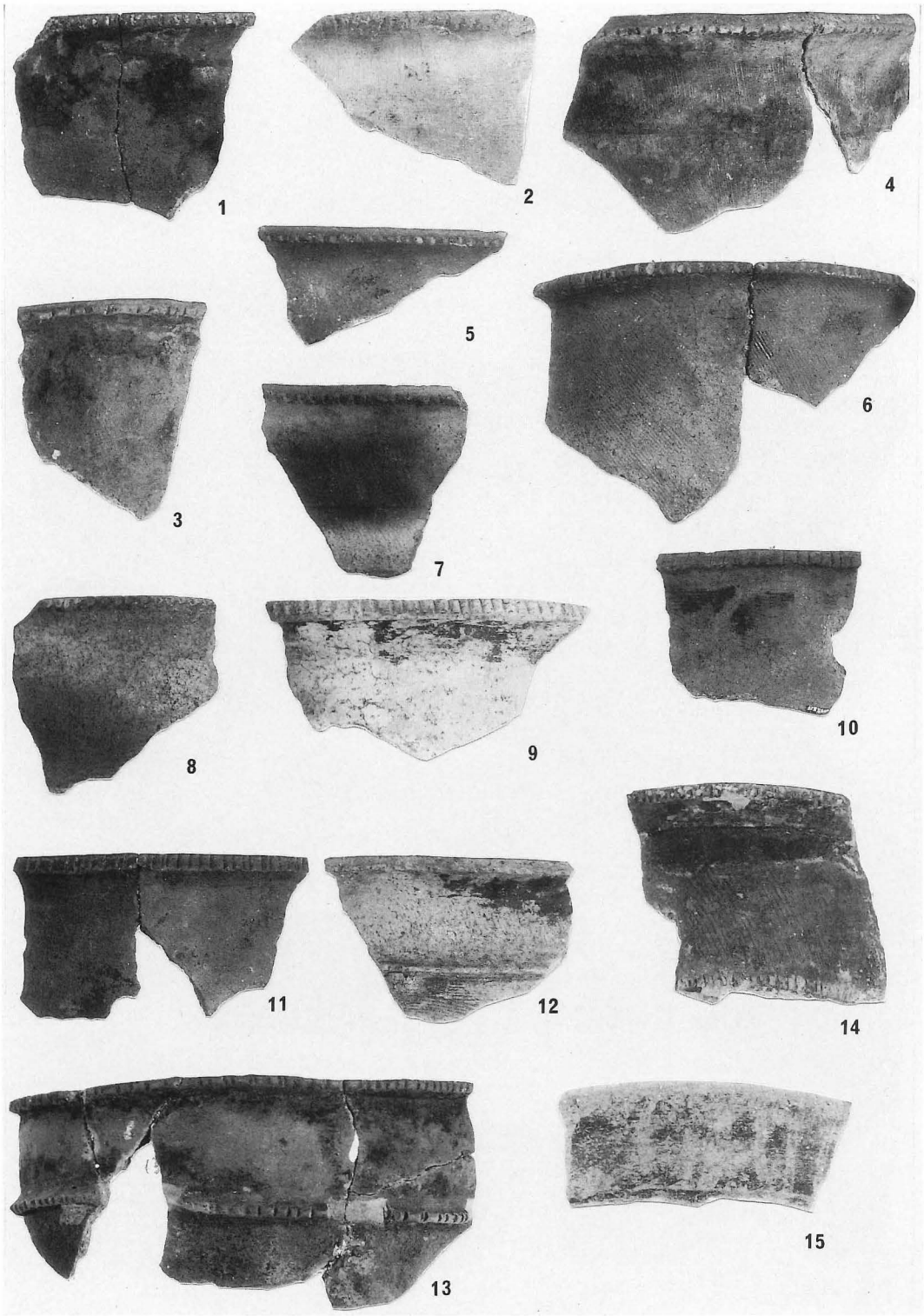
第Ⅰ区～8区出土縄文土器⑤（第26・27図に同じ）



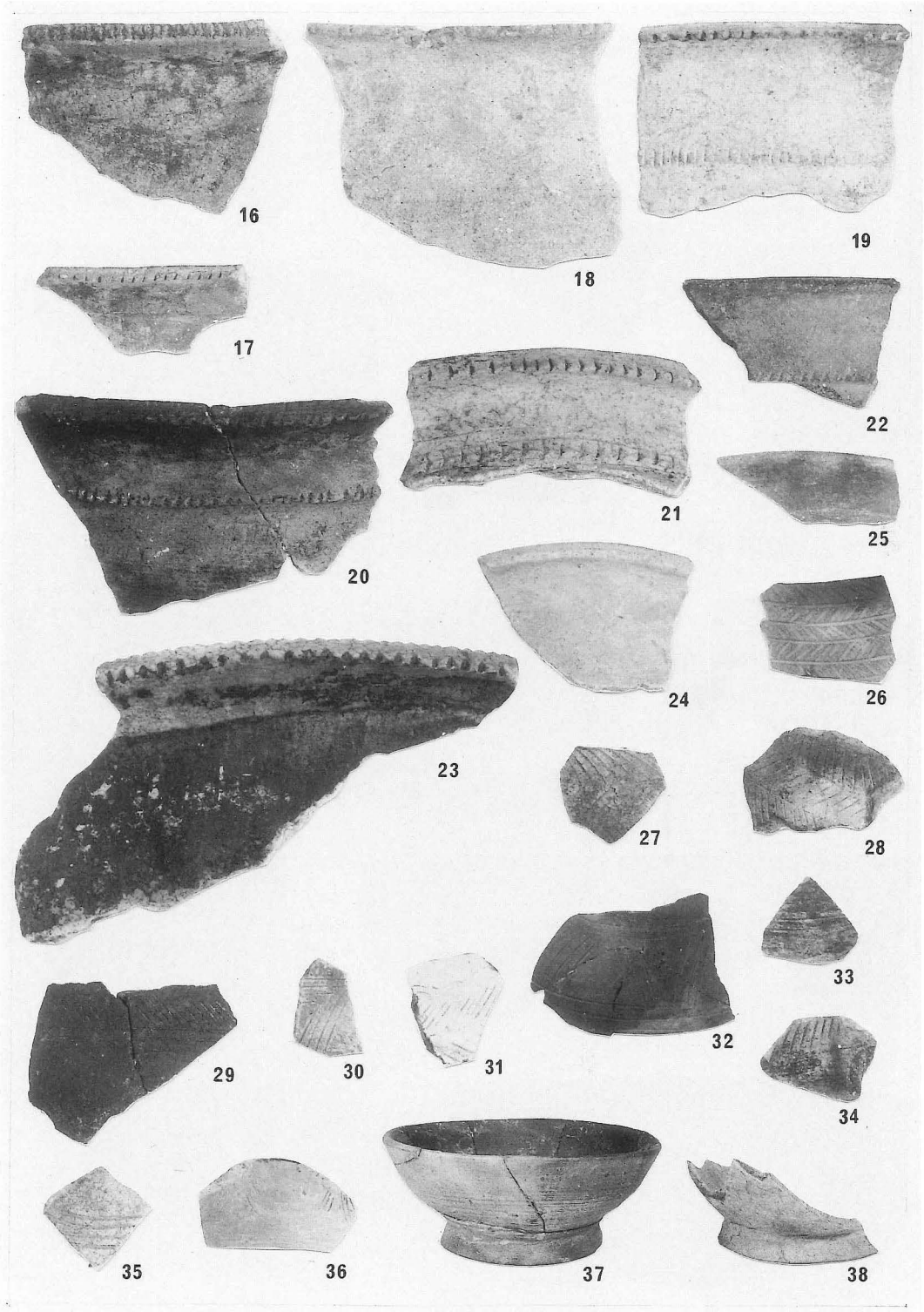
第Ⅰ区～8区出土縄文土器⑥(第28図に同じ)



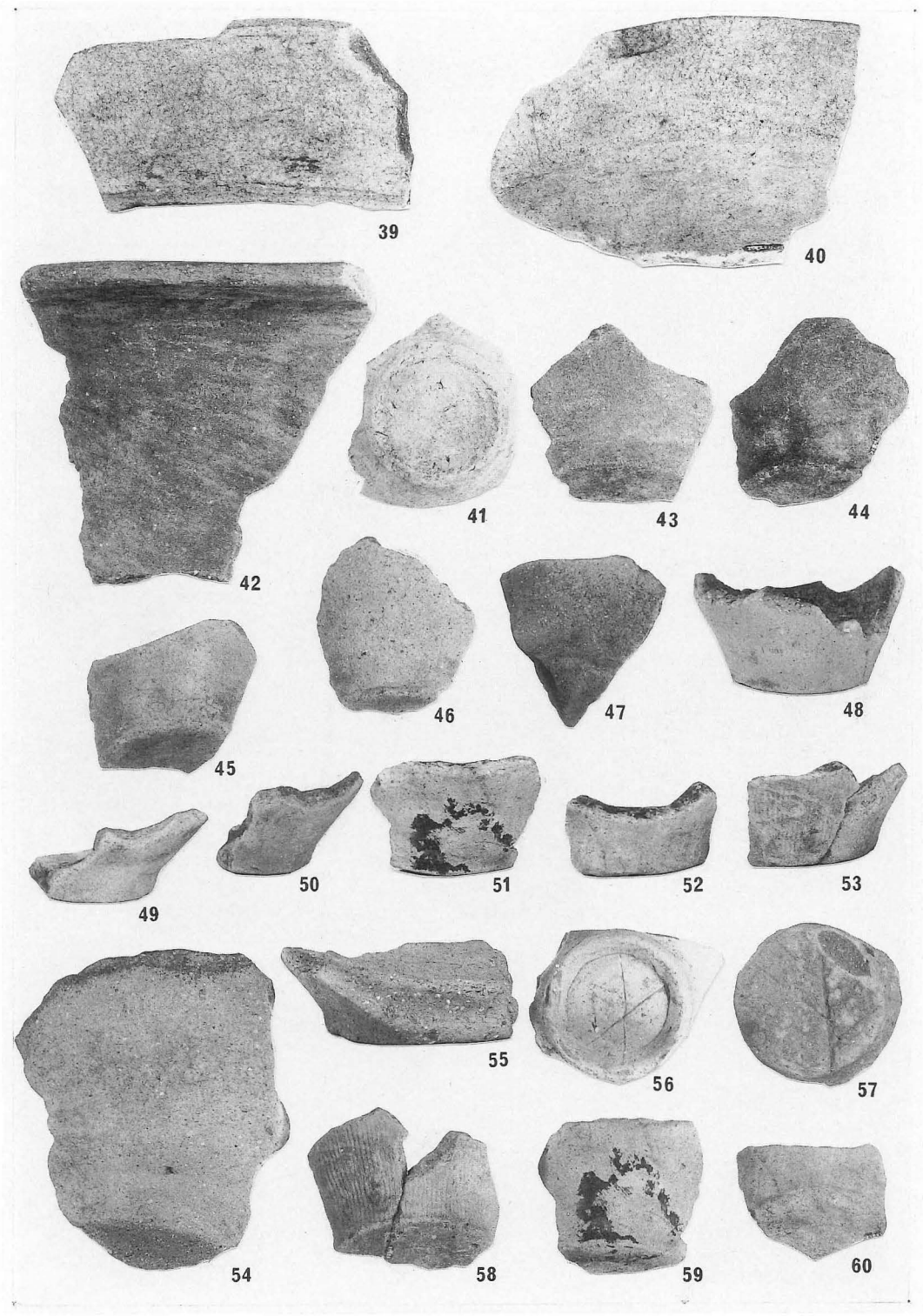
第Ⅰ区～8区出土縄文土器⑦(第28・29図に同じ)



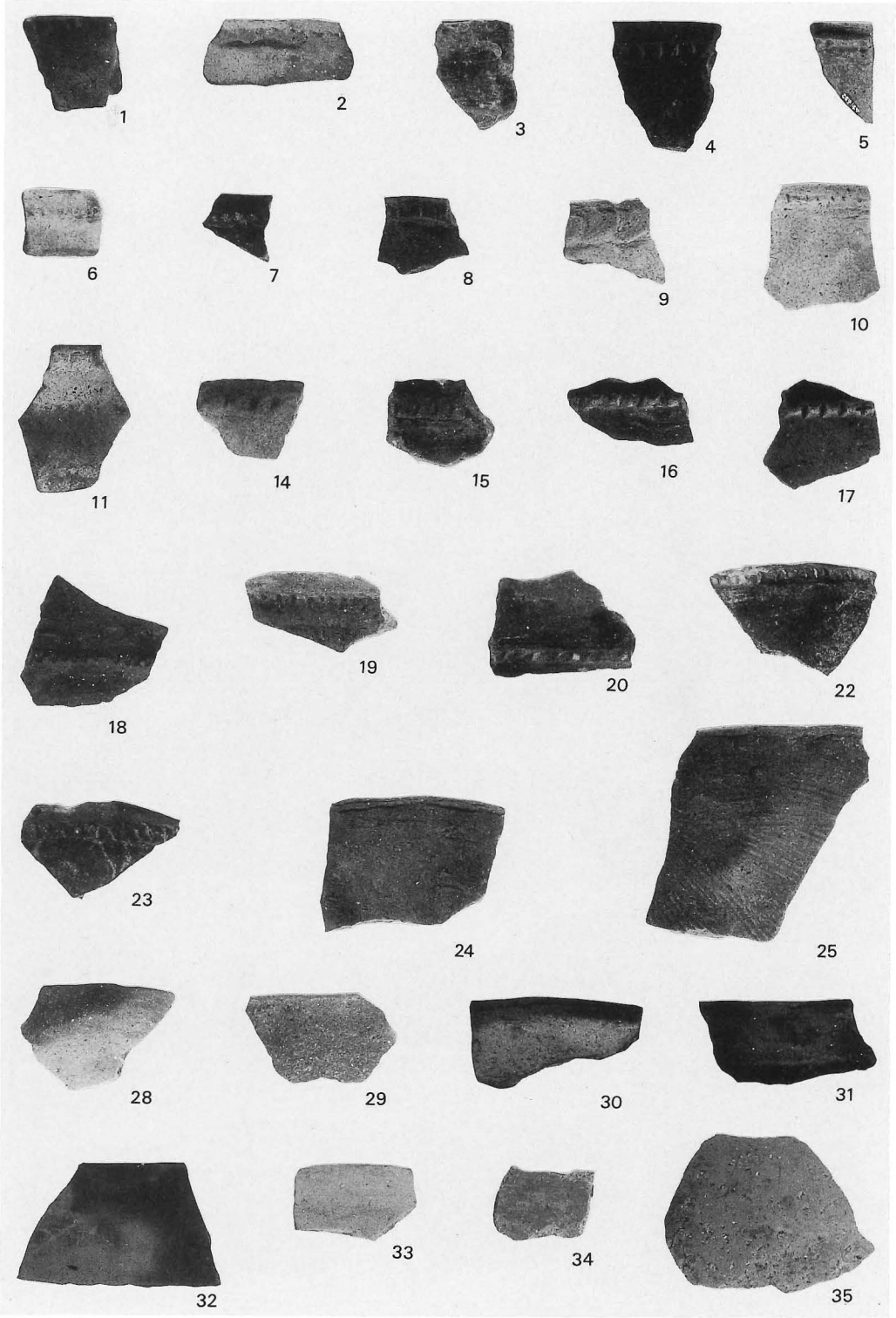
第１区～８区出土弥生土器①(番号は図に一致)



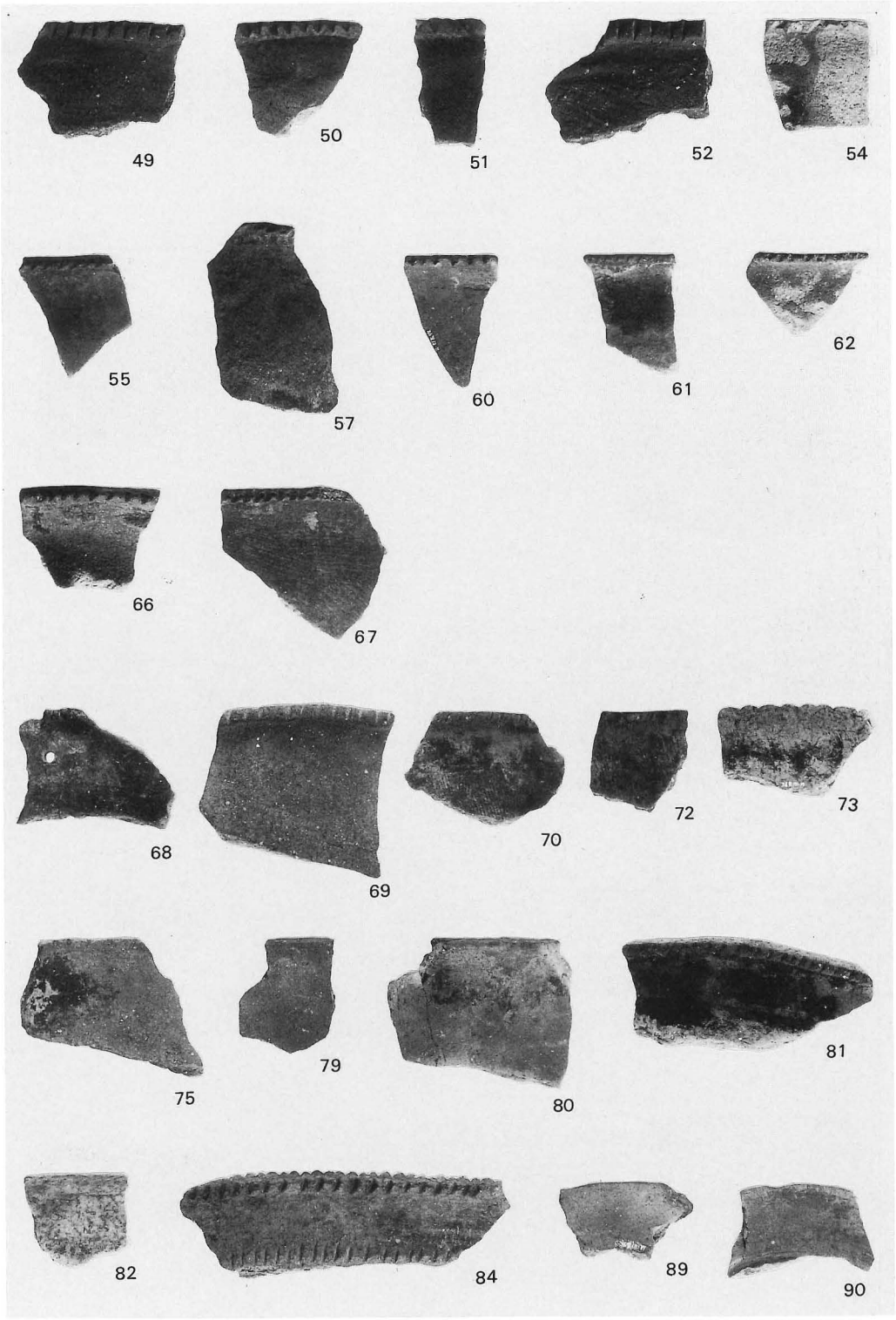
第１区～８区出土弥生土器②（番号は図に一致）



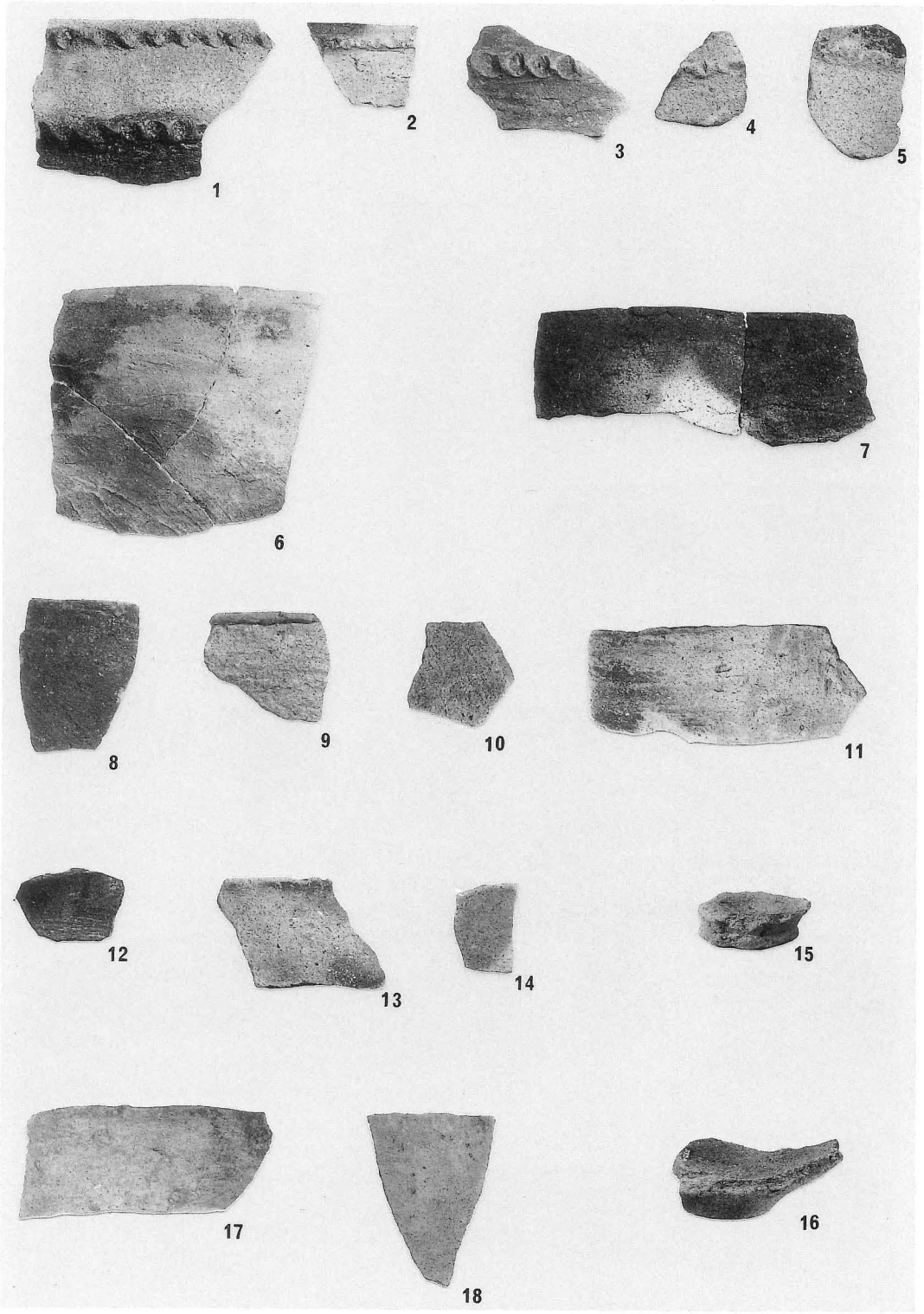
第１区～８区出土弥生土器③（番号は図に一致）



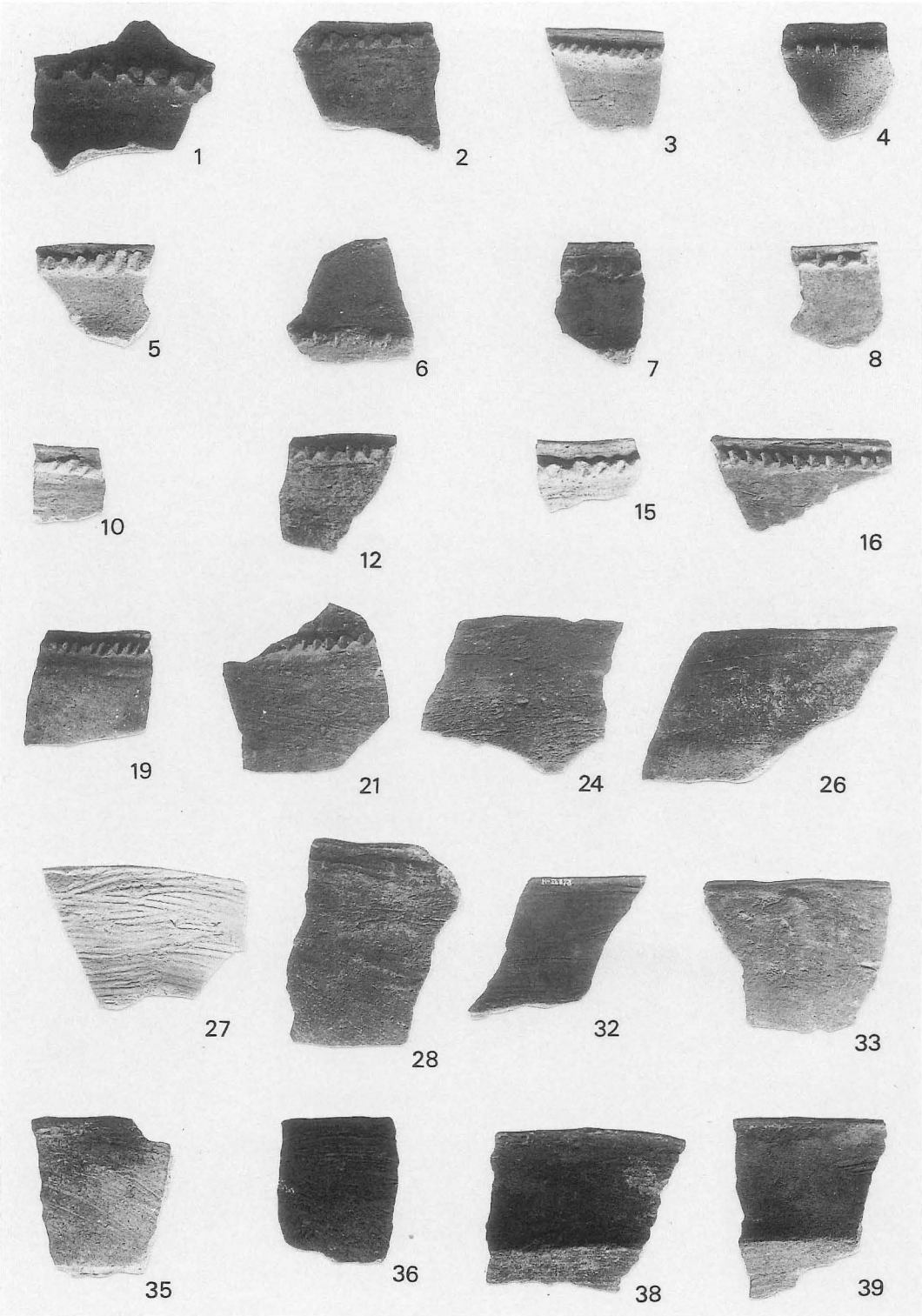
第11区～16区出土縄文土器①(番号は図に一致)



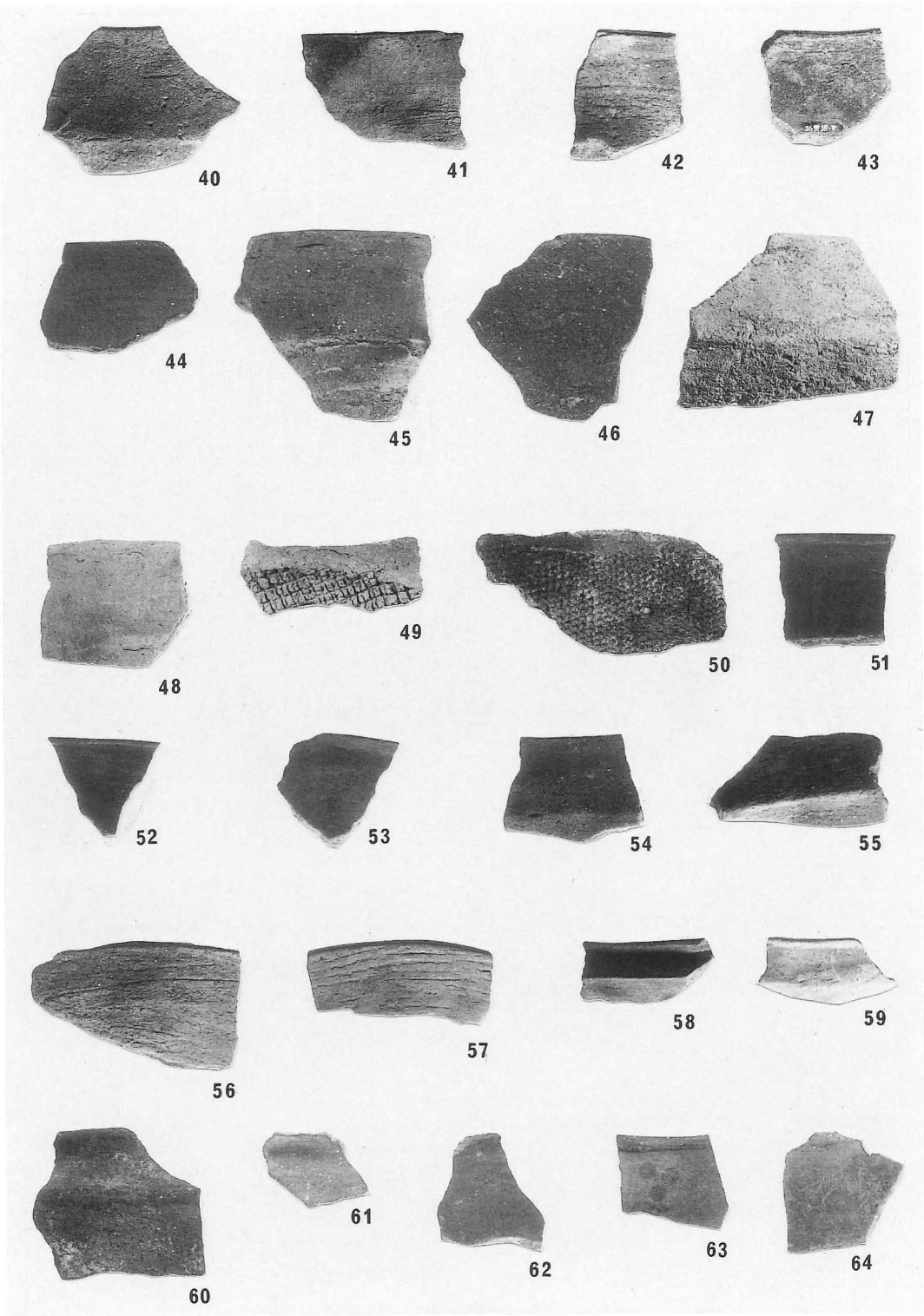
第11区～16区出土弥生土器①(番号は図に一致)



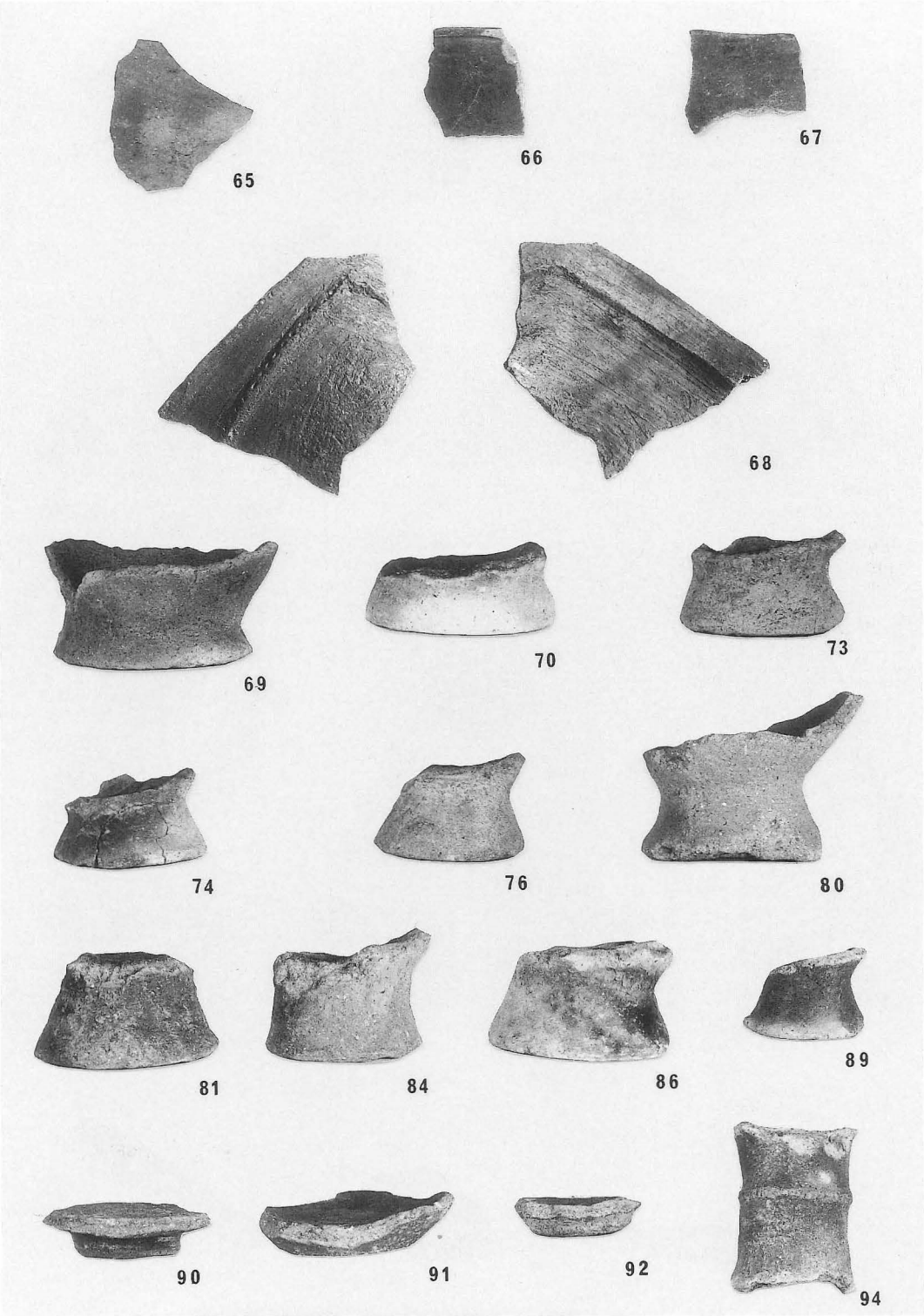
第21区～23区出土縄文土器①（番号は図に一致）



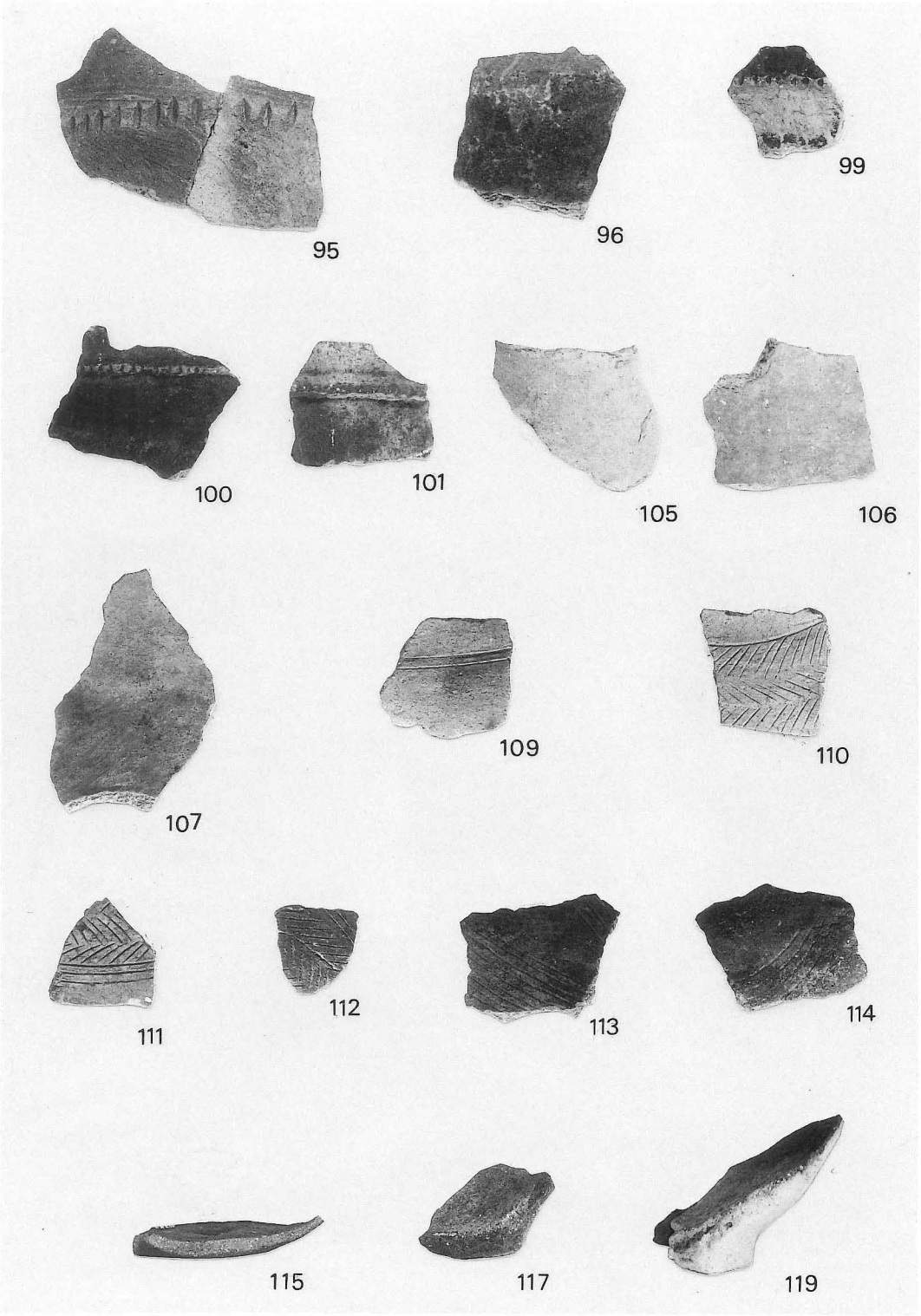
第35区～40区出土縄文土器①(番号は図に一致)



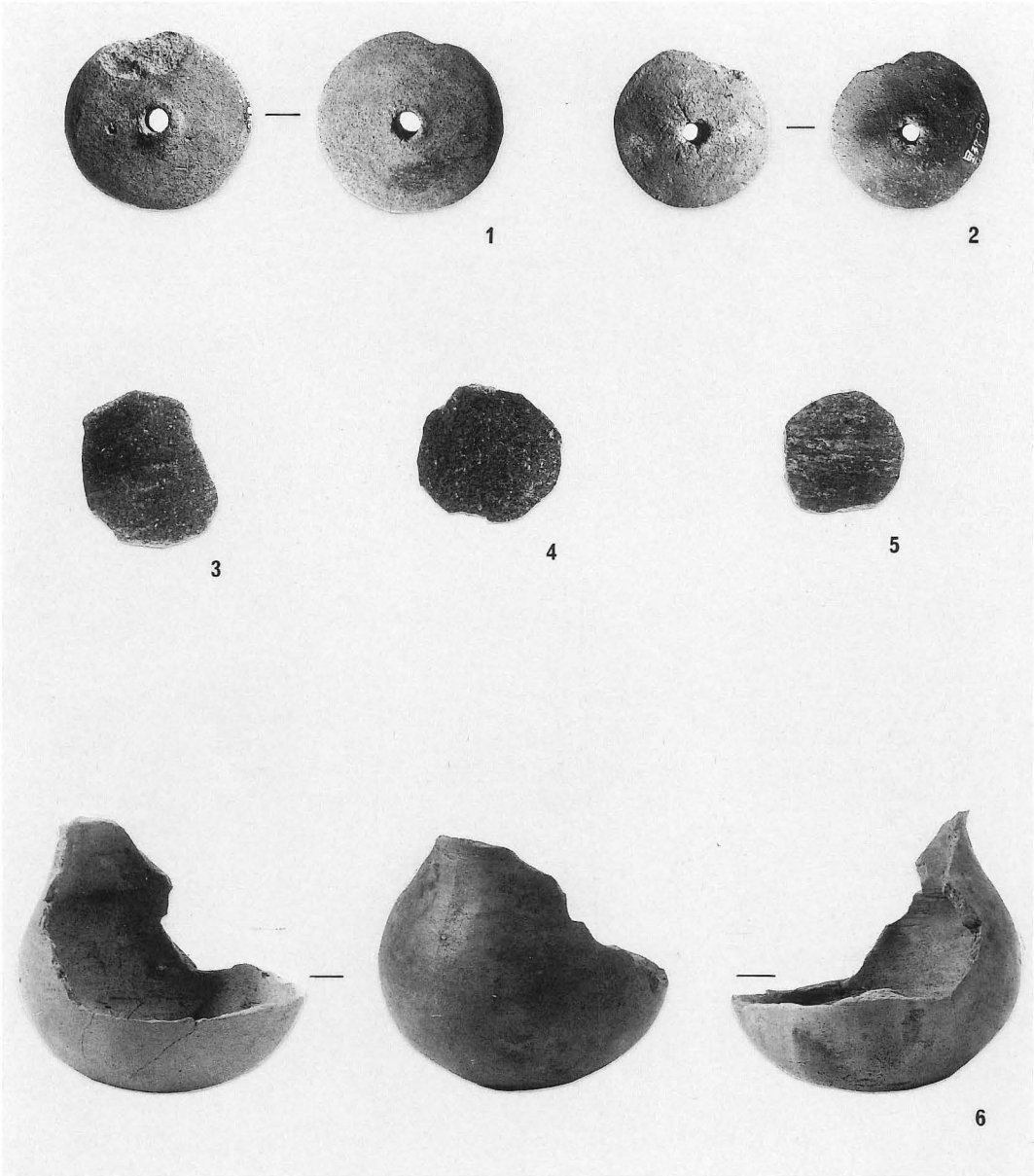
第35区～40区出土縄文土器②（番号は図に一致）



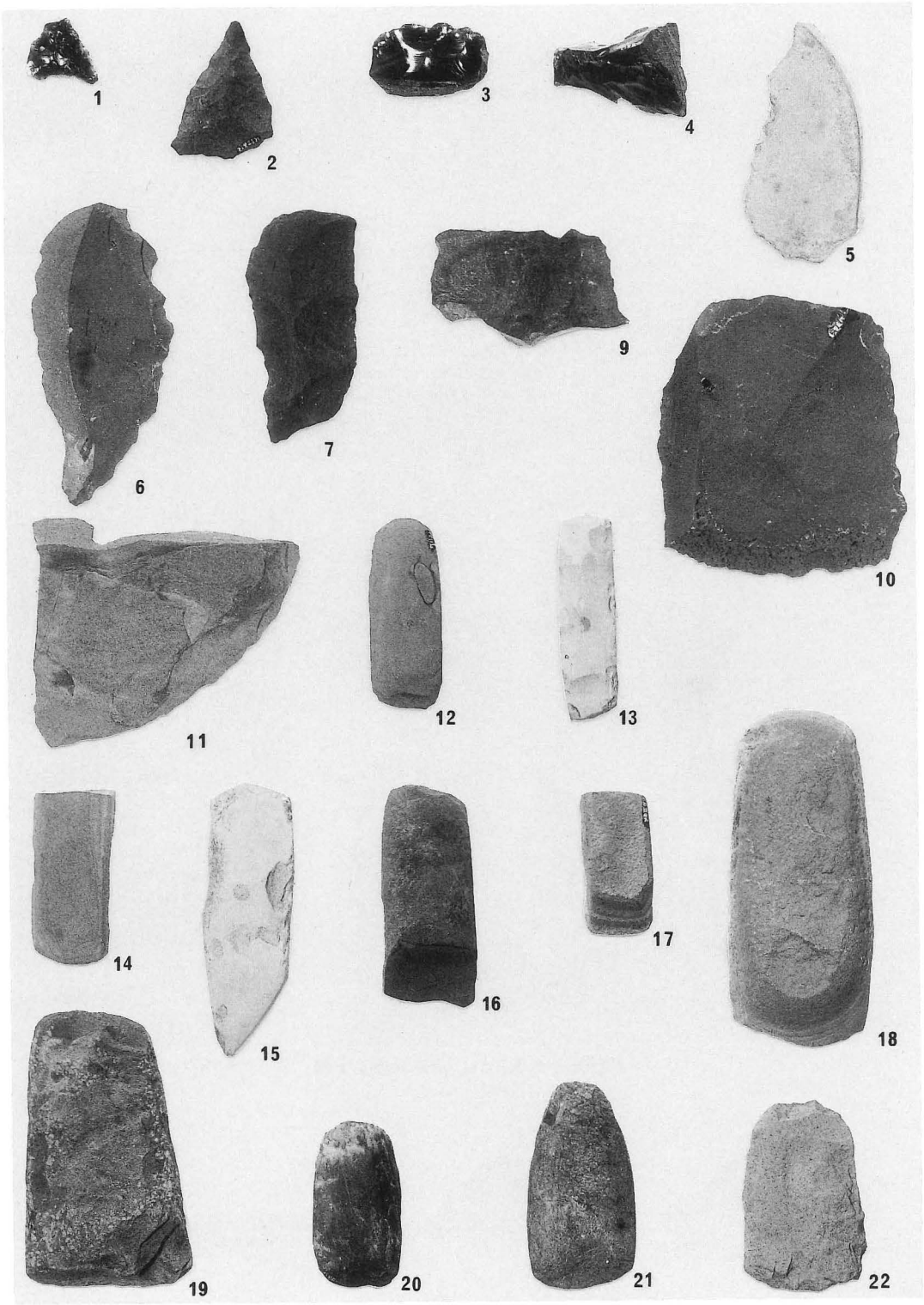
第34区～40区出土縄文土器③（番号は図に一致）



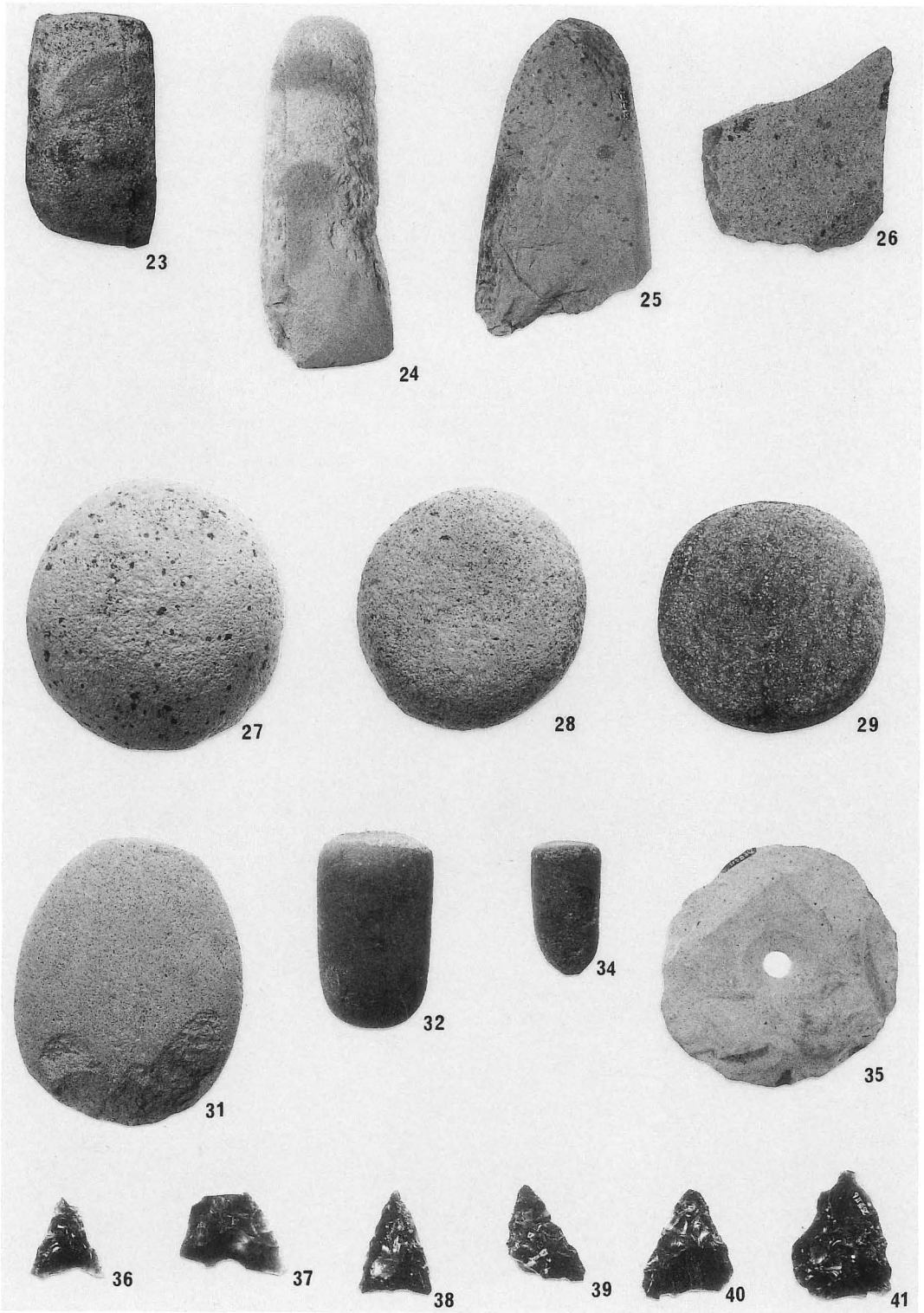
第35区～40区出土弥生土器（番号は図に一致）



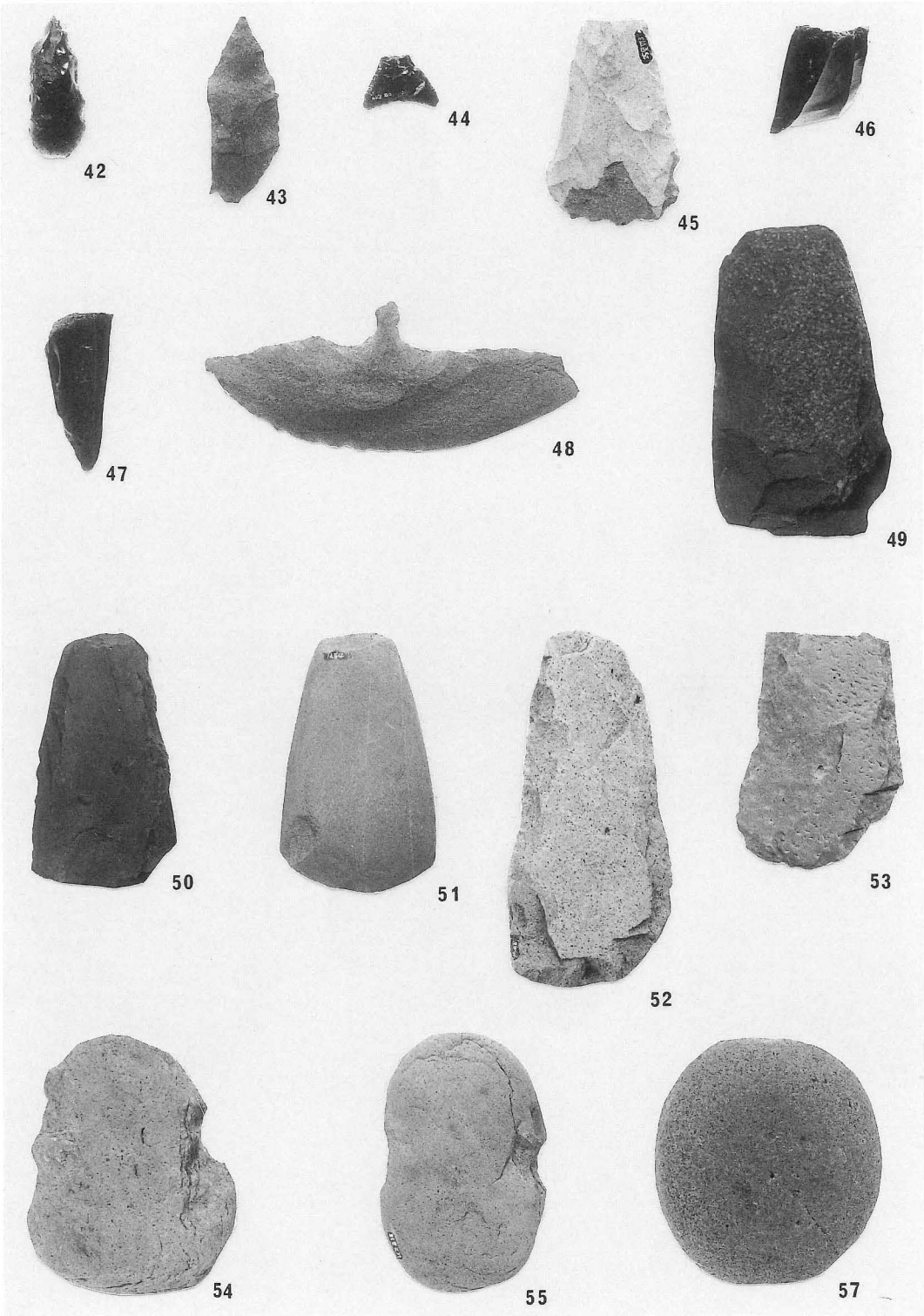
紡錘車・土製円盤，半島系無文土器



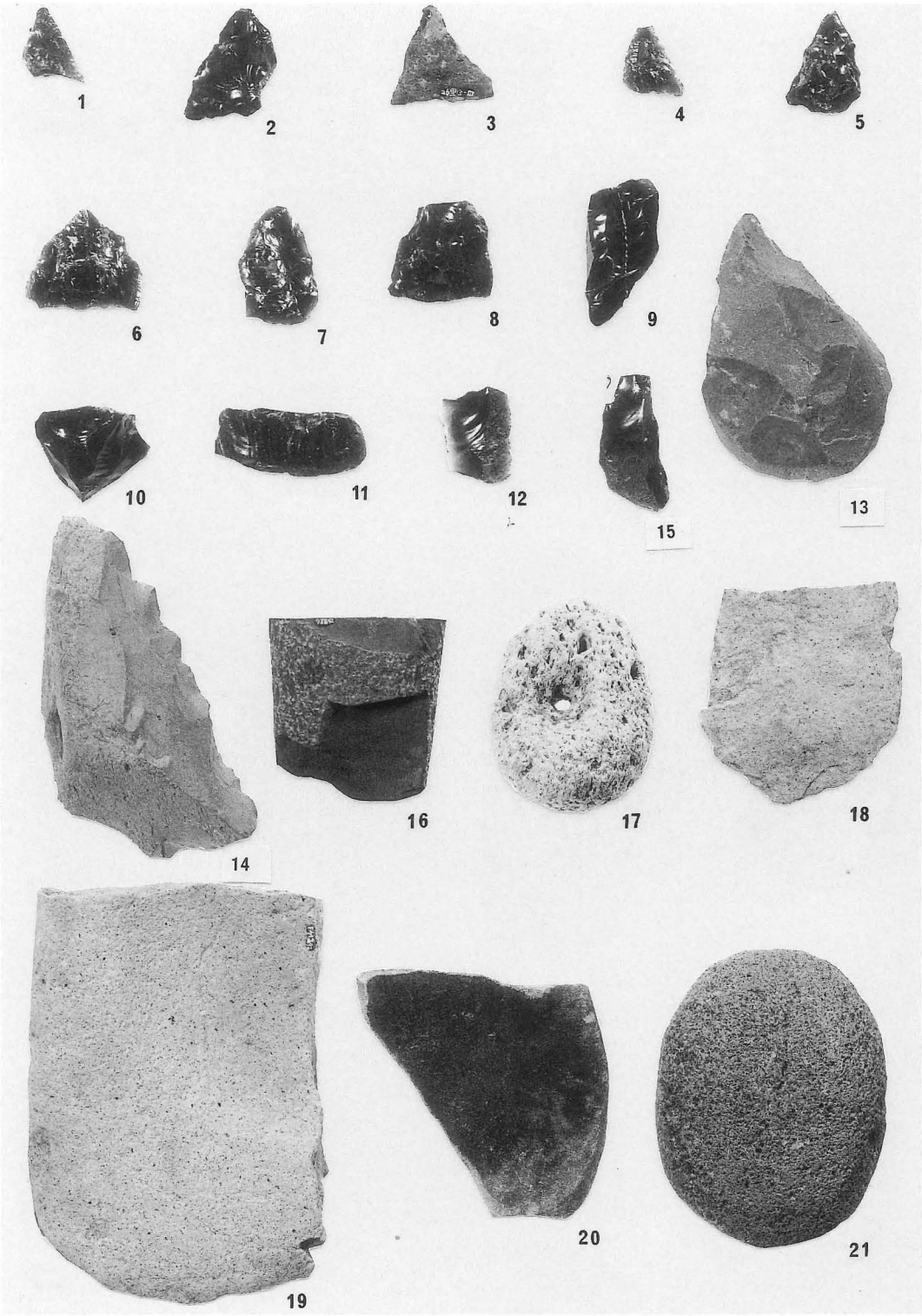
第Ⅰ区～8区出土石器①（番号は図に一致）



第Ⅰ区～8区出土石器②(番号は図に一致)

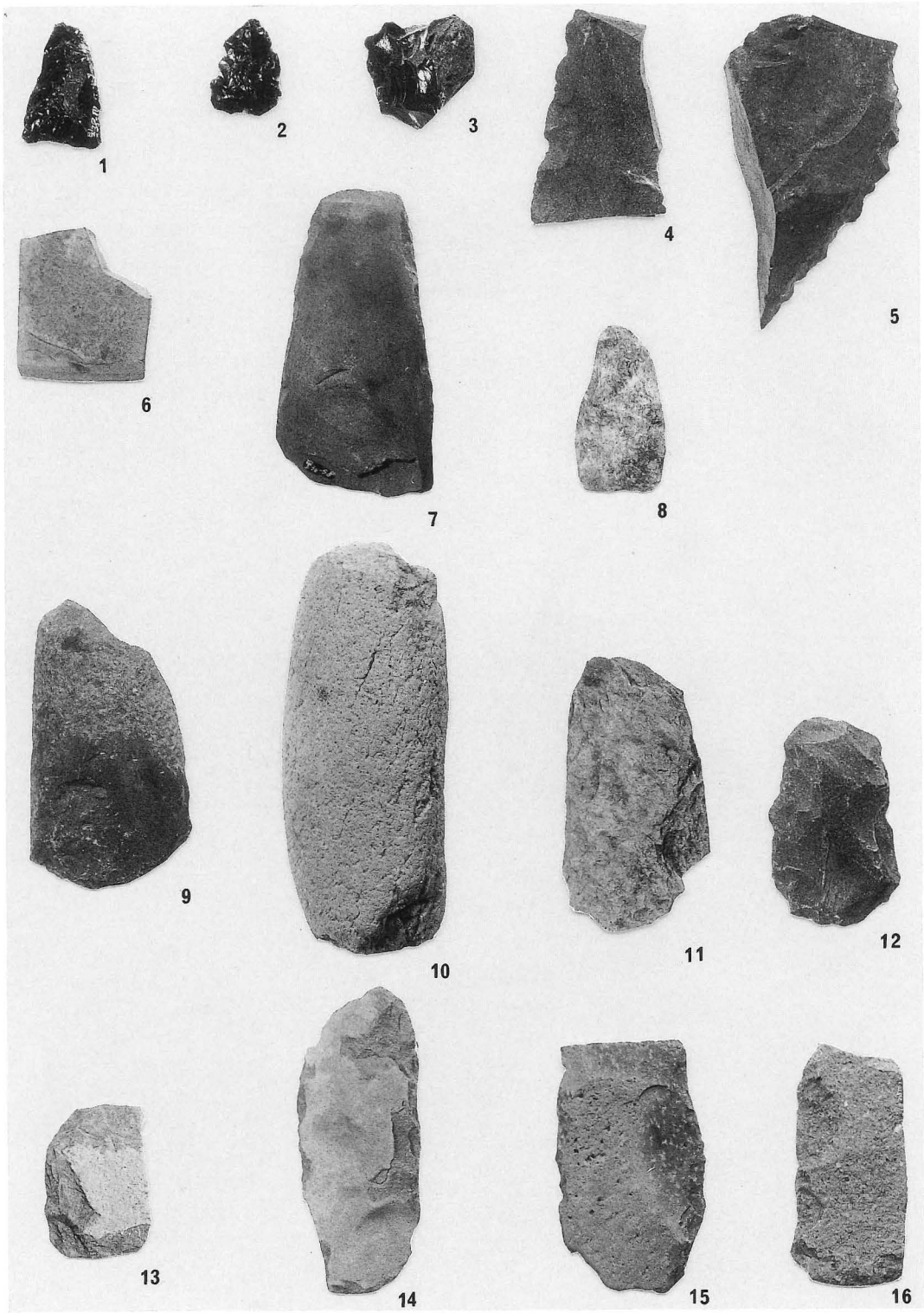


第Ⅰ区～8区出土石器③(番号は図に一致)

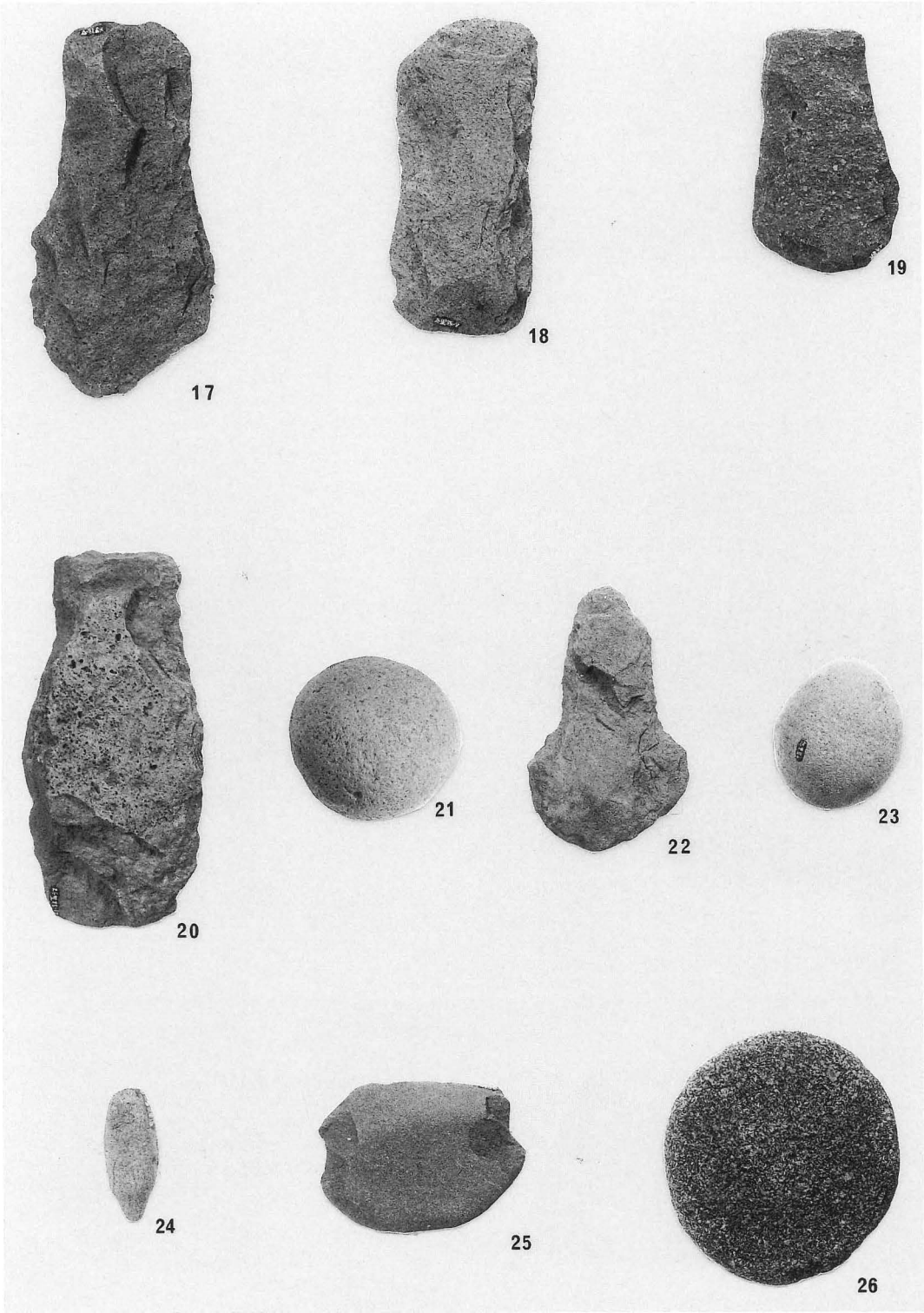


第11区～16区出土石器(番号は図に一致)

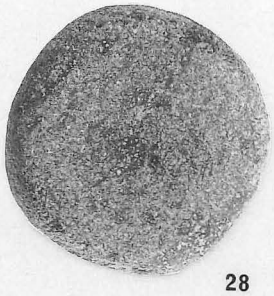
図版　40



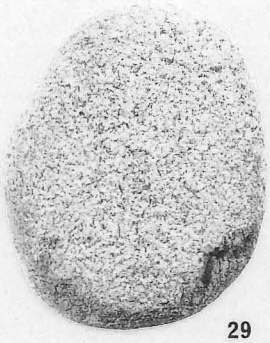
第34区～40区出土石器①（番号は図に一致）



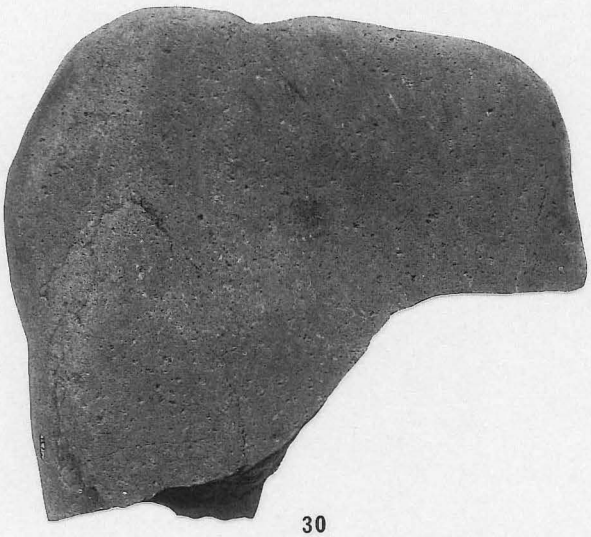
第36区～40区出土石器②（番号は図に一致）



28

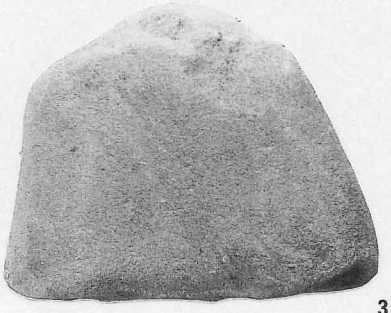


29



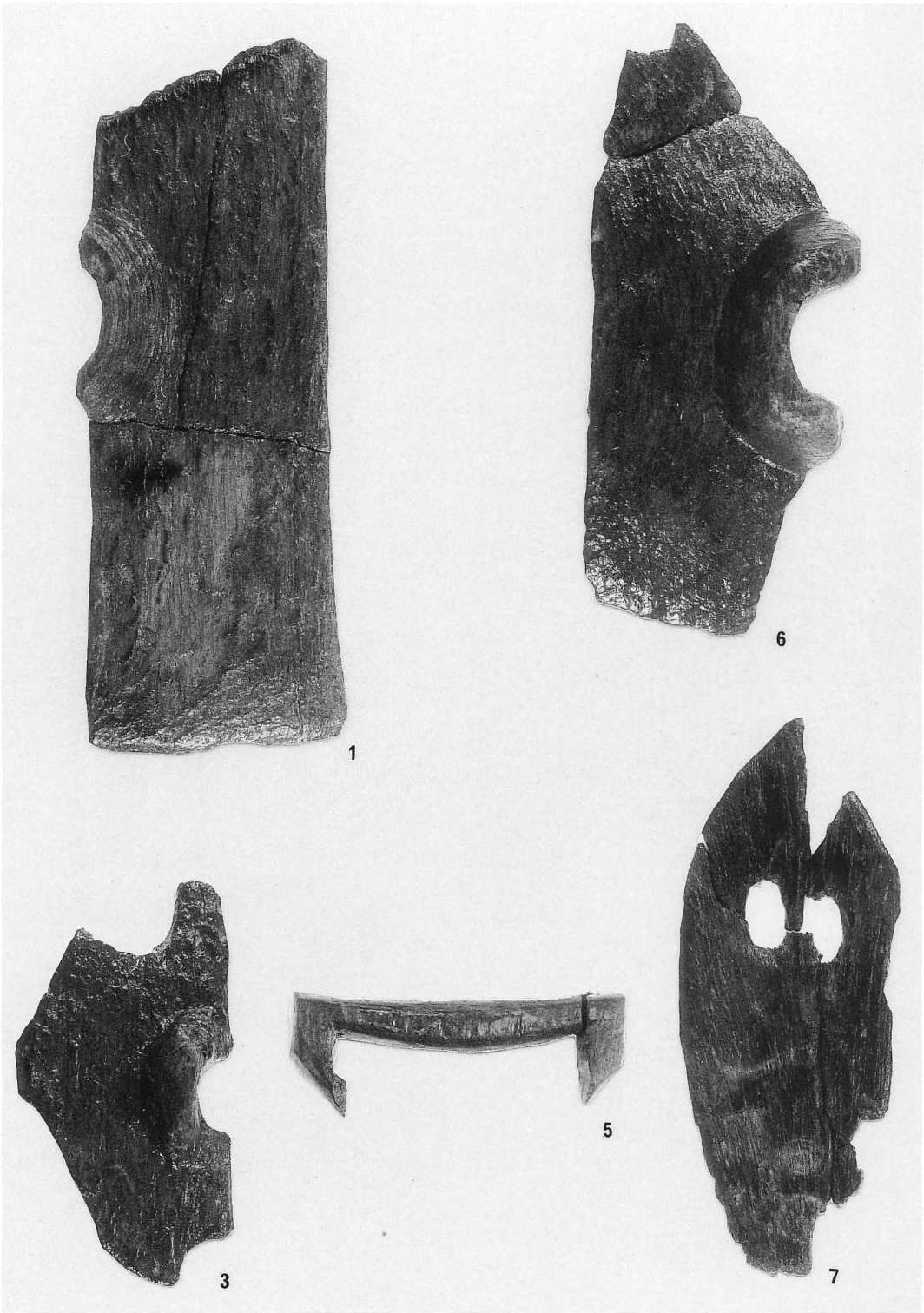
30

32

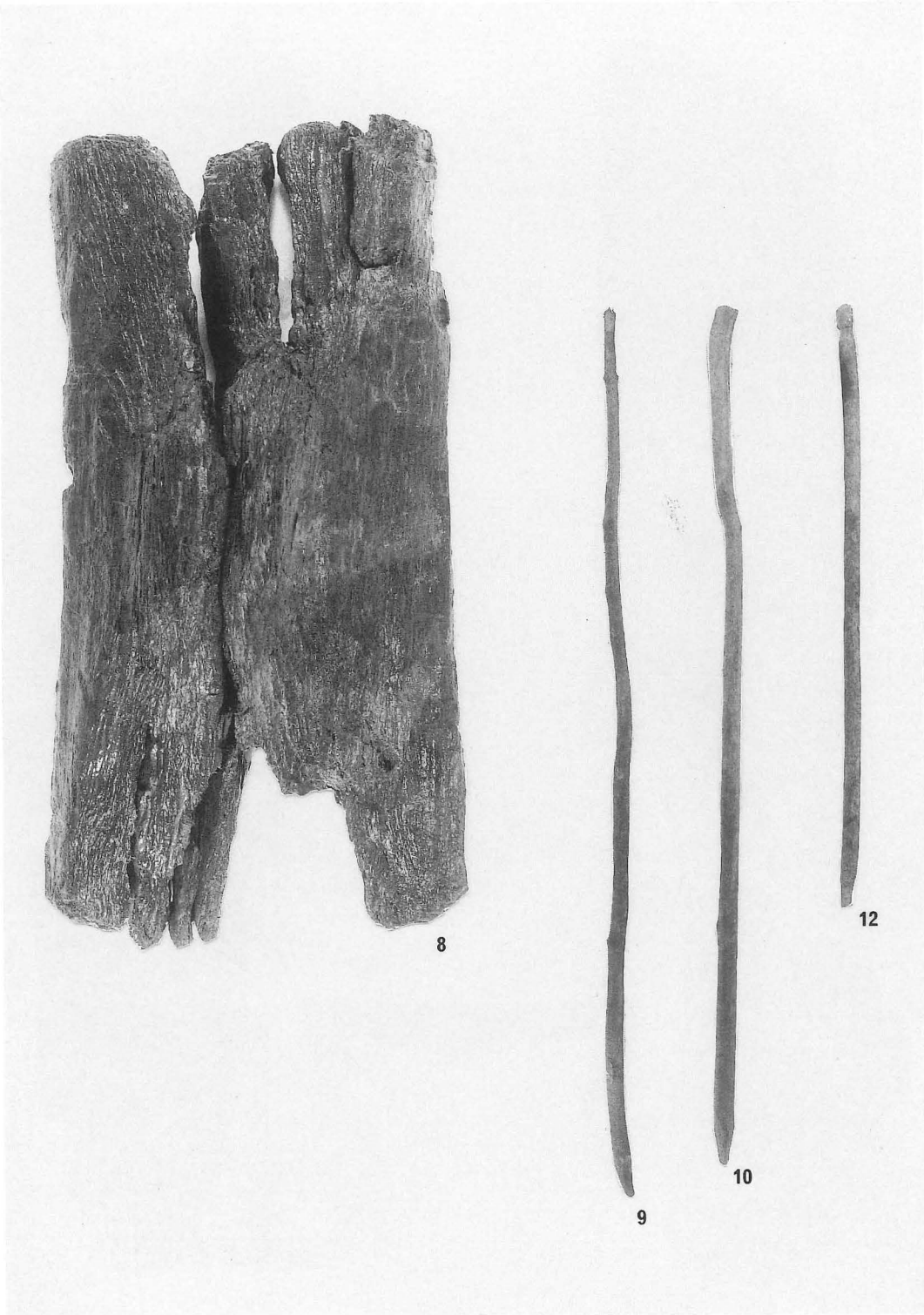


31

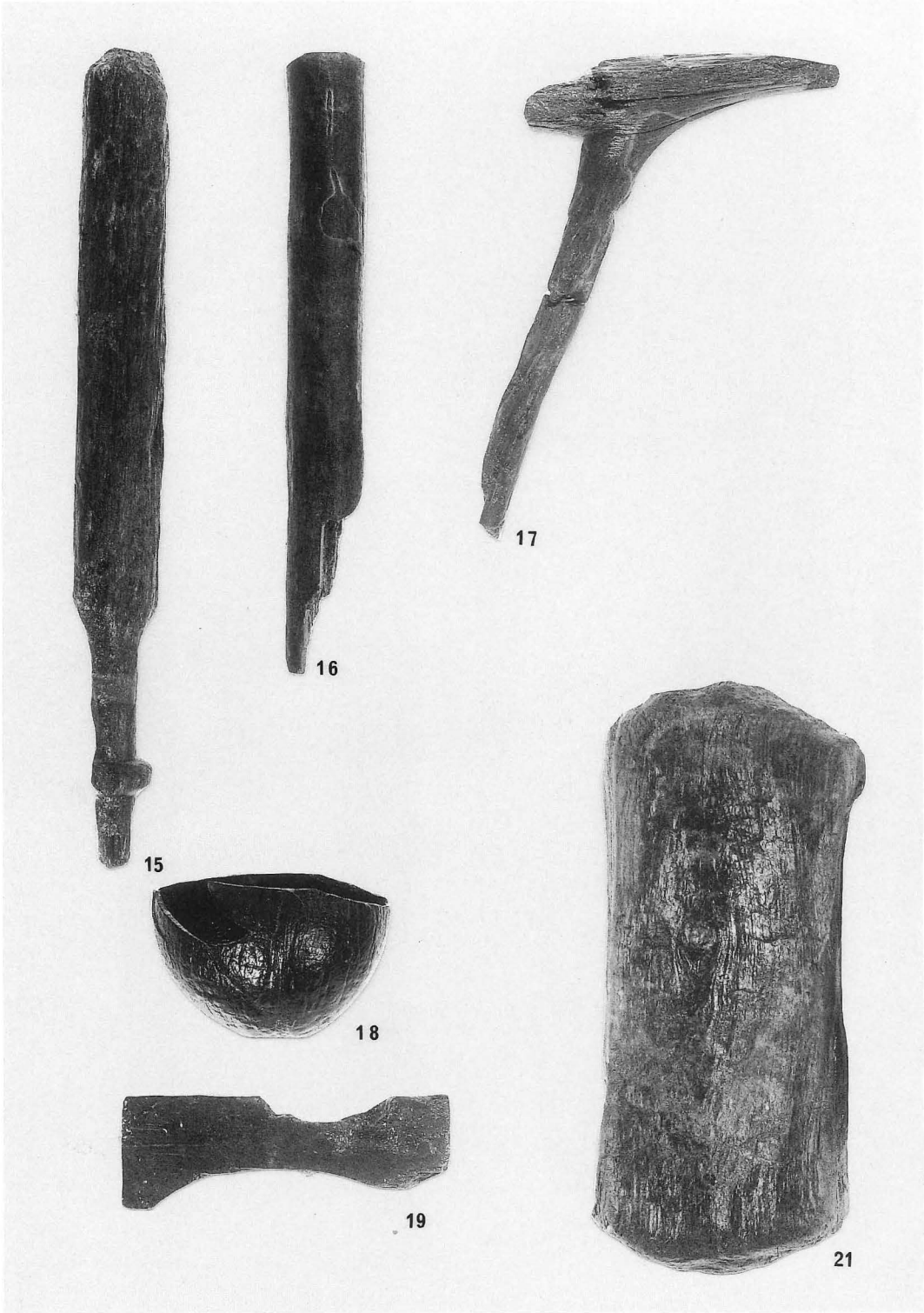
第34区～40区出土石器③（番号は図に一致）



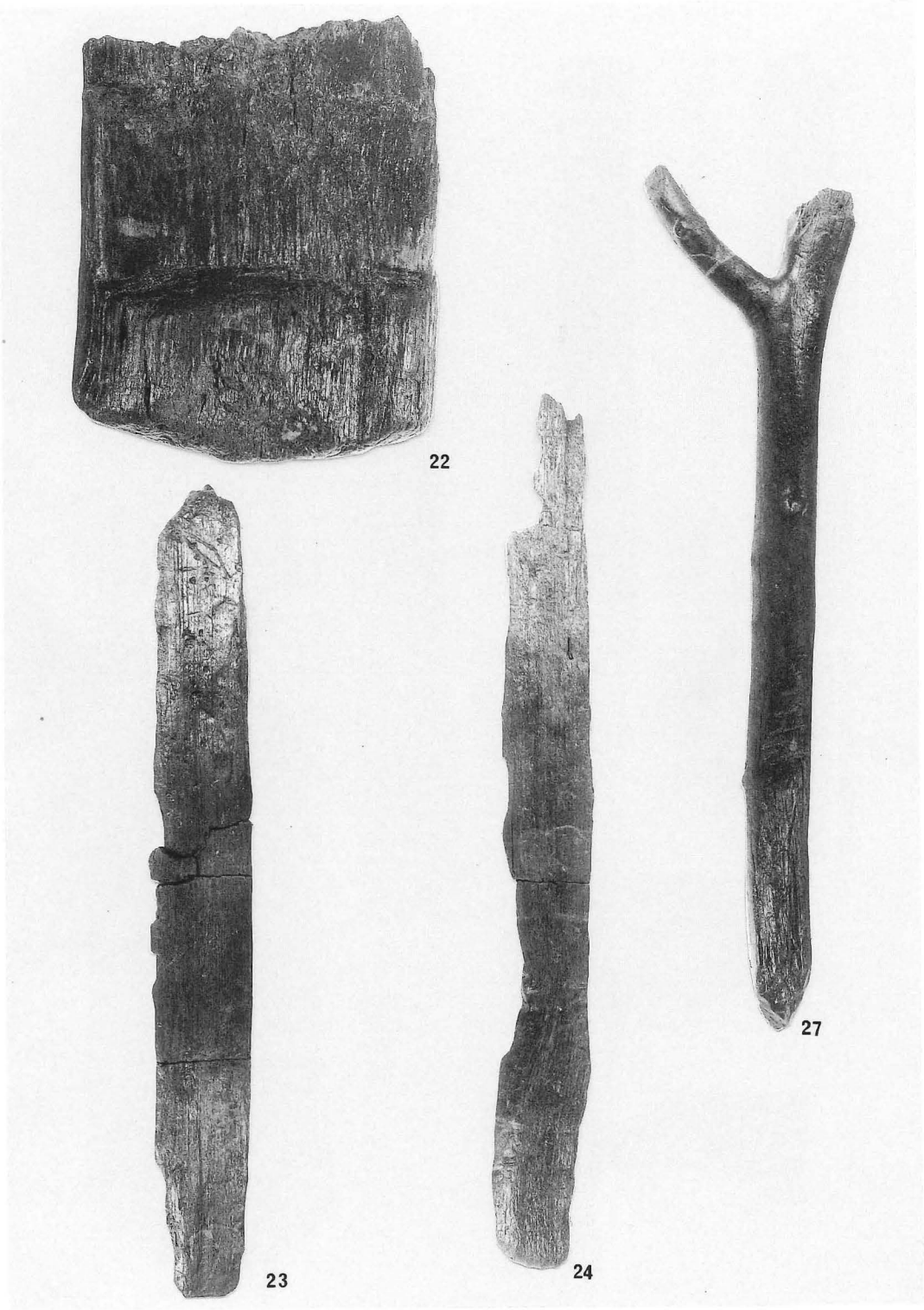
第Ⅰ区～8区出土農具・鍬・鋤柄



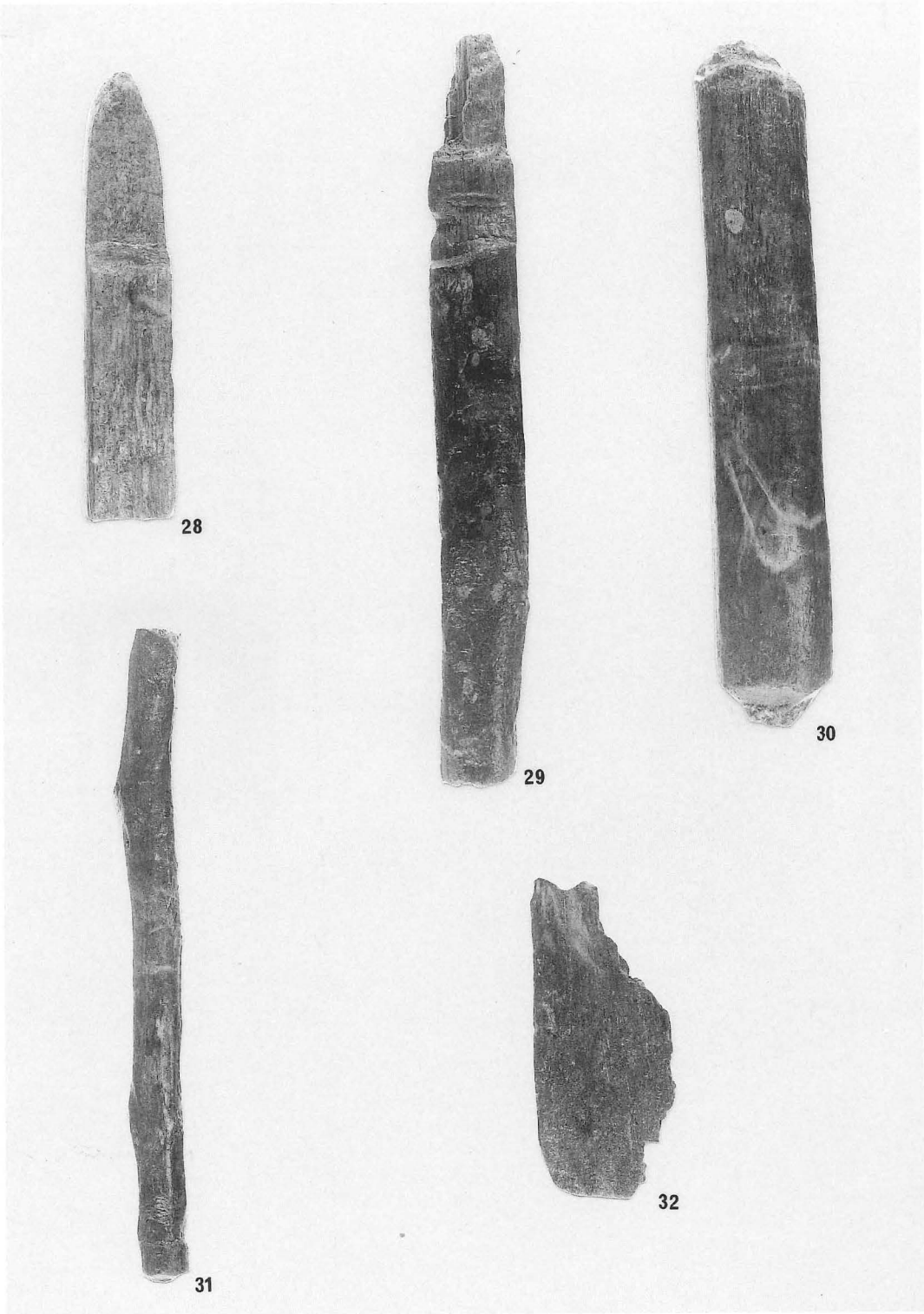
第Ⅰ区～8区出土農具未製品・棒状木製品



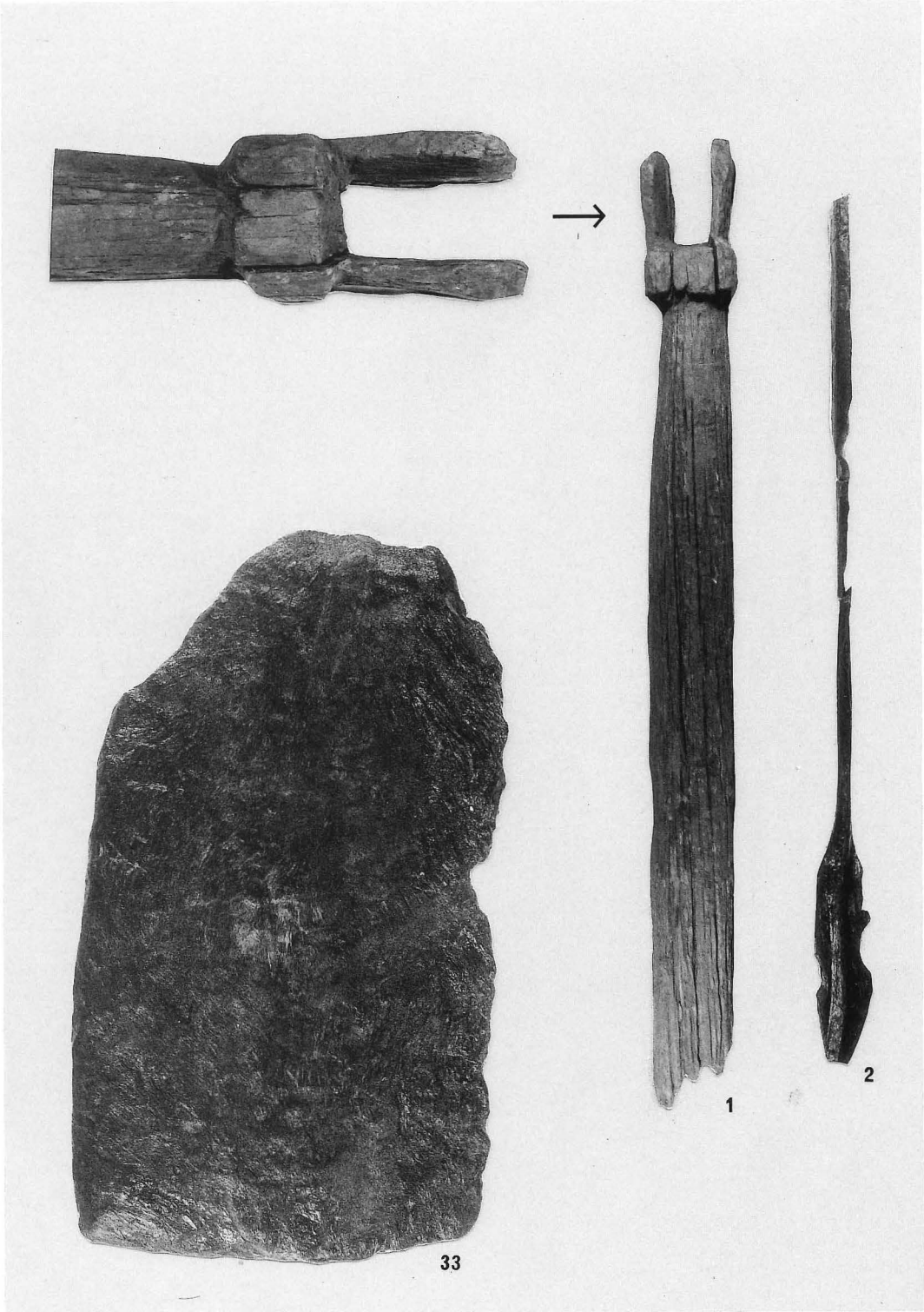
第Ⅰ区～8区出土竪杵・手斧柄・容器・櫛・槽未製品



第Ⅰ区～8区出土建築材・板・又木



第Ⅰ区～8区出土不明木器



出土建築材・鋤・不明木器

第１号支石墓

里田原遺跡所在の支石墓　　第２号支石墓

里田原遺跡

田平町文化財調査報告書 第5集

平成4年3月31日

発行　田平町教育委員会
長崎県北松浦郡田平町山内免
電話（0950）57—0207

印刷　昭和堂印刷